(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第254集

和田山天神前遺跡

北陸新幹線地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

《本文編》

1999

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第254集

和田山天神前遺跡

北陸新幹線地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

《本文編》

1999

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

和田山天神前遺跡遺景　正面谷地に2号建物、尾根に古墳がある

北陸新幹線が通過する榛名山南麓、高崎市北部から山麓を望む

94号土坑出土倒貴形水瓶（左複製、右実物）

94号土坑倒貴形水瓶 出土状態

蓋と高麗犬

注口

把手

蓋の裏側

4号古墳出土埴輪

1号建物出土蓮葉双雀鏡

中央尾根3号～8号古墳（中央）
1号建物出土軒平瓦と軒丸瓦（左下）
1号建物出土鬼瓦（右下）

序

北陸新幹線事業は、平成９年10月１日長野行き新幹線として開通しました。この建設事業に伴う事前の埋蔵文化財調査は35箇所におよび、平成３年から７年の間、群馬県教育委員会の委託を受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施しました。箕郷町にある和田山天神前遺跡は、平成４年から７年にかけて発掘調査、平成９年から２年計画で報告書を作成しました。

和田山天神前遺跡は、これまで和田山古墳群として周知され、武田信玄箕輪城攻略時の逆梅の伝承を持つ極楽院の比定地でもあり、発掘調査の成果には十分に期待されるものがありました。いくつもの尾根にまたがる調査には難しいものがありましたが、その成果には、旧石器時代にはじまり縄文、古墳、平安、中世そして江戸時代まで各時代を通じた遺構や遺物があります。26基の古墳は、後期群集墳として奥原古墳群に次ぐ資料となり、中世の寺院は箕輪城、長野氏の基盤や成立を解く重要な資料となりました。その中でも、発掘調査では全国初の信貴型水瓶が出土し、全国的にも注目を浴びました。

本書の刊行をもちまして、和田山天神前遺跡の発掘・整理のすべての事業が終了しました。発掘調査から報告書の刊行に至るまで日本鉄道建設公団、群馬県教育委員会、箕郷町教育委員会、地元関係者等には、大変お世話になりました。これら関係者の皆様に、衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史解明の上で広く活用されることを願い序といたします。

平成11年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　菅　野　　清

例　　言

1　本書は、北陸新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査として、平成４年度から平成７年度に実施した和田山天神前遺跡の発掘調査報告書である。

2　和田山天神前遺跡は、群馬県群馬郡群馬町大字和田山字天神前161、163-１・５・６・11、167、168、170、226-１、229、229-１・３・９・15、230、字地蔵堂437-１、438-１、439～445、446-1、447、448、451-13・14・18・19、字大久保453-１、454-１・２、456、464、466、465、467、471～473に所在する。

3　本発掘調査および整理事業は、日本鉄道建設公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施した。

4　調査対象地は、日本鉄道建設公団北陸新幹線高崎駅起点８km780mから９km370mにあたる新幹線の路線および側道部分である。

5　発掘調査期間および担当者

(1)　発掘調査期間

平成４年11月１日～平成６年11月、平成７年４月１日～同７月31日

(2)　発掘調査担当者

平成４年度　主任調査研究員　女屋和志雄、主任調査研究員　谷藤保彦、調査研究員　志塚雅美

平成５年度　専門員　女屋和志雄、主任調査研究員　谷藤保彦、調査研究員　小野田孝美

平成６年度　専門員　女屋和志雄、主任調査研究員　田村公夫、調査研究員　小野田孝美

平成７年度　専門員　女屋和志雄、主任調査研究員　田村公夫、調査研究員　小野田孝美

(3)　事務担当者

常務理事　邊見長雄（平成４年度）、中村英一（平成５～７年度）、事務局長　近藤　功（平成４～６年度）、原田恒弘（平成７年度）、管理部長　佐藤　勉（平成４～５年度）、蜂巣　実（平成６・７年度）、調査研究部長　神保侑史、総務課長　斎藤俊一（平成４～６年度）（平成７年度）、調査研究第１課長　真下高幸、総務課長代理　国定　均、笠原秀樹、総務課主任　須田朋子、吉田有光、柳岡良宏

6　整理事業期間および担当者

(1)　整理事業期間

平成９年４月１日～平成11年３月31日

(2)　整理事業担当者

担　当　女屋和志雄

補助員　平成９年度　山田キミ子、笠井初子、小野寺仁子、小久保トシ子、萩原由美子、深代初子
清野幸子

平成10年度　笠井初子、小野寺仁子、萩原由美子、嶋崎しづ子、内山由紀子、深代初子
清野幸子

(3)　事務担当者

常務理事　菅野　清（平成10年６月～理事長）、事務局長　原田恒弘（平成９年度）、赤山容造（平成10年度、９年度副事務局長兼調査研究第１部長）、調査研究第２部長　神保侑史、管理部長　渡辺　健、総務課長小渕淳（平成９年度）、坂本敏夫（平成10年度）、調査研究第３課長　真下高幸、総務係長　笠

原秀樹、経理係長　井上　剛(平成9年度)、小山建夫(平成10年度)、係長代理　須田朋子、主任　吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、宮崎忠司

7　遺構の写真撮影は、各担当者が、遺物は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団佐藤元彦が行った。

8　石材鑑定は、群馬地質研究会　飯島静男にお願いした。

9　人骨・獣骨の鑑定は、群馬県立大間々高校宮崎重雄にお願いした。

10　植物珪酸体の分析は古環境研究所、瓦の胎土、炭化材の分析は株式会社パレオラボに委託した。

11　鉄器の保存処理は、当事業団　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、小沼恵子が行った。

12　本書の執筆は、第3章　関口美枝、第7・8章のうち陶磁器　大西雅広、第12章　飯森康広
　本書の編集は、女屋和志雄が行った。

13　発掘調査、本書の作成にあたっては、日本建設公団、群馬県教育委員会、箕郷町教育委員会はじめ関係機関から多大なご協力をいただいた。また、発掘調査現場で働いていただいた多くの方々をはじめ、遺跡周辺の方々からも多大なるご支援をいただいた。記して、感謝する次第です。
　斎藤　忠、小此木輝之、森　浩一、梅沢重昭、近藤義雄、関　茂、松島栄治、都丸十九一、小林康幸
　石井榮一、今井　宏、平田重之、市橋一郎、大沢伸啓、足立佳代、斎藤和行、川原嘉久治、山下歳信
　原田一敏、時枝　務、片山光太郎、中世瓦研究会

14　和田山天神前遺跡出土の遺物、図面、写真は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡　　例

1　遺構番号は、発掘調査時のままを原則としたが、欠番もある。

2　遺物番号は、遺構ごとに登録した。登録後に他の遺物と接合した場合には、一方の番号を採用し、他方は欠番とした。

3　各遺構の位置は、後述する北陸新幹線仕様のグリットで標記した。方位は、座標北を示す。

4　遺構・遺物の縮尺については、各図に示してある。

5　遺物観察表のセ・ミ陶は瀬戸・美濃陶器、セ・ミ磁は瀬戸・美濃磁器、ヒ陶は肥前陶器、ヒ磁は肥前磁器をあらわす。

6　住居の方位は、カマドの位置を基準にして、カマドをもつ壁に直交する線を主軸線とした。

7　本書で使用したスクリーントーンは、次の事柄を示している。その他は各遺物図ごとに表示した。
　1　縄文土器の断面は繊維土器をあらわす。
　2　すり石、凹石はすり面、磨耗痕をあらわす。
　3　壁土の網点は小舞の圧痕をあらわす。
　4　住居内の網点は焼土、灰の分布をあらわす。
　5　石室の網点は裏込めをあらわす。
　6　道路状遺構は路面や硬化面をあらわす。

8　テフラの略称は、As-Aが天明3（1783）年浅間A軽石、As-Bが天仁元（1108）年浅間B軽石、Hr-FPが6世紀中葉榛名二ツ岳伊香保テフラ、Hr-FAが6世紀初頭榛名二ツ岳渋川テフラ、As-Cが4世紀初頭浅間C軽石をあらわす。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
第1章　遺跡の位置と環境……1
第2章　調査の経過と方法……5
第3章　旧石器時代の遺物……11
第4章　縄文時代の遺構と遺物
　1　概　要……17
　2　竪穴住居跡……17
　3　土　坑……34
　4　埋　甕……60
第5章　古墳時代の遺構と遺物
　1　概　要……61
　2　方形周溝墓……61
　3　竪穴住居跡……63
　4　古　墳……77
　5　墓　道……190
　6　FA混晶……192
第6章　平安時代の遺構と遺物
　1　概　要……193
　2　竪穴住居跡……193
　3　As-B下晶……196
　4　As-B下馬埋葬土坑……198
　5　土　坑……198
第7章　中世の遺構と遺物
　1　概　要……199
　2　寺　院　1号建物……201
　　2号建物……230
　　5号・7号道、6号道……257
　　165号土坑……259
　　6号・8号溝、11号溝、27号・29号溝、28号溝……268
　　17区STピット群……268
　　17区土坑群……270

1号～17号墓 ……273
3　館　5号～29号掘立柱建物 ……278
2号住居跡 ……298
土坑 ……298
2号～7号井戸 ……313
1号～6号集石、14号古墳上面集石 ……316
1号・2号焼土 ……320
溝 ……325
南大堀 ……326
東大堀 ……328
中世畠 ……330
第8章　江戸時代の遺構と遺物
1　概　要 ……331
2　1号屋敷　1号～4号掘立柱建物跡 ……331
1号～14号竪穴状遺構 ……342
3号・4号・5号・7号溝 ……346
4号道 ……346
3　2号屋敷　30号～35号掘立柱建物 ……349
1号井戸・8号井戸 ……355
11号集石 ……355
4　土　坑 ……358
5　溝 ……368
6　集　石 ……368
7　道 ……371
8　畠 ……373
第9章　遺構外の遺物 ……375
第10章　町道改修工事に伴う発掘調査 ……389
第11章　調査の成果
1　和田山古墳群について ……393
2　中世の遺構 ……407
3　室町・戦国期における上野国箕輪の変遷 ……411
第12章　分析・鑑定
植物珪酸体分析　古環境研究所 ……417
瓦胎土分析　パレオ・ラボ ……425
165号土坑出土炭化物分析　パレオ・ラボ ……435
94号土坑出土水瓶鉛同位体分析　東京国立文化財研究所 ……441
人骨・馬骨鑑定　宮崎重雄 ……449

挿図目次

第 1 図　周辺の遺跡 …… 2
第 2 図　調査区域図 …… 4
第 3 図　遺跡位置図・基本土層柱状図 …… 6
第 4 図　時代別遺構全体図(1) …… 8
第 5 図　時代別遺構全体図(2) …… 9
第 6 図　6・16区旧石器遺物分布図(1) …… 13
第 7 図　6・16区旧石器遺物分布図(2) …… 14
第 8 図　6・16区出土旧石器(1) …… 15
第 9 図　6・16区出土旧石器(2) …… 16
第 10 図　1 号住居跡遺構図・遺物図 …… 18
第 11 図　3 号住居跡遺構図(1) …… 19
第 12 図　3 号住居跡遺構図(2) …… 20
第 13 図　3 号住居跡出土遺物図(1) …… 21
第 14 図　3 号住居跡出土遺物図(2) …… 22
第 15 図　3 号住居跡出土遺物図(3) …… 23
第 16 図　4 号住居跡遺構図・遺物図 …… 24
第 17 図　4 号住居跡出土遺物図 …… 25
第 18 図　5 号住居跡遺構図 …… 26
第 19 図　5 号住居跡出土遺物図(1) …… 27
第 20 図　5 号住居跡出土遺物図(2) …… 28
第 21 図　6・8 号住居跡出土遺物図 …… 29
第 22 図 ,14号住居跡遺構図(1) …… 30
第 23 図　14号住居跡遺構図(2) …… 31
第 24 図　14号住居跡出土遺物図(1) …… 32
第 25 図　14号住居跡出土遺物図(2) …… 33
第 26 図　14号住居跡出土遺物図(3) …… 34
第 27 図　縄文時代土坑遺構図(1) …… 36
第 28 図　縄文時代土坑遺構図(2) …… 37
第 29 図　縄文時代土坑遺構図(3) …… 38
第 30 図　縄文時代土坑遺構図(4) …… 39
第 31 図　縄文時代土坑遺構図(5) …… 40
第 32 図　89・92号土坑出土遺物図(1) …… 41
第 33 図　92・98・99号土坑出土遺物図(2) …… 42
第 34 図　99号土坑出土遺物図(3) …… 43
第 35 図　99・101・102・105号土坑出土遺物図(4) …… 44
第 36 図　105・107・113・115号土坑出土遺物図(5) …… 45
第 37 図　115号土坑出土遺物図(6) …… 46
第 38 図　121・124号土坑出土遺物図(7) …… 47
第 39 図　126・127・128号土坑出土遺物図(8) …… 48
第 40 図　128・129号土坑出土遺物図(9) …… 49
第 41 図　130・131号土坑出土遺物図(10) …… 50
第 42 図　132・133・134号土坑出土遺物図(11) …… 51
第 43 図　134・136・137号土坑出土遺物図(12) …… 52
第 44 図　137・139号土坑出土遺物図(13) …… 53
第 45 図　139号土坑出土遺物図(14) …… 54
第 46 図　140・141・144号土坑出土遺物図(15) …… 55
第 47 図　145・152号土坑出土遺物図(16) …… 56
第 48 図　152・153号土坑出土遺物図(17) …… 57
第 49 図　154・156・157・158号土坑出土遺物図(18) …… 58
第 50 図　159・162・164・176・177・178号土坑出土遺物図(19) …… 59
第 51 図　1 号埋甕遺構図・遺物図 …… 60
第 52 図　1 号方形周溝墓遺構図・遺物図 …… 62
第 53 図　9 号住居跡遺構図(1) …… 63
第 54 図　9 号住居跡遺構図(2) …… 64
第 55 図　9 号住居跡出土遺物図 …… 65
第 56 図　11号住居跡遺構図 …… 66
第 57 図　11号住居跡出土遺物図 …… 67
第 58 図　13号住居跡遺構図 …… 68
第 59 図　13号住居跡出土遺物図 …… 69
第 60 図　15号住居跡遺構図(1) …… 70
第 61 図　15号住居跡遺構図(2) …… 71
第 62 図　15号住居跡遺構図(3) …… 72
第 63 図　15号住居跡出土遺物図(1) …… 73
第 64 図　15号住居跡出土遺物図(2) …… 74
第 65 図　17号住居跡遺構図(1) …… 75
第 66 図　17号住居跡遺構図(2) …… 76
第 67 図　17号住居跡出土遺物図 …… 77
第 68 図　1 号古墳遺構図(1) …… 78
第 69 図　1 号古墳遺構図(2) …… 79
第 70 図　1 号古墳出土遺物図(1) …… 80
第 71 図　1 号古墳出土遺物図(2) …… 81
第 72 図　2 号古墳遺構図(1)・遺物図 …… 82
第 73 図　2 号古墳遺構図(2) …… 83
第 74 図　3 号古墳遺構図(1) …… 84
第 75 図　3 号古墳遺構図(2) …… 85
第 76 図　3 号古墳出土遺物図(1) …… 86
第 77 図　3 号古墳出土遺物図(2) …… 87
第 78 図　4 号古墳遺構図(1) …… 89―90
第 79 図　4 号古墳遺構図(2) …… 91
第 80 図　4 号古墳遺構図(3) …… 92
第 81 図　4 号古墳出土遺物図(1) …… 93
第 82 図　4 号古墳出土遺物図(2) …… 94
第 83 図　4 号古墳出土遺物図(3) …… 95
第 84 図　4 号古墳出土遺物図(4) …… 96
第 85 図　4 号古墳出土遺物図(5) …… 97
第 86 図　4 号古墳出土遺物図(6)人 …… 98
第 87 図　4 号古墳出土遺物図(7) …… 99
第 88 図　4 号古墳出土遺物図(8)馬 …… 100
第 89 図　4 号古墳出土遺物図(9)馬 …… 101
第 90 図　4 号古墳出土遺物図(10)馬 …… 102
第 91 図　4 号古墳出土遺物図(11)馬 …… 103
第 92 図　4 号古墳出土遺物図(12)馬 …… 104
第 93 図　4 号古墳出土遺物図(13)家・鞍 …… 105
第 94 図　4 号古墳出土遺物図(14)家・鞍 …… 106
第 95 図　4 号古墳出土遺物図(15)鞍 …… 107
第 96 図　4 号古墳出土遺物図(16)鞍 …… 108
第 97 図　4 号古墳出土遺物図(17) …… 109
第 98 図　4 号古墳出土遺物図(18) …… 110
第 99 図　4 号古墳出土遺物図(19) …… 111
第100図　4 号古墳出土遺物図(20) …… 112
第101図　4 号古墳出土遺物図(21) …… 113
第102図　4 号古墳出土遺物図(22) …… 114
第103図　4 号古墳出土遺物図(23) …… 115
第104図　4 号古墳出土遺物図(24) …… 116
第105図　4 号古墳出土遺物図(25) …… 117
第106図　5 号古墳遺構図(1) …… 118
第107図　5 号古墳遺構図(2) …… 119
第108図　5 号古墳出土遺物図(1) …… 120
第109図　5 号古墳出土遺物図(2) …… 121
第110図　6 号古墳遺構図 …… 122
第111図　6 号古墳出土遺物図 …… 123
第112図　7 号古墳遺構図(1) …… 124
第113図　7 号古墳遺構図(2) …… 125―126
第114図　7 号古墳遺構図(3)・遺物図 …… 127
第115図　7 号古墳出土遺物図 …… 128
第116図　8 号古墳遺構図(1) …… 129

第117図　8号古墳遺構図(2)……130
第118図　8号古墳出土遺物図……131
第119図　9号古墳遺構図(1)……132
第120図　9号古墳遺構図(2)……133
第121図　9号古墳出土遺物図……134
第122図　10号古墳遺構図……135
第123図　10号古墳出土遺物図(1)……136
第124図　10号古墳出土遺物図(2)……137
第125図　10号古墳出土遺物図(3)……138
第126図　10号古墳出土遺物図(4)……139
第127図　10号古墳出土遺物図(5)……140
第128図　11号古墳遺構図……142
第129図　11号古墳出土遺物図(1)……143
第130図　11号古墳出土遺物図(2)家……144
第131図　11号古墳出土遺物図(3)……145
第132図　11号古墳出土遺物図(4)……146
第133図　12号古墳遺構図(1)……147
第134図　12号古墳遺構図(2)……148
第135図　12号古墳出土遺物図……149
第136図　13号古墳遺構図(1)・遺物図……150
第137図　13号古墳遺構図(2)……151
第138図　14号古墳遺構図(1)……152
第139図　14号古墳遺構図(2)……153
第140図　14号古墳出土遺物図……154
第141図　15号古墳遺構図……155
第142図　16号古墳遺構図(1)……156
第143図　16号古墳遺構図(2)・遺物図……157
第144図　17号古墳遺構図……158
第145図　18号古墳遺構図(1)……159
第146図　18号古墳遺構図(2)……160
第147図　18号古墳出土遺物図……161
第148図　19号古墳遺構図(1)……163
第149図　19号古墳遺構図(2)……164
第150図　19号古墳出土遺物図……165
第151図　20号古墳遺構図(1)……166
第152図　20号古墳遺構図(2)……167
第153図　20号古墳出土遺物図(1)……168
第154図　20号古墳出土遺物図(2)……169
第155図　21号古墳遺構図(1)……170
第156図　21号古墳遺構図(2)……171
第157図　21号古墳遺構図(3)……172
第158図　21号古墳出土遺物図……173
第159図　22号古墳遺構図(1)・遺物図……174
第160図　22号古墳遺構図(2)……175
第161図　23号古墳遺構図・遺物図……176
第162図　24号古墳遺構図(1)……178
第163図　24号古墳遺構図(2)……179
第164図　24号古墳出土遺物図(1)……180
第165図　24号古墳出土遺物図(2)……181
第166図　24号古墳出土遺物図(3)……182
第167図　25号古墳遺構図(1)……184
第168図　25号古墳遺構図(2)……185
第169図　25号古墳出土遺物図(1)……186
第170図　25号古墳出土遺物図(2)……187
第171図　25号古墳出土遺物図(3)……188
第172図　25号古墳出土遺物図(4)……189
第173図　1～4号墓遺構図・遺物図……191
第174図　18区FA跡高遺構図・遺物図……192
第175図　16号住居跡遺構図……194
第176図　16号住居跡出土遺物図……195
第177図　18号住居跡遺構図・遺物図……195
第178図　18区As－B島出土遺物図……196
第179図　18区As－B島遺構図……197
第180図　18区As－B島下層馬骨出土遺構図……198
第181図　1号土坑遺構図……198
第182図　中世寺院全体図……200
第183図　1号建物遺構図・遺物図……202
第184図　1号建物遺物出土状態図……203
第185図　1号建物出土遺物図(1)……204
第186図　1号建物出土遺物図(2)……205
第187図　1号建物出土遺物図(3)……206
第188図　1号建物出土遺物図(4)……207
第189図　1号建物出土遺物図(5)……208
第190図　1号建物出土遺物図(6)……209
第191図　1号建物出土遺物図(7)……210
第192図　1号建物出土遺物図(8)……211
第193図　1号建物出土遺物図(9)……212
第194図　1号建物出土遺物図(10)……213
第195図　1号建物出土遺物図(11)……214
第196図　1号建物出土遺物図(12)……215
第197図　1号建物出土遺物図(13)……216
第198図　1号建物出土遺物図(14)……217
第199図　1号建物出土遺物図(15)……218
第200図　1号建物出土遺物図(16)……219
第201図　1号建物出土遺物図(17)……220
第202図　1号建物出土遺物図(18)……221
第203図　1号建物出土遺物図(19)……222
第204図　1号建物出土遺物図(20)……223
第205図　1号建物出土遺物図(21)……224
第206図　1号建物出土遺物図(22)……225
第207図　1号建物出土遺物図(23)……226
第208図　1号建物出土遺物図(24)……227
第209図　1号建物出土遺物図(25)……228
第210図　1号建物出土遺物図(26)……229
第211図　2号建物遺構図(1)……231
第212図　2号建物遺構図(2)……232
第213図　2号建物瓦出土図……233
第214図　2号建物釘出土図……234
第215図　2号建物出土遺物図(1)……235
第216図　2号建物出土遺物図(2)……236
第217図　2号建物出土遺物図(3)……237
第218図　2号建物出土遺物図(4)……238
第219図　2号建物出土遺物図(5)……239
第220図　2号建物出土遺物図(6)……240
第221図　2号建物出土遺物図(7)……241
第222図　2号建物出土遺物図(8)……242
第223図　2号建物出土遺物図(9)……243
第224図　2号建物出土遺物図(10)……244
第225図　2号建物出土遺物図(11)……245
第226図　2号建物出土遺物図(12)……246
第227図　2号建物出土遺物図(13)……247
第228図　2号建物出土遺物図(14)……248
第229図　2号建物出土遺物図(15)……249
第230図　2号建物出土遺物図(16)……250
第231図　2号建物出土遺物図(17)……251
第232図　2号建物出土遺物図(18)……252
第233図　2号建物出土遺物図(19)……253
第234図　2号建物出土遺物図(20)……254
第235図　2号建物出土遺物図(21)……255
第236図　2号建物出土遺物図(22)……256
第237図　5・7号道遺構図……257
第238図　5・6号道出土遺物図……258
第239図　165号土坑遺構図……259
第240図　165号土坑出土遺物図(1)……260
第241図　165号土坑出土遺物図(2)……261
第242図　165号土坑出土遺物図(3)……262

第243図　165号土坑出土遺物図(4)……263
第244図　165号土坑出土遺物図(5)……264
第245図　165号土坑出土遺物図(6)……265
第246図　165号土坑出土遺物図(7)……266
第247図　6・8号溝遺構図・遺物図……267
第248図　17区S・Tピット群遺構図・遺物図……269
第249図　17区土坑群遺構図(1)・遺物図……270
第250図　17区土坑群遺構図(2)……271
第251図　17区土坑群出土遺物図(1)……272
第252図　17区土坑群出土遺物図(2)……273
第253図　3～15号墓坑遺構図……275
第254図　1～12号墓坑遺構図……276
第255図　13～17号墓坑遺構図・遺物図……277
第256図　16区中世遺構全体図……279
第257図　16区掘立柱建物概全図……280
第258図　6・7号掘立柱建物遺構図……282
第259図　8・9号掘立柱建物遺構図……283
第260図　10・11号掘立柱建物遺構図……284
第261図　12・14号掘立柱建物遺構図……285
第262図　13・15・16号掘立柱建物遺構図……286
第263図　17・18号掘立柱建物遺構図……287
第264図　19・20号掘立柱建物遺構図……288
第265図　21・22号掘立柱建物遺構図……289
第266図　23・24号掘立柱建物遺構図……290
第267図　25・26号掘立柱建物遺構図……291
第268図　27号掘立柱建物遺構図……292
第269図　28号掘立柱建物遺構図……293
第270図　16区古銭遺物図……294
第271図　16区掘立柱建物出土遺物図(1)……295
第272図　16区掘立柱建物出土遺物図(2)……296
第273図　16区掘立柱建物出土遺物図(3)……297
第274図　16区掘立柱建物出土遺物図(4)……298
第275図　6・7・8・9号掘立柱建物出土遺物図……298
第276図　2号住居跡遺構図・遺物図……299
第277図　86～95号土坑遺構図……301
第278図　96～104号土坑遺構図……302
第279図　108～151号土坑遺構図……303
第280図　94号土坑出土遺物図(1)……304
第281図　94号土坑出土遺物図(2)……305
第282図　94号土坑出土遺物図(3)……306
第283図　94号土坑出土遺物図(4)……307
第284図　94号土坑出土遺物図(5)……308
第285図　94号土坑出土遺物図(6)……309
第286図　94号土坑出土遺物図(7)……310
第287図　97・100・103・104号土坑出土遺物図……311
第288図　104・108・111・147号土坑出土遺物図……312
第289図　2～7号井戸遺構図……314
第290図　2・3号井戸出土遺物図……315
第291図　1～6号集石遺構図……317
第292図　14号古墳上部集石遺構図……318
第293図　1～4号集石出土遺物図……319
第294図　1・2号焼土遺構図……320
第295図　1号焼土出土遺物図(1)……321
第296図　1号焼土出土遺物図(2)……322
第297図　1号焼土出土遺物図(3)……323
第298図　1号焼土出土遺物図(4)……324
第299図　1号焼土出土遺物図(5)……325
第300図　13・14号溝遺構図・遺物図……326
第301図　南大堀遺構図……327
第302図　南大堀出土遺物図……328
第303図　東大堀遺構図・遺物図……329
第304図　6区中世墓遺構図……330
第305図　1号屋敷遺構図……332
第306図　1・2号掘立柱建物遺構図……333
第307図　3・4号掘立柱建物遺構図……334
第308図　1号屋敷出土遺物図(1)……335
第309図　1号屋敷出土遺物図(2)……336
第310図　1号屋敷出土遺物図(3)……337
第311図　1号屋敷出土遺物図(4)……338
第312図　1号屋敷出土遺物図(5)……339
第313図　1号屋敷出土遺物図(6)……340
第314図　1号屋敷出土遺物図(7)・2号掘立柱建物出土遺物図…341
第315図　1～15号竪穴状遺構図……343
第316図　8～13号竪穴状遺構図……344
第317図　1・2・4・5号竪穴状出土遺物図……345
第318図　4号道遺構図……347
第319図　3・5・7号溝出土遺物図……348
第320図　9号道遺構図……349
第321図　2号屋敷遺構図……350
第322図　30・31・32号掘立柱建物遺構図……351
第323図　33号掘立柱建物遺構図……352
第324図　34・35号掘立柱建物遺構図……353
第325図　1・8号井戸遺構図・遺物図……354
第326図　11号集石遺構図……356
第327図　11号集石出土遺物図……357
第328図　2～33号土坑遺構図……361
第329図　35～67号土坑遺構図……362
第330図　68～125号土坑遺構図……363
第331図　138～175号土坑遺構図……364
第332図　31・114号土坑出土遺物図(1)……366
第333図　119・125・138・142・143・170・175号土坑出土遺物図(2)…367
第334図　1・2号溝遺構図……369
第335図　17区官原神社前集石遺構図……370
第336図　8号道・8号集石遺構図……371
第337図　1～3号道遺構図……372
第338図　16区A品・18区A品遺構図……374
第339図　遺構外出土遺物図(1)……376
第340図　遺構外出土遺物図(2)……377
第341図　遺構外出土遺物図(3)……378
第342図　遺構外出土遺物図(4)……379
第343図　遺構外出土遺物図(5)……380
第344図　遺構外出土遺物図(6)……381
第345図　遺構外出土遺物図(7)……382
第346図　遺構外出土遺物図(8)……383
第347図　遺構外出土遺物図(9)……384
第348図　遺構外出土遺物図(10)……385
第349図　遺構外出土遺物図(11)……386
第350図　遺構外出土遺物図(12)……387
第351図　遺構外出土遺物図(13)……388
第352図　25号古墳町道改修分遺物図(1)……390
第353図　25号古墳町道改修分遺物図(2)……391
第354図　25号古墳町道改修分遺物図(3)……392
第355図　和田山古墳群分布図……393
第356図　古墳分布図(1)……396
第357図　古墳分布図(2)……397
第358図　古墳分布図(3)……398
第359図　石室平面集成図(1)……399
第360図　石室平面集成図(2)……400
第361図　石室平面集成図(3)……401
第362図　石室平面集成図(4)……402
第363図　石室平面集成図(5)……403
第364図　石室掘り方平面集成図(1)……404
第365図　石室掘り方平面集成図(2)……405
第366図　16区中世遺構全体図……409
第367図　16区中世遺構時期変遷図……410
第368図　翼輪推定地と周辺大字位置図（1：60,000）……412

挿図目次

群馬県、和田山天神前遺跡の自然科学分析
表1　植物珪酸体分析結果 ……422
図1　18区南壁の植物珪酸体分析結果 ……422
図2　As－B直下畠の植物珪酸体分析結果 ……423
図3　Hr－FA直下畠の植物珪酸体分析結果 ……423
図4　18区南壁の土層柱状図 ……423
写真　植物珪酸体の顕微鏡写真 ……424

和田山天神前遺跡出土瓦の材料分析
第1表　材料を検討した瓦および窯体試料 ……425
第2表　瓦および窯体試料の材料と特徴 ……430
第3表　瓦および窯体胎土中の粒子組成表 ……432
第1図　瓦および窯体胎土中の粒子組成図 ……432
図版1　瓦および窯体胎土中の粒子顕微鏡写真 ……433
図版2　瓦および窯体胎土中の粒子顕微鏡写真 ……434

和田山天神前遺跡の瓦窯の燃料
写真上　165号土坑燃焼室と焼成室……438
　　炭化材は燃焼室で出土
写真下　165号土坑焼成室
図版1　和田山天神前遺跡165号土坑出土炭化材
　　顕微鏡写真 ……439
図版2　和田山天神前遺跡165号土坑出土炭化材
　　顕微鏡写真 ……440

群馬県和田山天神前遺跡から出土した水瓶の材質に関する
自然科学的測定
図1　蛍光X線スペクトル図　水瓶底面 ……444
図2　蛍光X線スペクトル図　水瓶把手 ……444
図3　蛍光X線スペクトル図　水瓶注口 ……445
図4　蛍光X線スペクトル図　水瓶置鐘子 ……446
図5　鉛同位対比A式図 ……447
図6　鉛同位対比B式図 ……447
表1　水瓶の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比 …448
表2　水瓶の鉛同位対比 ……448

和田山天神前遺跡出土の人骨・馬骨について
3号墓歯の計測値 ……452
9号墓歯の計測値 ……452
8号溝馬歯の計測値 ……452

本　文　編

第１章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置（第１図）

和田山天神前遺跡は、群馬県群馬郡箕郷町大字和田山字天神前、地蔵堂ほかにある。

箕郷町は、県の西部中央を占める榛名山の南麓にある。現在は、傾斜地を利用した梅の栽培や酪農などが主な産業で、近年宅地開発が進み急速に変貌をとげつつある。以前は、養蚕と米麦二毛作を主とした純農地域で、中山間地特有の景観が広がっていた。北陸新幹線の開通は、この地域の中では画期的なことで、南北に走る河川や道路を軸とした開発が東西に進むことを予測させる。

2　地理的な環境

箕郷町は、榛名山南麓に位置し、山頂近くから烏川やその支流が作り出した平野までが範囲である。西は榛名町に接し、起伏に富んだ丘陵が広がる。東は井野川を境に平野に続く低台地の広がる群馬町である。南には、県西部の中心、高崎市の市街地がある平野を望むことができる。

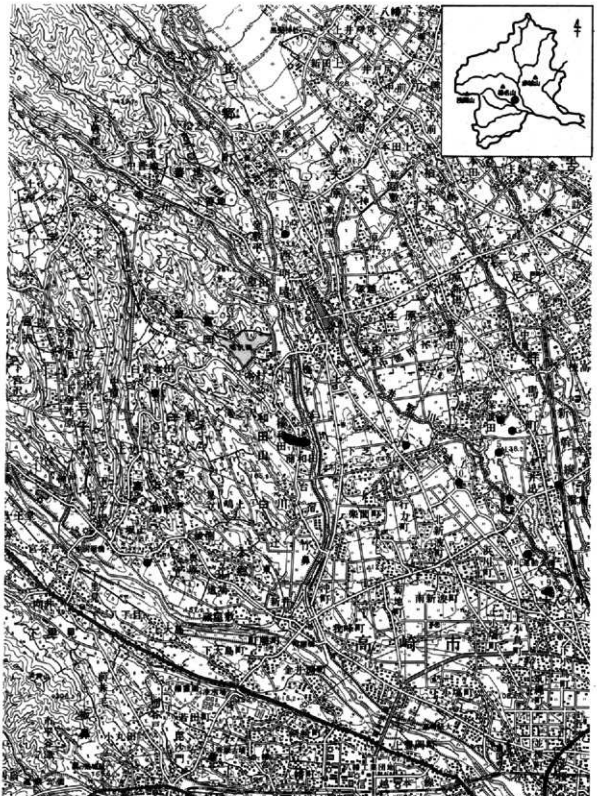
地形は、榛名白川を境として東西に大きく二分される。

西は、古期榛名山の火山噴出物を基盤とする、十文字面と呼ばれる起伏に富んだ丘陵が広がる。丘陵は、樹枝状にきざまれ、細く長い谷地が山麓に食い込むようにのびている。谷地は、幅100m前後、尾根との比高差20mをこす規模である。成沢、滝沢などと呼ばれ箕郷町合併以前の村境になるなど、自然の境界が集落や村の形成にも影響を与えている。

東には、井野川までの間に白川扇状地と呼ばれる水田地帯が続いている。基盤には、県中央部に広がる前橋台地がある。扇状地は、この上に６世紀代、榛名山二ツ岳の二度にわたる噴火による土石流でできたものである。箕輪城付近を扇頂部とし、なだらかな勾配を描きながら、標高100m付近で扇端部となる。ここを横切る北陸新幹線の調査では、最深５ｍに古墳時代の地表面のあることが知られている。土石流を取り除くと、井野川左岸に広がる低台地と対をなす地形であることがわかる。

和田山は、箕郷町の南西、平野と丘陵とが接する位置にある。

その境界線が榛名白川で、扇状地の形成以後も、幾度となく変流をくりかえしている。北陸新幹線の下芝上田屋遺跡では、洪水で埋まる河道のひとつが検出されており、古代から暴れ川であったようである。丘陵は、標高160～180m、幹に相当する尾根から左右に浅くきざまれた枝葉の尾根が幾重にものびている。勾配がきつく、水に乏しいところから、雑木林と桑畑に覆われ、現在では梅畑に変貌しつつある。一方の谷地は、榛名白川寄りでは水田として利用されているが、一歩中に入ると昭和50年代の土地改良以前は陸田であったようである。水田となるのは、昭和52年の群馬用水の通水を待ってからである。発掘調査の結果からも、榛名白川寄りでは古墳時代から畠の開墾がはじまるがものの、谷地の本格的な開墾は江戸時代になってからである。明治16年の上野国郡村誌には、田畑20町余、地味赭黛軽鬆とあり、火山灰質の土壌で雑木に覆われていたことがわかる。



1　和田山天神前遺跡　2　奥原古墳群　3　観音塚古墳　4　谷ツ古墳　5　保渡田３古墳（二子山・八幡塚・薬師塚）
6　岡通遺跡　7　三ッ寺遺跡　8　御布呂遺跡　9　芦田貝戸遺跡　10　来迎寺　11　長谷寺　12箕輪城

第１図　周辺の遺跡

3　歴史的な環境（第１図）

榛名山は、利根川をはさんで赤城山と対をなす名山である。

長く尾を引く裾野は、河川を通じて平野と結ばれ、豊かな後背林と肥沃な土壌を提供してきた。平野からの雄美な容姿は、祖霊の宿る山、平野を潤す水を恵む山として、古代から信仰の対象ともなり万葉集にも伊香保ろのと詠まれた。上野国府や国分寺が置かれるのも、恵まれた土地であるとともに、この信仰に力をかりたのではないだろうか。そんな思いをいだかせる山なみである。

旧石器時代から縄文時代は、台地や尾根が生活の舞台であった。箕郷町生原遺跡、安中市古城遺跡などが報告されている。北陸新幹線の遺跡では、榛名町の三ツ子沢中遺跡、白岩民部遺跡、箕郷町白川傘松遺跡がある。これらは、AT 下の黒色安山岩を使用したもので、県内の傾向に沿うものである。和田山天神前遺跡では、AT 下でも黒曜石を主としたもので、県内では安中市古城遺跡など数少ない例となる。

弥生時代になると、川沿いや低台地に進出する。井野川沿いには、中期から後期を通じた伝統集落がうまれる。農耕の普及で、定着性の高い村と新たな地へ進出をはかる村まで、その動きは平野をにらんだものである。高崎市日高遺跡は、谷地田を切り開いた村の様子を伝えている。村の一角には墓が作られており、開墾した耕地を眺めながら眠りにつくことができたようである。一昔前の農村風景のはじまりである。

古墳時代になると、井野川を軸にして地域圏が形成されていく。流域では、４世紀から６世紀の集落や水田、畠が広がっている。５世紀後半、それを基盤に築かれるのが群馬町三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族居館である。方90m、石垣をもち厳重な柵列で囲まれた中には、中心となる建物である正殿、まつりの場と推定される石敷遺構、井戸などが整然と配置されている。豪壮な構えは、開発の先導者の力のほどをみせつけるようである。近くにある二子山、八幡塚、薬師塚の保渡田３古墳は、その奥津城と推定されている。谷ツ古墳では、朝鮮半島との関係をうかがわせる金銅製飾履が出土している。

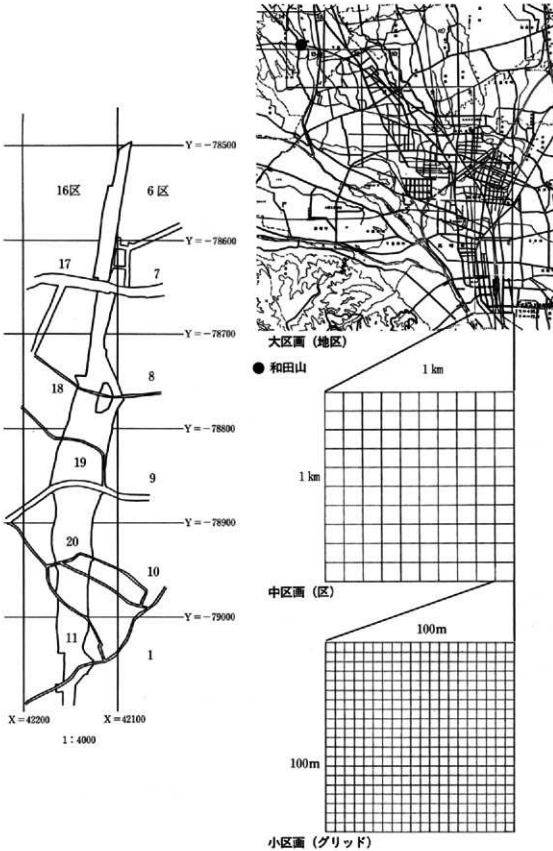
北陸新幹線の成果は、この豪族居館を中心とした世界を南北に縦断し、水田や畠の変遷やそれらを耕作する下芝五反田遺跡などの集落の実態を明らかにすることができた。

古代には、群馬郡に整備される。古墳時代二度にわたる火山災害から復旧し、井野川沿いには往時の勢いで村や田畠がひろがる。御布呂遺跡や芦田貝戸遺跡、同道遺跡は、災害の生々しさとその中でも復旧するたくましさが伝わってくる。和名抄によると、長野、井出、小野、八木、上郊、畦切、嶋名、群馬の８郷がある。東山道が東西に通過し、国府や国分寺とつながれ周辺地域として整備されたものと思われる。平野の開発が進む一方で、その動きは山麓へも分け入るようになる。ひとつは信仰、そして牧や鉄といった生産の側面も見逃せない。豊かな森林資源の活用もあろう。

標高700mという高所には、修行を意図した山岳寺院唐松廃寺が作られている。榛名町白岩観音長谷寺には12世紀代の十一面観音像がある。長野氏の菩提寺ともなる浜川来迎寺は、13世紀までさかのぼる。和田山に寺が出現する前夜でもある。

中世には、長野郷を基盤として長野氏が抬頭する。明応から大永年間には、箕輪城が長野尚業により築城される。尚業―憲業―業政―業盛の４代は、南麓を基盤とする武士団の棟梁として歴史舞台にしばしば登場している。ついには、西上州の要となり、武田信玄に足を運ばせるほどの勢力にまで抬頭する。

天正18年の井伊直政の箕輪入城をもって、この地の江戸時代の幕開けとなる。


Y＝－78500
Y＝－78600
Y＝－78700
Y＝－78800
Y＝－78900
Y＝－79000
16区
6区
17
7
8
18
19
9
20
10
11
1
X＝42200
X＝42100
1：4000
大区画（地区）
● 和田山
1km
1km
中区画（区）
100m
100m
小区画（グリッド）

第２図　調査区域図

第２章　調査の経過と方法

1　調査の経過

調査の対象は、高崎駅起点８km780mから９km320mまでである。このうち、９km160m以西は試掘調査をへて本調査した。平成４年11月の試掘調査にはじまり、その後同６年11月まで、平成７年４月から同年７月までの延べ２年４箇月を要している。以下、各年度にわけて調査の経過を述べる。

平成４年度

20区西第１、２尾根と19区中央尾根の一部を対象とする。西第１尾根で２号古墳、西第２尾根で１号住居跡、中央尾根で３号、４号古墳を調査する。２本の尾根では、旧石器の試掘を行うが遺物の出土はない。

平成５年度

４月から10月にかけて18区、19区を調査する。１号、３号～８号古墳、中世墓坑、江戸時代の１号屋敷などが検出され、１号、２号建物の調査がはじまり中世寺院の存在が明らかとなる。11月からは16区に移る。５号をはじめとする掘立柱建物跡や南大堀が検出される。中世、古墳そして縄文の各時代が重複していることが明らかとなる。平成６年１月24日、94号土坑から信貴形と分類される銅製の水瓶が出土する。この発見により、２月７日大正大学斉藤忠名誉教授、同講師小此木輝之氏に中世の遺構について現地指導をうける。

平成６年度

４月から６月、16区の古墳、縄文、旧石器の調査する。７月から菅原神社前の17区、８月から町道西の17区に移り、11月までに９号、16号～21号古墳、Ｂ畠、２号屋敷などを調査する。19区の一部を残して、対象地区の調査を終了する。

平成７年度

４月から７月に19区の１号方形周溝墓や22号～26号古墳などを調査し、すべての調査を終える。

2　調査の方法（第２図）

北陸新幹線の発掘調査では、一連の事業として遺跡略称、測量基準をはじめとして統一した。

遺跡略称は３桁の数字で標記し、冒頭に北陸新幹線のローマ字標記のＨＳを加えた。各桁の数字の意味は、下記のとおりである。

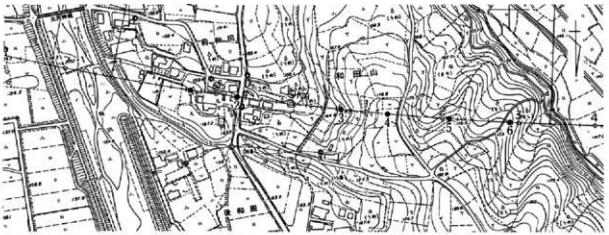
(1)　３桁目　遺跡所在地の市町。高崎市　０、箕郷町　１、榛名町　２、安中市　３である。

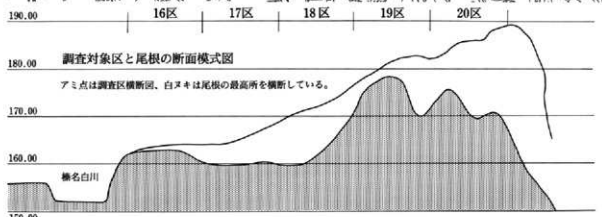
(2)　同一自治体の中で高崎起点から長野方面に向かって順次１・２・３…とつける。

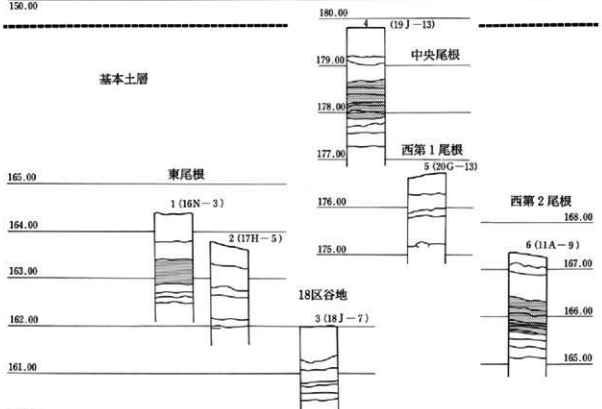
(3)　すでに調査着手前に確定している遺跡については０をつけ、調査開始後に数遺跡に分割されたり、確定していた遺跡と遺跡の間に新たな遺跡が発見された場合は、１・２・３…とつける。

箕郷町にある本遺跡では、この標記に従い『ＨＳ120』と省略される。箕郷町分では、高崎起点から西に２番目の遺跡という意味である。

測量の基準であるグリットについては、その設定方法の詳細は『行力春名社遺跡―北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集、群馬県埋蔵文化財調査事業団報告第183集』に記載されているので、詳しい説明は省略するが、概略は以下のとおりである。







第３図　遺跡位置図・基本土層柱状図

グリット設定は、国家座標に基づき、1㎞四方の区画を設定した。これを大グリット、地区とよび、北陸新幹線調査対象地全域に設定した。大グリットの起点は、高崎駅の南東にある国家座標系第Ⅸ系のX＝＋35,000㎞・Y＝－73,000㎞である。本遺跡は、13大区にある。

この大グリットは、100m四方の区画に100等分し、これを区とした。区は、各大区の東南隅を基準とし、東から西、南から北への順序で1区から100区までを設定した。さらに、この区を5m四方の区画に400等分し、グリットと呼ぶ。東南隅を基準に東西をアルファベット、南北を算用数字をつけ、例えば13－6区A1グリットと呼称して測量の基準とした。

3　基本土層（第3図）

6・16区の地形

19区からのびる東尾根の先端にある。中央部で標高163m前後である。菅原神社の東で、やや南に向きを変え、幅も広く平坦になる。本来は、さらに東に50mほどのびていたが、昭和41年の洪水復旧工事で大きく削られている。北側もひな壇状に削り取られた形跡があり、斜面を加えた幅が本来の姿のようである。昭和9年にも、洪水は尾根に迫る勢いであったという。自然の改変著しい地区である。また、接するように並ぶ古墳、その後中世の遺構による削平、盛土と人の手も大幅に加えられている。

17区の地形

東尾根の南斜面にあたり、谷地にかかる。町道の西側で標高168m前後である。馬の背状の特徴をもち、区の状況を知る手掛かりとなる。土層は、16区、18区と同じくソフトローム層上にAs-C、As-Bをのせる。As-Cは、純層はなくほとんどが混土化して古墳時代以降の地表面となっている。

18区の地形

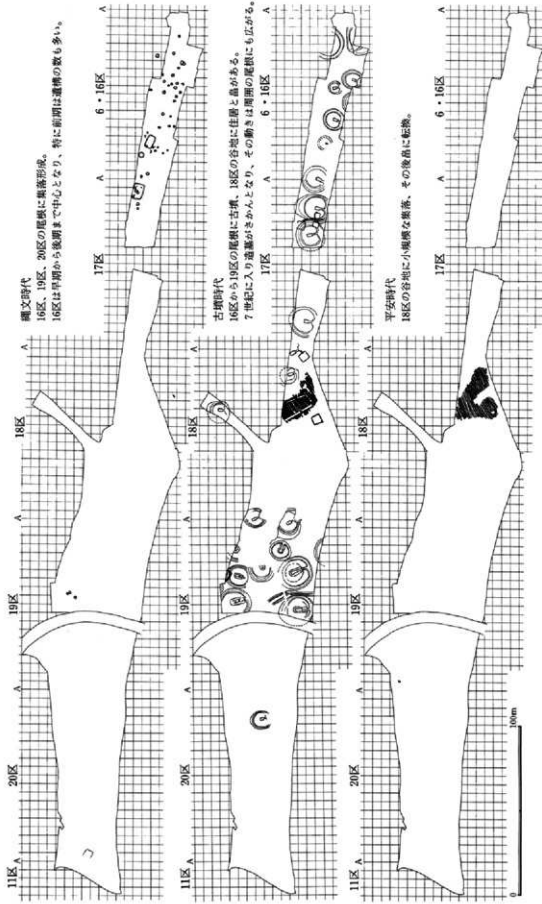
中央尾根と東尾根とがY字形に分岐するつけ根にあたる。1号古墳付近で標高170mをこす。中央部に東南方向に開口する谷地があり、尾根とは20m近い比高差がある。谷地は、20区のものと同様に暗色帯相当土を開析、その後埋没して現在に至る。東斜面に設けた4本のトレンチでは、As-SPが40度近い勾配で谷地に向かって堆積しているのがみられた。谷地は、As-SP降下以前に開口、その後徐々に埋没して現況にいたると推測される。斜面は、30度をこす急勾配で、江戸時代以来の開墾でほぼ一筆ごとに石垣がめぐらされて、糞生されている。この勾配は、耕作するのには障害となったが、古墳時代後期には南面する尾根が古墳を築くのに格好な場所となる。

19区の地形

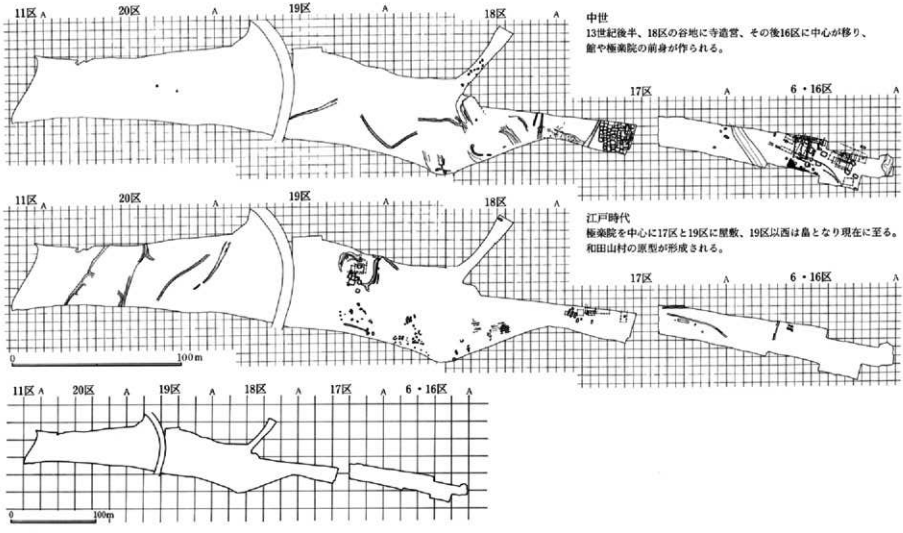
中央尾根の頂上部にあたる。東西の5、12ライン、南北のE、Jラインで旧石器の試掘を兼ねた深掘りでは、下記のような所見を得た。

1　尾根上では、暗色帯からAs-BP降下までは水平方向の土層堆積がみられる。

2　現況に沿う勾配がみられるのは、As-SP以後でIラインより東にAs-SPが残る。頂上部では、ソフトロームを含めて削平されている。この削平は、古墳築造といった人為的なものではなく、As-SP上に漸移層をのせることから沖積世の自然とみるのが妥当である。その時期としては、16区の斜面に堆積した遺物包含層から縄文時代中期前後と推定される。調査区の最高所、9ラインより南では、As-SPがブロック状に寸断されたり、あるいは反転したりしている。Eラインよりも東でも、土坑状に落ち込んだり、ブロック化している。このことから、地形の変換が、Iライン、9ライン付近からはじま



第4図　時代別遺構全体図(1)



第5図　時代別遺構全体図(2)

り、尾根の肩口にかかるものと推定される。

肩口には、江戸時代後期の屋敷が構えられている。湧水のあることが大きな要素である。

20区の地形

19区がある中央尾根から分岐する、２本の尾根と３本の谷地がある。西は、滝沢とよばれる間口100m近い沢で仕切られている。尾根はともに幅40m弱、馬の背状、新幹線工事中の断面では暗色帯までが水平に堆積し、その後は19区と同じくAs-SP降下以降の動きがみられる。

谷地は、暗色帯が開析されてできたもので、暗色帯は粘土化している。その後、漸移層に相当する暗褐色土、黒色土と続き、As-C、同混土、As-Bが安定した状態で堆積している。調査でも井戸が全く検出されなかったが、本来水に乏しいことが推測され、遺構の希薄さの原因となったようである。

3　検出された遺構（第４、５図）

検出された遺構は、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、平安時代、中世、江戸時代のものがある。

竪穴住居跡	10軒	縄文時代３軒、古墳時代５軒、平安時代２軒
埋甕	２基	縄文時代
掘立柱建物	34棟	中世24棟、江戸時代10棟
礎石建物跡	２棟	中世
古墳	26基	古墳時代
墓道	４条	古墳時代
土坑	178基	縄文時代42基、平安時代１基、中世21基、江戸時代および時代不明112基
溝	29条	中世
井戸	８基	中世６基、江戸時代２基
墓坑	18基	中世
竪穴状遺構	14棟	江戸時代
集石遺構	12基	中世７基、江戸時代５基
道	９条	中世３、江戸時代６
方形周溝墓	１基	古墳時代
畠	６箇所	古墳時代１、平安時代１、中世１、江戸時代３
堀	２箇所	中世
粘土採掘坑	１基	中世
瓦窯跡	１基	中世

未報告としたものに、風倒木２箇所、性格及び時代不明の配石遺構２箇所がある。

以上は、遺構の種類別としての数である。この多くは、中世の寺院、極楽院前身遺構、江戸時代の屋敷を構成するものである。従って、個別に独立したものは少なく、相互に関連する場合が多い。本報告では、時代別を柱としながらも、関連させた内容とした。

概要は、当事業団年報12～15、「レールの下の歴史」「ヒストリア椎名」、群馬地域文化協議会「群馬文化」222号にそれぞれ掲載。

第３章　旧石器時代の遺物

本遺跡では、16区北半部と17区の縄文時代の住居内から旧石器時代の遺物が出土している。遺跡は、榛名山麓から連なる丘陵が、中小の河川によって開析された台地上に位置している。台地頂上の平坦部では安定したローム層の堆積が認められ、浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP）や浅間―室田軽石（As-MP）、姶良―丹沢火山灰（ＡＴ）などのテフラが確認されている。

16区では合計21点の石器が発見されている（第６図）。石器の出土した地点は、東西に延びる長さ約300m、下幅100m、上幅50mの細長い馬背状の台地のほぼ中央部にあたる。比較的急峻な台地で、現状では特に北側が急斜面となっているが、後世の改変を受けており、台地頂部も一部削平されているようである。台地の東側を榛名白川が流れ、現河床との比高差は約10mである。石器は、台地頂部の先端から約40m程内側の、傾斜変換点に近い緩やかな南斜面で、大きく２ヶ所に集中して検出された。調査区北側が台地頂上の平坦部へと続いており、遺物の分布も調査区外に広がるものと思われる。

石器は暗色帯中から出土しており、比較的上下のばらつきは少ない（第７図）。暗色帯中には、ＡＴが約１cmの厚さで堆積しているのが確認されているが、石器はこのＡＴ層の下からの出土である。石器の石材は、総数21点のうち20点が黒曜石であり、石材の片寄りが大きい。黒曜石はいずれも挟雑物の少ない良質なもので、長野県方面原産のものである可能性が高い。加工されているもの以外は、いずれも小さな剥片・砕片である。

１はナイフ形石器の先端部破片である。約1.3m離れた地点から出土した７の基部と接合する。接合後の長さは3.7cm。石刃を素材とし、基部の両側背面側に調整加工を施している。調整により素材の打面部は失われている。先端部を一部欠損する。黒曜石製。

２・３はエンドスクレイパーで、ともに黒曜石製。２はやや厚手の石刃を素材とし、刃部と両側に急角度の調整を加えている。腹面側の左半は、素材の打面部側から大きく剥離されている。３も石刃素材と思われ、刃部と左側に調整が加えられる。

４・５は剥片と砕片でともに黒曜石製。

６・８・９は二次加工ある剥片で全て黒曜石製である。６は本来はより大形の石器であったが、破損などにより再加工しているものと思われる。破損後に器体下部の剥離面を打面とし、腹面側で小型の剥片を剥離。この剥離によってできた鋭利な縁辺下部にわずかに調整を加えている。先端は三角形状に尖る。８は調整打面を持つ石刃状の縦長剥片を素材とし、打面側の両側に不規則な調整を加えている。背面に自然面を残し、上半を欠損している。９は縦長剥片の左側の主要剥離面側に調整を加えている。右側には刃こぼれ状の細かな剥離痕が観察される。上半を欠損。

11から22は剥片および砕片である。石材は、16が珪質頁岩である以外は全て黒曜石製である。いずれも小型で、11と17を除いては、全て重量が１ｇに満たない。16、19、20は小型ではあるが、石刃状の比較的整った形態を呈する。17は、表面がほとんど自然面に覆われており、非常に小型の原石から剥離されたものである。

以上のうち、１～８と17～22が東側、11～16が西側の集中部から出土している。９は単独での出土である。なお、17～22はグリッド一括遺物として取り上げたため、第７図には出土地点がマークされていない。

２ヶ所の集中部は約15m程離れており、接合関係も認められないが、石器や石材の特徴や出土層位から、

同一の集団によって残されたものと推測される。東側の集中部は約３ｍ×２ｍの範囲に14点の石器が分布している。調査区の北東隅に位置しており、調査区外に分布が広がるものと予想される。西側の集中部は２ｍ×３ｍの範囲で、北側と南側に３点ずつかたまって分布している。両者は２ｍ程度離れており、非常に少数の石器ではあるが２つのブロックとして捉えるのが妥当かもしれない。東側の集中部が数量、石器組成ともにより充実しており、トゥールや二次加工ある剥片などは全て東側に分布している。前述したように、石器の分布がさらに調査区外に延びる可能性があり、石器群の全体像が把握できないため、遺跡内での行動を復元することは困難である。出土した石器からみる限りは、トゥールの加工とメンテナンスのほか、小型の石刃状の剥片があることから石刃の剥離などが行われていたと考えられる。

これらの石器は、ＡＴ層下位からの出土であり、群馬編年のⅠ期にあたる（麻生・大工原　1994）。石器群全体が検出されていない可能性が高く、限られた資料からの判断となるが、トゥールの素材として石刃が多用されていること、エンドスクレイパーの特徴などから、Ⅰ期の後半段階に位置付けたい。

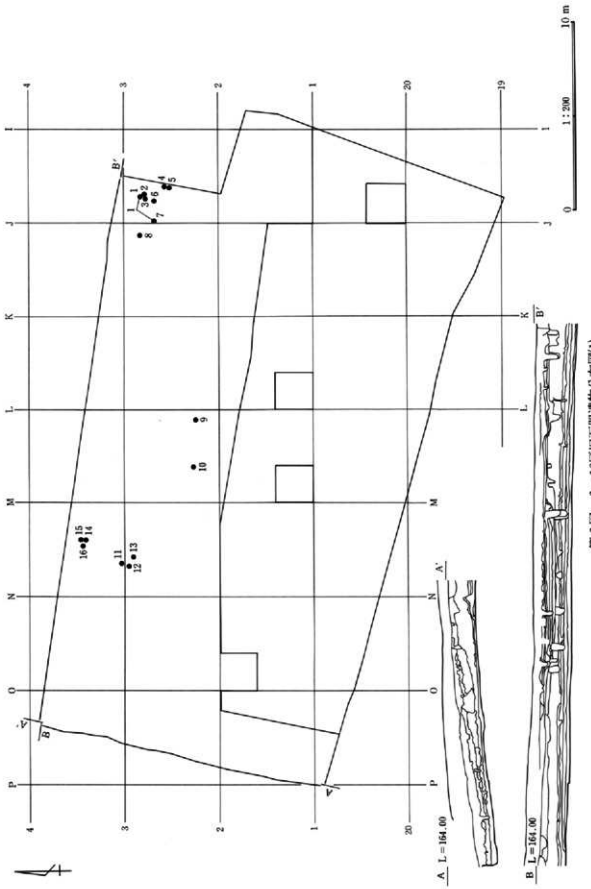
また、17区の14号住居中から、旧石器時代の遺物と考えられる石器が２点出土している。出土地点は、16区の出土地点よりも約70m西側で、傾斜変換点よりもやや下がった南斜面にある。住居はローム層を掘り込んで構築されており、周溝は暗色帯まで達していた。石器は、この周溝内から見つかっていることから、本来の包含層は暗色帯であった可能性が高い。住居内や周辺からは他に旧石器時代遺物の出土はない。23は大形、幅広の縦長剥片で、平坦打面を持つ。石材は黒色頁岩。24は石刃で黒色頁岩製である。稜線の通った比較的形状の整った石刃で、打面は平坦である。２点のみの出土であり、出土層位も不確実ではあるが、石器の特徴から、ＡＴ下位の時期に位置付けられよう。

参考文献

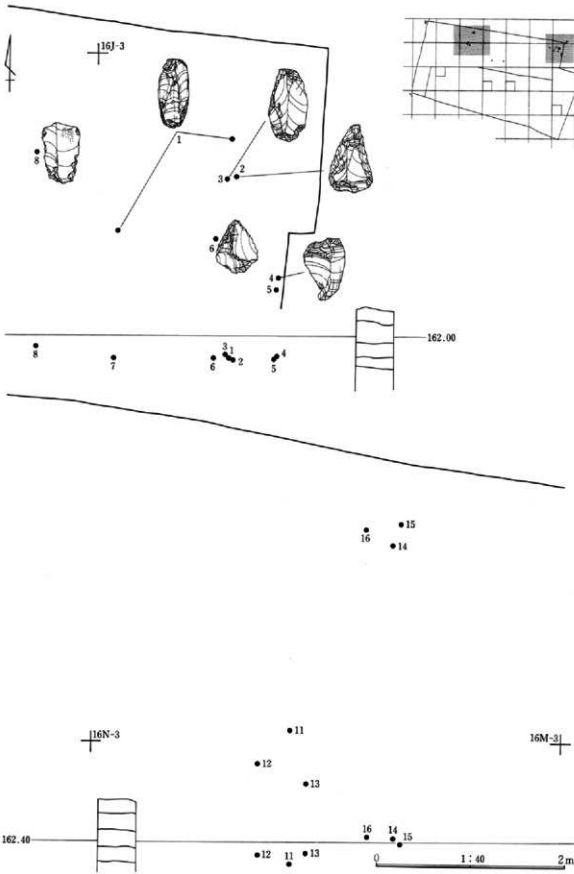
麻生敏隆・大工原豊（1994）「Ⅰ期－ＡＴ降灰以前のナイフ形石器文化－」「第２回岩宿フォーラム群馬の岩宿時代の変遷と特色　予稿集」岩宿フォーラム実行委員会

観察表

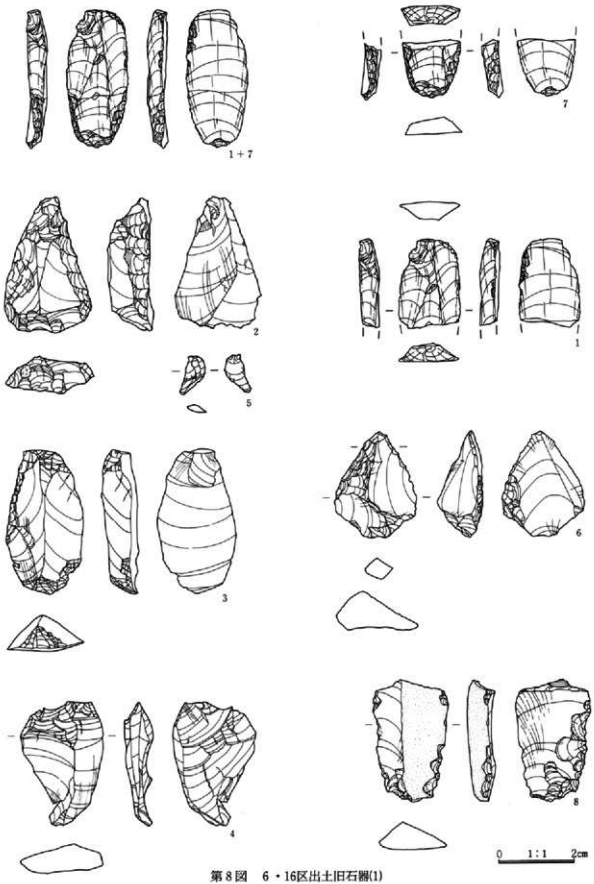
番号	器　種	出土位置	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
1	ナイフ形石器	16区Ⅰ－２	先端と基部欠損	4.7	3.2	0.9		黒曜石	№７と接合
2	エンドスクレイパー	16区Ⅰ－２	完形	3.6	2.3	1.0	7.4	黒曜石	
3	エンドスクレイパー	16区Ⅰ－２	完形	3.8	3.6	0.95	6.7	黒曜石	
4	剥片	16区Ⅰ－２	完形	3.25	2.2	0.75	4.0	黒曜石	
5	砕片	16区Ⅰ－２	完形	1.0	0.7	0.18	0.1	黒曜石	
6	二次加工ある剥片	16区Ⅰ－２	完形	2.8	2.2	1.05	3.9	黒曜石	
7	ナイフ形石器	16区Ⅰ－２	基部破片	3.0	3.1	1.0		黒曜石	№１と接合
8	二次加工ある剥片	16区Ｊ－２	上半欠損	3.25	2.0	0.75	4.1	黒曜石	
9	二次加工ある剥片	16区Ｌ－２	上半欠損	3.15	2.0	0.7	2.6	黒曜石	
10	（欠番）								
11	剥片	16区Ｍ－２	先端一部欠損	3.4	1.3	0.6	1.7	黒曜石	
12	剥片	16区Ｍ－２	完形	1.7	1.15	0.18	0.2	黒曜石	
13	剥片	16区Ｍ－２	完形	1.4	1.45	0.3	0.3	黒曜石	
14	砕片	16区Ｍ－３	打面部欠損	1.05	1.4	0.2	0.1	黒曜石	
15	砕片	16区Ｍ－３	先端欠損	0.63	0.68	0.2	0.1	黒曜石	
16	剥片	16区Ｍ－３	先端欠損	1.9	1.0	0.2	0.3	珪質頁岩	
17	剥片	16区Ⅰ－２	上半欠損	1.85	1.75	0.75	2.1	黒曜石	グリッド一括
18	剥片	16区Ⅰ－２	完形	1.25	1.5	0.4	0.6	黒曜石	グリッド一括
19	剥片	16区Ⅰ－２	上部欠損	1.2	2.1	0.25	0.6	黒曜石	グリッド一括
20	剥片	16区Ⅰ－２	上部欠損	2.15	1.2	0.25	0.7	黒曜石	グリッド一括
21	剥片	16区Ⅰ－２	完形	1.5	0.7	0.15	0.1	黒曜石	グリッド一括
22	剥片	16区Ⅰ－２	先端一部欠損	1.55	0.9	1.5	0.1	黒曜石	グリッド一括
23	剥片	14号住居	完形	10.2	5.0	2.8	104.5	黒色頁岩	17区
24	石刃	14号住居	完形	8.7	2.7	0.8	17.8	黒色頁岩	17区



第６図　６・16区旧石器遺物分布図(1)



第7図　6・16区旧石器遺物分布図(2)



第８図　６・16区出土旧石器(1)

第9図　6・16区出土旧石器(2)

第４章　縄文時代の遺構と遺物

1　概　　要

東尾根の先端寄りの６・16区から17区、中央尾根の頂上部の19区、西第１尾根の20区、この３箇所で遺構が検出された。総数は、竪穴住居跡３軒、土坑42基、埋甕２基である。時期は、前期黒浜式期、中期加曽利E3式期、後期堀之内式期である。

その内訳では、６・16区から17区で竪穴住居跡２軒、土坑39基、埋甕２基、19区が土坑３基、20区が竪穴住居跡１軒である。このほかに斜面に堆積した遺物包含層がある。

６・16区から17区は、東の榛名白川に向かってのびる尾根の先端近くにあり、当時にあっては河川に面して格好な居住の場であったと推定される。遺構は、前期黒浜式期の竪穴住居跡と土坑、中期加曽利Ｅ３式期の埋甕が検出されている。竪穴住居跡は等高線沿いに縦列し、土坑はそれを取り囲むようである。直径１ｍ前後の円形で袋状になるものが多い。復元可能な土器や人頭大の石が出土したものがあり、墓坑の可能性をもっている。集落の構造を考える上で興味深い資料である。遺物包含層には、早期の撚糸文や前期の諸磯式、十三菩堤式、中期のものがあり、遺構の存在が推定される。この包含層は、斜面にいくつかのたまりの状態で見られたもので、調査区域外での遺構の存在を暗示する。

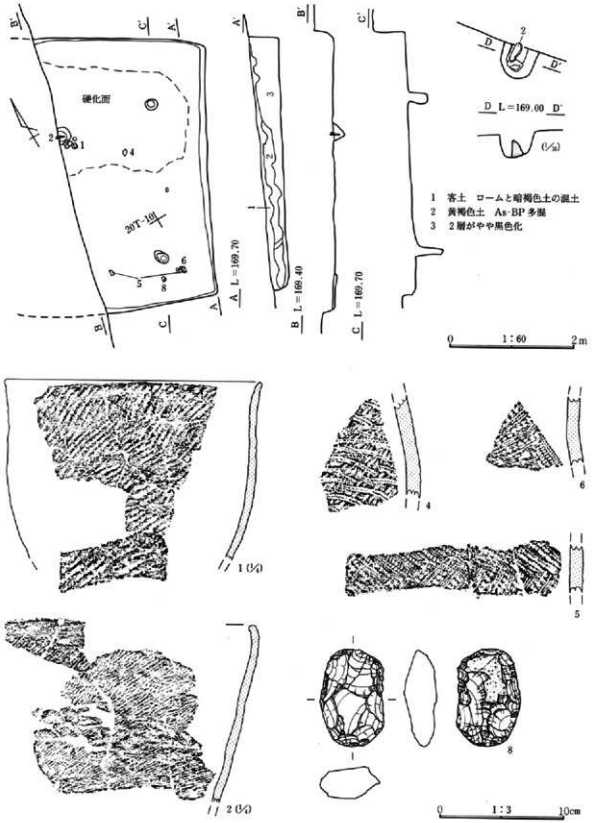
19区は、前期黒浜式期の土坑２基と後期堀之内式期の土坑１期がある。直径１ｍ前後の円形、周辺に前期の遺物包含層がある。北側に広がりがある。

20区は、前期黒浜式期の竪穴式住居跡１軒がある。早期の押型文土器が表採されている。

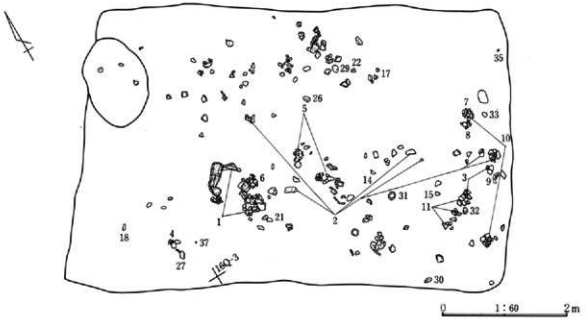
2　竪穴住居跡

1号住居跡（第10図　ＰＬ４・68）

西第２尾根の南緩斜面、20区ＳＴ－９、10グリットに位置する。当初ローム層の上面では確認できず、旧石器の試掘で掘り下げられた断面で炉跡が検出されたことから全貌が明らかとなった。西側は削平され東半分だけの検出である。16区の当該期の住居との比較から、等高線に直交、東西に棟方向をもつ長方形プランと推定した。東と南の壁については、埋没土とあわせて検討したが不明瞭さが残る。壁の状態、柱穴との位置関係の２点で、さらに広がる可能性がある。規模としては、南北4.25m、東西2.65mで14号住居跡を参考にすると東西６ｍをこすと推定される。主柱穴は２本が検出された。直径20cm前後、深さ30cm、柱間245cmである。壁溝はない。残存壁高は北壁で50cm、As-BP直上近くまで掘り込み、３辺ともにほぼ垂直に近い掘り方である。埋土は崩落した疑似ロームで自然埋没している。上層はAs-BPを多混する黄褐色土、下層はやや黒色化している。床面は、南へのわずかな下り勾配。炉の南から東にかけてはたたくと金属的な音がするくらいに堅くしまっている。南北両端で20cmの差がある。炉跡は中央のやや北寄りにある。ロート状の掘り方をもった地床炉で、底面に拳大の石をすえ支脚の代わりとしている。わずかに残った深鉢はその上にかけたものと思われ、破片は隙間をうめて固定したものと考えられる。ただし、焼けた痕跡は少ない。遺物は、炉の埋設土器、東南隅で石斧、深鉢破片がある程度で、埋土中への混入も少ない。時期は、炉からの土器やその他の遺物から前期黒浜式期である。



第10図　1号住居跡遺構図・遺物図



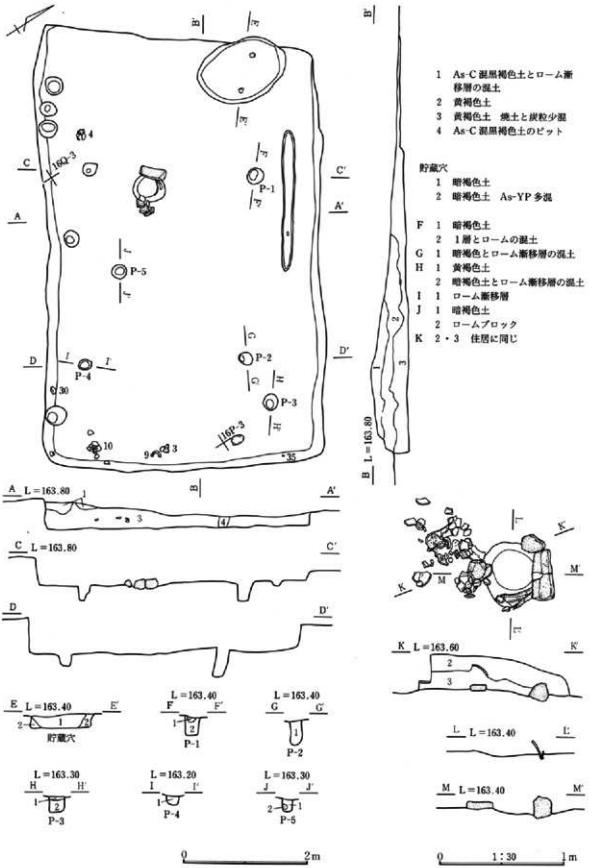
第11図　3号住居跡遺構図(1)

3号住居跡（第11～15図　ＰＬ68～70）

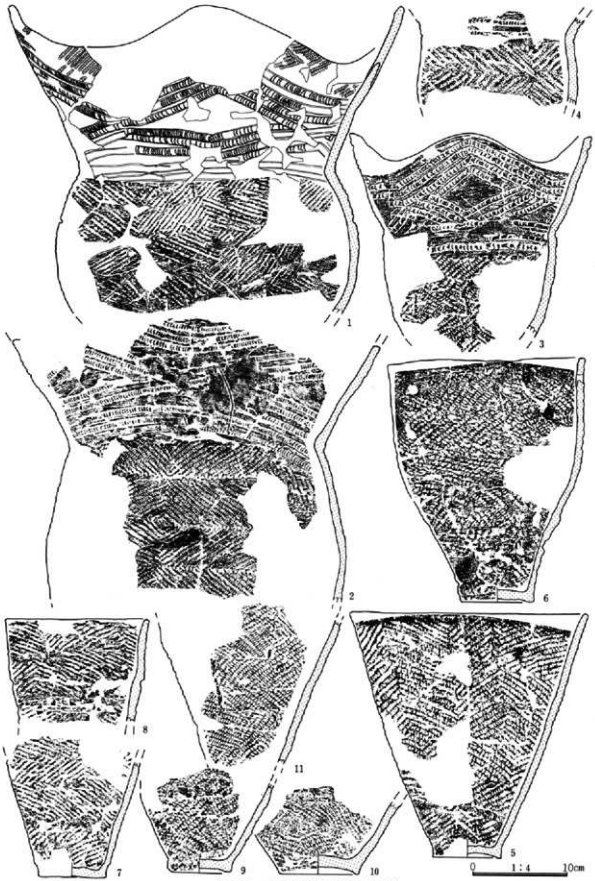
東尾根の南斜面、16区ＰＱ－２～４グリットに位置する。上面には、15号古墳、その高まりを利用した南大堀にかかる橋台があり、それらの検出作業で上面は大分削られて検出される。主軸はＮ－60°－Ｗで等高線に平行している。東西７ｍ、南北4.40ｍの長方形、北西隅は土坑のあることから、さらに広がる可能性がある。主柱穴は４本、壁際、特に南辺に壁柱穴がめぐる。主柱穴は直径が22～最大27cm、柱間は東西300、310cm、南北260、250cmを測る。北辺のやや内側に壁溝らしいものが２ｍあまり検出された。柱穴や北西隅の土坑と考え合わせると建替え、拡張の痕跡かと推定される。覆土はロームを多く含む黄褐色土が床面を覆い、その上にローム漸移層とロームの混じった土がみられる。地形勾配に沿った北側からの自然埋没である。遺物は３層に多く含まれている。

床面はほぼ水平で、全体に堅く中でも主柱穴で結ばれた中ではその傾向が強い。南西の隅寄りに埋設土器がある。炉としては、小ぶりすぎて用をなさず、埋甕と考えられる。炉は中央やや西にある。直径50cmをこす浅い掘り方をもつ地床炉である。東西に対をなすかのように枕石があり、燃焼部の深さを調整したものと考えられる。西のものは長さが40cm近い、幅15cm強の割石で脇を拳大の石で固定されていた印象を受ける。東は、20cm四方の平坦面をもち炉辺での置き台か簡易な作業台と推定される。特徴的なのは、炉辺の土器で深鉢大小４個体が復元される。接合の状態からは、最も大きいものは口縁部を炉辺のついたてのように、単口縁の深鉢が炉にかけられたものと推定される。遺物の出土状態は、全体に多くみられ、しかも炉辺などではそのまま廃棄されたかのようで接合率が高い。組成では、波状口縁の深鉢と単口縁深鉢で大小４個体前後があること、床面での出土が多く、屋内での使用状態を思わせる。石器は、定型的なものと剥片の一部を粗く加工したものがあり、数では後者が主である。縁辺を全体に調整して形状を整えたものから、簡単に刃を付けた程度のものまで幅がある。また、覆土中に200個をこす卵大の円礫がある。14号住居跡でもみられたが、粒ぞろいであることに共通点と人為的な意図を感じるが、用途不明である。

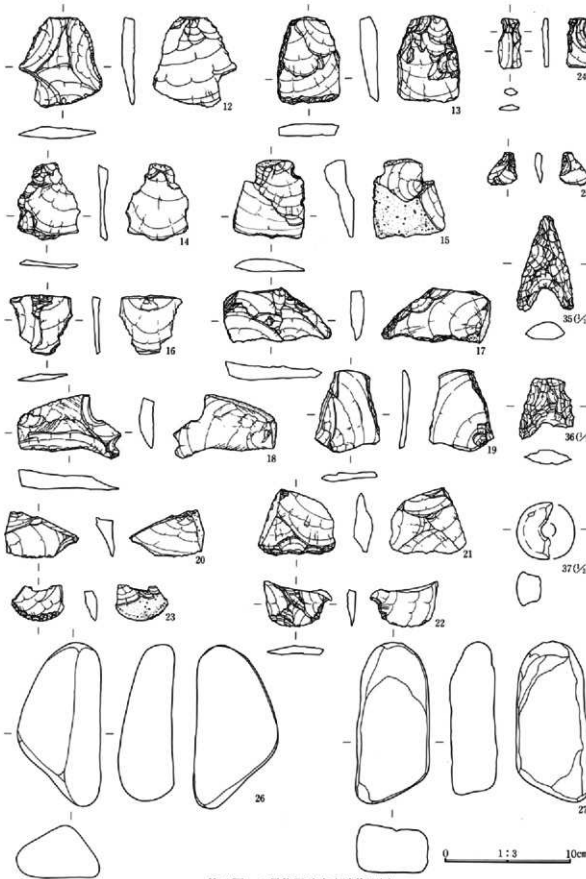
時期は、前期黒浜式期で14号住居跡とは同時期である。



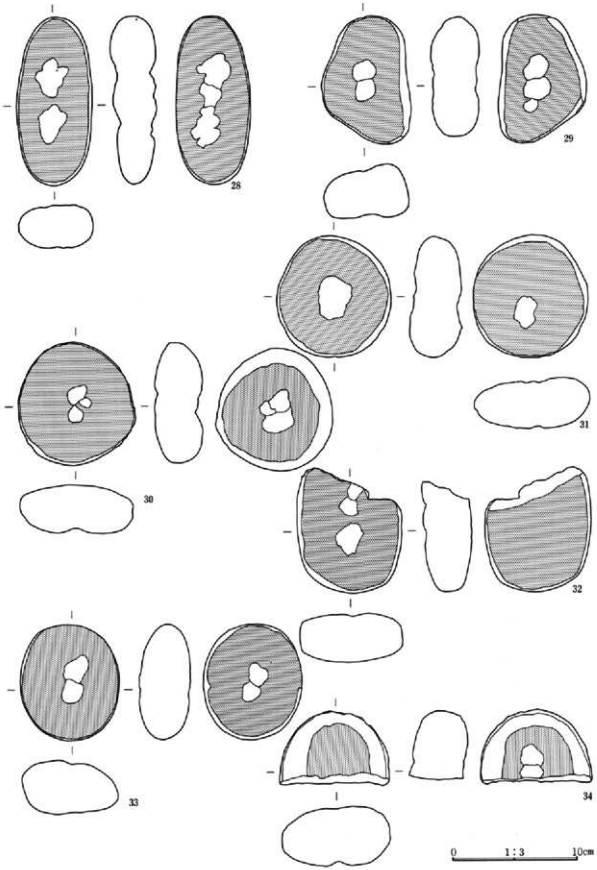
第12図　3号住居跡遺構図(2)



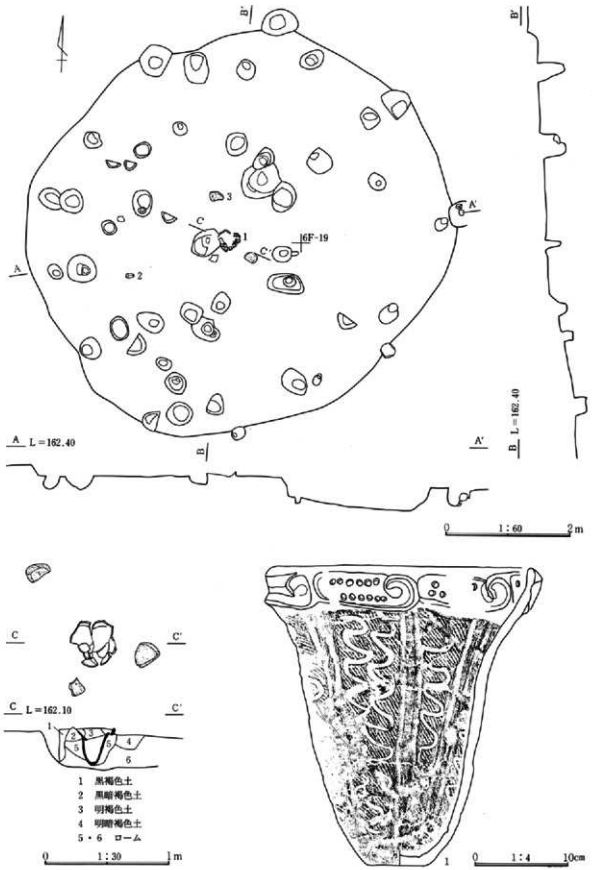
第13図　3号住居跡出土遺物図(1)



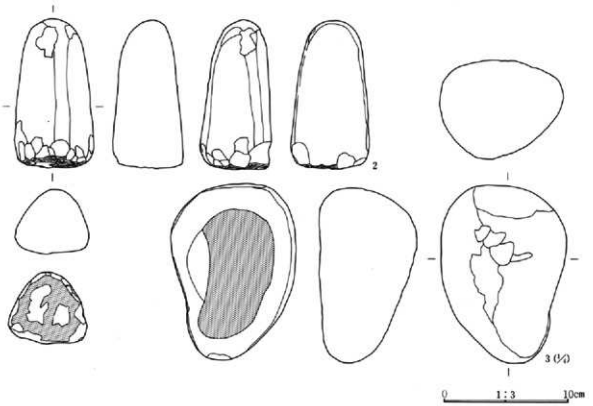
第14図　３号住居跡出土遺物図(2)



第15図　3号住居跡出土遺物図(3)



第16図　4号住居跡遺構図・遺物図



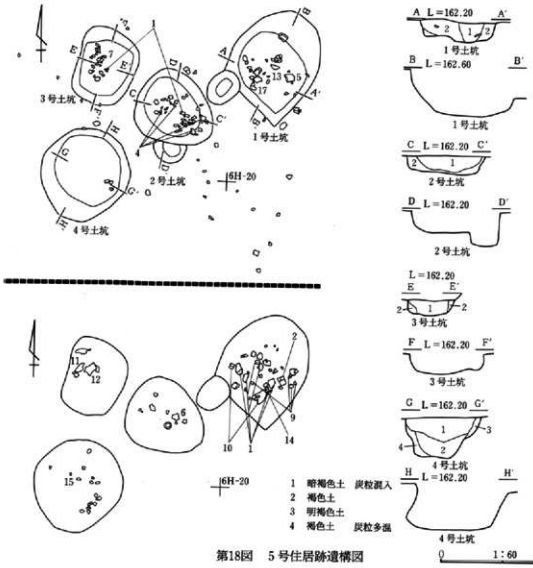
第17図　4号住居跡出土遺物図

4号住居跡（第16・17図　ＰＬ４・５・７）

10号古墳の西側周堀にかかる６ＥＦ―18・19グリットで検出された。北西に３号集石、東に４号集石が重複して全貌はとらえにくい状態である。住居と判断したのは、炉体の埋甕とも思える深鉢がまず確認され、その周辺に柱穴らしきピットが多数あったことによる。また、尾根の中では平坦面に近い立地にもよる。

土器は、口縁を上にした正位ですえられ、ほぼ同規模の掘り方がある。周囲の三方向に拳大ほどの割石が取り囲むようにあり、炉とみることもできる。しかし、床面らしい硬化した状態や炉跡としてみた場合の焼土などに乏しく、埋甕と判断される。遺物は、この土器を除くと斜面堆積の包含層からの混入要素が強く、スタンプ形石器も隣接するグリットで多くみられる撚糸文土器に伴うものである。

この時期の遺構は、14号古墳の前庭で検出された１号埋甕、隣接して133号土坑がある。調査範囲全体に混入する土器も少なく、集落としては小規模なものと推定される。



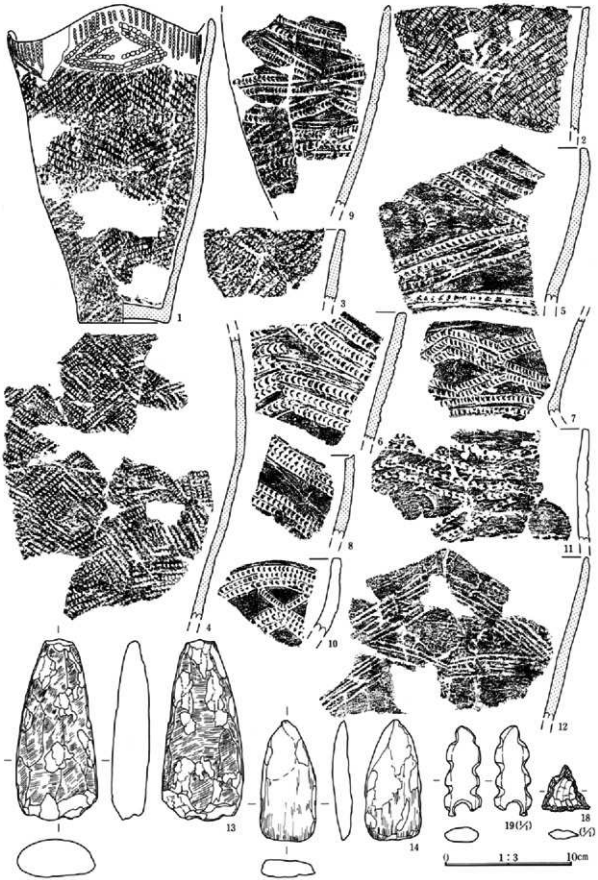
第18図　５号住居跡遺構図

５号住居跡（第18～20図　ＰＬ５・６・71）

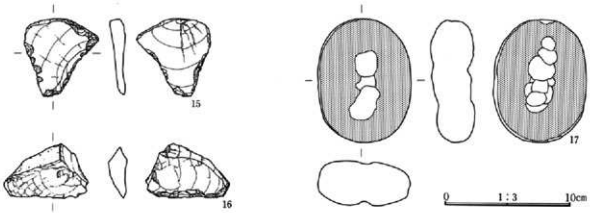
12号古墳の北側、６ＧＨ－19・20グリットで検出された土坑群を、調査当時のままの名称で報告する。古墳周辺の精査中、ローム漸移層面で検出されたもので４基の土坑がある。いずれも直径が１ｍ前後の断面円筒形の土坑で、周辺で多数確認されたものと一体のものである。住居との判断は、一定の範囲に土器を中心とした遺物が集中していたこと、遺物の時期に混淆がないこと、土坑４基を中心にして土層に色調の変化がみられたこと、尾根の中でも平坦面にある立地の４点による。結果は、一括性の高い土坑群で、多数の遺物は上面を広く覆う包含層の一部であることが判明した。

１号土坑は、縦156cm、横130cm、深さ80cmの円形、２号土坑は、縦130cm、横115cm、深さ40cmの不整円形、３号土坑は、縦120cm、横92cm、深さ35cmの隅丸方形、４号土坑は、縦150cm、横135cm、深さ65cmの円形である。覆土は、この時期の土坑特有の褐色土と黒色土の斑模様の土で堅く締まる。大きく４層にわけられ、量に差があるが微小な炭粒を含んでいる。いずれも自然埋没とおもわれるが、１層の中には被熱した様子がみられる。遺物は、１層と２層で落ち込むように出土している。埋没時の混入と推定される。

時期は、４基とも前期黒浜式期である。



第19図　5号住居跡出土遺物図(1)



第20図　５号住居跡出土遺物図(2)

６号住居跡（第21図　ＰＬ６・72）

10号古墳と12号古墳との間、６ＧＨ－18・19グリットで確認された遺物包含層である。当初は、撚糸文土器が多くみられたことから住居跡の可能性もあるとして調査を始めた。土器76点、その内撚糸文が尖底部を含む16点、スタンプ形石器を含む石器29点を記録した。しかし、炉や柱穴として確定できるものがなく、床面も硬化した状態がみられず南北で50cmの差があることから、斜面堆積の遺物包含層と判断した。その後、周辺での調査が進み２つの古墳の間には、７号住居とした同様な土層の堆積状態や遺物の集中状態が見られた。いずれも、遺物は撚糸文土器と前期黒浜式とが混在している。撚糸文土器は、遺構外遺物として報告した。

７号住居跡（ＰＬ６・72）

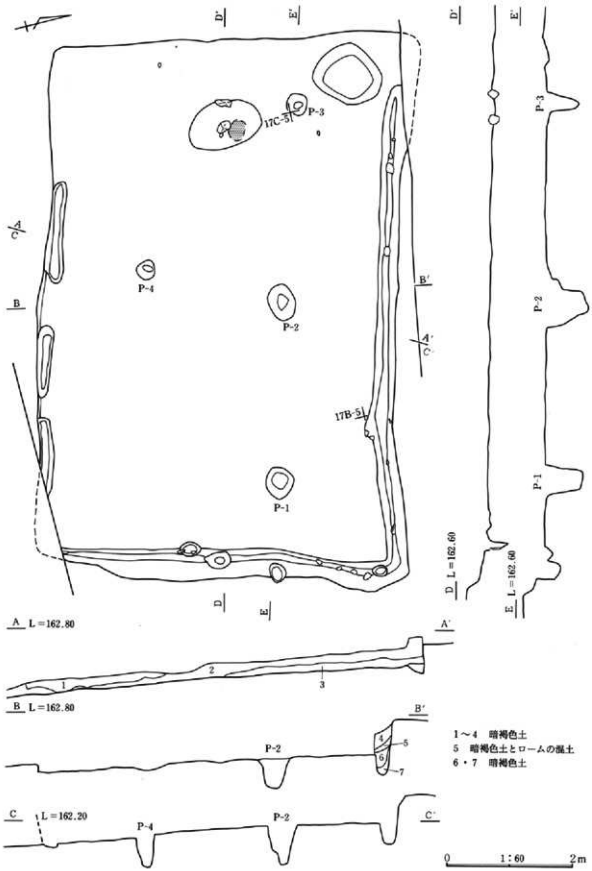
12号、13号、17号の各古墳との間、６ＪＫ－20グリットで確認された遺物包含層である。当初は、ローム層を掘り込むピットと方形に土層変化がみられたことから、住居として調査を始めた。６号住居跡の検討結果と同じく、床面とすべき硬い面がみられないこと、等高線と直交し平坦でないこと、炉跡がないことの３点の理由から斜面堆積の遺物包含層とした。

旧地形では、尾根の平坦面から斜面に変換する箇所にあたり、遺物がたまりやすい状態であることがわかる。遺物は、前期黒浜式が最も多く、早期撚糸文から中期加曽利Ｅ式までの遺物がある。南辺際にある石の列は、包含層を取り除いたところで検出された。大きさやレベルが揃い等高線に沿うことから、縄文時代の配石遺構とも考えられたが確定できない。

８号住居跡（第21図　ＰＬ６・72）

16ＯＰ－２・３グリットで３号住居跡の東側に隣接して検出された。プランに相当する矩形の土層の変化がみられたこと、３号住居跡と同様に遺物が集中した状態でみられたことの２点から、住居を想定して調査を進めた。民家への搬入路のため東西に二分して調査をしたが、搬入路部分では遺物量が少なく、広く確認した中ではプランに相当する土層のちがいはみとめられなかった。想定されるプランの南西隅を確認したにとどまる。しかし、隣接する３号と14号の住居跡が、いずれも等高線に平行するのに対してやや東南にふれている。以上から、６号や７号といった斜面の鞍部にできた遺物のたまり、包含層の一部とみた方がよい。

第21図　6・8号住居跡出土遺物図



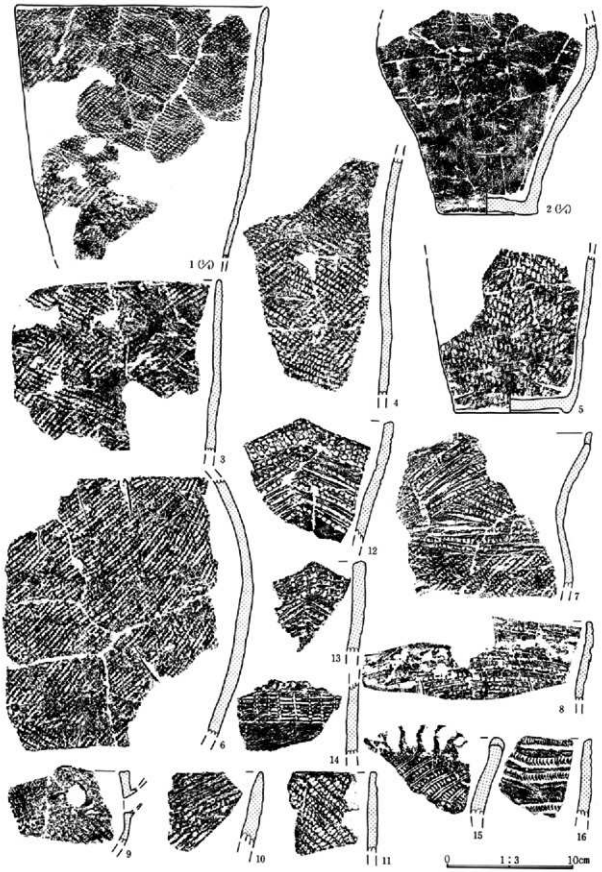
第22図　14号住居跡遺構図(1)

第23図　14号住居跡遺構図(2)

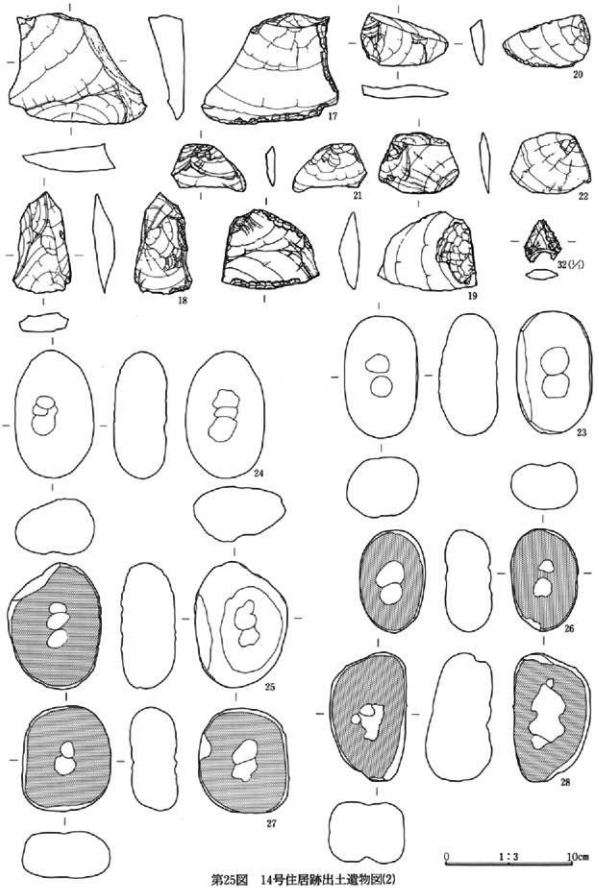
14号住居跡（第22～26図　ＰＬ７・74・75）

18Ａ～Ｃ－３～５グリットで検出され、３号住居跡とは一群をなすと推定される。規模は、長軸の東西方向で8.54m、南北方向の東辺で5.80mを測る長方形である。プランは、周溝がめぐることを理由としたが北側の柱列に対応する柱が南にないことから、さらに広がることが考えられる。周溝は、西辺と南辺の一部を除いてめぐり、幅15～20cm、北側が深く南が浅くなる傾向があり総じて深さ20cmをこしている。東辺に限り、柱穴らしいピットが４本ある。周溝内におさまるか、わずかに飛び出すかの位置にある。場所からすると、炉跡と対面しており入口の造作に関係したものと判断される。主軸方位は、北辺でＮ－75°－Ｗである。主柱穴は、北側で３本、南中央で１本がある。本来６本を想定したが、残る２本については掘り方においても検出できなかった。埋土は北からの自然埋没で全体を暗褐色土が覆っている。中に卵大の円礫が100個以上も含まれ、３号住居跡と共通する。住居の埋没に伴う自然の現象か、それとも粒がそろっていることから遺構の一部であろうか。土器をはじめとした遺物と混在した状態にある。床面は、暗色帯まで掘り下げ平坦にしたもので、北側半分では一様な硬さがみられた。炉跡は、西辺から１m弱のところに浅い楕円形の掘り方をもつ地床炉である。中央部の焼土を囲むように拳大の山石２点が枕石のような位置にある。遺物は、埋土に混在したものが多いが床面では第24図の１がある。時期は、前期黒浜式期である。

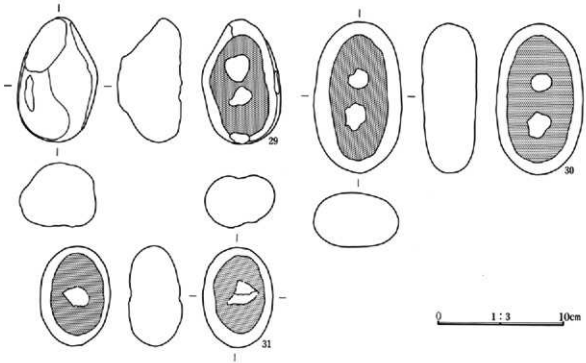
なお、152号～156号の土坑は、14号住居のプランの中にある。土器の接合例が多く、住居の一部とも考えられるが、検出時には土層の色調に差異があり別の遺構と判断した。



第24図　14号住居跡出土遺物図(1)



第25図　14号住居跡出土遺物図(2)



第26図　14号住居跡出土遺物図(3)

3　土　　坑（第27～50図）

６・16区32基、17区７基、19区３基の合計42基がある。５号住居跡とした４基が追加される。時代不明とした中にも、覆土から縄文時代と考えられるものが６・16区で10基前後ある。古墳の築造や中世の整地を考慮すると、全体の数はさらに増すものと推定される。

時期　前期　40基　中期　１基　後期　１基

分布の状況　６・16区、17区の一群は、東尾根の先端、榛名白川寄りにある。東西100m前後の範囲にまとまり、３号、14号の２軒の住居を取り巻いている。旧地形では、標高163m前後の傾斜変換点付近に緩い弧を描くように集中する。

19区の３基は、中央尾根の頂上部にある。古墳の盛土下にあり、その後の削平をまぬがれたようである。調査区域の北側には、前期を中心とした遺物の散布がみられる。20区の住居跡と考え合わせると、６・16区とは地点を異にする集落が推定できる。白川傘松遺跡との関係も考えられる位置である。

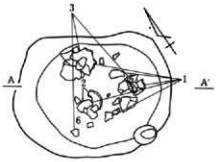
形状と規模　円形　40基、楕円形１基、長方形　１基

直径１m を越すものが大半である。例外が99号、３m前後の規模をもち遺物組成も住居と差が少ない。断面形では椀底状と袋状のものがあり、後者は底面が平坦になる傾向がある。住居の周辺にみられる傾向があり、貯蔵施設ではないかと考えられる。覆土は、かたく締まる暗褐色土や疑似ローム様の黄褐色土である。微小な炭粒が覆土の中位に混入している。人頭大の石が落ち込むような例もあり、墓坑と推定される。

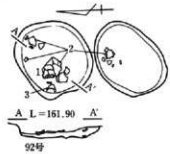
遺物の出土状況　遺物は、検出面から覆土の中位で出土している。遺物の有無では、明瞭な差がある。

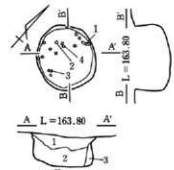
和田山天神前遺跡縄文時代土坑一覧表

番号	位置	形状	縦・横・深	遺物	時期	備考
89	16F－2	円形	127・95・53		黒浜	2号集石が重複
92	6F－20	円形	130・105・31		黒浜	
98	16OP－3・4	円形	103・90・49		黒浜	
99	16QR－3・4	円形	290・287・38		黒浜	
101	16Q－2	楕円形	150・103・52		黒浜	
102	16I－1	円形	125・120・27	剥片	黒浜	
105	6G－19	長方形	205・150・52	剥片	黒浜	
107	16Q－2	円形	95・70・55	深鉢	黒浜	
115	6D－19・20	円形	121・110・43	深鉢	黒浜	
121	16P－3	円形	88・88・75	深鉢	黒浜	袋状
122	16J－3	円形	80・75・79		黒浜	
123	16J－3	円形	85・80・103		黒浜	
124	16J－1	円形	173・150・66		黒浜	111坑が重複
126	6K－20	円形	188・146・84	深鉢	黒浜	
127	16Q－2・3	円形	140・55・25	深鉢	黒浜	半分のみ
128	6H－20 16H－1	円形	155・155・72		黒浜	2基あり
129	16H－1	円形	115・105・43	深鉢	黒浜	
130	16IJ－1	円形	155・128・20		黒浜	
131	6G－19	円形	130・126・59		黒浜	
132	6G－19・20	円形	123・115・56	深鉢	黒浜	
133	6M－20 16M－1	円形	110・115・40		加曽利E	
134	6I－20	円形	160・142・78		黒浜	
136	6N－20 6N－1	円形	125・73・87		黒浜	半分のみ
137	6J－20	円形	157・155・37	深鉢	黒浜	
139	16M－1	円形	191・160・76	黒曜石	黒浜	
140	16NO－2	円形	140・140・48	深鉢	黒浜	
141	16N－2	円形	100・95・40		黒浜	
144	6N－2	円形	123・114・50	剥片	黒浜	
145	16Q－2	円形	120・90・112		黒浜	半分のみ
152	17AB－4	円形	190・170・63		黒浜	14住に重複
153	17B－4	円形	195・190・37		黒浜	14住に重複
154	17B－4	円形	195・185・42		黒浜	14住に重複
155	17B－4	円形	150・140・		黒浜	14住に重複
156	17C－5	円形	140・120・65		黒浜	14住に重複
157	16T－4	円形	168・150・42		黒浜	
158	16T－4	円形	127・106・32		黒浜	
159	17B－4・5	円形	230・140・		黒浜	

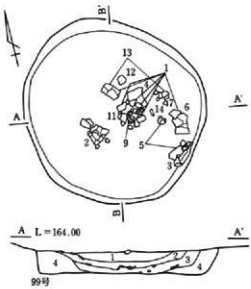


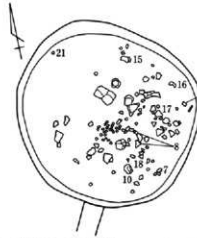
1　暗黄褐色土
2　暗褐色土



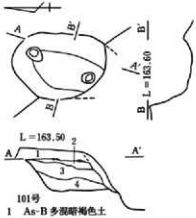


1　黄褐色土と茶褐色土の斑状混土
2　暗褐色土
3　黄褐色土

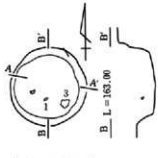




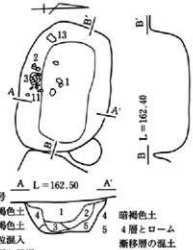
1　暗褐色土　炭粒少混　2　暗褐色土　ロームブロック少混
3　暗褐色土　ロームブロックやや多　4　明褐色土　ローム多混



1　As-B 多混暗褐色土
2　As-C 多混黒褐色土
3　黒褐色土　4　ロームブロック多混褐色土

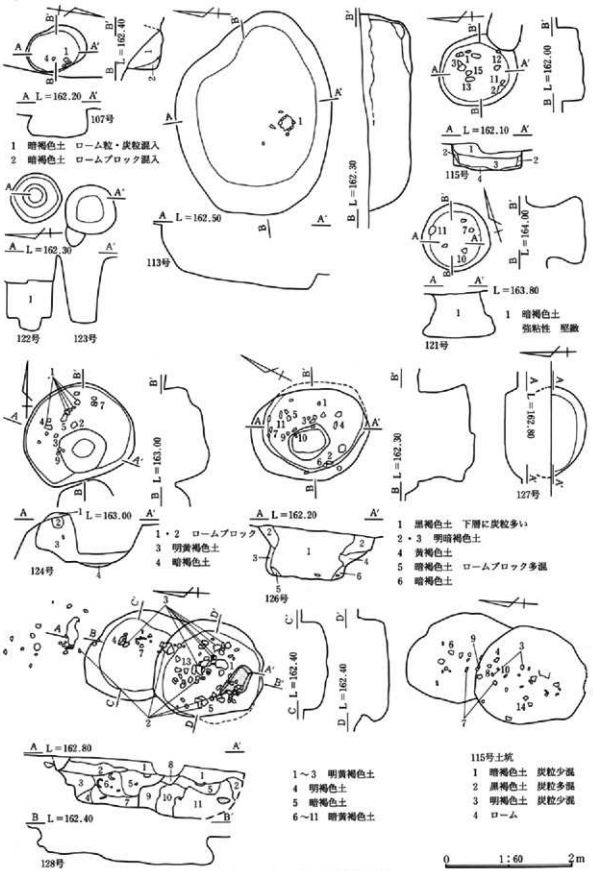


1　黒褐色土
2　黄褐色土

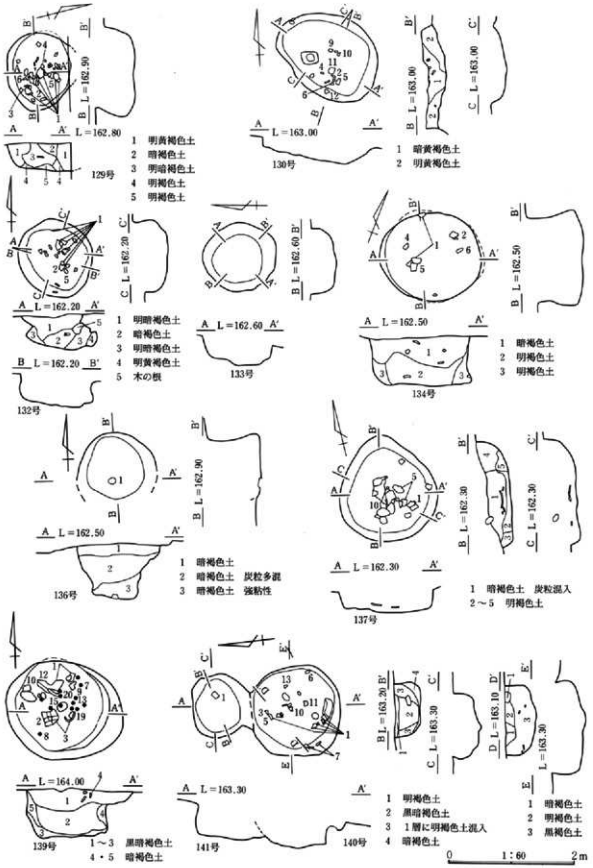


1　暗褐色土
2　暗褐色土
炭粒混入
3　2層と黒褐色土の混土
4　暗褐色土
5　4層とローム漸移層の混土

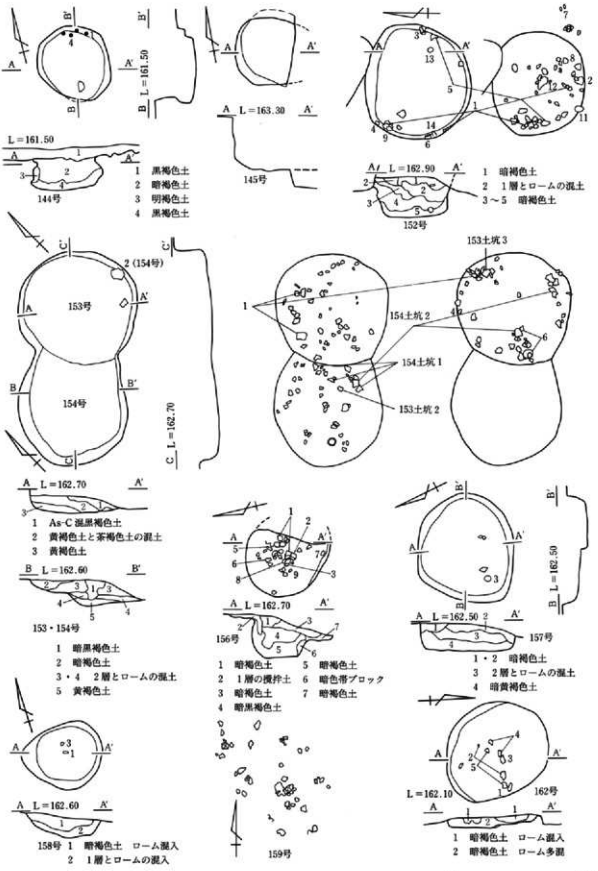
第27図　縄文時代土坑遺構図(1)



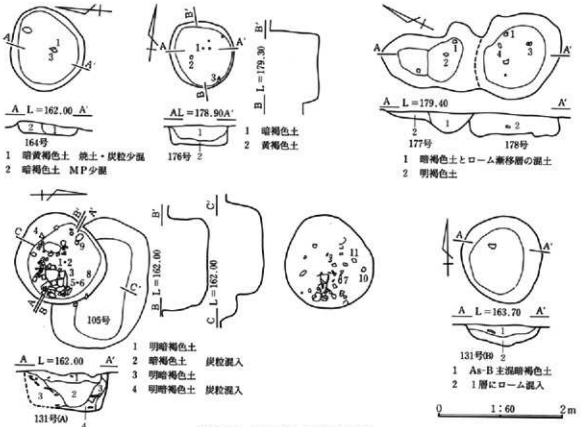
第28図 縄文時代土坑遺構図(2)



第29図　縄文時代土坑遺構図(3)

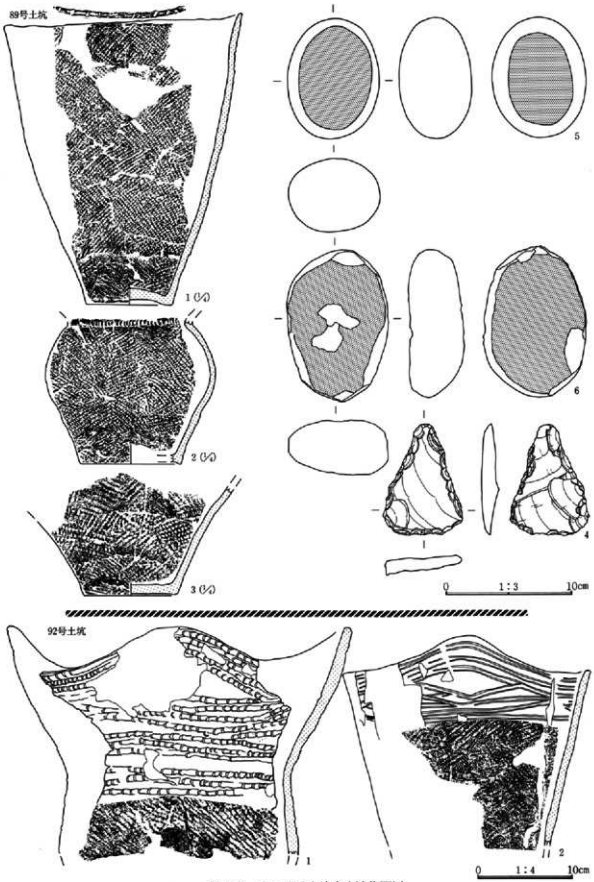


第30図 縄文時代土坑遺構図(4)

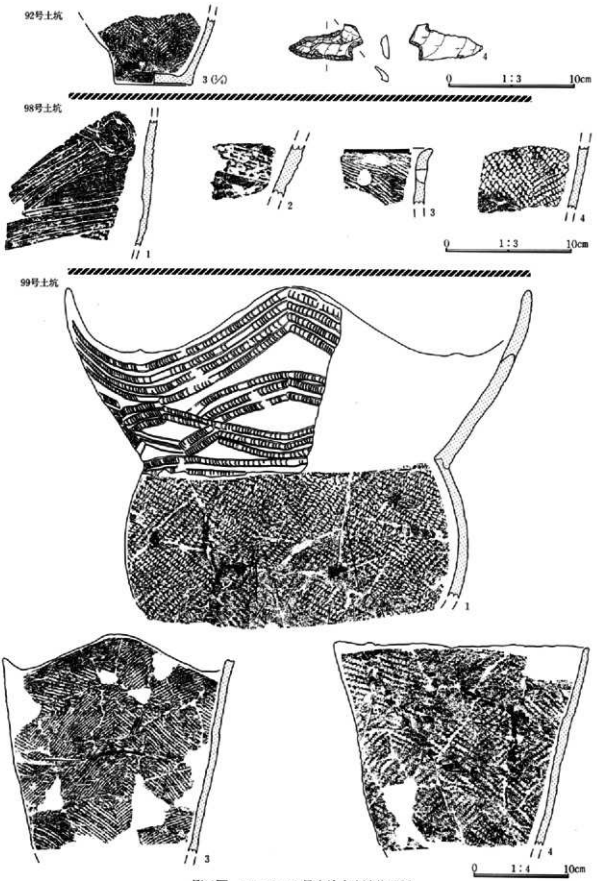


第31図　縄文時代土坑遺構図(5)

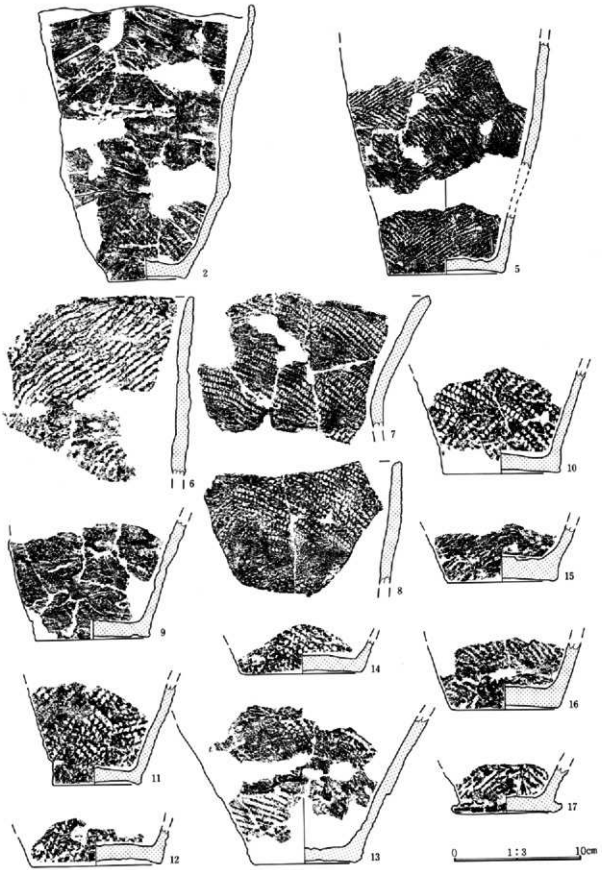
番号	位　　置	形　状	縦・横・深	遺　物	時　期	備　考
162	17CD－4	円　形	168・148・15	深鉢	黒　浜	
164	17D－4	円　形	129・117・18	深鉢、剥片	黒　浜	
176	19J－1	円　形	108・103・30		黒　浜	
177	19I－1・2	円　形	150・110・31		堀之内	
178	19I－1・2	円　形	150・123・38		黒　浜	



第32図 89・92号土坑出土遺物図(1)

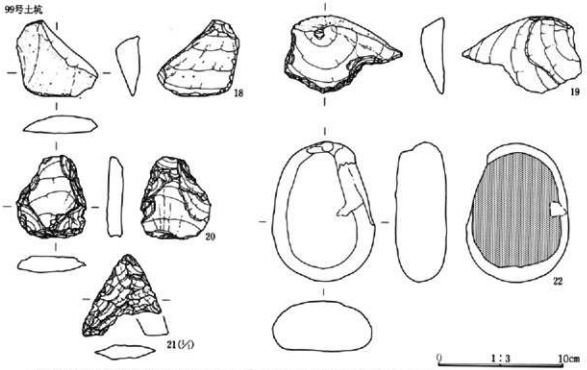


第33図　92・98・99号土坑出土遺物図(2)

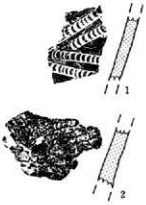


第34図　99号土坑出土遺物図(3)

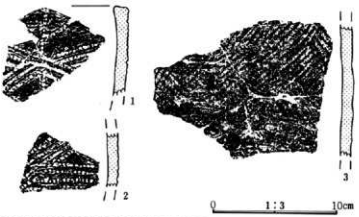
99号土坑



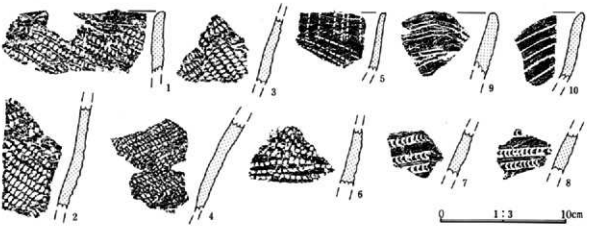
101号土坑



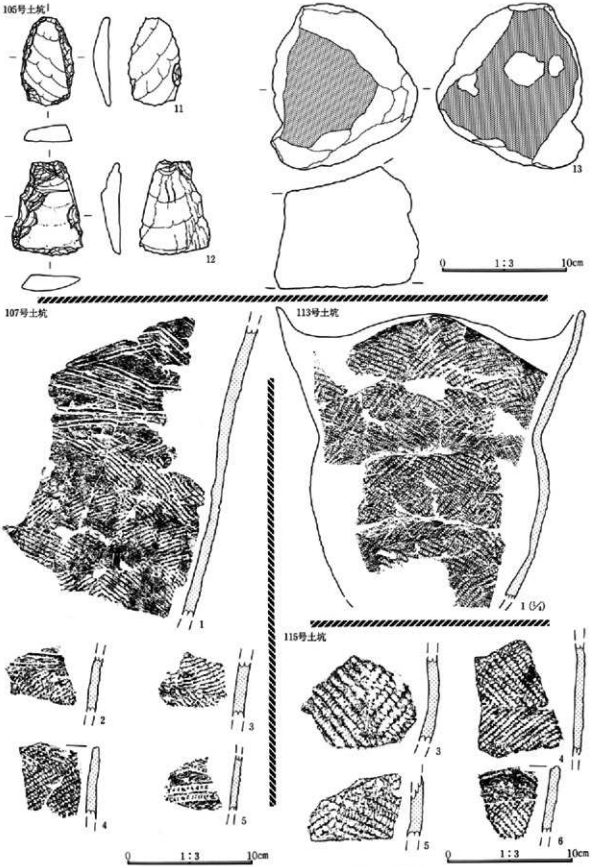
102号土坑



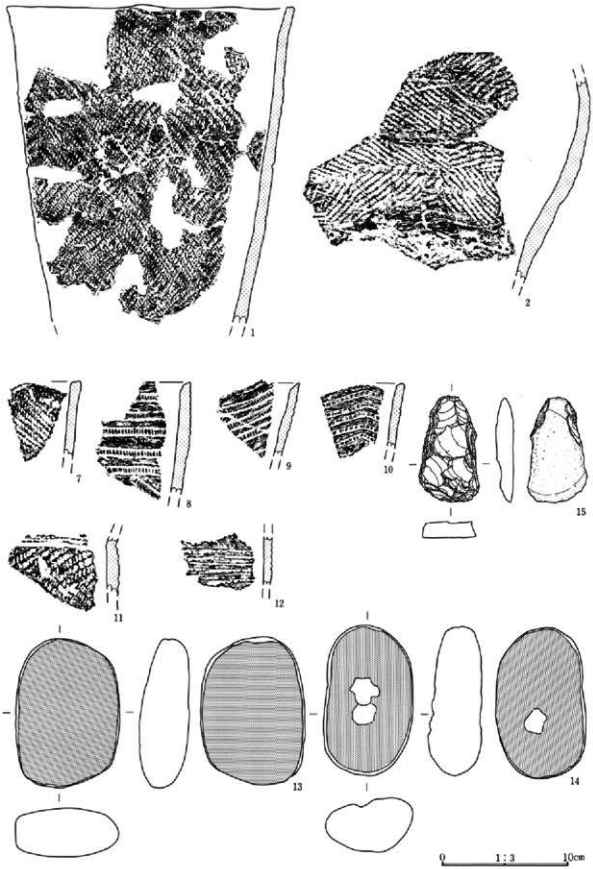
105号土坑



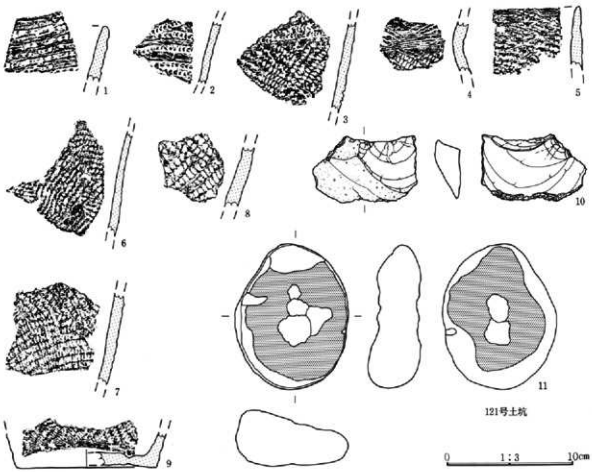
第35図　99・101・102・105号土坑出土遺物図(4)

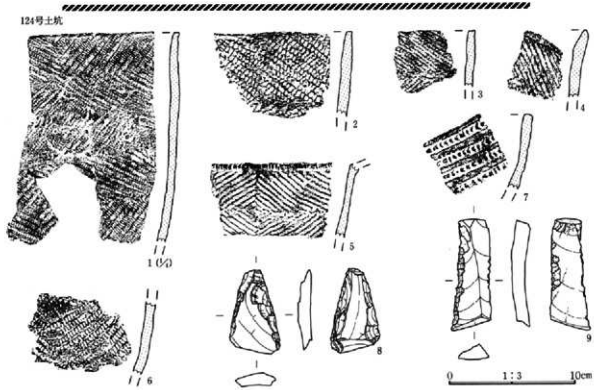


第36図 105・107・113・115号土坑出土遺物図(5)

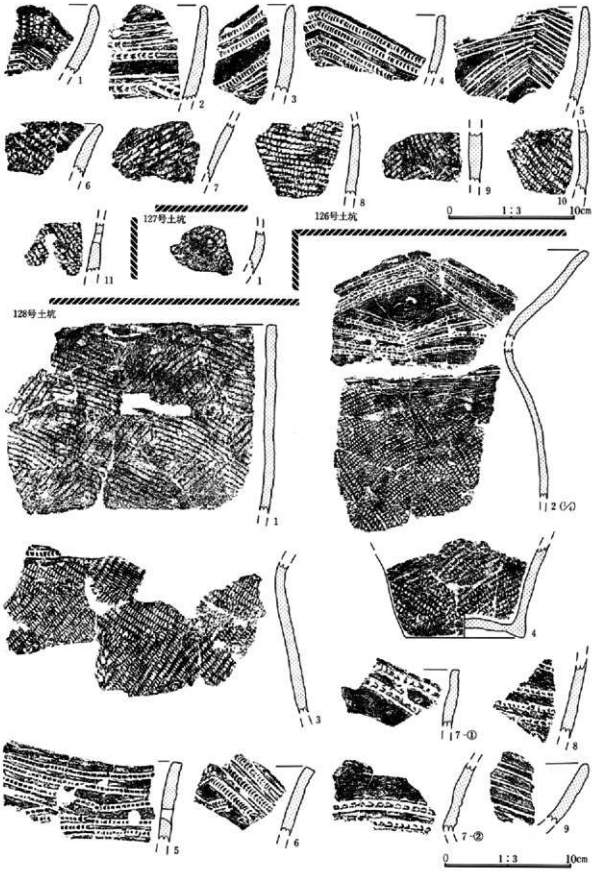


第37図　115号土坑出土遺物図(6)

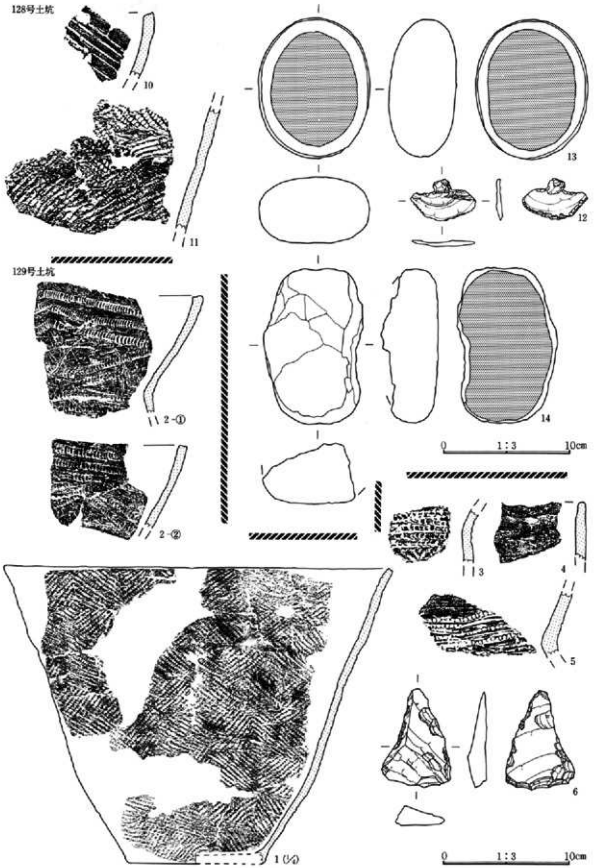




第38図　121・124号土坑出土遺物図(7)

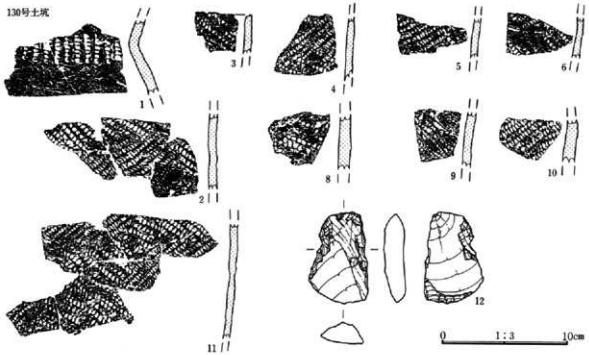


第39図　126・127・128号土坑出土遺物図(8)

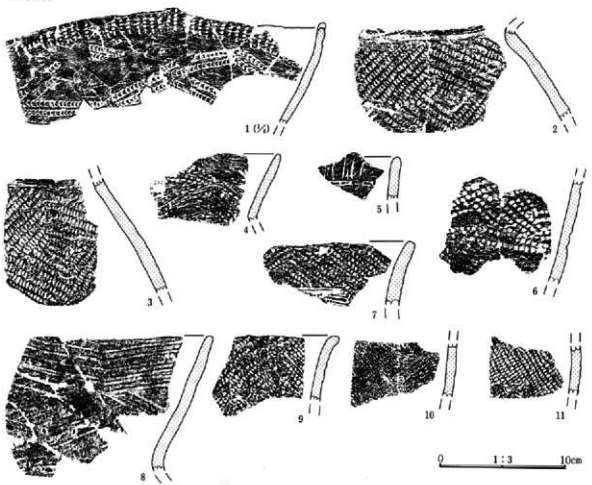


第40図　128・129号土坑出土遺物図(9)

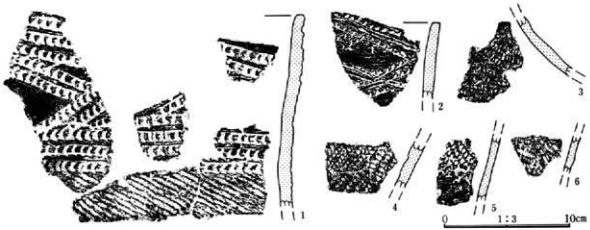
130号土坑



131号土坑

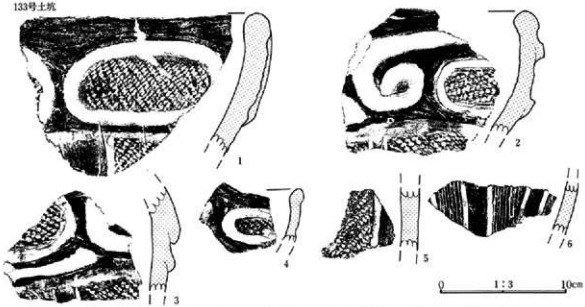


第41図　130・131号土坑出土遺物図(10)

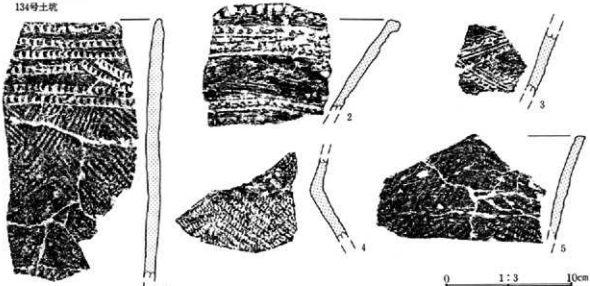


132号土坑

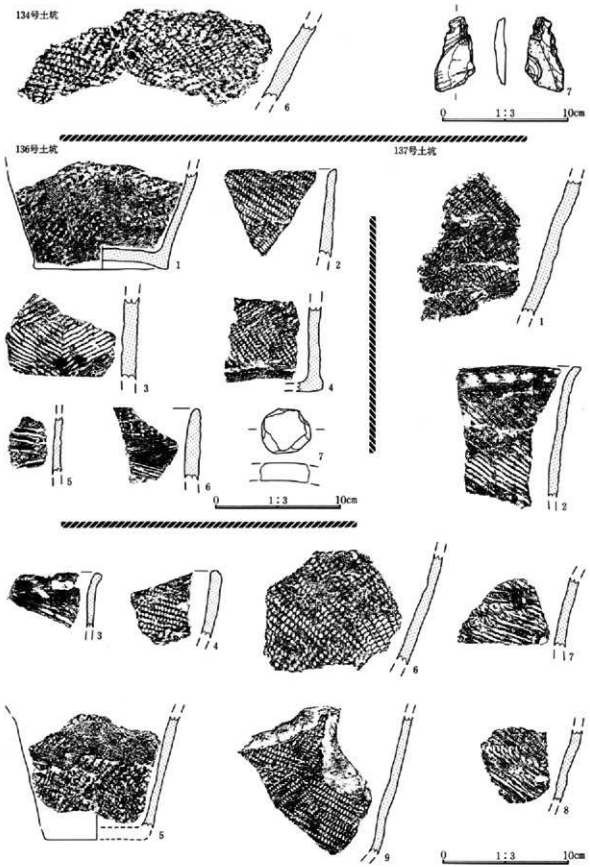
133号土坑



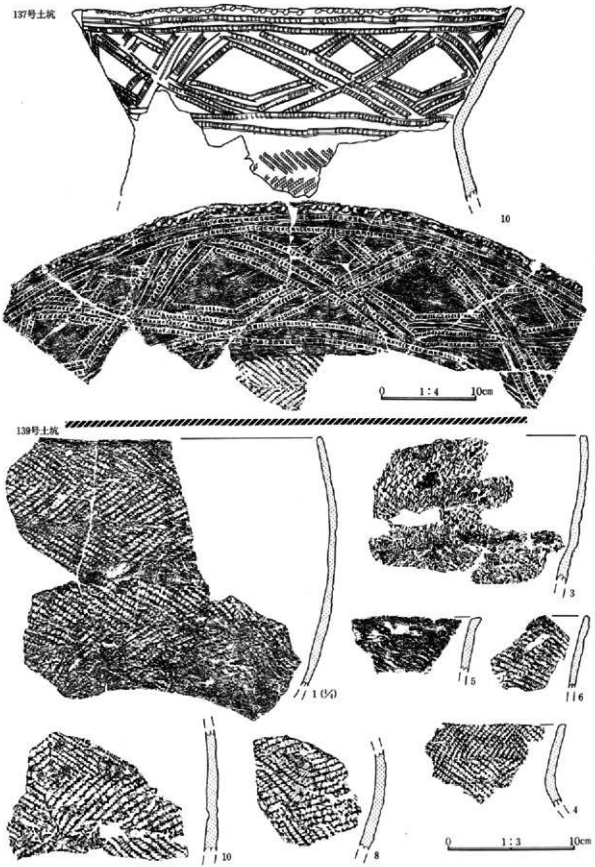
134号土坑



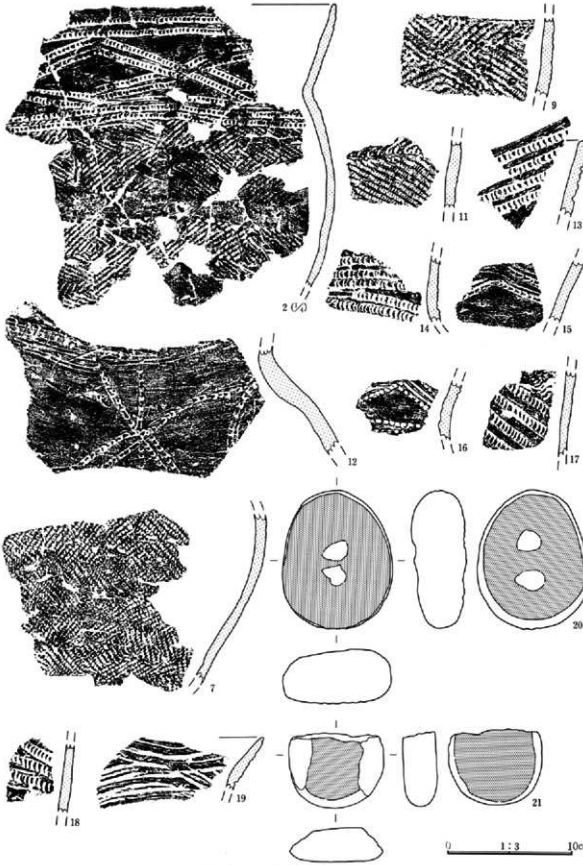
第42図 132・133・134号土坑出土遺物図(1)



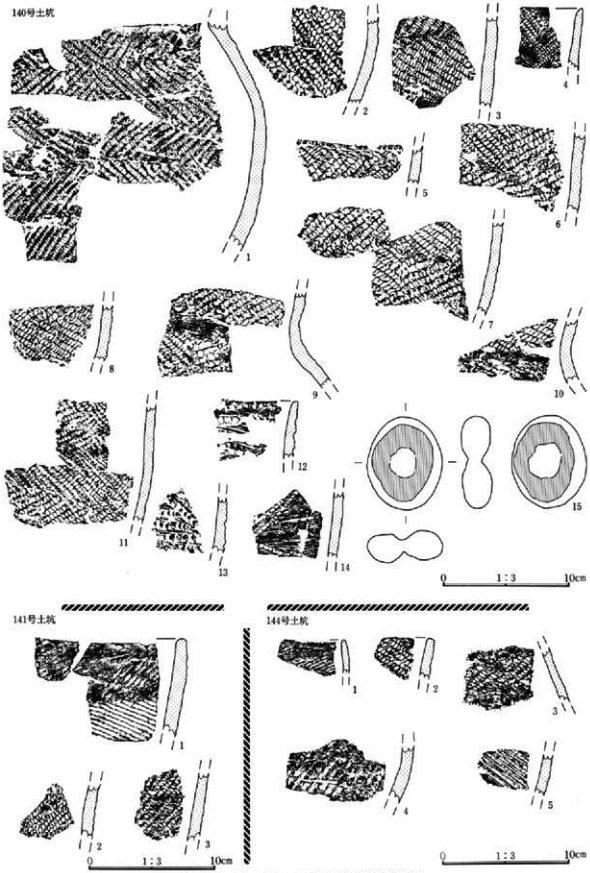
第43図　134・136・137号土坑出土遺物図(1/3)



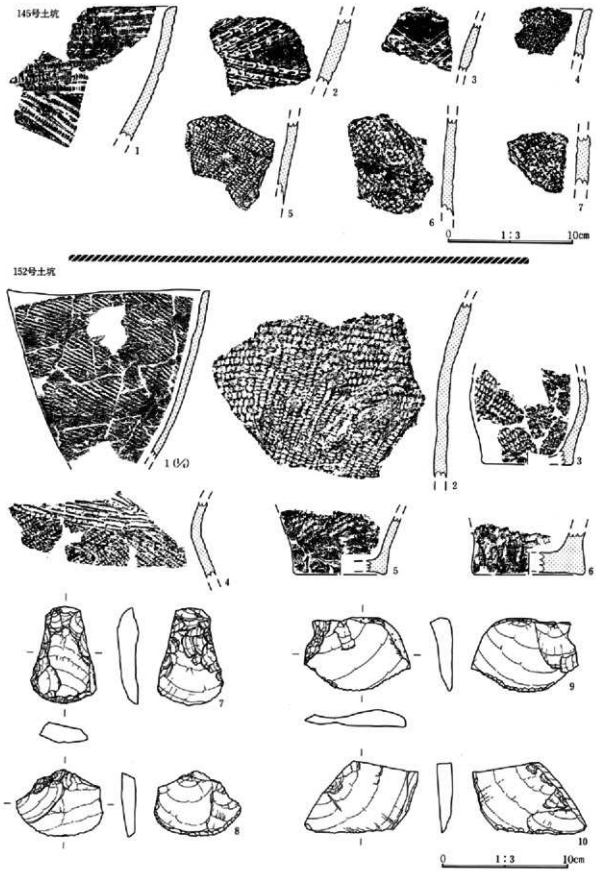
第44図　137・139号土坑出土遺物図(3)



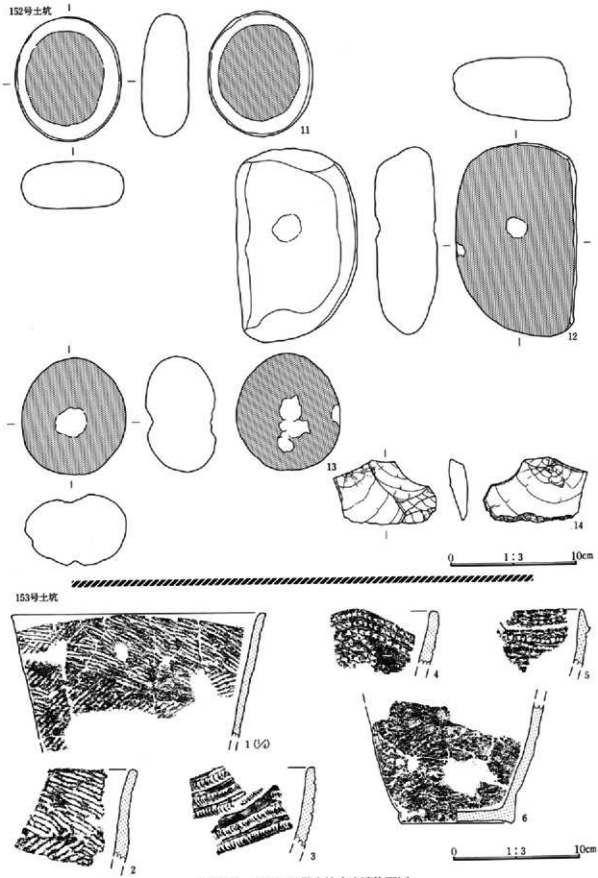
第45図　139号土坑出土遺物図(4)



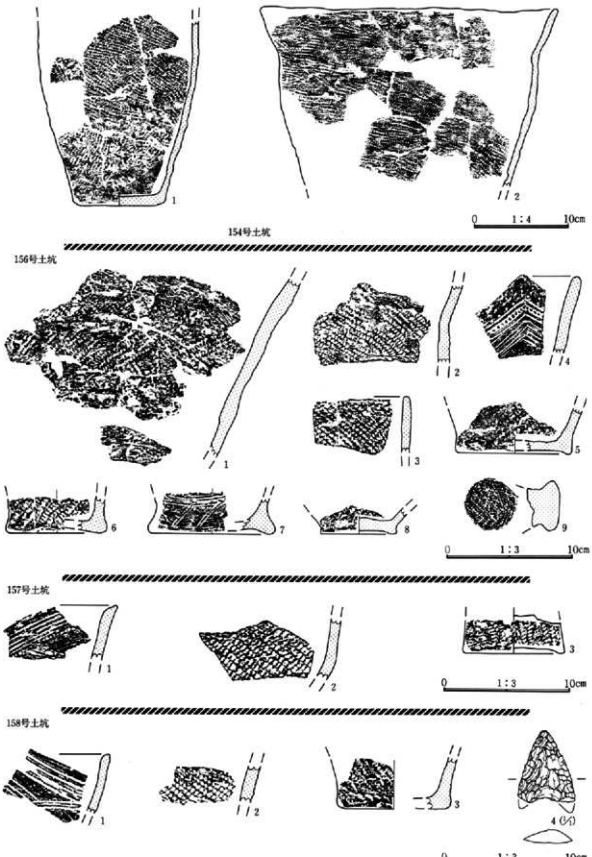
第46図　140・141・144号土坑出土遺物図(15)



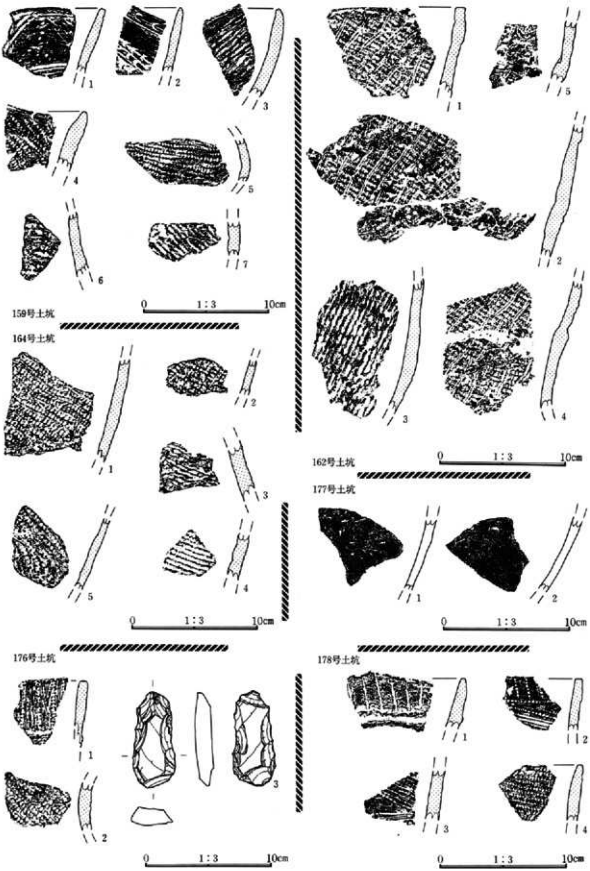
第47図　145・152号土坑出土遺物図(06)



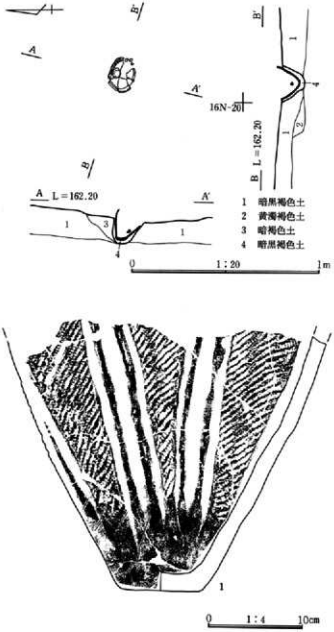
第48図　152・153号土坑出土遺物図(17)



第49図　154・156・157・158号土坑出土遺物図(1/3)



第50図　159・162・164・176・177・178号土坑出土遺物図(1)



第51図　1号埋甕遺構図・遺物図

4　埋　甕

1号埋甕（第51図　PL146）

16M−20グリット、14号古墳の羨道部下層のローム漸移層中で検出された。古墳の築造にともなう整地で、上面を削平されている。平面的には検出できなかったが、断面では土器をひとまわり大きくした浅い掘り方が暗褐色土中にある。平面的な検出はむずかしい。土器は、口縁を上に、底部を水平にした正位の状態ですえている。被熱、加工、敲打などの形跡はなく、使用した状況にとぼしい。土器の周囲には、柱穴、ピットはなく、住居の一部や土坑と組み合わせた遺構とは判断しがたい。時期は、4号住居跡とした埋甕に近い加曽利E3式である。

高さ27.3cm、最大径34cm、底径8.6cm、2条単位の貼付隆帯で8単位に区画し、RL施文。

第５章　古墳時代の遺構と遺物

1　概　要

16区から20区まで、尾根とそのふところの谷地で古墳26基、竪穴住居跡５軒、方形周溝墓１基、畠１箇所が検出された。尾根は前期以降墓域となり、谷地はそれを支える居住や生産の場であった。二ツ岳の噴火以降、尾根上の墓域が居住域にまで拡大して群集墳を形成していく様子を知ることができる。

古墳は、和田山古墳群の中でも中心の一角にあたる。中央尾根とそこから東西に枝分かれする、都合３本の尾根で３つの群を構成する。６世紀後半から７世紀中頃まで継続して作られた後期群集墳で、尾根が造墓の単位のようである。造墓が尾根の頂上部と先端部からはじまること、その中で４基前後にまとまる小さな単位があることが特徴としてあげられる。

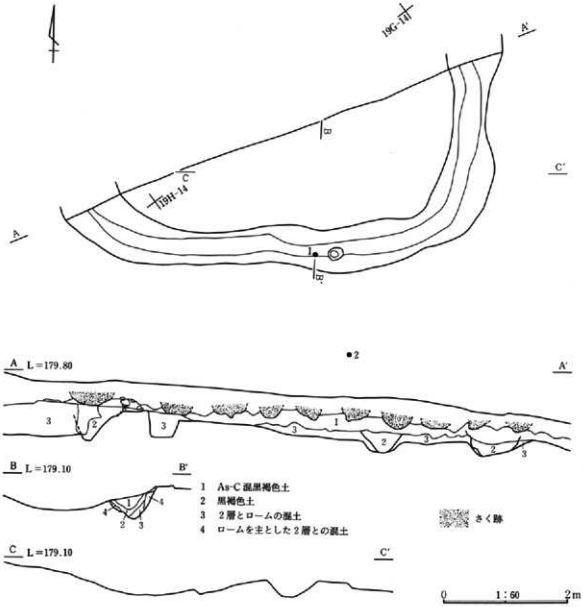
住居は、いずれも古墳築造前のもので６世紀中頃から後半、中には築造に伴って埋められたものがある。中心が調査区域の南に推定される集落の一角で、その北縁にあたる。２つの住居群がある。17区付近の尾根の斜面に立地する一群と尾根のふところで畠を囲むようにある、18区の一群である。前者を東群、後者を西群とすると、東群は形状や規模、主軸方向の点で共通した特徴がみられる。遺物組成でも、大型の個体を欠くことから11号古墳に始まる墓域の拡大に伴う移動も考えられる。これに対して西群は、尾根側にかまどを設けて畠に入口を開く位置である。畠を中心とした集落景観が復元されようか。

和田山古墳群は、これまで後期の群集墳のみと考えられてきたが、新たに中央尾根頂上部で方形周溝墓が検出された。同じ尾根上には、桜塚古墳、箕郷町教育委員会が調査した４世紀代の古墳や太子塚古墳がある。墓域のはじまりや構成、中核となる古墳を知る資料である。また、少量ながらも、弥生時代後期の樽式土器が出土していることから尾根の一角には、この時期の遺構も十分推定される。

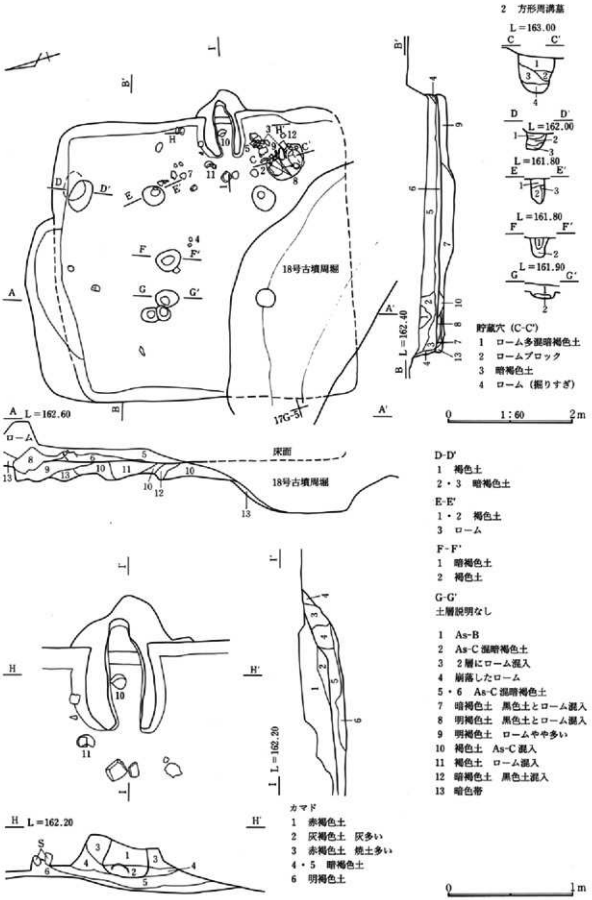
2　方形周溝墓

１号方形周溝墓（第52図　ＰＬ26・144）

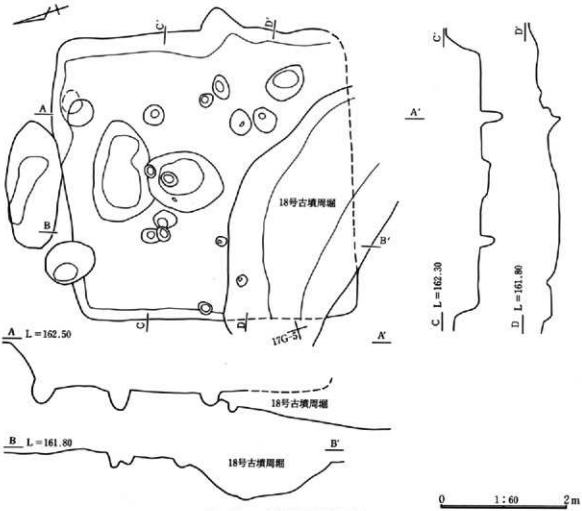
中央尾根のほぼ頂上部、19区Ｆ～H13・14グリットに位置する。24号古墳の北側墳丘から周堀に重複し、東南隅を中心とした南辺と東辺の一部を検出する。規模は、南辺で6.50m、方台部は5.20mである。溝は、谷地側が深く、多少のレベル差があるものの全周している。幅１m前後で断面はＵ字形である。外壁にかかり直径20cmのピット１基が検出されたが、溝に付属するものか断定できない。埋土は４層に分けられる。１層はAs-C混入黒色土、２層は黒褐色土、３層は２層とロームの混土、４層はロームを主とした２層との混土である。このうち、下位の３と４層は混土の状態から方台部からの崩落土であろう。方台部は、古墳との重複や後世の耕作による削平で遺存状態が悪く、盛土の有無は判断できなかった。遺物は、南辺の溝のほぼ中央から単口縁台付甕１点が出土している。副葬されたものと思われる。このほか、埋土からは縄文時代前期黒浜式土器や弥生時代樽式土器の各破片が出土している。周辺遺構からの混入である。時期は、出土した単口縁台付甕から古墳時代前期と判断される。



第52図　１号方形周溝墓遺構図・遺物図



第53図 9号住居跡遺構図(1)

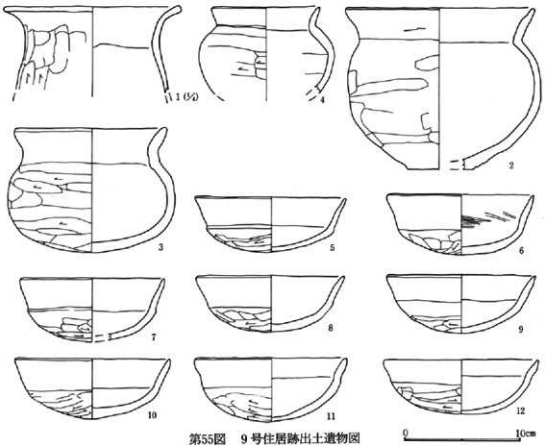


第54図　９号住居跡遺構図(2)

3　竪穴住居跡

９号住居跡（第53～55図　ＰＬ６・72・73）

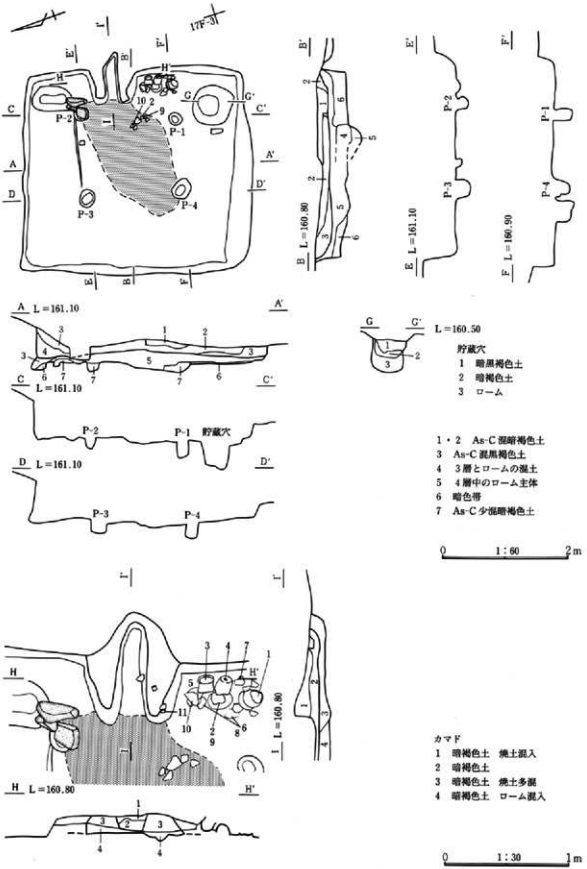
17区ＦＧ－４・５グリットにあり、19号古墳の墳丘下で検出された。群集墳築造直前期の住居で、墓域の形成と当時の集落との関係を知ることができる。規模は、東辺で南北4.55m、北辺で東西4.50mを測る。主軸は北辺でＮ－67°－Ｗ。ほぼ方形であるが、北辺には床下に風倒木痕があり、南辺は18号古墳の周堀が重複している。主柱穴は３本が検出され、南西の１本は重複のために消失している。床面は、暗色帯直上まで掘り込み平坦に踏み固めている。特に焚口の周辺では、硬化している状態がみられる。掘り方では、床面で確認したほかにピット６本、土坑２基が追加確認された。このうち、小さなものは後世の樹根である。土坑は、住居の中央部にあり深さ10～12cmの楕円形、風倒木痕に伴う可能性がある。貯蔵穴は、壁からやや離れた南西隅にある。縦55cm、横48cmの楕円形、断面椀形で深さ40cmである。上面では、かまどのものと思われる煤でよごれた割石３個が土器に混在している。かまどは、東辺のやや南寄りにある。全長90cm、煙道がわずかに壁の外側に突き出す。壁の20cm内側に、伏せて支脚の代用とした杯がある。焚口付近にある石は、両袖からの人為的な崩落である。ロームを混在した暗褐色土で袖をつくる。遺物は、かまどの周辺から貯蔵穴上面を除いて少なく、接合率も低い。遺構の時期としては、６世紀後半が考えられる。



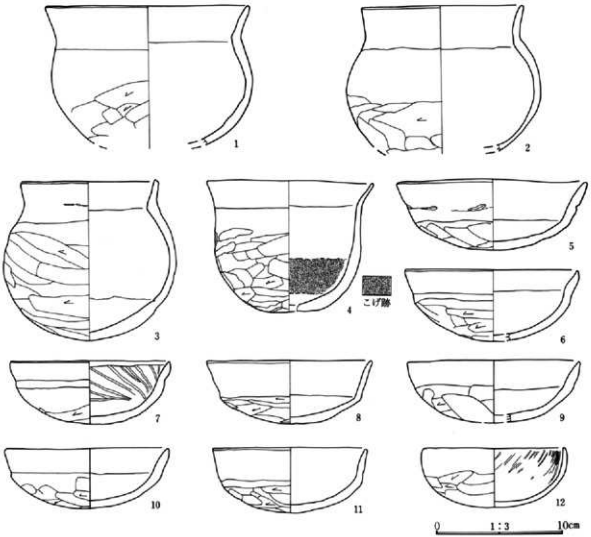
第55図　9号住居跡出土遺物図

11号住居跡（第56・57図　ＰＬ７・73）

17区Ｆ－２・３グリットにあり、18号古墳の墳丘下で検出された。９号住居跡同様に群集墳築造直前期の住居である。規模は、西辺で南北3.40m、南辺で東西3.25mを測る。方形で主軸は北辺でＮ－70°－Ｗである。主柱は４本、直径20～34cm、深さ16～33cmで南側２本がやや深い。柱間は、110、130、150、150cmで南北がやや長い。周溝はない。貯蔵穴は東南隅にある。縦65cm、横62cmの方形で深さ26cm。北側から西にＬ字形に幅10cm前後、床面よりもわずかに高い粘土帯がめぐる。それにより、南西隅を１m四方に間仕切りをした格好である。上面が開いていることから、蓋の存在が推定される。自然埋没で中から遺物の出土はない。埋土はレンズ状に堆積した自然埋没で、壁際にロームと As-C 混黒褐色土の混土、その上に As-C 混黒褐色土がみられる。壁高は、北辺で48cm、土層の堆積状態からするとさらに高い位置が想定される。床面は、ローム層中の暗色帯上面まで掘り込んでいる。北辺側が少し低く、逆に中央部が南北に比較して５cmほど山盛り状になっている。西辺では、２本の柱穴付近までのびる土手状の高まりがある。ロームの掘り残しで、入口、間仕切りなどに関連した施設かと考えられる。かまどは、東辺の中央にある。掘り方では、東辺から約40cm舌状に掘り込み、その内側に床面と同質の暗褐色土を貼付して袖と天井部を作っていることがわかる。袖石をはじめとして、内部は崩落したままで焼土は住居の中央部付近にまで流失していた。ただ、主柱穴Ｐ２を蓋をするように、かまどの石３個がのせられており何らかの意図が感じられる。遺物は、かまどと貯蔵穴との間、壁際に並べたように小型甕２、甑１、杯６の合計９点の土器がまとまって出土している。床面との間にわずかな隙間があること、列をなしていること、小型甕、甑が一様に伏せられていることなどの理由から、かまど脇の台の上に置かれていた状態と推定される。このほかに目立った遺物はなく、しかも大型の甕類などがない。遺構の時期は６世紀後半、重複する古墳とは半世紀ほどの時差がある。



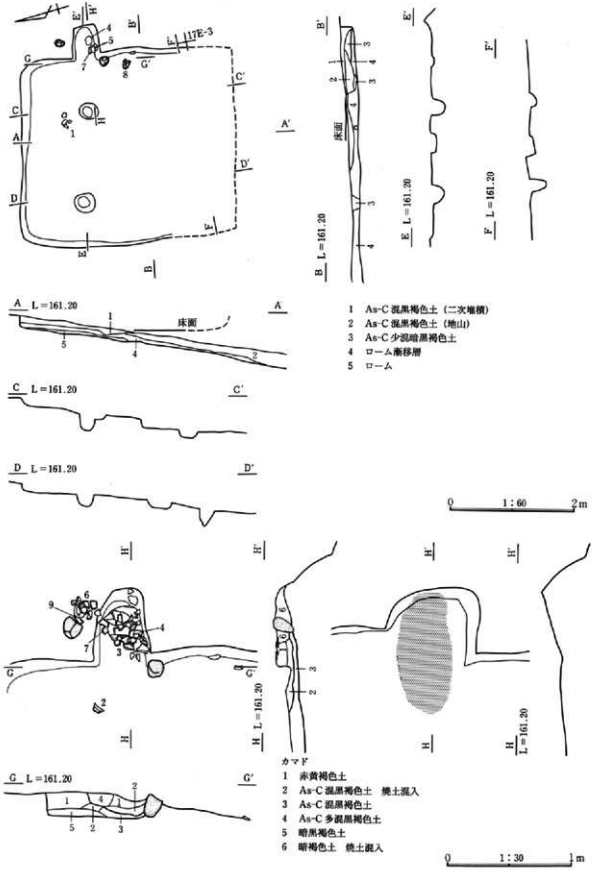
第56図　11号住居跡遺構図



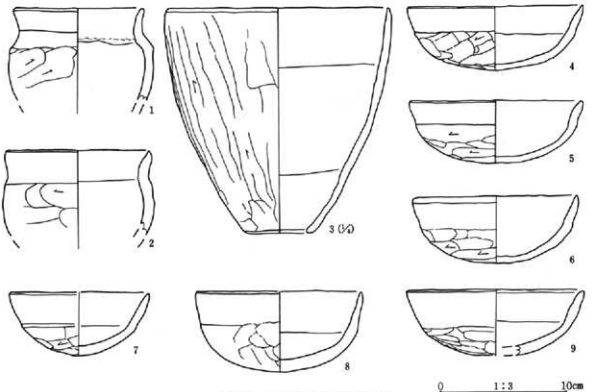
第57図　11号住居跡出土遺物図

13号住居跡（第58・59図　ＰＬ７・73・74）

17区ＤＥ－２・３グリットにあり、19号古墳の墳丘下で検出された。南半分は削平されていたが、方形と推定した。９号、11号の２軒と一群をなす、古墳築造前の住居である。規模は、北辺の東西で3.10m、西辺の南北で推定3.40mである。主軸方向は、北辺でＮ－80°－Ｗである。主柱穴は４本と推定され、このうち北側の２本が検出されている。直径30cm前後、深さ25、28cm、柱間140cmである。これと対応するかのような柱列が、北辺から約１m離れた位置で検出されている。埋土では住居と大差なく、屋外の土留施設と推定される。周溝はなく、残壁高は10cm。埋土は、As-C混黒褐色土のみが残存していた。床面は、残存する北半分がローム漸移層まで掘り込んでいる。土層勾配からすると南半分は、貼床と推定される。かまどは、東辺のやや北寄りにある。煙道の先端は、19号古墳の周堀に削られている。燃焼部は壁外にあり、壁際に袖石をたてかけた構造である。燃焼部の中央には河原石の支脚があり、底面にわずかに焼土が残る。掘り方には、ひとまわり大きい方形の掘り込みをもち、この中での造り替えが考えられる。左側にある人頭大の石と焼土は、その痕跡である。遺物は、かまど内部と周辺だけで杯と甑がある。遺構の時期は、６世紀後半である。



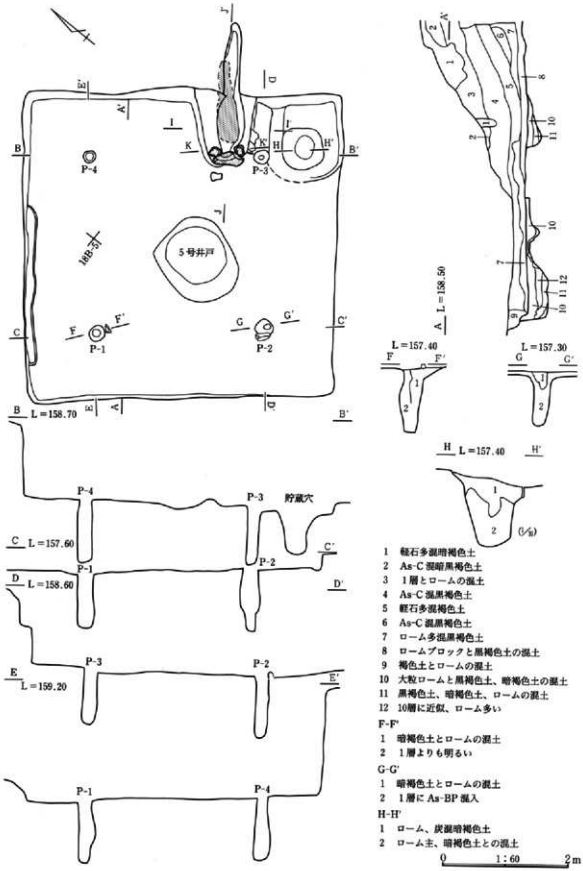
第58図　13号住居跡遺構図



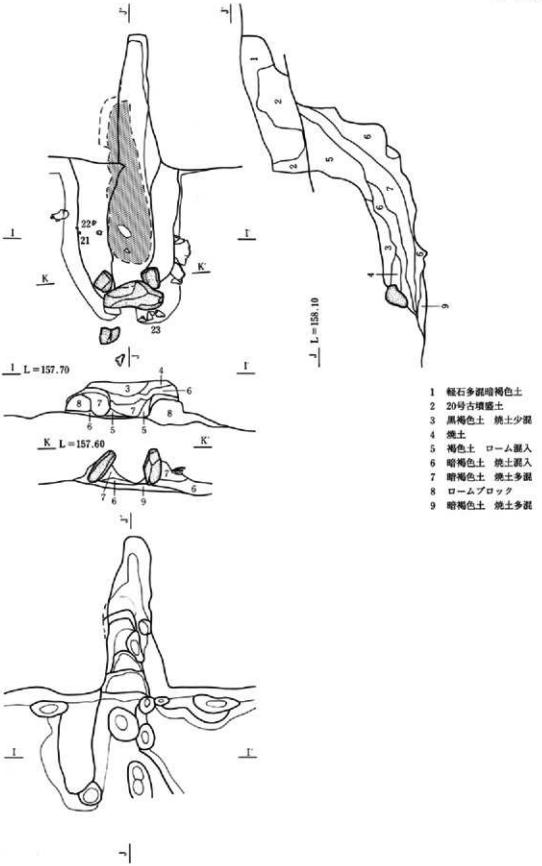
第59図　13号住居跡出土遺物図

15号住居跡（第60～64図　ＰＬ８・18・75～77）

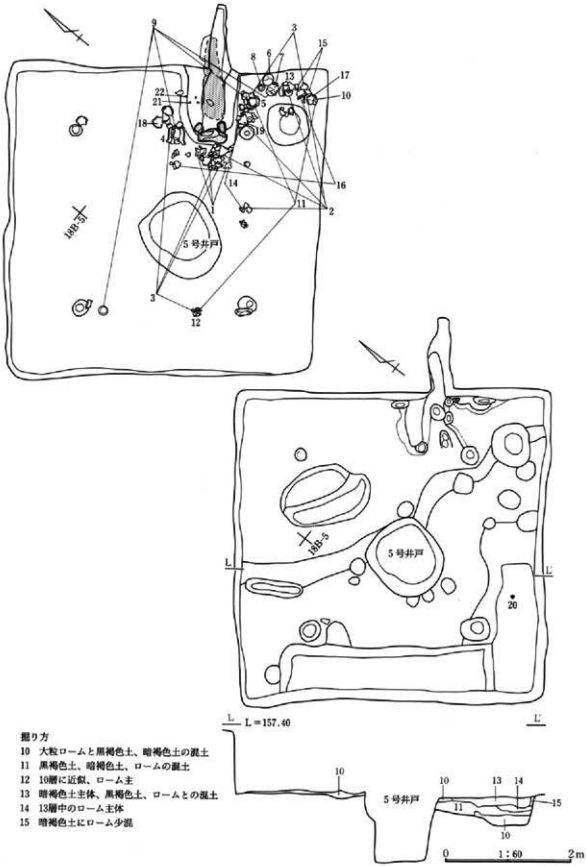
18区ＡＢ－４・５グリットにあり、20号古墳の築造に伴って埋められた住居である。方形で、規模は長軸5.05m、短軸4.90mを測る。主軸は西辺でＮ－130°－Ｗである。主柱穴は４本、Ｐ１が直径24cm、深さ98cm、Ｐ２が30、83cm、Ｐ３が24、91cm、Ｐ４が19、98cmである。柱間はＰ１とＰ２が280cm、Ｐ２とＰ３が270cm、Ｐ３とＰ４が270cm、Ｐ４とＰ１が270cmである。周溝は、北西辺の中央部にだけ長さ2.50mの範囲である。壁は、北辺で削平されながらも１mをこしている。埋土はローム混土と暗褐色土との互層である。床面は、全体を貼床している。掘り方は、かまどの両袖部分をのぞいて、ほぼ全面にわたり掘り返している。特に、南東と南西の２辺が幅１mほどの一段深く帯状に掘り込まれていた。土取りが目的なのか、南西から南東への順序や鋤跡らしい痕跡が読み込めた状態にある。北西辺のＰ１近くには、根太と推定されている間仕切り溝がある。長さ90cm、深さ22cmを測る。貯蔵穴は、北東隅を床面からあらためて10cmほど低くし、さらに１m強ほどに間仕切った中に設けている。この段差は蓋と考えられる。大きさは、縦横65cm、深さ58cm、遺物の出土はない。かまどは、北東辺のほぼ中央にある。全長２m、掘り残したロームを芯にして、壁際に燃焼部の中心がくるように作られている。焚口には、河原石で鳥居状にくんでいる。高さ25cm、間口35cm、高さについては石を割ってそろえている。煙道は燃焼部に対して直立に近い状態で、検出した壁よりも離れていない。上端は古墳築造時に削平されていた。１度造替えをしているが、掘り方では左右の壁際、袖の外側でピットが検出されている。土留めか上屋に関係した造作であろうか。遺物は、焚口周辺から貯蔵穴と壁の間に集中している。長甕、小型甕、甑、杯が、その使用状態を推定させるかの位置にある。この壁際の様子は、11号住居跡でもみられる。かまどの左袖からは、臼玉２点が出土している。かまどや住居の廃棄にともなう儀礼行為なのか、造作時の単なる混入か判別しがたいが、住居埋没の経緯からすると前者をあげておく。遺構の時期は６世紀後半、20号古墳築造時には壁際にわずかに土が堆積をはじめた頃ではないか。



第60図　15号住居跡遺構図(1)

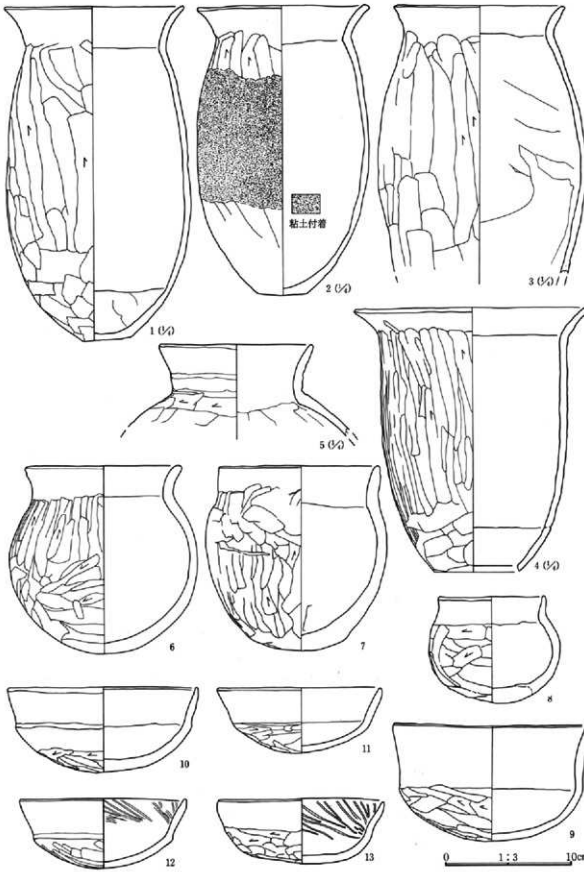


第61図　15号住居跡遺構図(2)

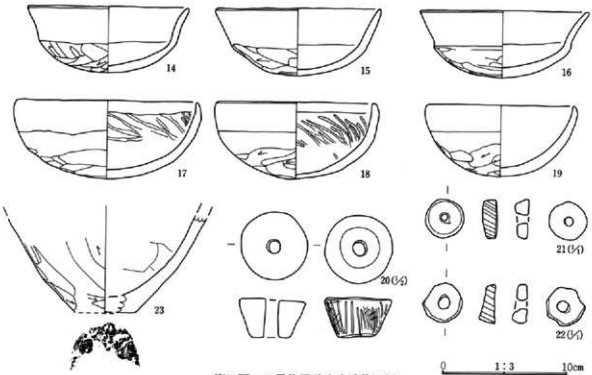


掘り方
10　大粒ロームと黒褐色土、暗褐色土の混土
11　黒褐色土、暗褐色土、ロームの混土
12　10層に近似、ローム主
13　暗褐色土主体、黒褐色土、ロームとの混土
14　13層中のローム主体
15　暗褐色土にローム少混

第62図　15号住居跡遺構図(3)



第63図　15号住居跡出土遺物図(1)

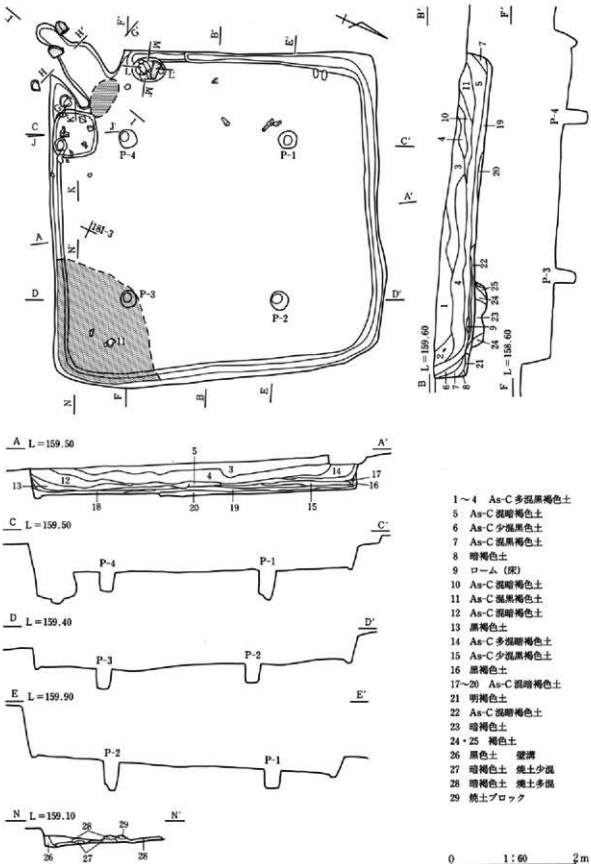


第64図　15号住居跡出土遺物図(2)

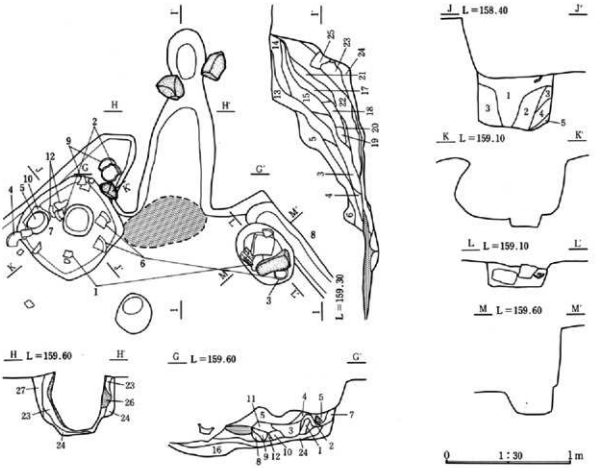
17号住居跡（第65～67図　ＰＬ９・77・78）

18Ｈ Ｉ－２・３グリットにあり、方形で、規模は南辺で5.25m、西辺で5.16m、主軸方向西辺でＮ－25°－Ｗである。主柱穴は４本、直径25～30cm、柱間は250cm前後である。周溝は全周する。幅10～20cm、床面の勾配に沿って５cm前後と一様な深さである。貯蔵穴は、南辺に接したかまどの左脇にある。縦75cm、横70cmの方形で深さ40cm、蓋を暗示する周堤状のたかまりがめぐる。底面には直径20cmほどのピットがあく。埋没時に混入した杯の破片がある。西辺かまど右脇には、灰のかきだし用と推定する縦50cm、横40cm、深さ20cmの土坑がある。かまどの袖石と思われる角柱状の河原石２点が出土している。埋土は、地形勾配に沿った西から東への自然埋没で当時の地表面であるAs-C混土を主としたものである。残壁高は50cm、ほぼ垂直に近い。床面は、ローム層暗色帯まで掘り下げ平坦にしている。東西で20cmの差がある。かまど焚口前から主柱穴で囲まれた中央部が硬化している。焚口付近には薄い灰の層、東南隅には床面から５cmほど浮いた状態で畳半分ほどの焼土がみられた。土屋根の一部とも考えられる。被災した可能性もあり、Ｐ１の脇で長さ30cmをこす垂木を思わせる炭化材が出土している。掘り方では、西辺に寄った中央部で直径１m強の円形土坑がある。遺物の出土はなく、用途不明である。

かまどは、南西の隅にある。右に灰のかきだし穴、左に貯蔵穴がある。作り替えをしており、当初は煙道が急傾斜なのに対して後に浅くなっていることがわかる。かきだし穴の石は、その際に取り外したものであろう。両袖はローム層を掘り残して作り、煙道が壁外に突き出ている。その中程には、人頭大の石が対に置かれている。これを屋外の施設とみると、検出面が当時の地表面と考えられる。遺物は、主柱穴間は全くの空白でかまど左袖にたてかけた小型甕と貯蔵穴上面の杯、北西隅にこも石２点があるくらいである。この中で貯蔵穴上面の土器は、壁際に並んでおり上に置いたものが住居の埋没に伴い中に落ちたものであろう。遺構の時期は、６世紀後半で畠をはさんで15号住居跡と一群をなしている。ともに尾根にむかって煙道をつけ、畠の側に入口を設けた構造である。



第65図　17号住居跡遺構図(1)



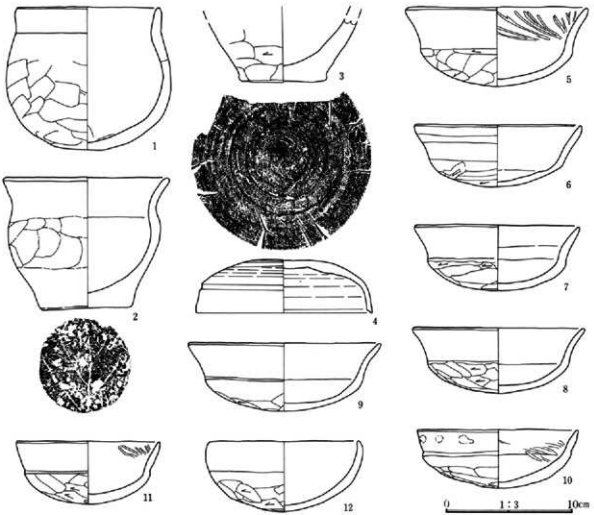
カマド

1　暗褐色土　ロームかためで硬い、焼土塊（1cm大）多混、粘性強
2　暗褐色土　粘性あり、焼土塊（5mm大）多混、1層より軟
3　暗褐色土　粘性なし、焼土塊（5mm大）混、軟
4　明褐色土　ローム焼けずに存、粘性あり、軟
5　黒褐色土　粘性なし、軟、As-C少混、焼土微混
6　黒褐色土　粘性なく、ざらざら、As-C少混、焼土なし
7　黒褐色土　粘性少あり、焼土まばらに混、軟
8　暗褐色土　粘性強、硬い、焼土塊（2cm大）多
9　暗褐色土　粘性あり、硬い、焼土塊（5mm大）混
10　暗褐色土　粘性あり、焼土なし
11　黒褐色土　粘性なし、焼土なし、柔らかくふかふか
12　灰褐色土　粘性あり、焼土なし、柔らかくふかふか、灰混
13　暗褐色土　粘性なし、軟、焼土微混、ロームブロック（2cm大）少混
14　暗褐色土　硬い、粘性あり、炭少混、As-C混
15　暗褐色土　硬い、As-C混、焼土粒（1mm）少混、粘性あり
16　暗褐色土
17　暗褐色土　14、15、16層より軟、粘性少
18　暗褐色土　硬い、粘性あり、焼土塊（2cm大）混
19　灰黒褐色土　粘性なし、灰？
20　暗褐色土　焼土粒多混、粘性なし、軟
21　暗褐色土　硬い、As-C混、焼土粒多
22　暗褐色土　軟、As-C少混、焼土粒多
23　暗褐色土　軟、ローム粒少、焼土粒多、炭混
24　暗褐色土　軟、ローム粒少、焼土少
25　褐色土　ロームブロック多、As-C少混、焼土なし（はりつけ）
26　褐色土　As-C混、粘性あり、硬い、焼土粒多
27　暗褐色土　As-C混、粘性あり、硬い、（壁土）地山

貯蔵穴

1　暗褐色土
2　暗褐色土
3　褐色土
4　褐色土
5　ローム漸移層

第66図　17号住居跡遺構図(2)



第67図　17号住居跡出土遺物図

12号住居跡

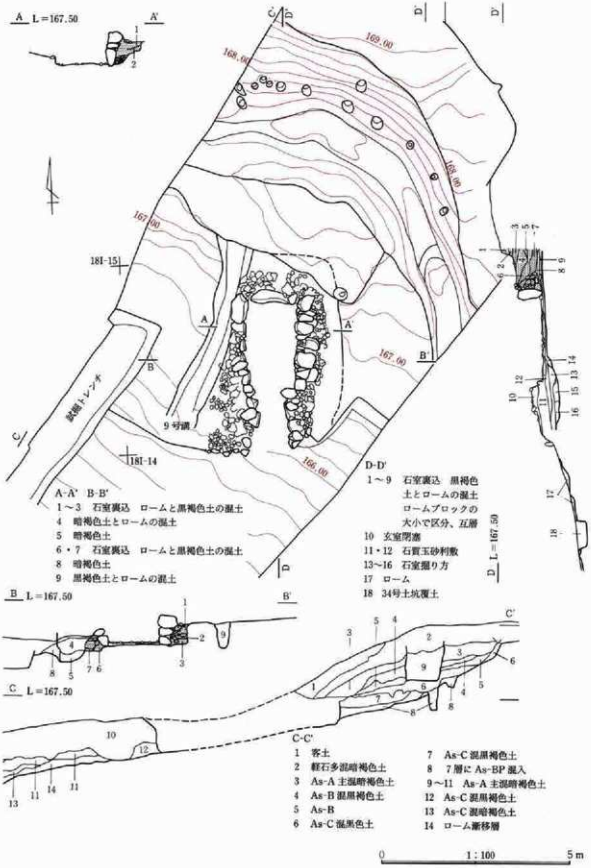
17区D４グリットで、住居特有の暗褐色土が方形に広がることから住居として調査した。重複する19号古墳よりも古く、掘り方ではおおよそ円形となる浅いくぼみが検出できたが住居と断定するには至らなかった。かまどのものらしい石はあるものの、特定できる遺物がないこと、焼土などかまどにつながる痕跡もみられないことから、記録に番号のみ残して調査を終えた。

4　古　　墳

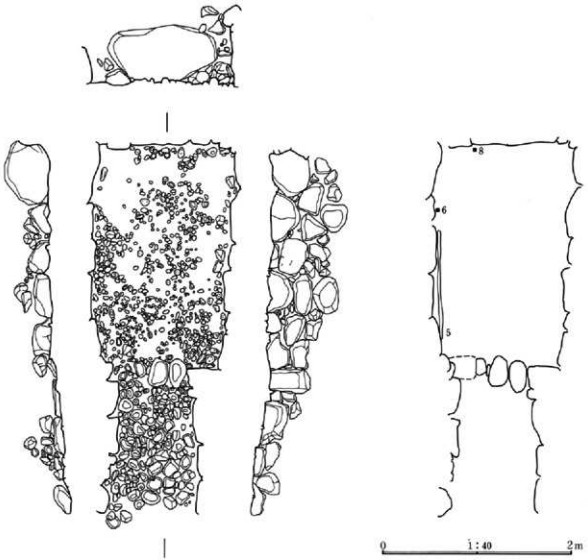
1号古墳（第68～71図　ＰＬ11・79・98）　箕郷町和田山字天神前449-１、449-４他　綜覧番号不明

東尾根の南斜面上段、18G～Ｉ－13～16グリットにある。尾根最上段の古墳である。町道で上半部は削平され、前庭から羨門は消失している。玄室左壁の裏込めは、江戸時代の９号溝で掘り抜れている。

円墳、直径９ｍ、As-C混黒褐色土が構築面で、同混土とロームで盛土されていた可能性がある。埴輪と葺石はない。周堀は幅３ｍ、深さ１～２ｍ前後、全周すると考えられる。外側法面には、直径20cm前後のピットがほぼ等間隔に並んでいる。覆土から周堀に伴うと判断した。５号、６号、８号古墳でも類例があり、土留の杭跡か構築作業に伴うものであろうか。



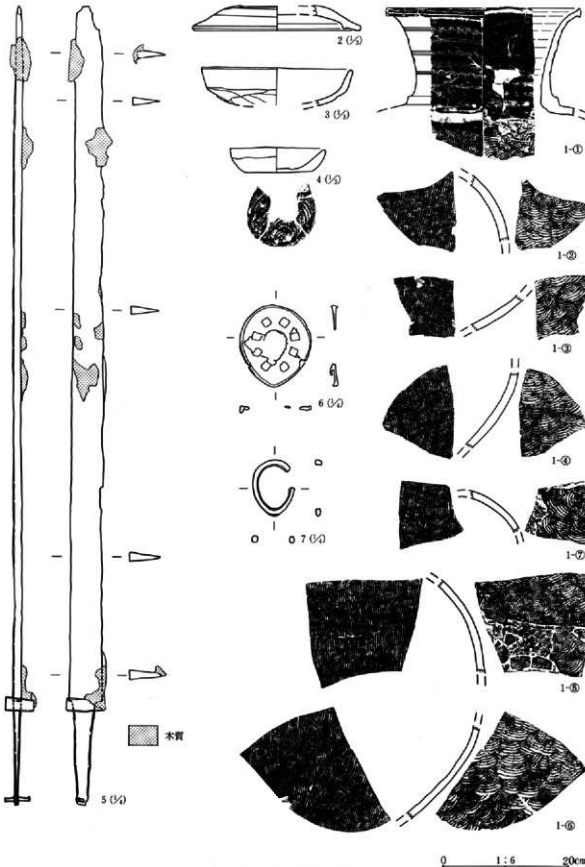
第68図　1号古墳遺構図(1)



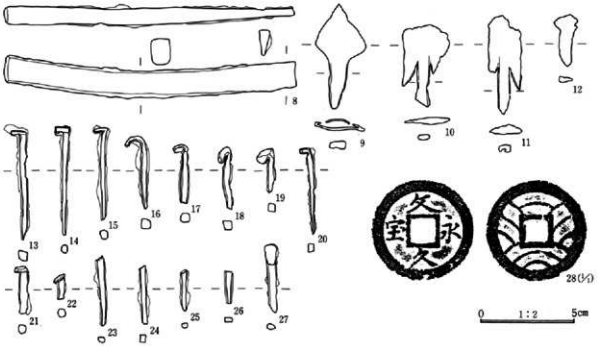
第69図　1号古墳遺構図(2)

主体部は、南開口S－4°－E、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。縦4.40m以上、横3m以上の隅丸方形の掘り方の中に作られ、構築面は玄室がローム層、玄門から南が斜面に盛土をしている。石室全長3.90m以上、玄室は方形で長さ2.25m、幅1.30m、奥壁は1石、一部に壁面調整のハツリ痕をもち、玄門は立柱、壁は小口積である。羨道の長さ1.65m以上、幅65～75cm。床面は、拳大の舗石の上に薄い玉砂利層がある。ともに河原石である。裏込めは、根石の基部に拳大から手のひら大の河原石を詰め込み、その上にロームを主とした混土が厚さ10cm前後の互層、堅緻である。砂利は少なく、混土が主である。左右の壁は、掘り方から約50cm、奥壁が1m近い厚さをもっている。構築の基準は、直線的な右壁である。

遺物は、玄室から大刀1点、小刀1点、片丸広鋒三角腸抉式鉄鏃4点、釘15点が出土している。左壁際で柄を北にした大刀、小刀は奥壁際、鉄鏃、釘は散在した状態である。北周溝から須恵器甕、前庭で須恵器の蓋、瓶、杯が出土している。時期は、河原石の使用、玄門の特徴から7世紀前半から中頃と考えられる。



第70図　１号古墳出土遺物図(1)



第71図　1号古墳出土遺物図(2)

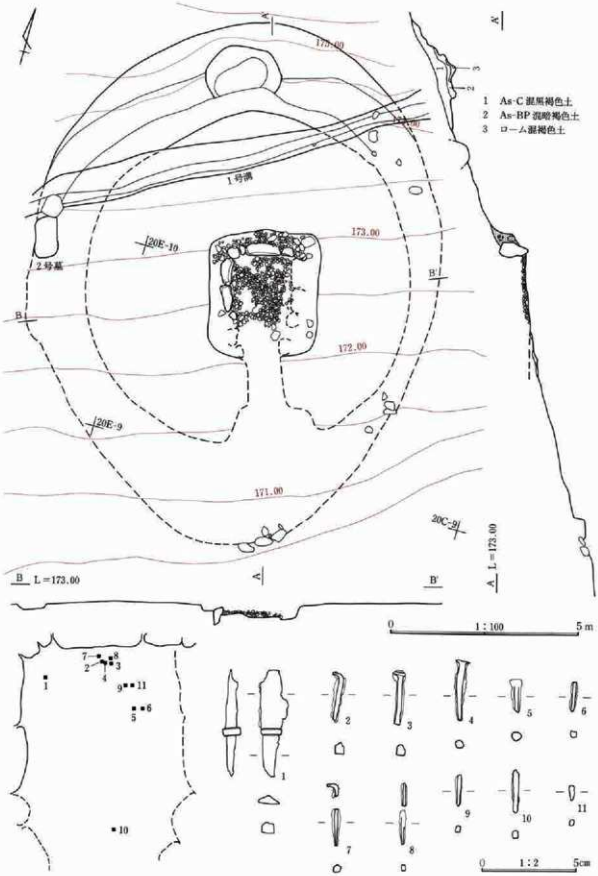
2号古墳（第72・73図　ＰＬ11・80）　箕郷町和田山字大久保464　綜覧漏

西第1尾根の東南斜面中段、19Ｃ～Ｅ－８～11グリットにある。この尾根上では、南端の古墳である。中央部付近を江戸時代の１号溝が横断、西周堀には中世の２号墓がある。全体は、江戸時代以降の開墾で石室は根石近くまで石が抜かれ、石室プランはその痕跡からも復元した。周堀は、幅2.40m前後で全周すると推定されるが、南半分は不明である。

円墳、推定直径8.60m、構築面は、旧地表の As-C 混黒褐色土と推定されるが表土下にロームが露出する状態である。埴輪、葺石はない。

主体部は、南開口Ｓ－17°－Ｗ、自然石乱石横両袖型横穴式石室である。構築面は、ローム層中暗色帯にあり縦3.30m、横2.90mの隅丸方形の掘り方の中に作られている。玄門から羨道は削平されており、玄室の床面までが崩落した砂利混じりの土で埋没している。玄室は方形、長さ2.50m、幅1.55m、奥壁は鏡石の両脇に各１石を置き、玄門は立柱と推定される。鏡石には、壁面調整程度の筋状のハツリ痕がある。床面は、卵大の玉石の上に卵大から拳大の石を敷き重ねている。下層は河原石、上層が軽石を主としている。裏込は、壁石の基部に人頭大ほどの石を詰め込み、さらに卵大の石と砂利で充塡している。

遺物は、玄室の奥壁右隅寄りで刀子１点、釘13本が出土している。刀子は、柄に銀装の留金具がまかれている。釘は、平釘と角釘に分けられる。北堀の覆土からは、まだ外稜を残す土師器杯、円筒埴輪が出土している。時期は、１号古墳に近い方形の玄室プランから７世紀前半から中頃と考えられる。



第72図　2号古墳遺構図(1)・遺物図

第73図　2号古墳遺構図(2)

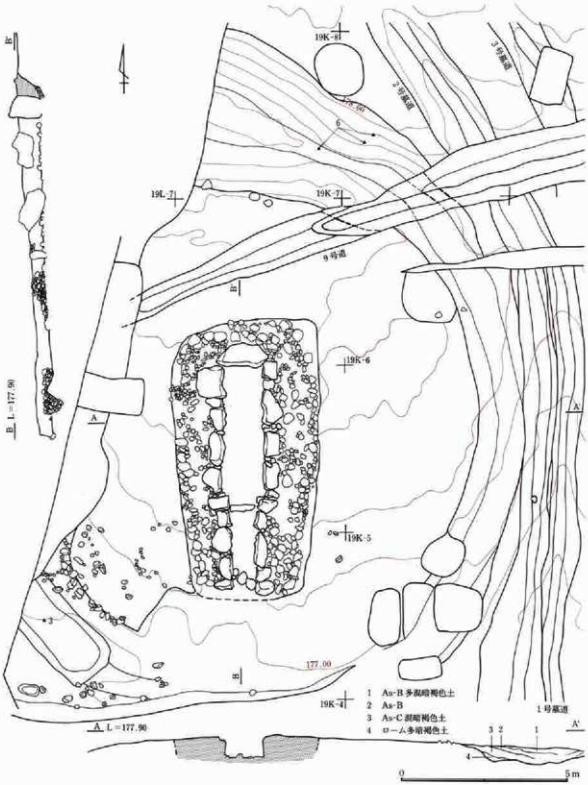
3号古墳（第74～77図　PL10・12・26・80・98）賀郷町和田山字地蔵堂438-1、451-13　線覧車郷村85号

中央尾根の頂上部、19J～L－3～7グリットにある。4号、24号、25号古墳とともに頂上部で一群を構成する。上半部を削平され、石室は露出、壁石は中に投げ込まれていた。北側を東西に9号道が横断し、4号古墳との間には1号～3号の墓道が縦走している。

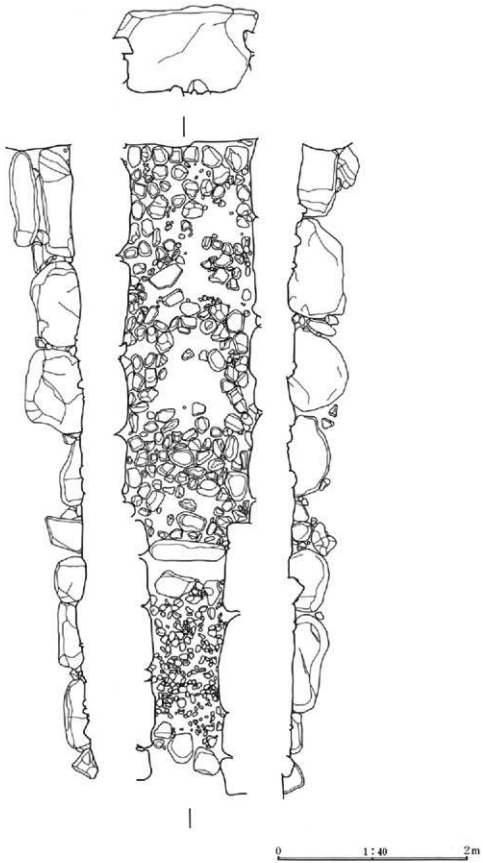
円墳、直径13.5m、As-C混黒褐色土が構築面で同混土とロームの互層が盛土である。2段築成と考えられる。羨門から続く20cm大の角閃石安山岩の葺石がある。

主体部は、南開口真北、自然石互目積両袖型横穴式石室である。構築面はローム層、縦8.20m、横3.40～4.40mの方台形の掘り方の中に作られている。全長6.80m、玄室は短冊形、長さ4.10m、幅1.20m、奥壁は1石で右壁が直角に交わり構築基準と考えられる。壁石は横置き、玄門のみを小口積みにして羨道と区別する。玄門には、幅76cm、厚さ21cm、高さ44cmの框石を立てている。羨道は、両壁がほぼ平行、長さ2.50m、幅65～70cmである。羨門は、玄門同様に小口積みである。床面は、玄室から羨道まで水平、貼床の上に手のひら大の河原石、さらに卵大の軽石を重ねる。裏込めは、壁一段ごとに大ぶりな石と玉砂利の混土で互層にしている。石は軽石がほとんどである。前庭には、攪乱されているが墓道の痕跡がある。

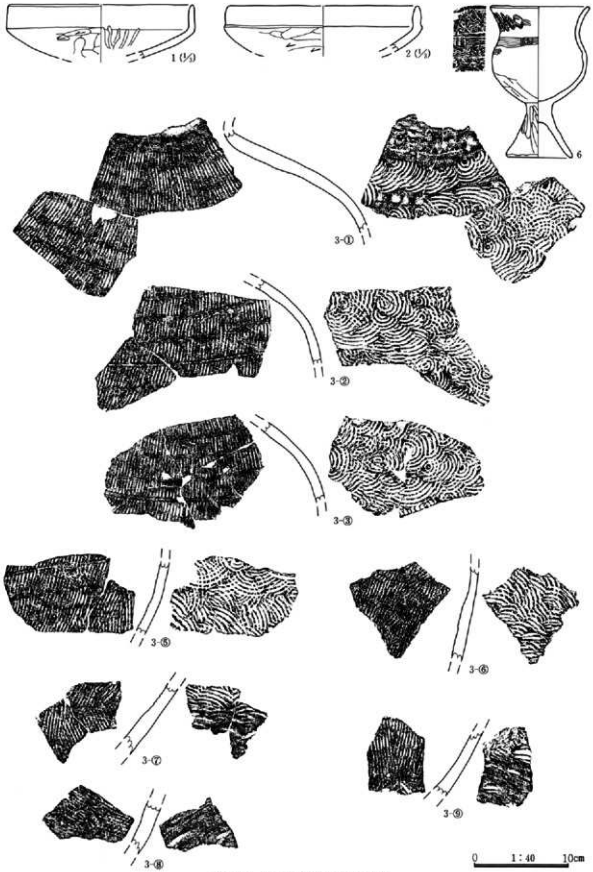
遺物は、玄室で鉄破片、西周堀の前庭寄りで須恵器甕が破片で出土している。時期は、大ぶりな石を使用した短冊形の石室プラン、玄門や羨門の特徴から7世紀初頭、頂上部の一群の中では、4号、24号・25号古墳に続くものと考えられる。短冊形プランの石室が、方台形から整った短冊形へ変遷していき玄門や羨門が同じく整っていく様子を知ることができる。



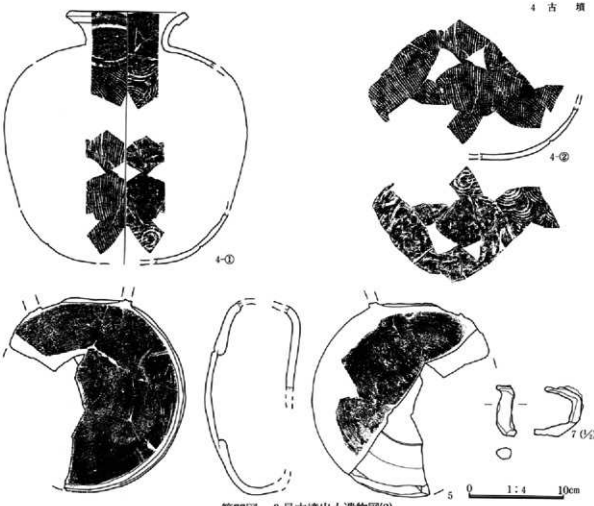
第74図　3号古墳遺構図(1)



第75図　3号古墳遺構図(2)



第76図　３号古墳出土遺物図(1)



第77図 3号古墳出土遺物図(2)

4号古墳（第78～105図 PL10・12・13・80～88・98）

箕郷町和田山字地蔵堂438-1、440、451-3他 綜覧東郷村84号

中央尾根の頂上部、19E～I－3～7グリット、3号、24号、25号とともに頂上部での一群を構成する。3号古墳との間には1号～3号の墓道が縦走し、北側には9号道が横断している。墳丘の東裾は、畑を区画する溝で切られている。5号古墳に周堀が切られている。

円墳、直径15m、構築面は旧地表のAs-C混黒褐色土を整地した上に盛土をしている。ロームを主として、黒褐色土、暗褐色土の混土で厚さ10cm前後の互層、堅緻である。2段築造と推定され、人頭大の角閃石安山岩の葺石が、墓壇と羨門から続く2段目にめぐる。根石を横置き平積み、1間程度の間隔で小間割りのように輝石安山岩が使われていた。周堀との間には、幅50cmほどの平坦面がある。この基部に円筒埴輪列がある。間隔は1本すかし程度である。周堀は、上幅2.50m、深さ30cm前後で全周する。

主体部は、玄室、羨道、墓道からなる。南開口S－14°－W、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面はローム層、縦7.92m、横3.32～4.10mの方台形の掘り方である。石室全長6.20m、玄室は羽子板状、長さ3.80m、同幅は奥壁で1.20m、玄門で0.90m、奥壁は1枚の鏡岩で高さ1mである。玄門は小口積された石を20cmほど持ち送る。一見すると袖無型のようである。羨道は、長さ2.40m、幅70～75cm、ほぼ平行している。床面は、玄室から羨道まで水平、上下2層の石敷からなる。裏込めは、厚さ1mをこす控積をとり掘り方との間にはロームと黒褐色土の互層でつき固めている。根石のつけ根には、栗石が花弁状にかまされている。床面下には、壁際に作業用と考えられるピットが6本以上検出されている。墓道は長さ3.40m、幅1

m、深さ15cm、羨門からみて右にわずかに曲がる。3号が前庭にすりつくのに対して、段差が明瞭である。左羨門から長さ1.30mにわたって角閃石安山岩の貼石がある。石室とは、石材の種類や大きさを異にすることから追葬時のものと考えられる。

遺物は、玄室で左壁際から大刀の残片、鞘装具2点、北東隅で端刃鑿先式鉄鏃8点以上、釘3点、ガラス小玉29点が出土している。前庭周辺からは、供献されたと思われる須恵器甕、瓶が出土している。いずれも破片で、接合関係からは羨門右側に原位置が推定できる。

円筒埴輪は、胎土、色調、ハケの特徴から4分類できる。砂粒多混橙色、砂粒多混赤褐色土、24号、25号古墳が全体的に統一感があるのに対して、形象とともにばらつきが目立ち大きな特徴である。人物は、腕、美豆良の数から男子2人、女子1人以上がいる。うち1人を復元した。馬は2頭、頭部と胴部、脚がある。盾は4個体以上があり、墳丘の四隅には配置されていた。1個体を復元した。砂粒多混暗赤褐色で統一感がある。赤彩が見られる。靫は3個体以上あり、矢羽根が粘土紐と線刻の2形式である。盾同様の砂粒多混土である。大刀は2個体あり、1個体を復元した。家は入母屋形式のものが2棟ある。1棟の上屋を復元した。墳頂部で家型埴輪、墳丘の東で馬2頭、大刀2振り、靫、盾、帽子が出土している。盾は、四隅に配置されたようである。時期は、占地、石室の平面形の特徴から、頂上部の中でも先行する6世紀後半と考えられる。

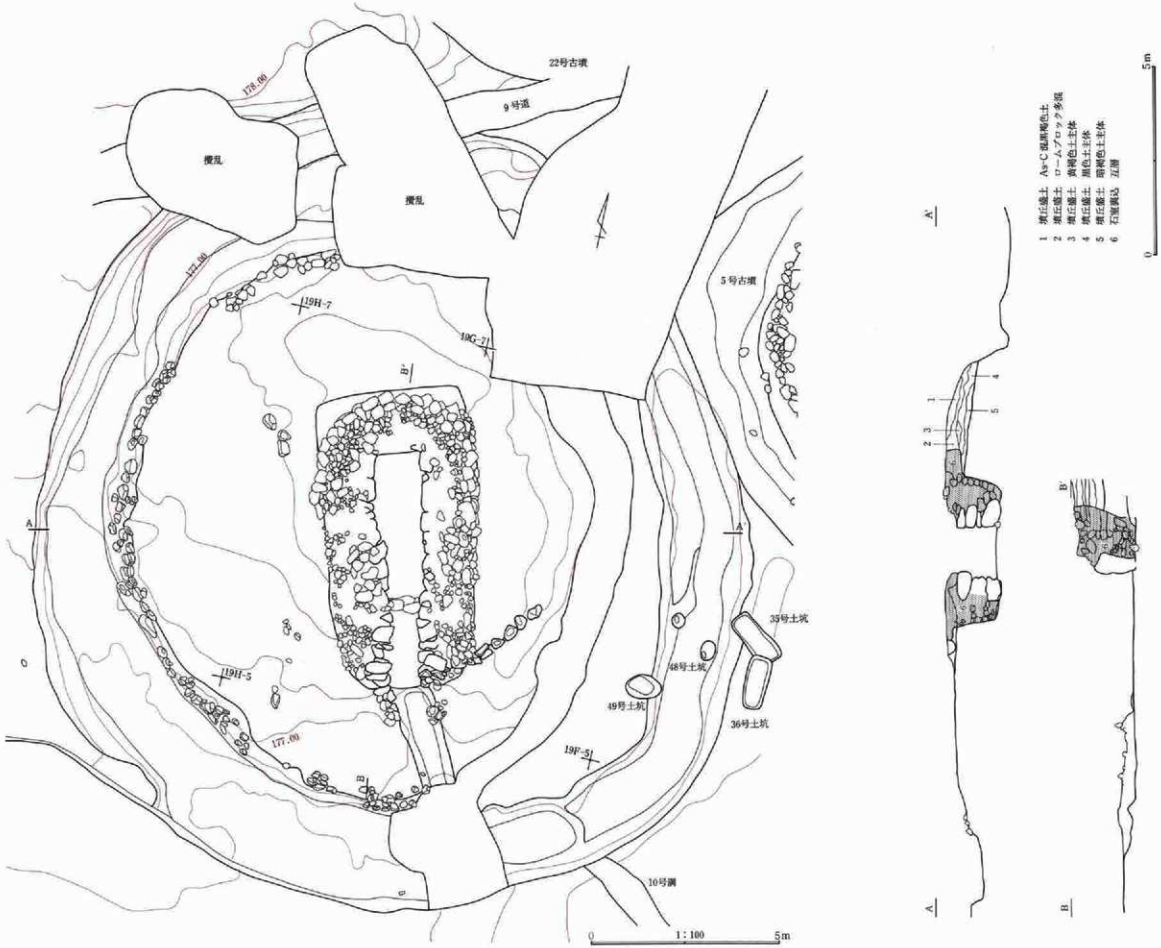
家型埴輪　入母屋型と入母屋らしい2棟がある。46と48の1号家は、神保下條1号古墳1号家と同じ型式で、上屋が強調され鋸歯文で飾られている。棟頂部と左右の破風から復元する。棟頂部長55.7cm、推定の高さ35cm、下端長23.8cmである。合掌部は断面コの字形に近く、流れは垂直に近い。破風は端部をつまみあげ、折り曲げている。堅魚木は、接合する1本と剝落痕から6本とする。断面は円形で、堅魚木から棟に貫通孔がある。鋸歯文は、3段に区画された中に上から4・3・2単位で線刻され、赤彩されている。成形は、幅の広い粘土板を積み上げヨコ方向に指でなで消している。内面には、積み上げの痕跡を一部で残している。

靫は、3個体以上がある。53・56・60・75で矢筒部を復元をした。高さ39cm以上、最大幅46cm、筒本体は凸帯あたりで直径13cm、上方に向かって細くなる。両側に、本体に縦に取りつく鰭部がある。上端は水平で16cm左右に張り出す。脇は、屈曲して突帯上端にとりついている。表面は、細かなハケでていねいに調整された後、線刻により背負い紐がハの字状に表現されている。一部が赤彩されている。基部には、幅3cmの鋸歯文をもつ突帯が貼付されている。矢筒先端部は、幅11.5cm、長さ10cm、厚さ1.5cmの粘土板を矢筒にさしこんで作られている。矢板は、7本の粘土紐を貼る。先端は、鏃をあらわすのか左に折れている。鰭との境には、幅1cm強の突帯があり、直径1cmのボタン状の貼付が5個ある。裏面全体は、細かなハケのみで、突帯も脇までで全周しない。

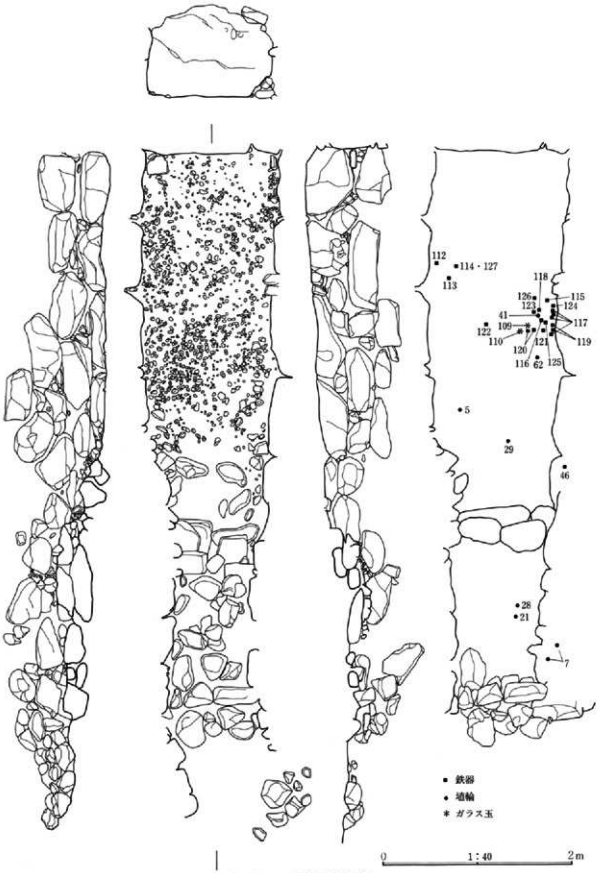
盾は少なくとも5個体以上がある。玄室からみた4方向に配置されていたようである。59を復元した。筒の両側に鰭状の盾部がつくものである。基部との境に、上下2段に突帯がめぐる。上段は幅2cm、中央部に紐しばり痕、下段は突帯の上に幅の広い突帯を貼り重ねている。上半部は、細かなハケ調整の上に紐をあらわすのか三角状の線刻がある。

帽子は、つばから上を復元した。現存部の高さ27.6cm、最大幅28.3cm、基台は直径12.6cmのやや楕円形である。先端からつばまでの高さ21cm、最大径13cm、全体に細かなタテハケ、中段を線で区画しハの字状に線刻、さらに赤彩する。上端には飾りと思われる剝離痕がある。

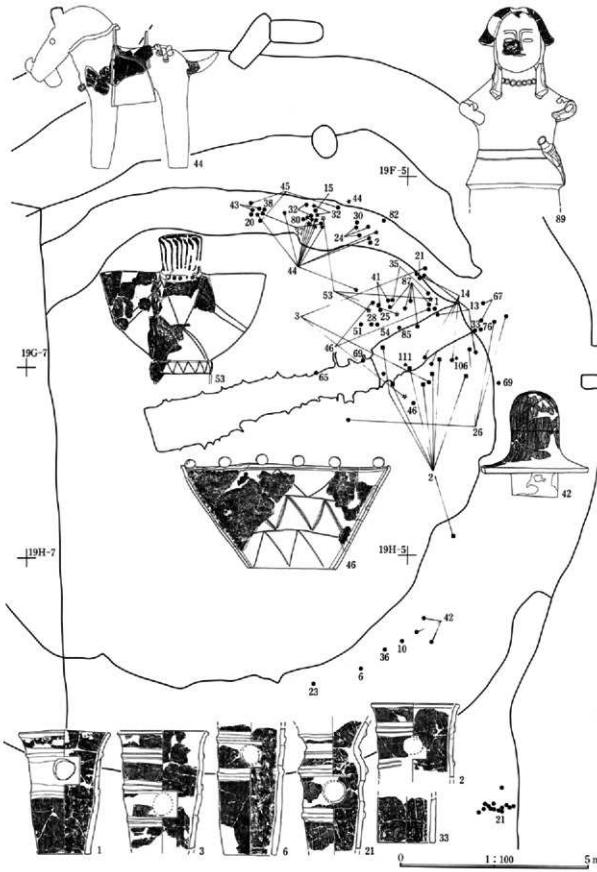
馬は2頭ある。44は、面繋と鞍とがある。縦がみは円筒部にほぞつぎされ、ボタン状の飾りがつく。耳から口もとにかけては、十文字の革帯が表現されている。鞍は、粘土板を左右から継ぎ合わされている。前輪や手綱、鐙の一部が残されている。このほかに、飾金具を表現した尻や尻尾などがある。



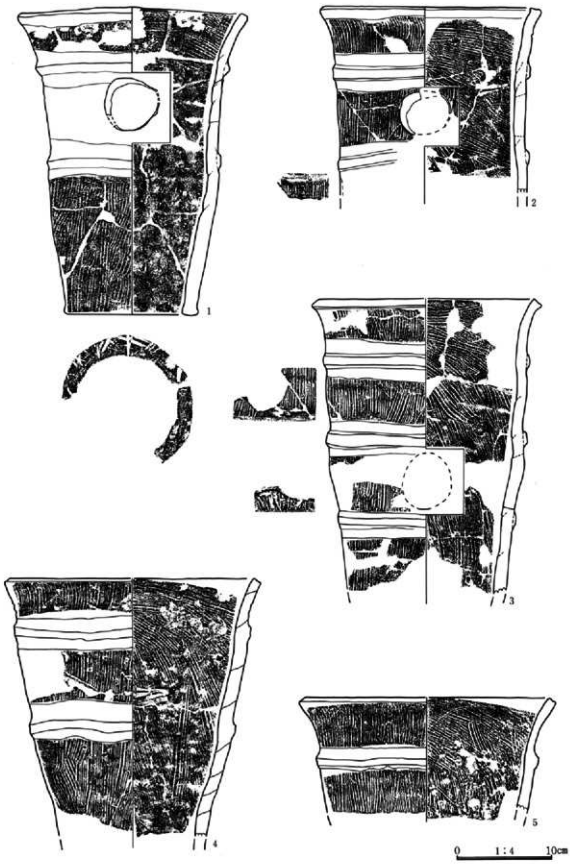
第78図　4号古墳遺構図(1)



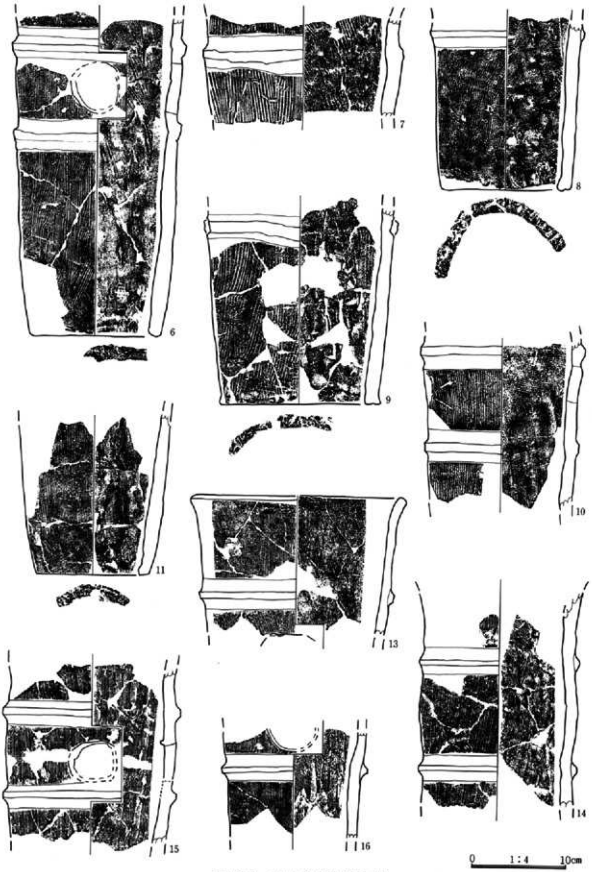
第79図　4号古墳遺構図(2)



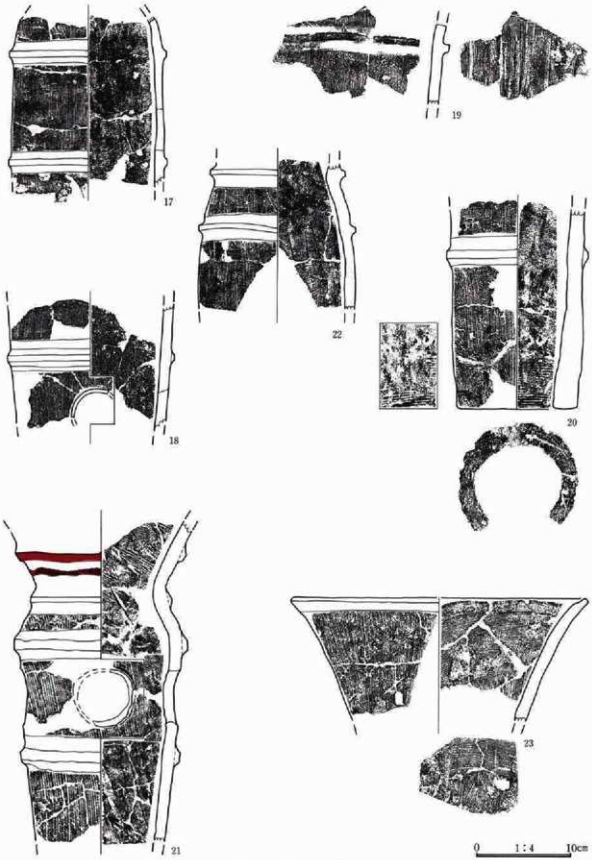
第80図　４号古墳遺構図(3)



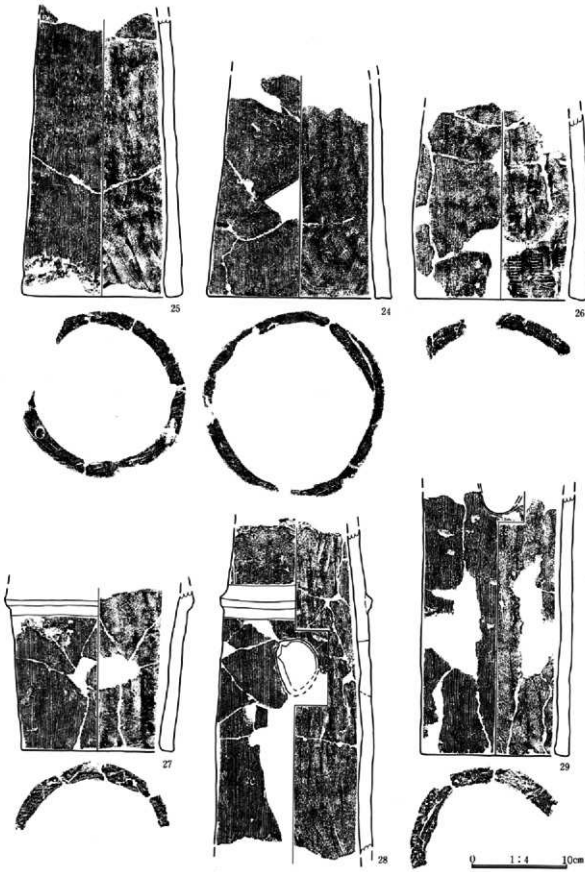
第81図　4号古墳出土遺物図(1)



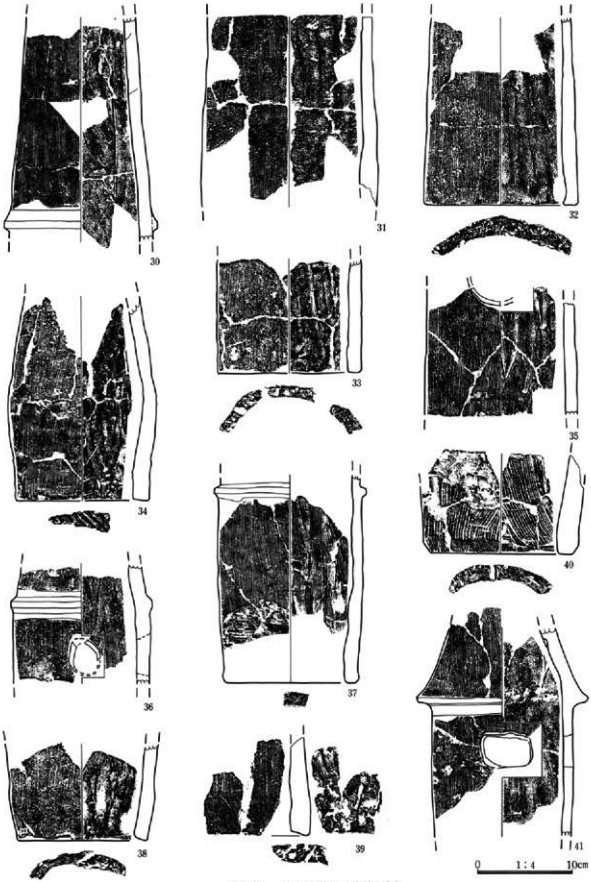
第82図　４号古墳出土遺物図(2)



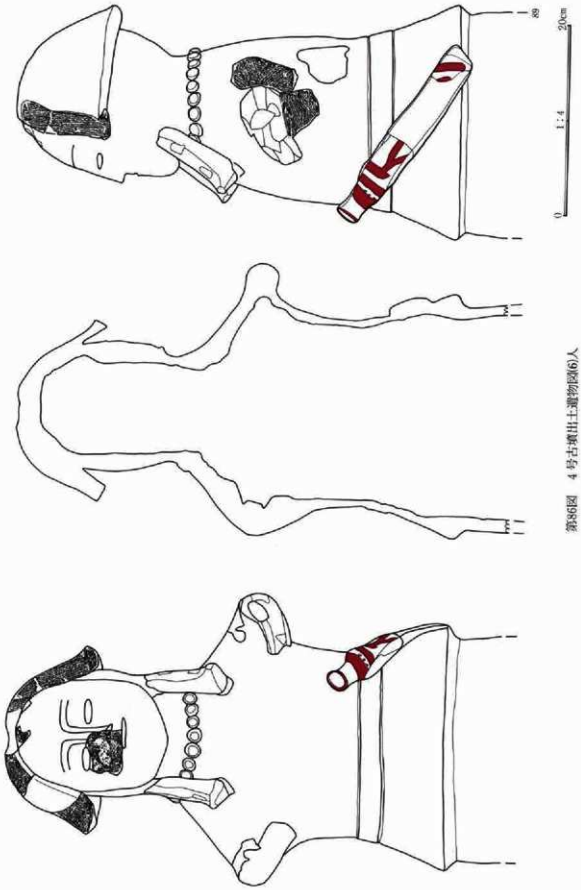
第83図 4号古墳出土遺物図(3)



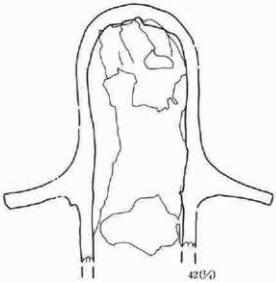
第84図　4号古墳出土遺物図(4)

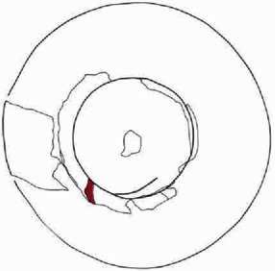


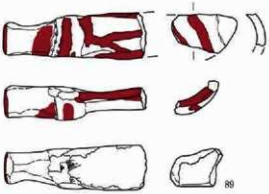
第85図 4号古墳出土遺物図(5)

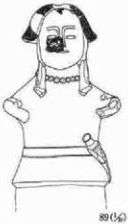


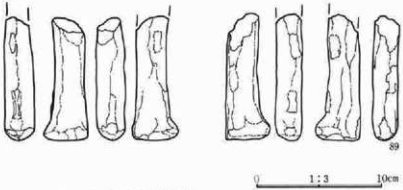
第86図　４号古墳出土遺物図(6)人



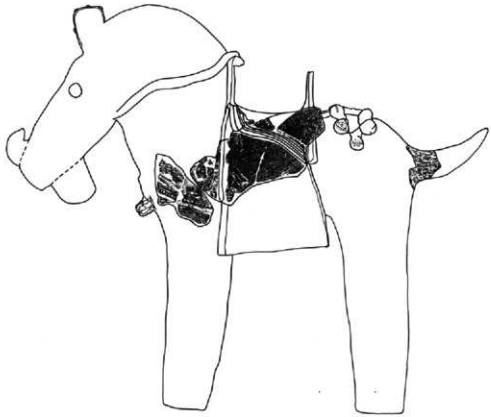


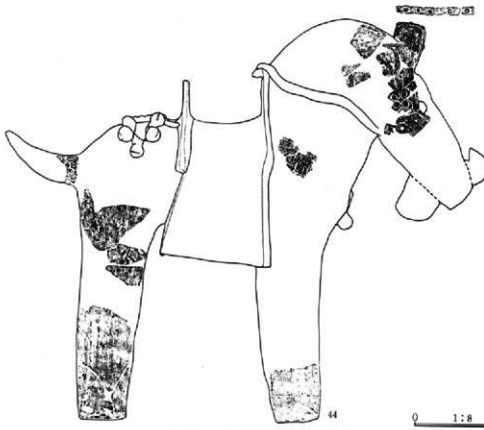




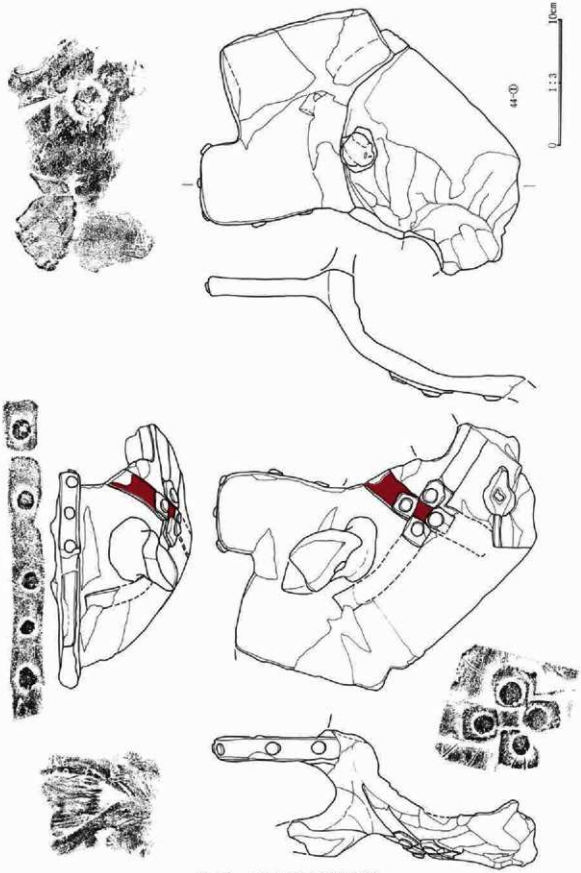


第87図　4号古墳出土遺物図(7)

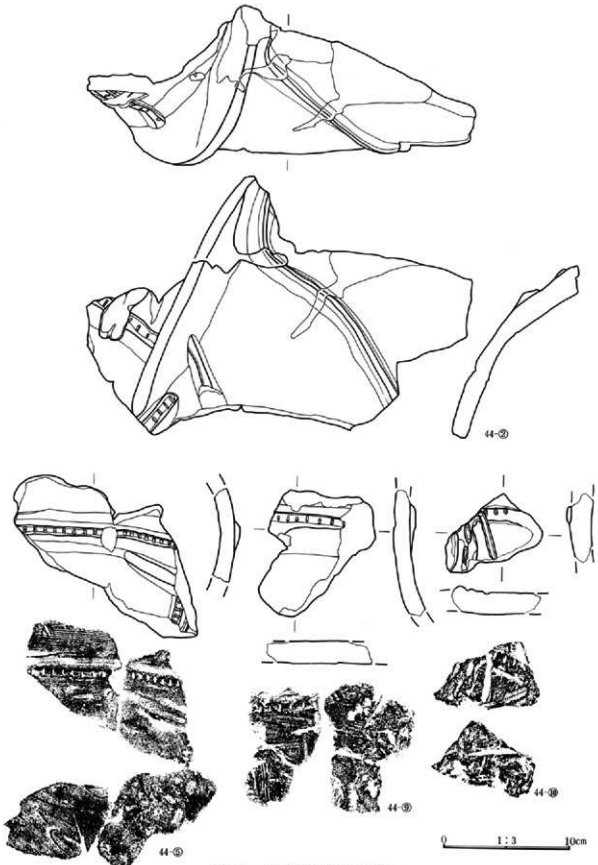




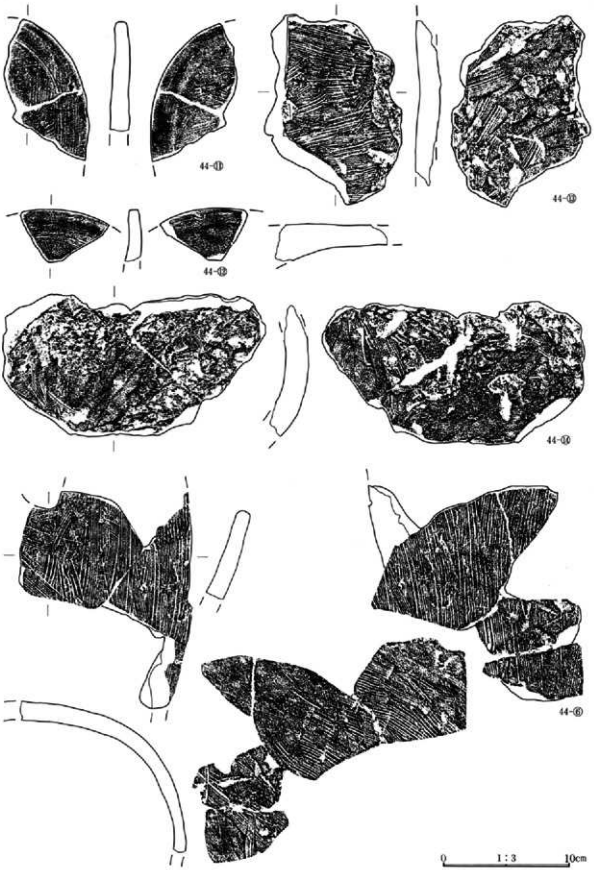
第88図　４号古墳出土遺物図(8)馬



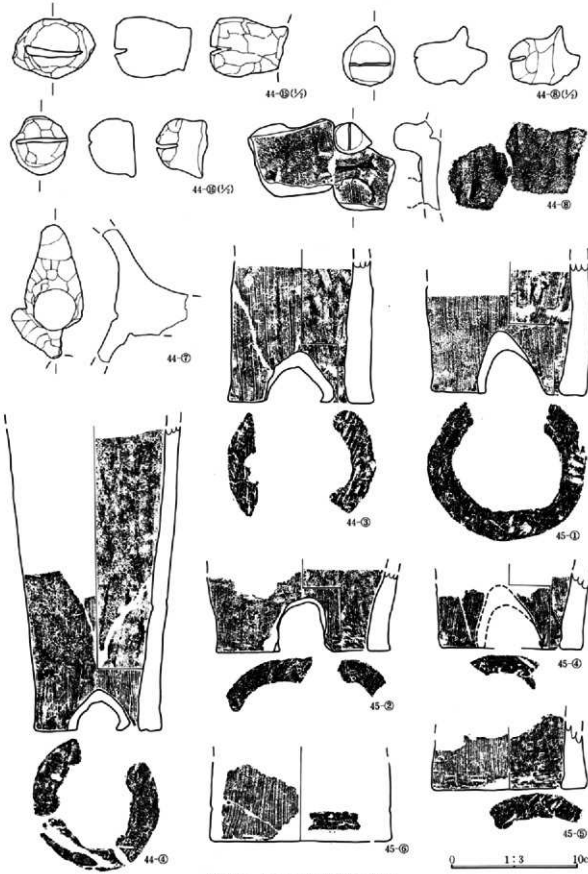
第89図　4号古墳出土遺物図(9)馬



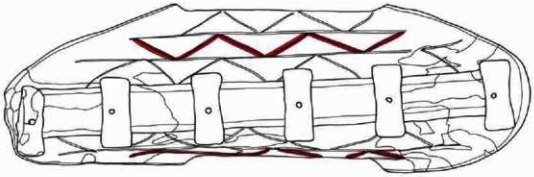
第90図　４号古墳出土遺物図⑩馬

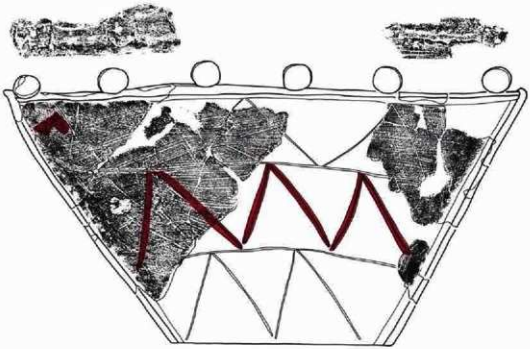


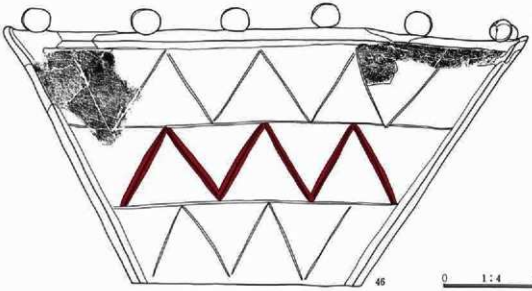
第91図　4号古墳出土遺物図10馬



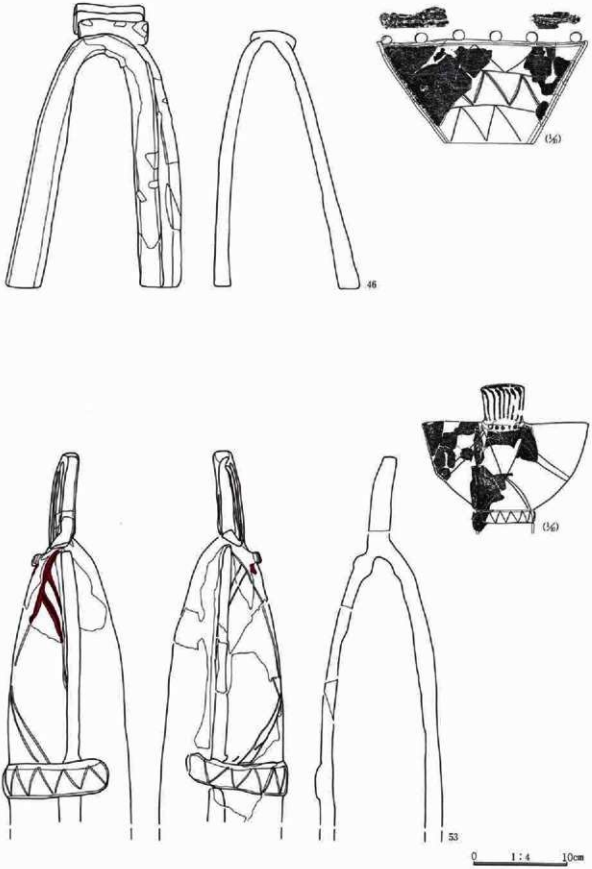
第92図　４号古墳出土遺物図(12)馬



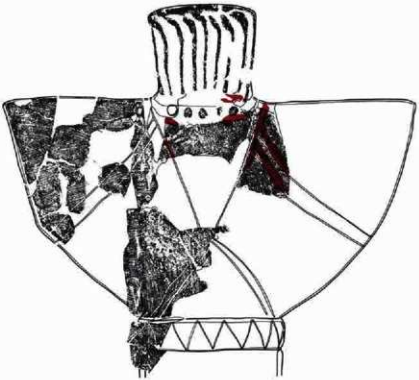


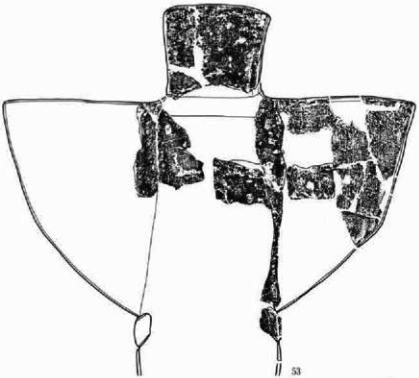


第93図 4号古墳出土遺物図(3)家



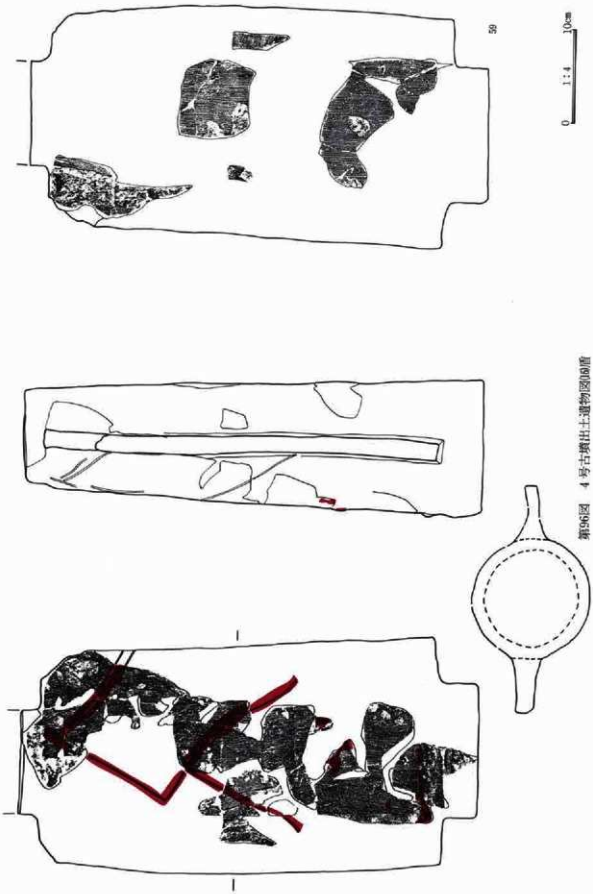
第94図　4号古墳出土遺物図(10)家・靫



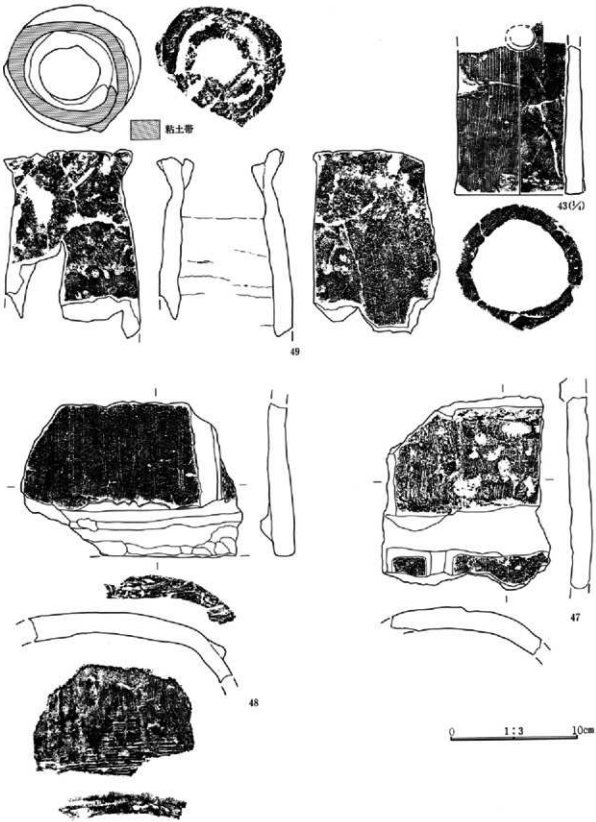


0 1:4 10cm

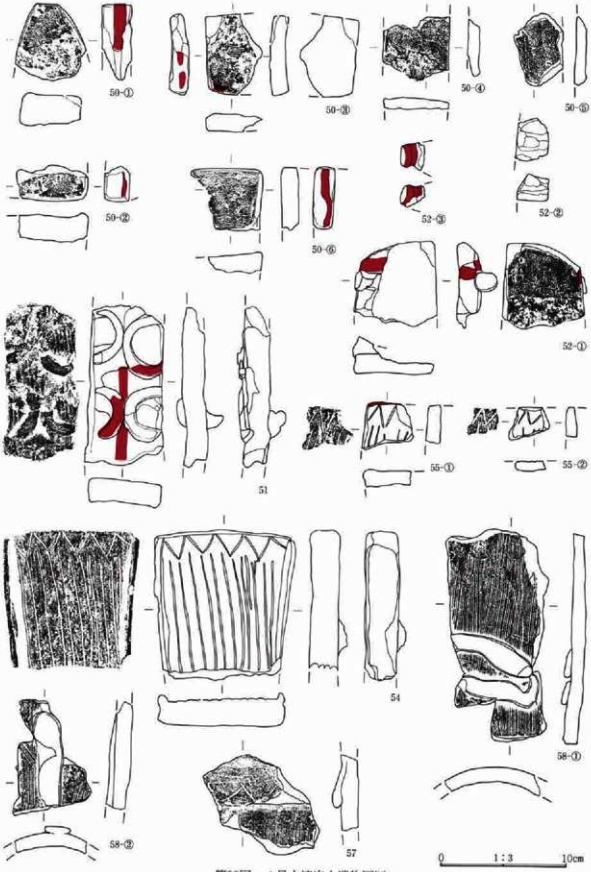
第95図 4号古墳出土遺物図(53)



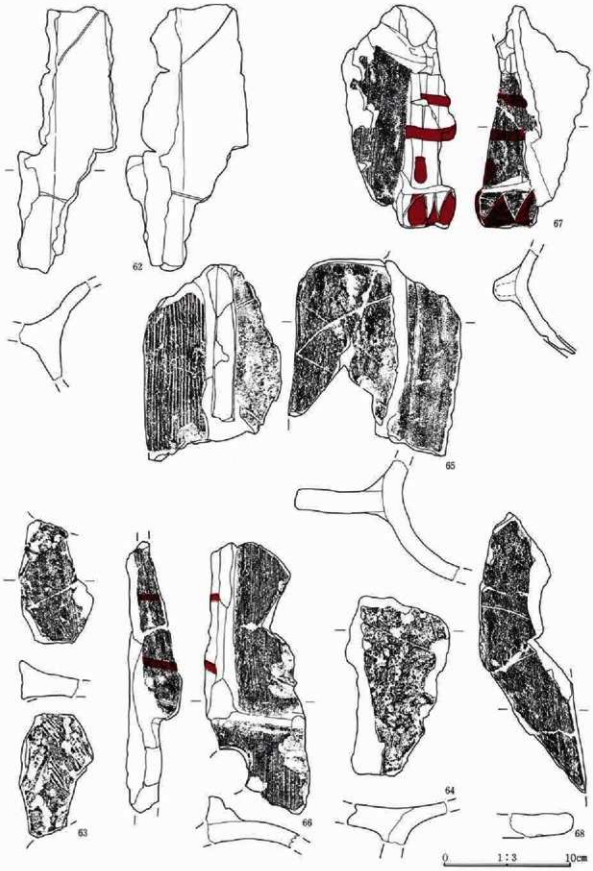
第56図　4号古墳出土遺物図面の順



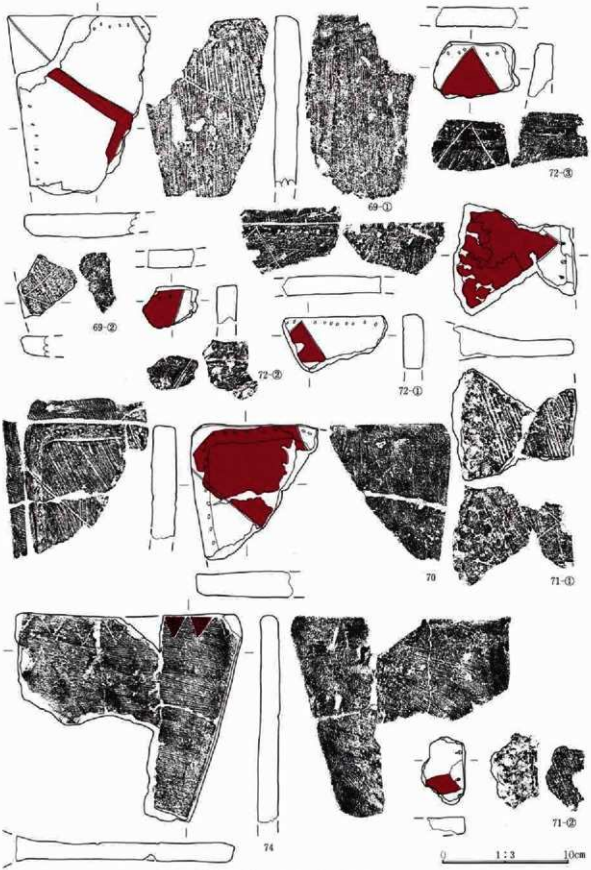
第97図　4号古墳出土遺物図(7)



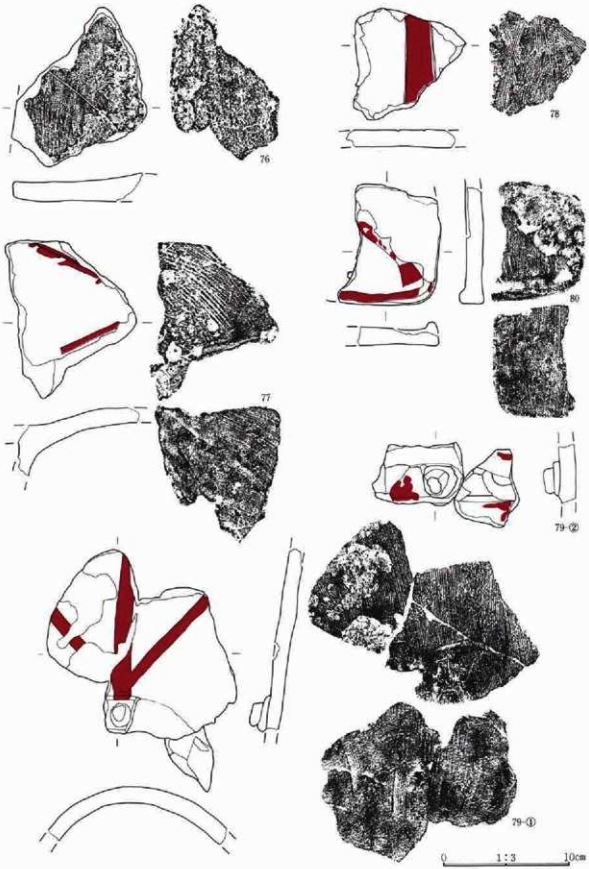
第98図　4号古墳出土遺物図(18)



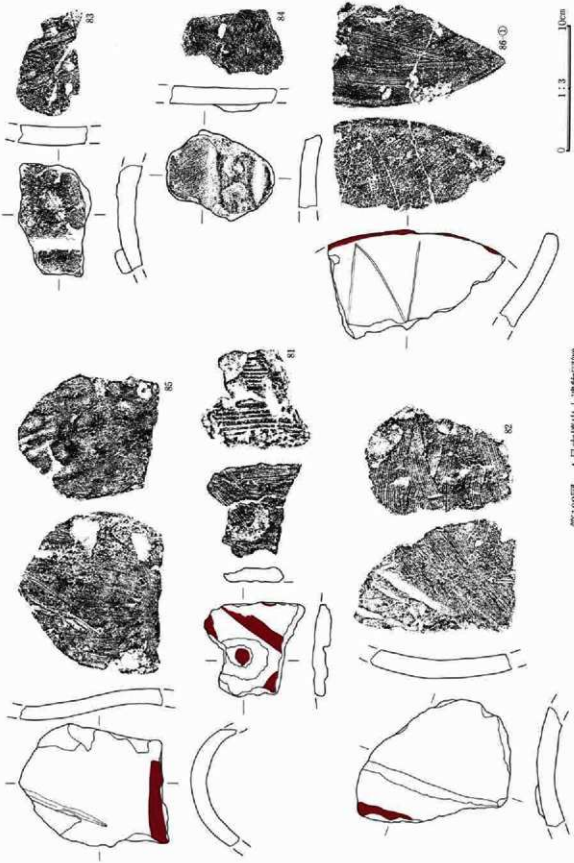
第99図　4号古墳出土遺物図(3)



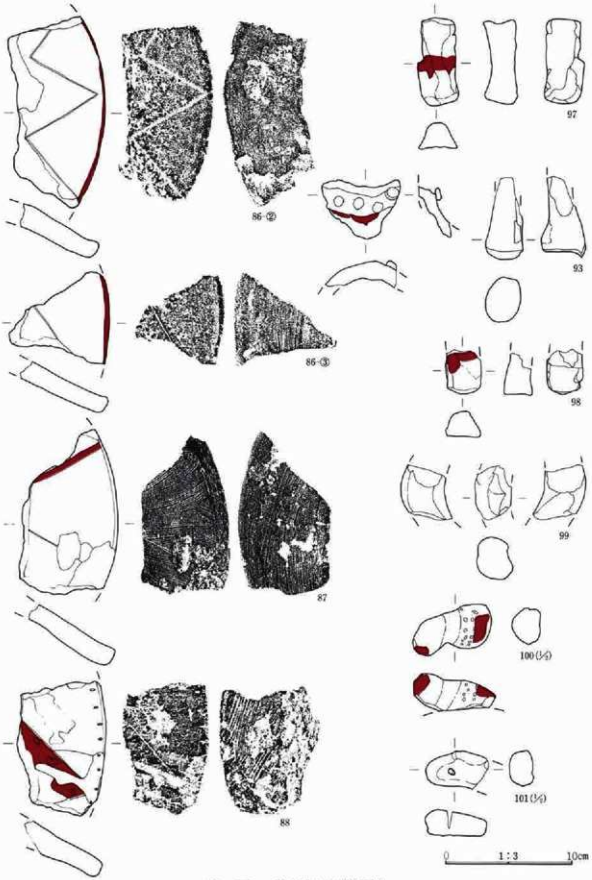
第100図　4号古墳出土遺物図(2)



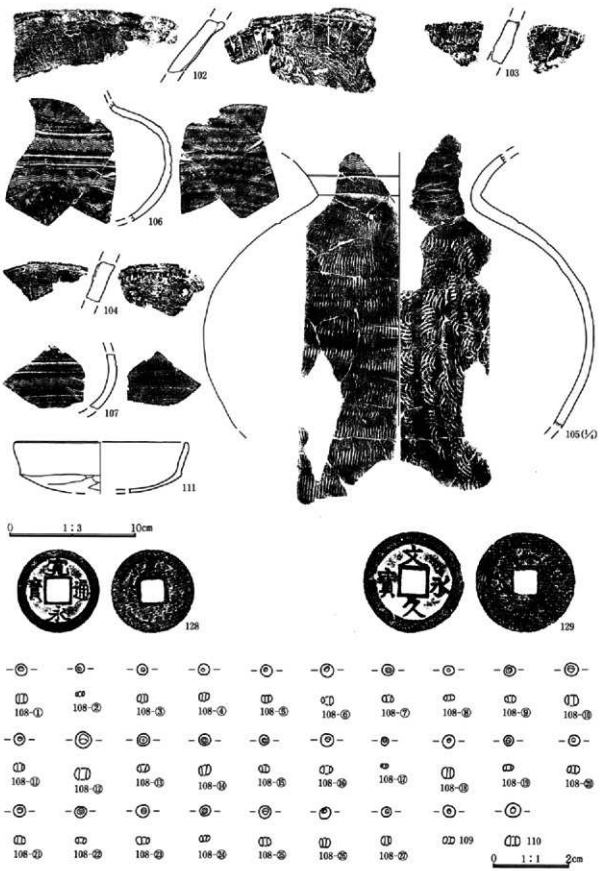
第101図　4号古墳出土遺物図(2)



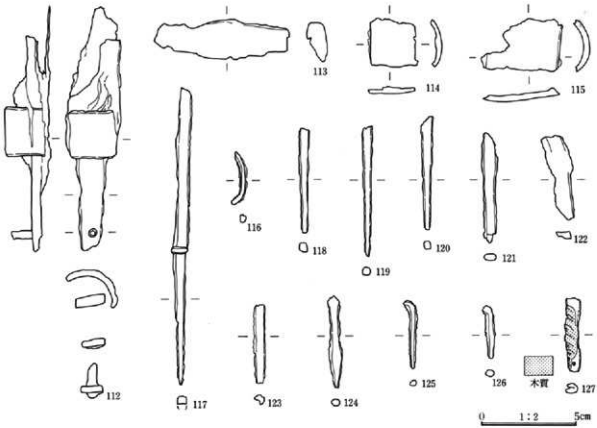
第101図　4号古墳周辺遺物実測図



第103図 4号古墳出土遺物図(3)



第104図　4号古墳出土遺物図(4)



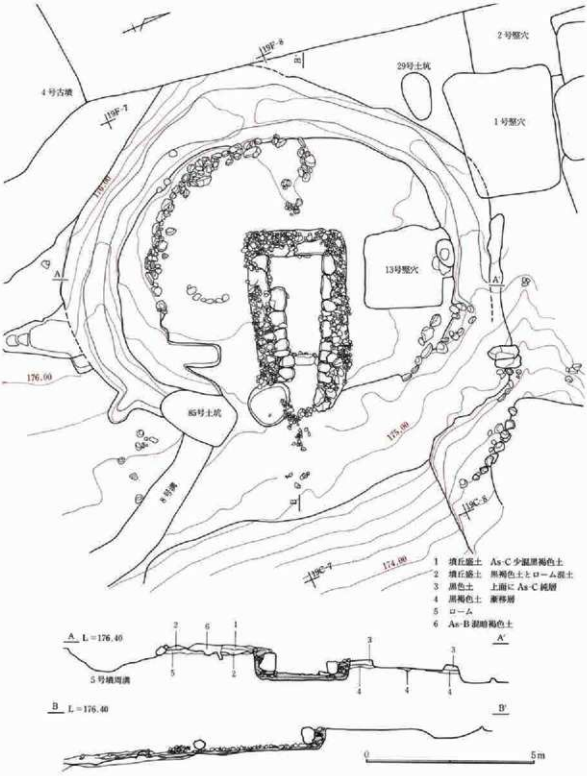
第105図　4号古墳出土遺物図(25)

5号古墳（第106～109図　P L 10・14・88・89・98）　箕郷町和田山字地蔵堂440、441　綜覧車郷村83号

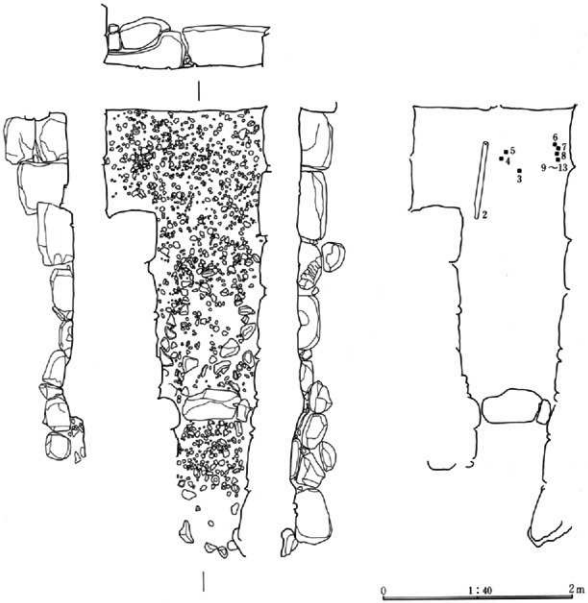
中央尾根の頂上部東肩口、19C～E－7・8グリットにある。22号、23号古墳とともに頂上部肩口で一群を構成する。墳丘の北側は、石室近くまでが江戸時代の1号屋敷で削平され、13号竪穴状遺構などがある。前庭には、中世寺院の外郭である8号溝が斜面をのぼりつめ、とりつくようにある。

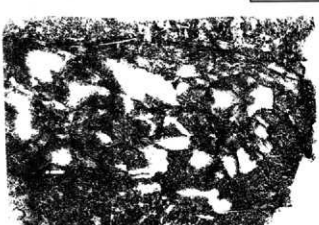
円墳、直径9m、As-C混黒褐色土が構築面で、わずかに盛土が残る。角閃石安山岩と山石が混在する葺石がめぐる。埴輪はない。周堀は、上幅2.60m、深さ70cm、全周する。ピット5本がある。

主体部は、東開口E－26'－N、角閃石安山岩L字型横穴式石室である。構築面はローム層、縦7.84m以上、横2.90mの方台形の掘り方の中に作られている。石室全長4.70m以上、玄室は長さ2.95m、幅奥壁1.60m、玄門90cm、張出部の奥行きは92cmである。奥壁は2石を置き、壁石は奥壁を含めて転石を半割した上で5面に加工されている。加工痕は、手のひらほどの半円形で縦に列をたどることができる。羨道は長さ1.77m、幅70cm、玄室との境には幅64cm、厚さ36cm、高さ28cmの框石がある。裏込めは、石を主とし掘り方いっぱいにつめこまれている。床面は、拳大の軽石層の上に玉砂利を敷き詰めている。玄室と羨道とは、ほぼ水平である。遺物は、玄室から大刀2点、鉄鏃20点、釘2点、ガラス小玉82点が出土している。大刀は左壁に沿って柄を奥壁に向けて置かれている。ガラス小玉は、頭の位置を示すかのように奥壁寄りの北西隅でまとまって出土した。この2つの出土状態からは、西頭位が推定できる。時期は、6世紀後半の4号古墳を周堀の一部が切り、占地、石室の平面形の特徴から7世紀前半、斜面部の一群に先行すると考えられる。



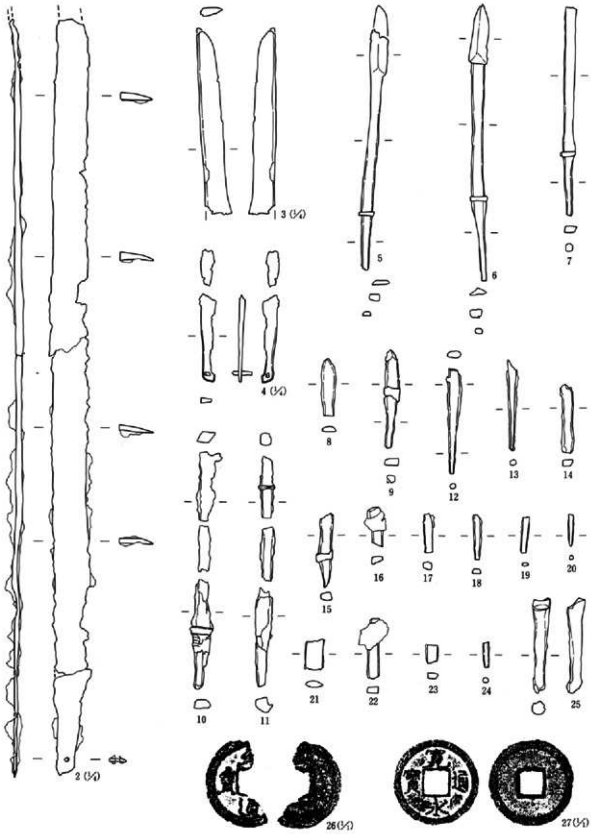
第106図　５号古墳遺構図(1)



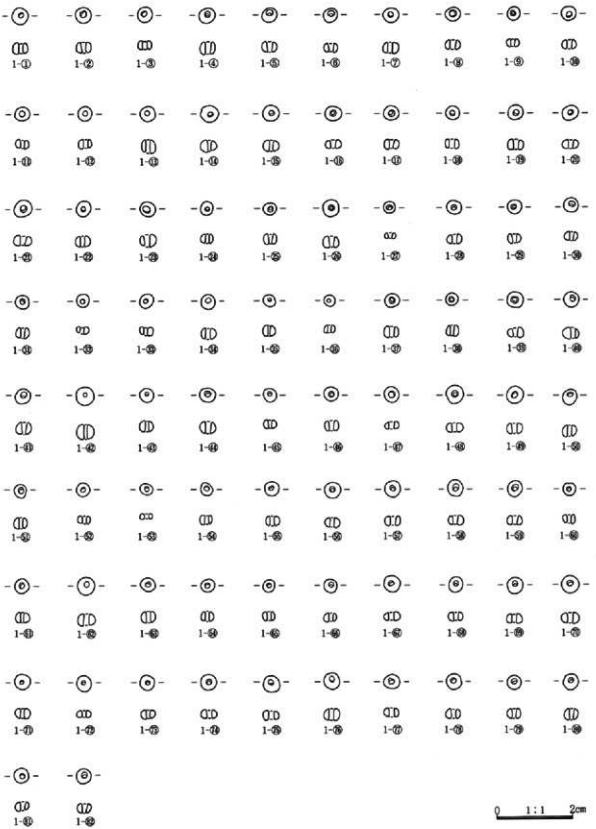


奥壁拓本(1/4)

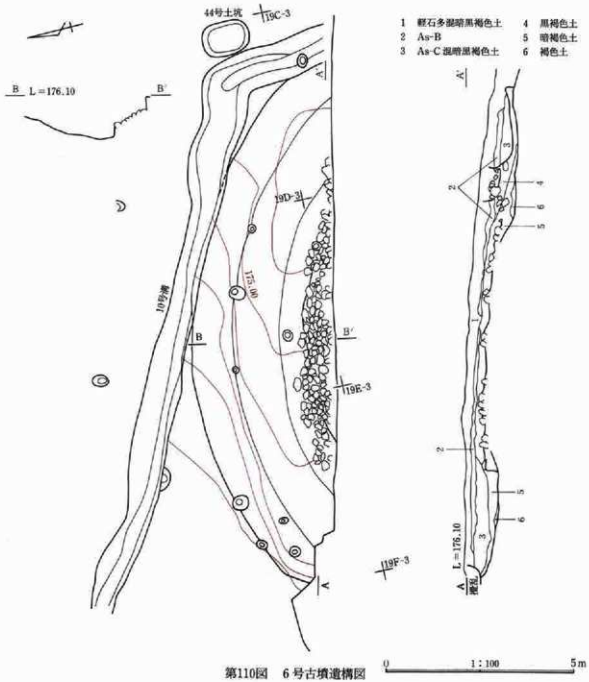
第107図　5号古墳遺構図(2)



第108図　５号古墳出土遺物図(1)



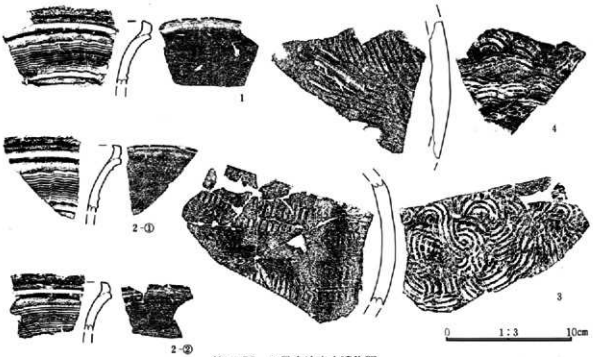
第109図　5号古墳出土遺物図(2)



第110図　6号古墳遺構図

6号古墳（第110・111図　P L 10・16・89）　箕郷町和田山字地蔵堂442　綜覧車郷村86号か

中央尾根の頂上部、19C～E－3グリットにある。4号、5号古墳が北側にあり、南には綜覧91号がある。周堀の北側が検出され、直径12mの円墳と推定される。プランの大半は南の調査区域外にあり、現況でもわずかに高く主体部が残存している。周堀は、幅2m、断面椀形で深さ60cm、規模や掘り方は周囲にある古墳と大差がない。直径20cm前後のピットが9本ある。角閃石安山岩の葬石があり、大きさや数の点からは4号古墳に類似している。遺物は、埋土から円筒埴輪、須恵器甕、土師器杯、中世の平瓦が出土している。この中で埴輪が伴う可能性がある。時期は、古地、葬石の特徴から4号古墳に近く一群と考えられる。



第111図　6号古墳出土遺物図

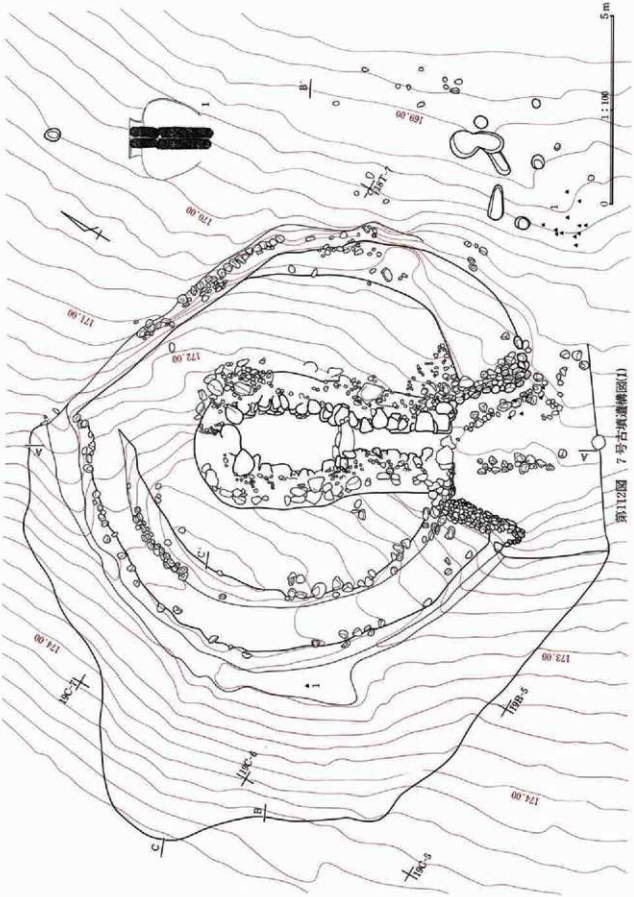
7号古墳（第112～115図　P L 10・15・89・98）　箕郷町和田山字地蔵堂441、443、447　綜覧番号不明

中央尾根の東斜面、19A～C－5～8グリットにある。北側は、畑の区画で削られている。

円墳、直径11mの山寄せ古墳である。構築面は、旧地表のAs-C混黒褐色土を傾斜に沿って整地、ローム、黒褐色土、暗色帯の混土で互層に盛土をしている。高さを補うために、前庭を東周堀の底面に合わせて深く掘り下げている。2段築造、基壇と2段目には、河原石の外護列石がめぐる。周堀は、山側で擂鉢状の上幅5m、断面墳丘側が鋭角の椀形、深さ1.20mで全周する。

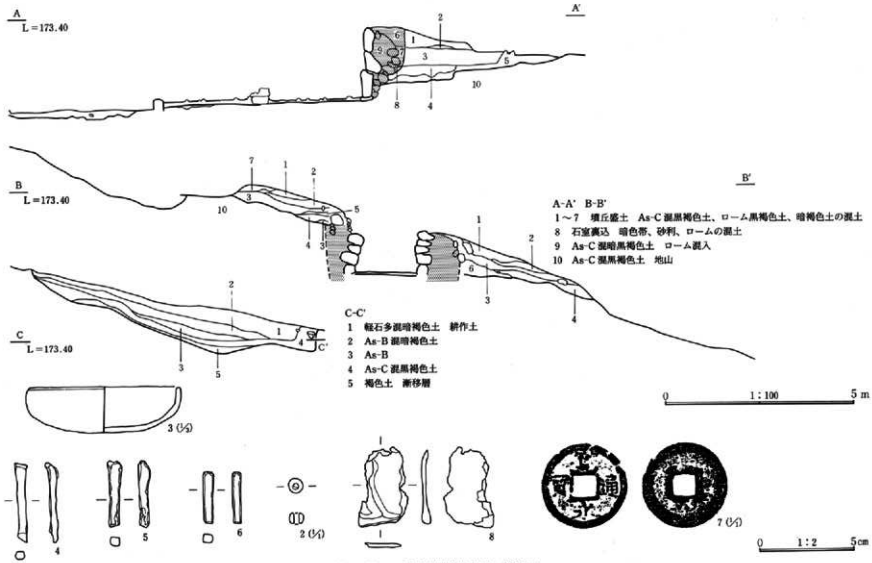
主体部は、南開口S－30°－W、河原石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、盛土中から掘り込まれ暗色帯に達している。左壁の山側をL字形に掘り込み、谷地の右壁側は盛土をしている。縁6.60m、横最大3.60m徳利形で、さらに奥壁側は方形に張り出している。奥行き2m、幅1.68m、掘り方の中では、特異な例である。石室全長5.65m、玄室は長さ2.55m、幅1.65mでやや胴張りする。尾根側からの土圧で谷地側に大きく歪み、天井石崩落の原因となっている。奥壁は、高さ1.88m、鏡石が3段に積まれている。羨道はほぼ平行し、長さ2.55m、幅85cm、高さ1.20mである。玄門と羨門が角閃石安山岩の5面の削石、その他は河原石の小口積みである。玄門は、6面の削石で塞いでいたらしい。資料化せず本文のみである。盤石は、隣接する8号古墳に比べると長さ40cmほどの棒状で小口面の大きさに差がある。前庭は斜面を切り込むように作られた台形、長さ2m、幅は奥で2.64m、先端で4mである。羨門の前には多量の石がある。崩落したものか投棄したものか判然としない。この下層には、羨門からのびるように幅60cm、石の列で両側を区画した墓道状のものがある。

遺物は、玄室から釘3点、人骨、前庭から土師器杯1点と左羨門の前でつぶれたような須恵器の大甕、東周堀からは長頸壺、甕が出土している。時期は、占地、石室の平面形の特徴から7世紀中頃から後半と考えられる。

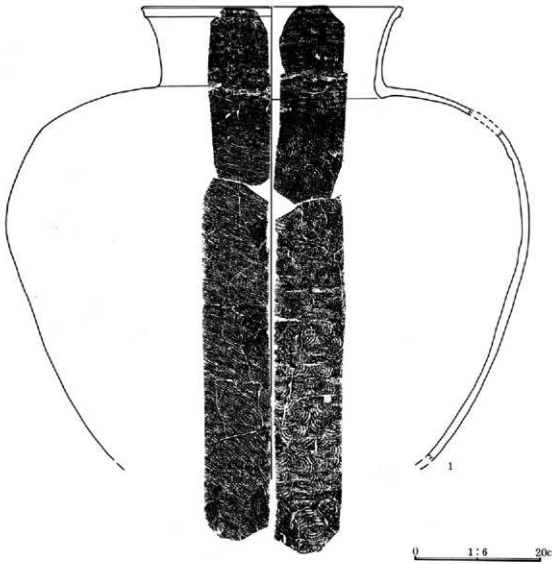


第112図　7号古墳遺構図(1)

第113図　7号古墳遺構図(2)



第114図 7号古墳遺構図(3)・遺物図



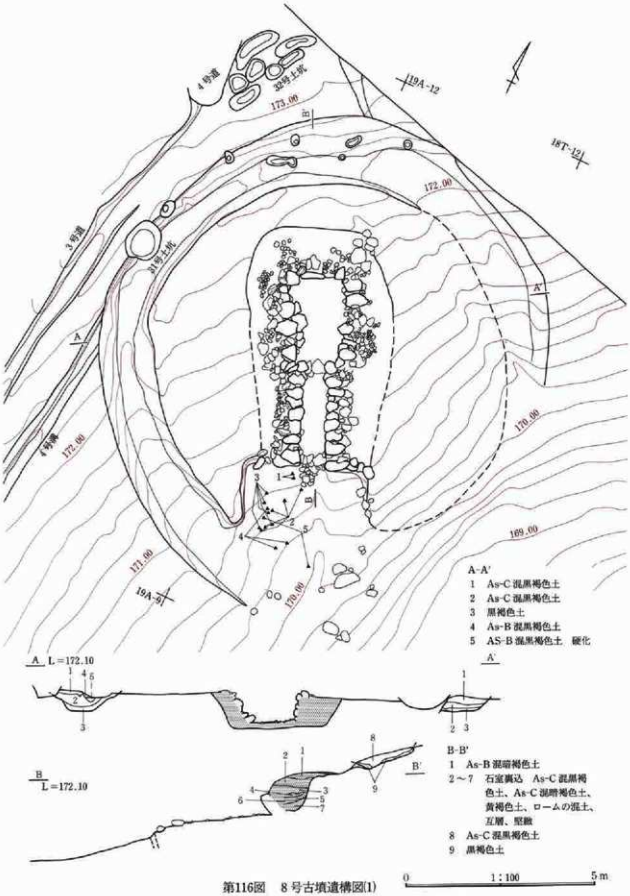
第115図　７号古墳出土遺物図

８号古墳（第116～118図　ＰＬ10・17・90）　箕郷町和田山字地蔵堂447　綜覧車郷村82号

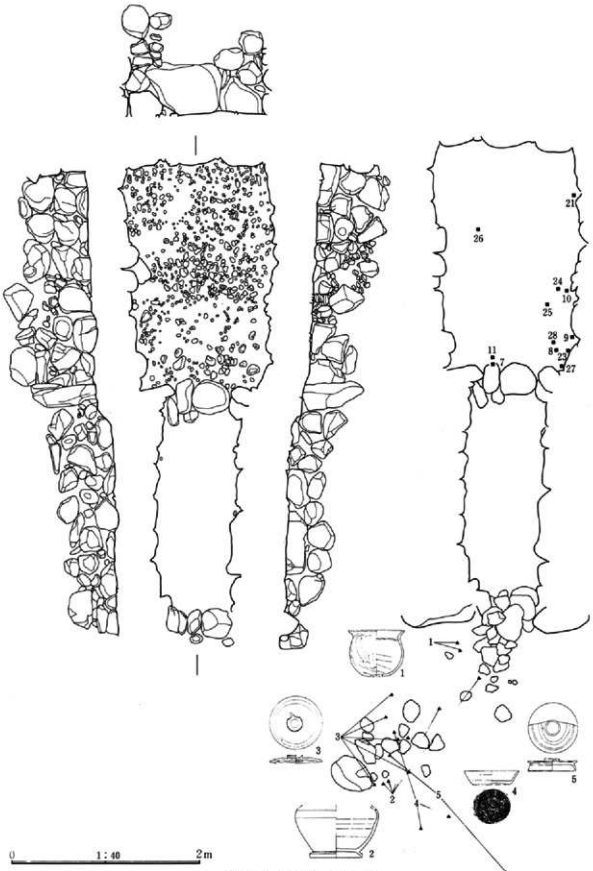
中央尾根の東斜面、７号古墳の北側、18ＳＴ、19Ａ－９～11グリットにある。周堀に４号溝、５号溝が重複する。As-B降下時には、上半部がすでに崩落し前庭に多量の河原石が流れ落ちている。前庭のAs-B層の直下には、道と思われる硬化面が羨道からのびるようにある。掘り方が類似する、５号道に続く可能性もある。前庭からは、８世紀後半の須恵器蓋が出土しており墓前の再利用が考えられる。

円墳、直径9.5mの山寄せ古墳である。構築面はAs-C混黒褐色土を整地して盛土している。葺石はない。周堀は、上幅1.60m、断面椀形、深さ55cmで全周する。山側に７本のピットがある。

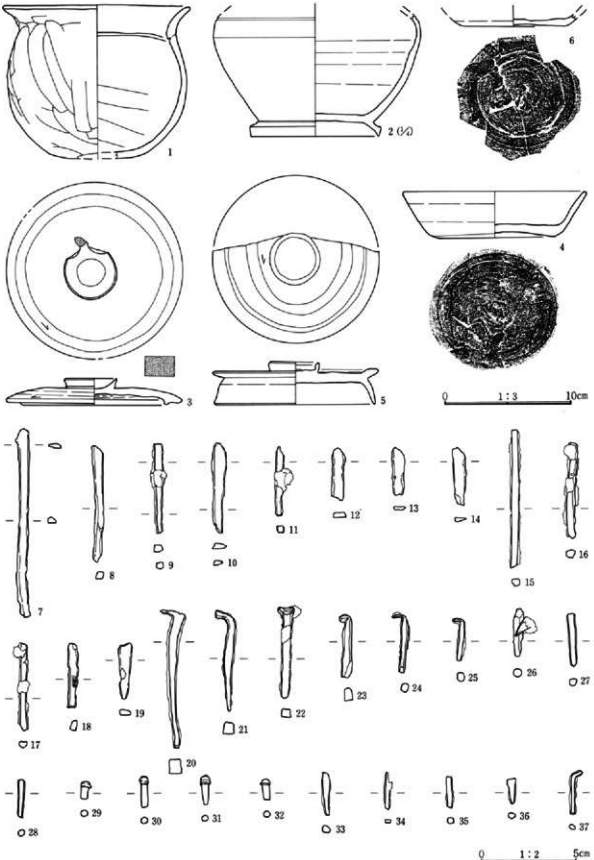
主体部は、南開口Ｓ－23°－Ｗ、河原石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は暗色帯、縦6.70m、横3.28mの方形の掘り方の中に作られている。石室全長5.20m、玄室は方形、右壁がわずかに弧を描いている。長さ2.40m、幅奥壁で1.50m、玄門で1.35m、奥壁中央に鏡石、左右に２石が並んでいる。壁は、長さ40cmの前後の河原石を小口積、左右４段が残る。７号古墳と比べると、石が小ぶりである。玄門は立柱、高さ68cmである。羨道は左右平行で、長さ2.80m、幅75cm、玄室と同じ小口積みで３段が残る。羨門は、偏平で厚



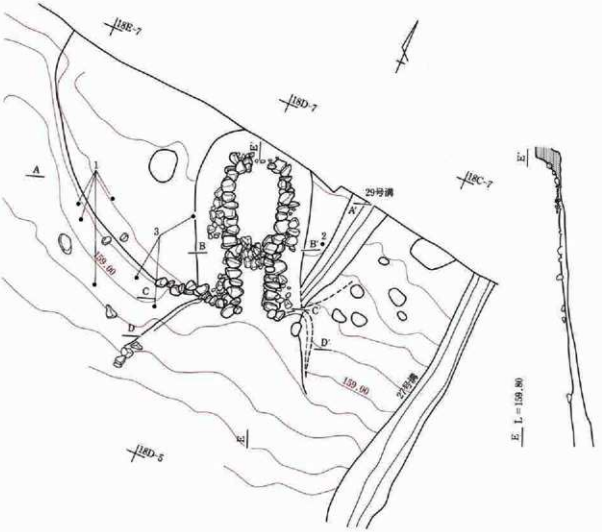
第116図 8号古墳遺構図(1)

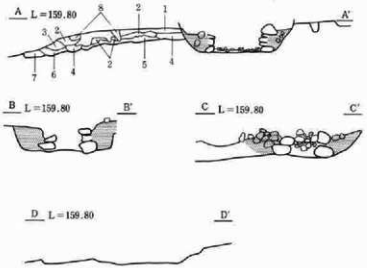


第117図　8号古墳遺構図(2)



第118図　8号古墳出土遺物図

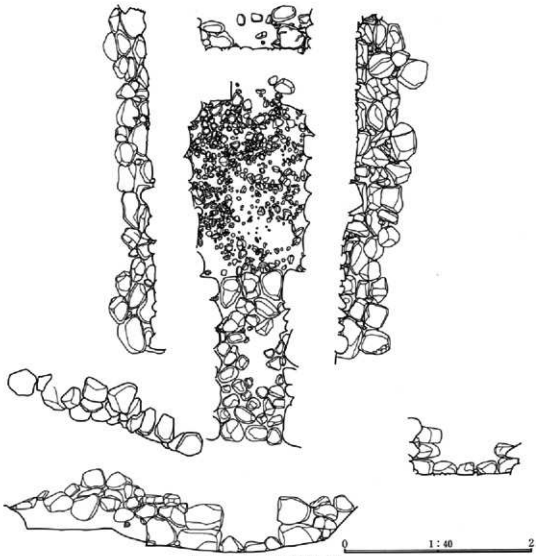




1　As-C 混暗褐色土
2　1層に FA 混入
3　As-C 混暗褐色土
4　As-C 混黒褐色土
5　As-C 混黒褐色土
6　As-C 混暗褐色土
7　As-C 混暗褐色土
8　ローム崩落層
1～7層は明暗、混入するローム粒子や量で区分される

0　1:100　5m

第119図　9号古墳遺構図(1)



第120図　9号古墳遺構図(2)

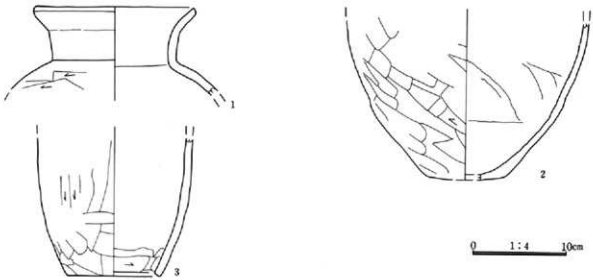
手の河原石を4段以上積んでいる。積上げた閉塞がある。裏込めは、ローム混土が主である。床面は、玄室が卵大の玉石敷、羨道が10cmほど低く石も大きめである。前庭は方形、裏込めのない小口積で両羨門脇だけ3段程度の石組みが残る。遺物は、玄室で鉄鏃13点、釘18点、人骨、周堀で須恵器甕、前庭では規瓶、須恵器杯、蓋が出土している。時期は、遺物や玄室、玄門の特徴から7世紀前半から中頃と考えられる。

9号古墳（第119～121図　ＰＬ18・90）　箕郷町和田山字天神前163-６、166　綜覧漏

東尾根の斜面基部から谷地にかかる、18Ｂ～Ｅ－５～７グリットにある。20号、21号古墳と東西に並んでいる。中世寺院の土塁の一部として使われた形跡がある。石室の右壁近くは29号溝が縦断し、11号集石もその上に重なる。近くに15号、17号の住居跡やＦＡ混晶があり、居住域から墓域への転換を知る古墳である。

円墳、直径10m、構築面は、As-C混黒褐色土で整地した上に同じ混土を盛土している。この中にはＦＡがブロックで混入している。墳輪はないが、角閃石安山岩が点々とあり外護列の可能性がある。周堀はめぐると推定されるが、中世寺院で削平されたようである。

主体部は、南開口Ｓ－25°－Ｗ、河原石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、ローム漸移層で縦4.60



第121図　９号古墳出土遺物図

m、横３mの隅丸方形の掘り方の中に作られている。石室全長3.65m、玄室は胴張方形、長さ1.70m、幅1.15m、玄門幅56cm、奥壁は抜き取られている。羨道は長さ1.95m、幅65cmでほぼ平行している。前庭は、縦3.70m、横3.20mの方形、左羨門から墳丘に続く小口積の石組みがある。床面は羨道から玄室まで水平で、玉砂利敷きである。裏込めは、ロームと黒褐色土、暗褐色土の厚さ５cm前後の互層である。

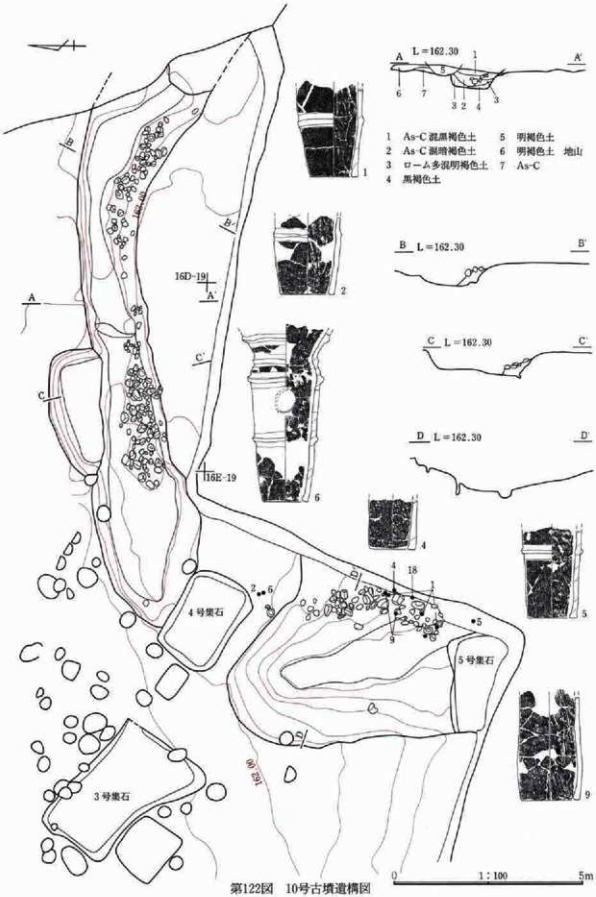
丸胴甕は、墳丘盛土での混入と思われる。時期は、玄室プランから７世紀前半と考えられる。

10号古墳（第122～127図　ＰＬ16・19・91・98）箕郷町和田山字天神前229-２、３、12、15　綜覧車郷村113号

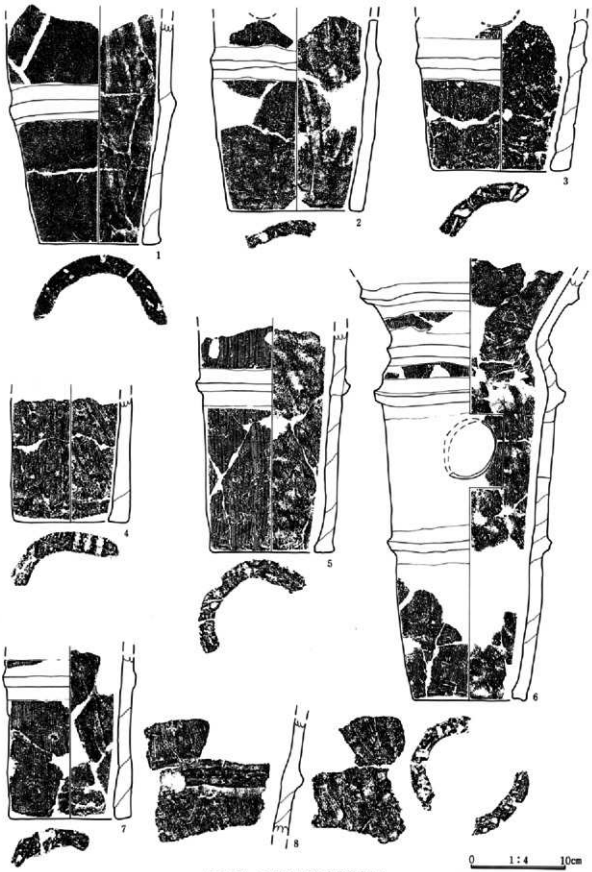
東尾根の先端部、６区Ｃ～Ｆ－17～19グリットにある。11号古墳の南にあり、綜覧114号との間にある。11号と同じく尾根の最先端に立地する。周堀の北側から西側だけを検出したもので、主体部を含む一帯は南の調査区域外にある。現況での高まりは、耕作による盛土でできたものという。レーダー探査では、調査で検出された範囲に続いて、周堀と思われる箇所が認められている。周堀としては全周するものと考えられる。西周堀には、４号、５号の集石が重複する。

円墳、推定直径13m、旧地表のAs-C混黒褐色土が構築面で、盛土をしたと思われるがわずかに残るだけである。最近の耕作だけでなく、中世の整地による削平も十分に考えられる。西堀には、ピットが多数重複している。周堀は、北西が途切れて土橋状になっている。幅は、北が1.60～2.50m、底面がほぼ平坦で深さ60cm、西が４mで断面椀形、深さ110cmである。西側が深く、北にまわるに従って浅くなるのは正面の関係であろう。西周堀には、埴輪とともに多量の葺石が崩落している。葺石は、11号古墳にくらべてひとまわり大きい人頭大の河原石で、底面近くと覆土中位に分けられる。埴輪は、このうち中位に伴うものが多い。組成からは、円筒と形象とが混在しており、個体数も多いことから密に配列されていた状態が復元される。

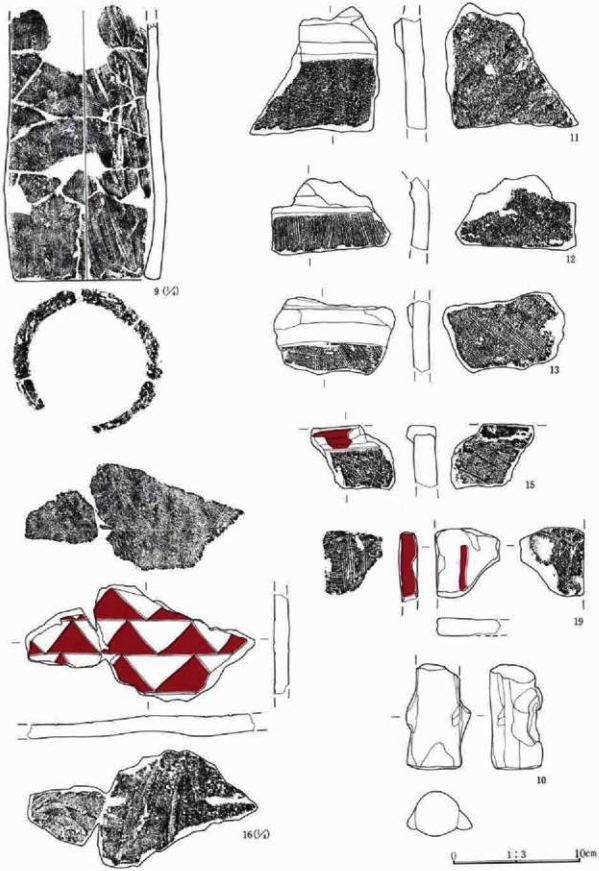
遺物は、朝顔を含む円筒輪のほかに家、盾の形象埴輪、須恵器の甕、高杯、土師器の杯が出土している。円筒埴輪は、胎土とハケ、凸帯の特徴から３分類できる。11号古墳の特徴に近く、19区にある４号古墳以下とは区別される。砂粒多混の浅黄～浅橙色系統が数の上では多く、１～４が該当する。凸帯は低く三角につぶれ、ハケが１cmで５～６本である。にぶい橙色系統、８が該当する。橙色系統その他で５～７がある。凸帯は台形、ハケは１cmで８～９本である。全体的には、二次的な理由も含めて被熱のためか発泡状態のもの



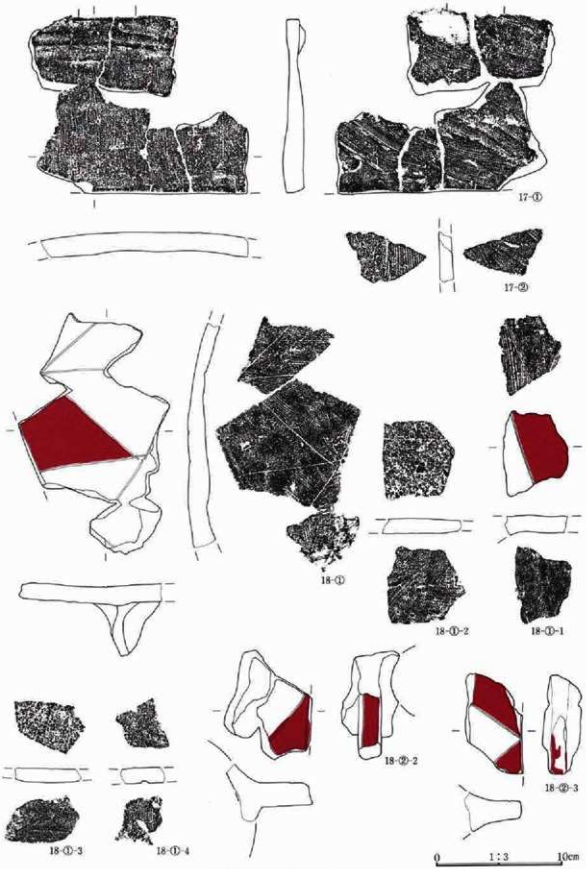
第122図 10号古墳遺構図



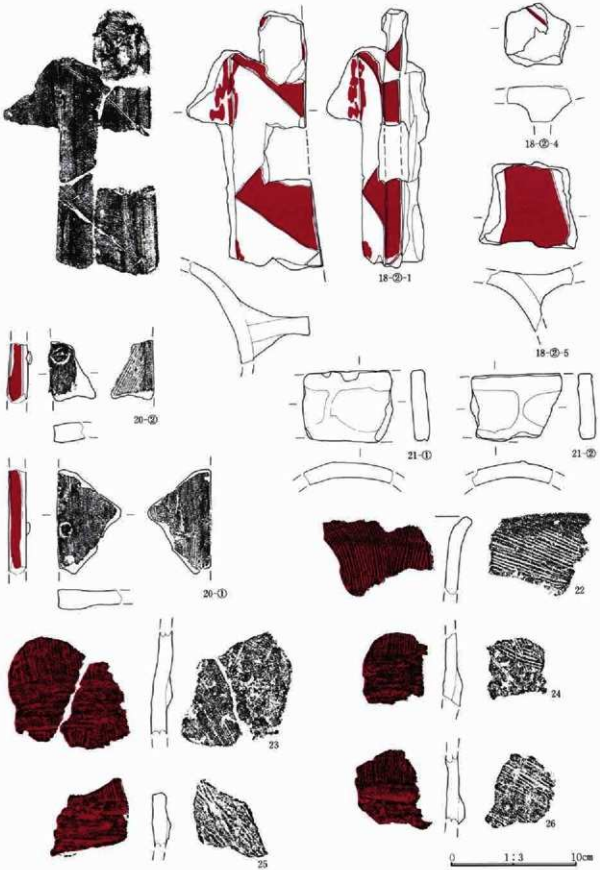
第123図　10号古墳出土遺物図(1)



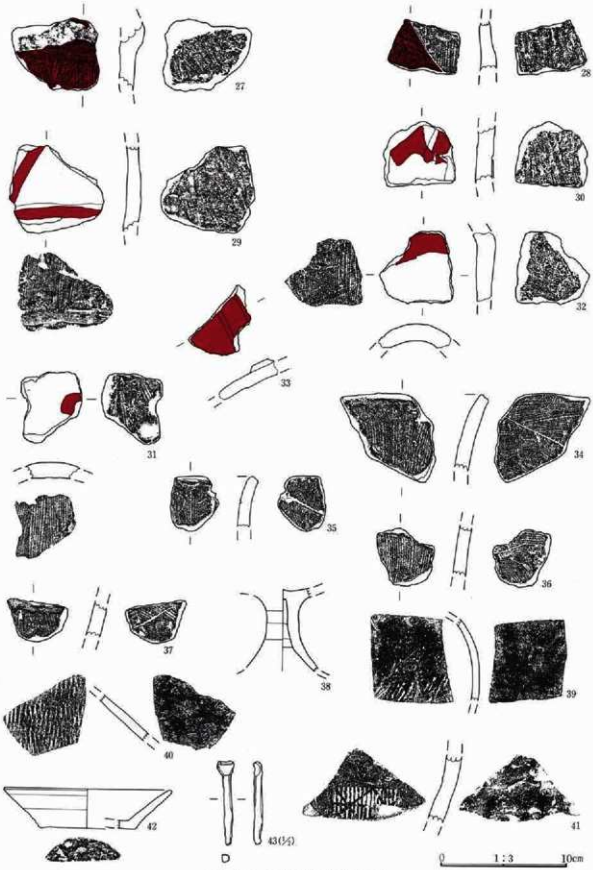
第124図　10号古墳出土遺物図(2)



第125図　10号古墳出土遺物図(3)



第126図　10号古墳出土遺物図(4)



第127図　10号古墳出土遺物図(5)

が目につく。これが大きな特徴となっている。また、赤色彩色されたものが形象だけでなく、円筒の中にもみられる。円筒では22～26のように凸帯の上下や全体に帯状に塗るものが多く、形象では文様表現の一部としてみられる。11～15・17の家型埴輪は、凸帯の状態から下屋か四注部と思われる。11号古墳の家に類似する。砂粒多混の赤橙色、ハケは円筒と共通して密に施されている。一部が赤彩されている。同一の個体が3号集石に混入している。竪魚木のあることから、2棟がある。16の盾は、精選された胎土で褐色、線刻で区画した中に赤彩された鋸歯文を施している。18も線刻で区画した中を赤彩された鋸歯文が施されている。19は、ハケや赤彩された端面の状態から靫かと推定される。

時期は、埴輪の特徴から6世紀後半と考えられる。立地規模から、11号古墳がもつ尾根先端での位置を継承したものと考えられる。周堀が途切れ、造出しをもつ可能性もある。地権者によると、戦後以降の耕作中に多量の埴輪が出土したとのことで、中には土橋状の箇所にあたる位置での人物埴輪が含まれている。一部は、群馬県立博物館に寄託されたとのことである。箕郷町誌にも、その内容が記載されている。また、東京国立博物館所蔵群馬郡箕郷町和田山出土品の埴輪も、その可能性があるとのことである（発掘調査中、和田山在住見山　力氏教示）。

11号古墳（第128～132図　ＰＬ16・19・92・98）

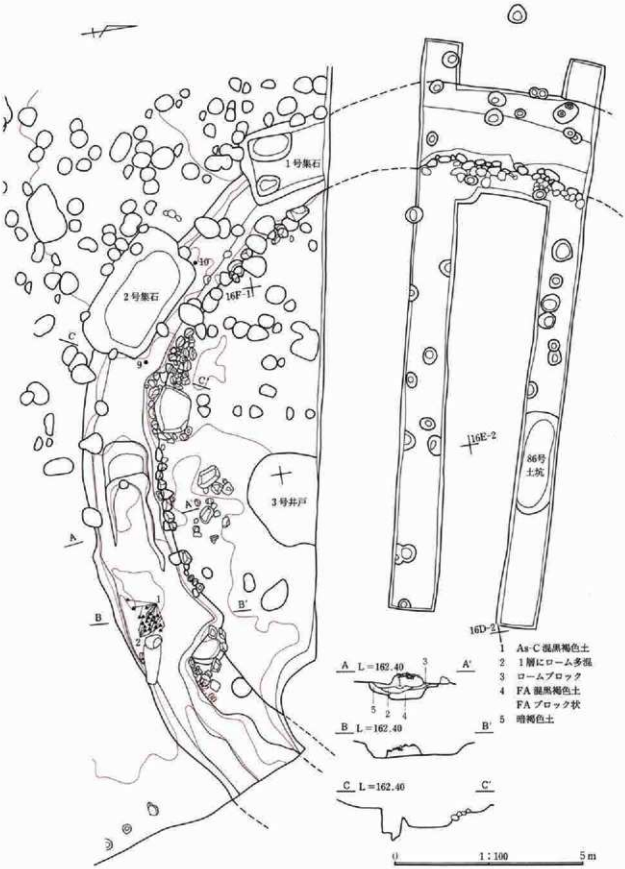
箕郷町和田山字天神前229-12、229-15　綜覧車郷村112号か

東尾根の先端部、10号古墳の北側、6・16Ｃ～Ｆ－20・1グリットにある。楡名白川に突き出た尾根の最先端か近い位置と思われる。検出された古墳の中では、ＦＡがある、唯一の6世紀初頭のものである。

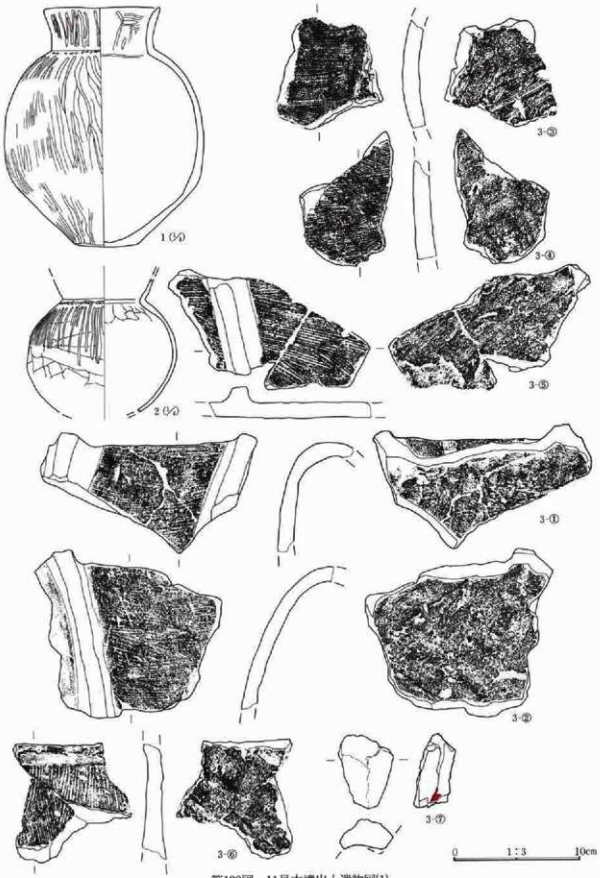
円墳、直径15m、南から西側にかけての周堀を検出する。南周堀に1号、2号の集石が重複し、全体は中世の館の築造に伴い整地・削平されていた。墳丘上には、3号井戸、12号、13号、15号の掘立柱建物がある。特定できないが天井石は、上がり框石に利用されている。

周堀は、西で幅1.30m前後、底面はほぼ平坦で深さ70cmである。南は幅1.50m、深さ70cmである。南が正面との関係か、深くなる。覆土は3層に分けられ、中位の2層にＦＡがブロック状で見られた。20cm前後の河原石の葺石が3段前後残っていた。円筒埴輪、坩は、南周堀にややまとまりをもって出土したもので、上層の1層と中の2層からである。主体部は、未確認ながら、地山であるAs-C混黒褐色土のあり方や周堀のＦＡの存在から、竪穴系と推定される。和田山古墳群の中では、後期の群集墳以前のもので尾根先端部の立地、主体部のあり方からも特徴づけられる。円墳と推定しているが、東南隅で周堀内に底面から一段高くなる、一見すると造出しを思わせる部分がある。検出した範囲で、幅4m、奥行1.50mである。葺石の可能性をもつ石が途切れることからも、その可能性は高い。

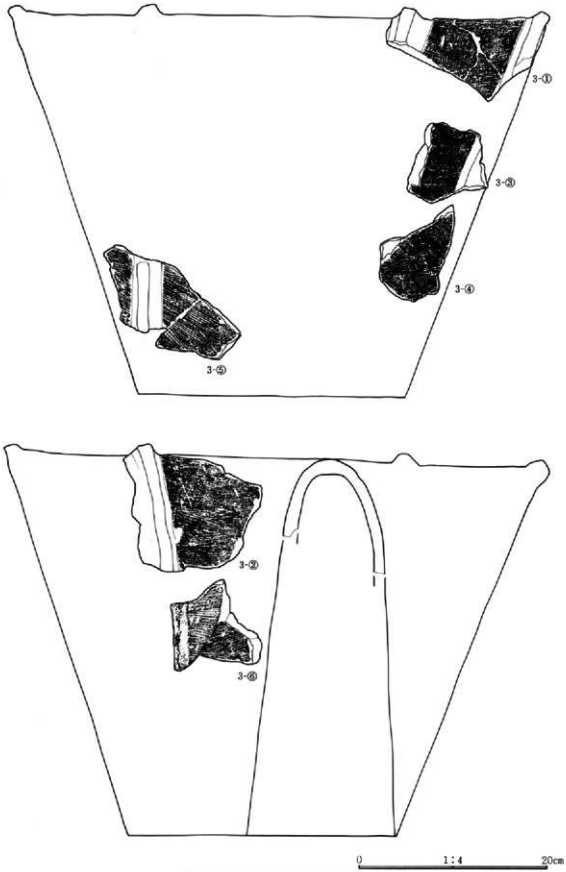
埴輪　形象として、3の家、4の盾、5～7の器財の一部と思われるものがある。家は、周囲にある集石に混入している。入母屋型、棟頂部や破風の破片から上屋だけを復元する。棟頂部で60cm、下端28cm、高さ40cmである。断面が強い合掌形、竪魚木がない。屋根をおさえる垂木が、凸帯で表現されている。破風は赤彩され、円柱状をあらわした棟木がある。外面には、垂木の間にヨコハケ、内面は指ナデを施す。4号古墳の家と比較すると、幅の広い粘土帯を積み上げ、凸帯をつかい、やや厚くハケを施す点に特徴がある。下屋では、上屋との接合部がある。四柱部には、入口部や隅に近い部分がある。柱や梁は、上屋と同じく凸帯で表現されている。円筒には、朝顔が含まれる。全体に、色調、胎土、ハケの調整で10号古墳と同様な特徴をもっている。色調では、淡黄～淡橙色、にぶい橙色、橙色に分けられる。



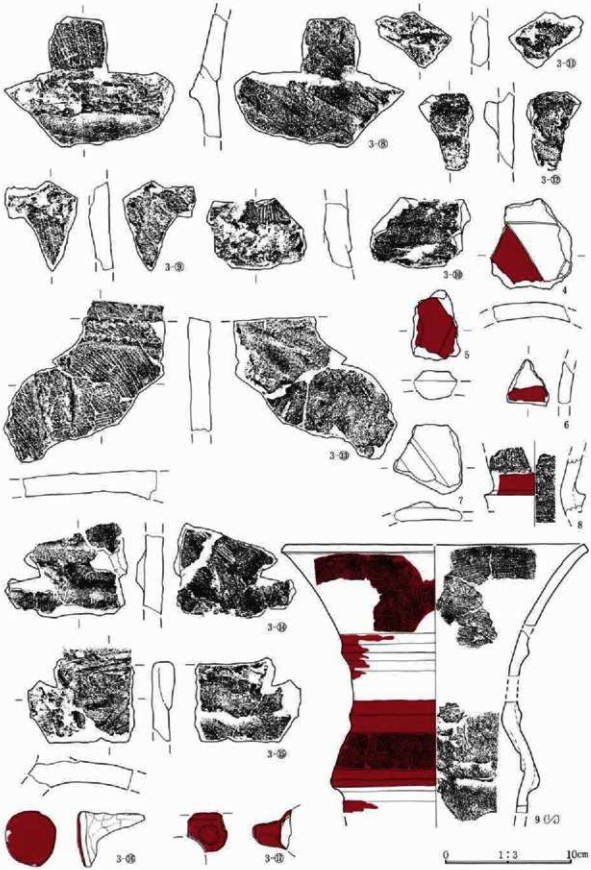
第128図　11号古墳遺構図



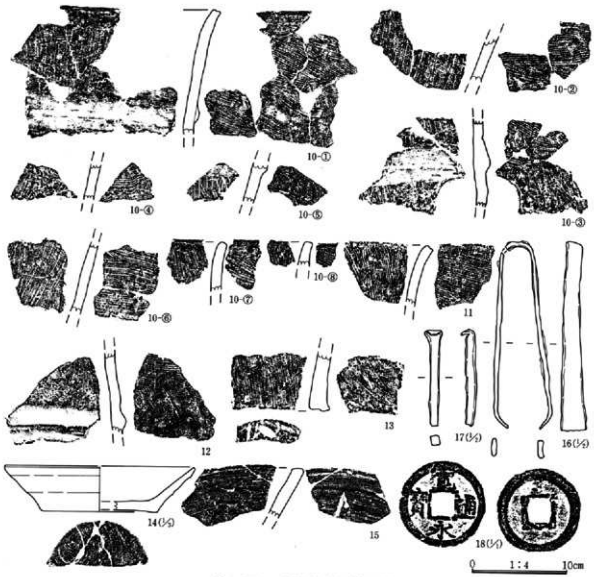
第129図　11号古墳出土遺物図(1)



第130図　11号古墳出土遺物図(2)家



第131図　11号古墳出土遺物図(3)



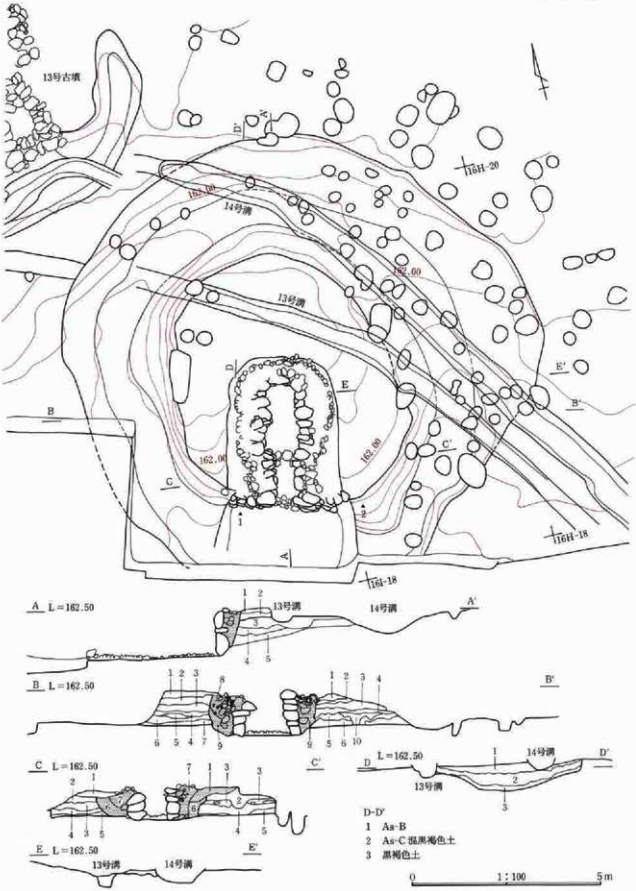
第132図　11号古墳出土遺物図(4)

12号古墳（第133～135図　ＰＬ19・93・98）　箕郷町和田山字天神前229-15　綜覧番号不明

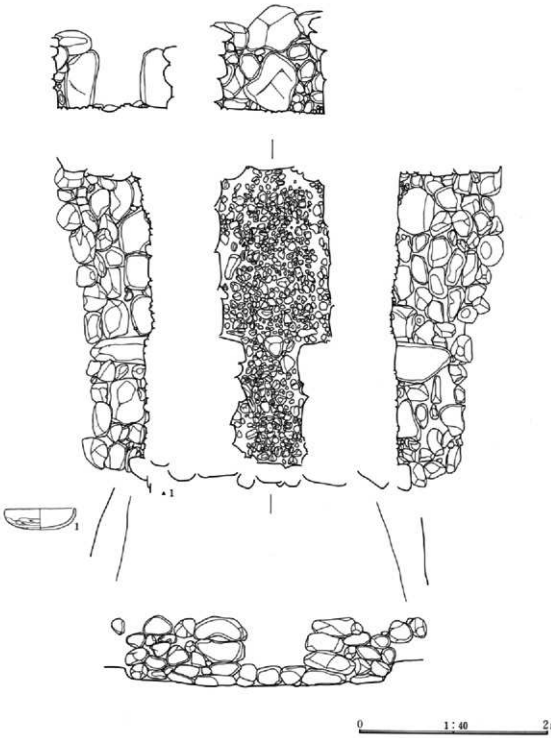
東尾根の斜面、６Ｇ～Ｊ－17～20グリットにある。前庭の一部を除いて検出するが、上部は中世の館で削られていた。13号、14号の溝がほぼ東西に横断する。

円墳、直径７ｍ、構築面は、As-C混黒褐色土で同じ混土で盛土をしている。葺石と埴輪はない。周堀は上幅2.40ｍ、深さ70cm前後で全周する。前庭が一段深くなる。

主体部は、南開口Ｓ－７'－Ｅ、河原石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面はローム層上位、縦4.20ｍ、横2.90ｍの隅丸方形の掘り方の中に作られている。石室全長3.20ｍ、玄室はやや胴張りの短冊形で右壁が直線的、構築の基準辺と考えられる。長さ1.70ｍ、幅1.05ｍ、奥壁は２段の鏡石で高さ1.13ｍ、壁はわずかに内傾する。玄門は立柱、高さ60cmである。左に１石がのり高さ80cmとなる。羨道は長さ1.50ｍ、幅60cmで両壁はほぼ平行している。ほぼ閉塞石で埋没していた。羨門は４段の小口積みである。裏込めは、２段目までは土ざめで、３段目から上に石が多くなる。床面は羨道から玄室まで水平、小砂利敷きの上に卵大の石を敷いている。前庭は台形、羨門両側にだけ小口積みの石組みがある。



第133図 12号古墳遺構図(1)

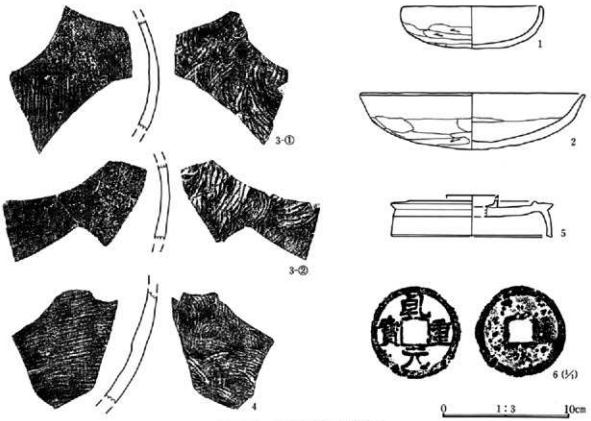


A-A'
1　墳丘盛土　As-C 多混
2　墳丘盛土　As-C、ローム混
3　As-C 混黒褐色土
4　暗褐色土
5　ローム漸移土

B-B'
1　中世盛土
2　墳丘盛土
3　As-C 混黒色土
4　As-C 多混黒色土
5　As-C 混褐色土
6　暗褐色土
7　ローム漸移層
8・9　石室裏込　互層
10　As-C 混暗褐色土

C-C'
1　墳丘盛土
2　As-C 混黒褐色土
3　As-C 多混黒褐色土
4　暗褐色土
5　ローム漸移層
6・7　石室裏込　互層

第134図　12号古墳遺構図(2)



第135図 12号古墳出土遺物図

遺物は、前庭から破片ながら須恵器の蓋1点、瓶3点、羨門の右から完形の土師器杯1点が出土している。墓前に供献されたものである。蓋は、8世紀後半の特徴をもち、8号古墳の類例である。時期は、玄室プランや杯の特徴から7世紀前半から中頃と考えられる。

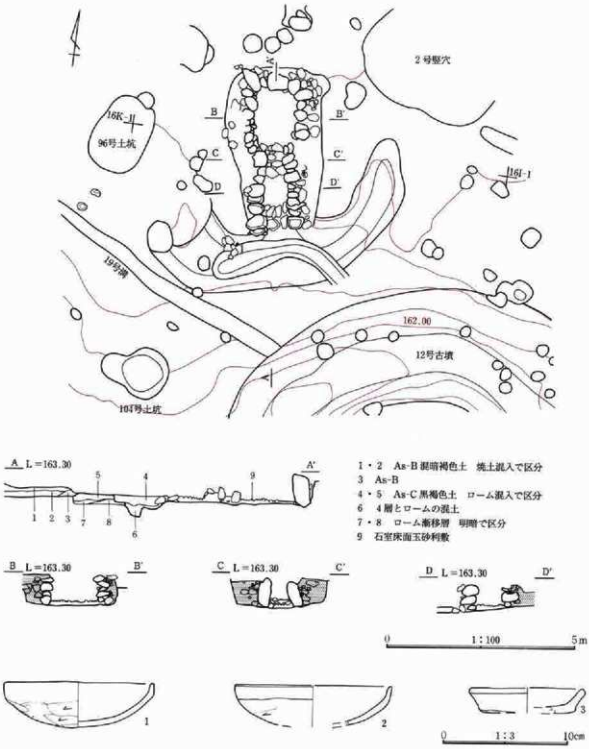
13号古墳（第136・137図 P L 19・20・93） 箕郷町和田山字天神前229-1、230 綜覧番号不明

東尾根の斜面中段、6・16 I ～K－1・20グリットにある。中世の遺構で上半は削平されている。前庭を利用して6号集石がある。

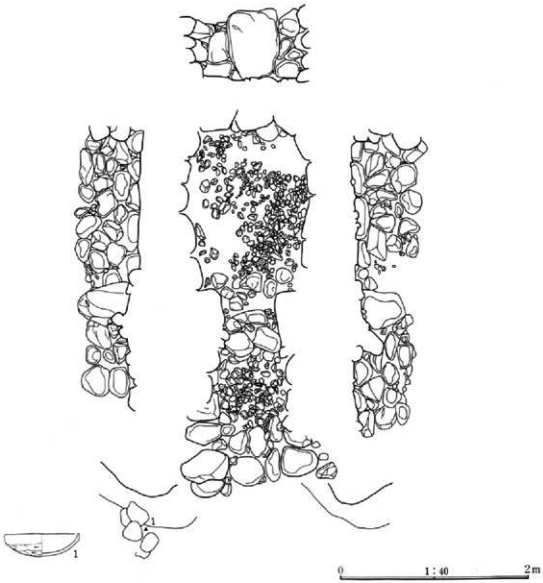
円墳、直径7m、構築面はAs-C混黒褐色土、葺石と墳輪はない。周堀は上幅1.50m前後、深さ30cmで前庭から逆ハの字形にめぐる。本来は全周していた可能性がある。

主体部は、南開口S－13'－W、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、ローム層中位、縦5.20m、横2.52mの長台形の掘り方の中に作られている。石室全長3.80m、玄室は胴張りの方形で長さ1.65m、幅奥壁で1.15m、最大1.30m、奥壁は中央に高さ82cmの鏡石を置き、左右を小ぶりな石で小口積で4段以上重ねている。玄門は立柱、高さ76cm、羨道は長さ1.50m、幅60cm、羨門は小口積で3段が残る。
裏込めは、玉砂利を壁の段を意識するように半ば互層にしている。床面は、掘り方の上に黒褐色土とロームの混土で貼床をして玄室、羨道ともに卵大の石を敷いている。玄門では、やや大ぶりな石が縦に数石積み上げられて羨道と分けている。羨門では、壁石ほどの大きさの石が2列並べられている。

玄室からの遺物はなく、前庭部北西部隅から土師器の完形杯1点が出土している。時期は玄室プランの特徴から7世紀前半から中頃と考える。



第136図　13号古墳遺構図(1)・遺物図



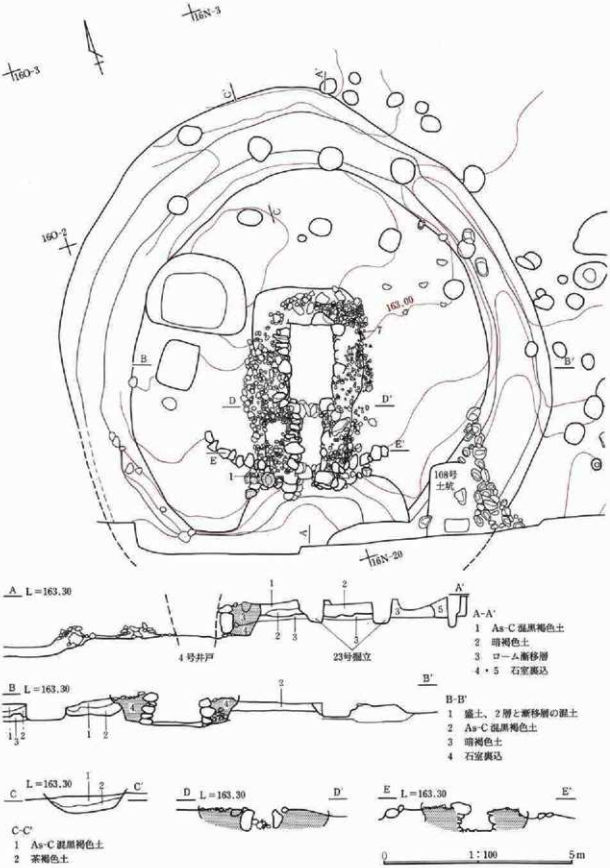
第137図 13号古墳遺構図(2)

14号古墳（第138～140図 P L 19・20・93・98） 箕郷町和田山字天神前230 綜覧東郷村漏

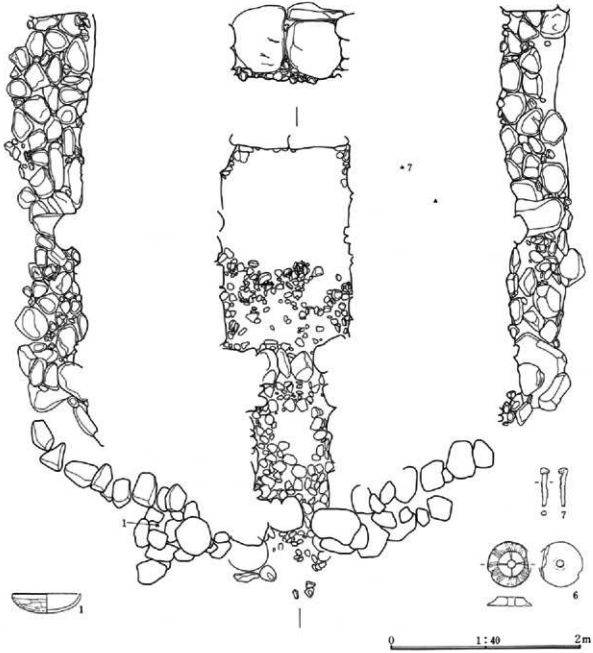
東尾根の斜面中段、6・16L～0－19～2グリットにある。13号、15号古墳の間にある。北周堀に24号掘立柱建物、東側に21号溝が重複する。中世館に伴う土塁としても利用され、玄室には石組みを利用して4号井戸が掘られている。

円墳、直径10m、構築面はAs-C混黒褐色土で、わずかに盛土がみられた。葺石、埴輪はない。周堀は上幅2m前後、深さ50cm前後で全周する。前庭側にかけて深くなる。

主体部は、南開口S－18°－E、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、ローム層上位で縦5.60m、横2.88mの長方形の掘り方の中に作られている。石室全長4.50m、玄室は長さ2m、幅奥壁1.25m、玄門1.15mの方形、奥壁は2石並列、高さ71cm、玄門は立柱で高さ71cm、縦に2石置いて框石としている。羨道は長さ2.50m、幅60cmでほぼ平行する。羨門は小口積4段、閉塞は羨門付近だけに積み上げている。裏込めは、段ごとに石とローム混土で半ば互層にしている。床面は、玄室が卵大の砂利敷、羨道がやや大きめの

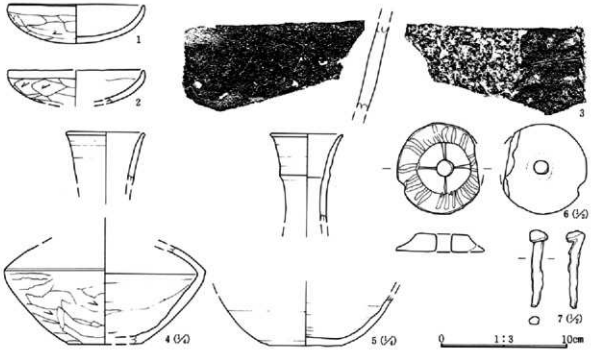


第138図　14号古墳遺構図(1)



第139図　14号古墳遺構図(2)

石で敷き詰められている。前庭は台形、羨門からは墳丘に続く左右１ｍほどの石列と矩形を意識させる石組みがある。北西隅からは、墓前に供献された土師器杯１点が出土している。石製紡錘車は、北周堀の覆土から出土しているが混入と思われる。時期は、玄室プランの特徴から７世紀前半から中頃と考えられる。

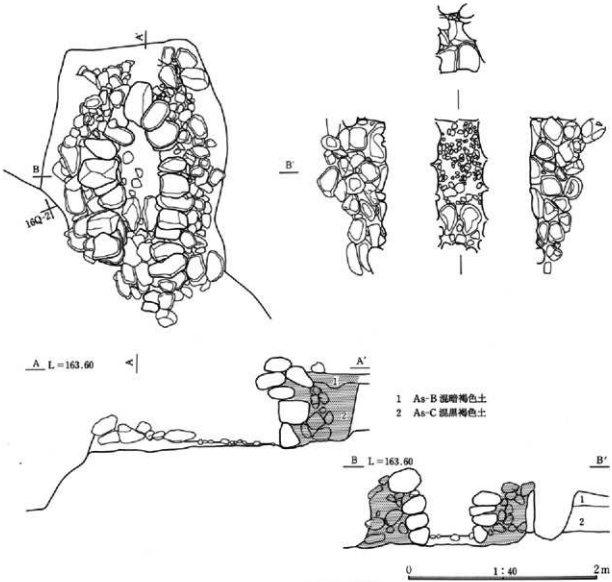


第140図　14号古墳出土遺物図

15号古墳（第141図　ＰＬ19・21）　箕郷町和田山字天神前229-１　綜覧車郷村湯

東尾根の斜面中段、14号と16号古墳の中間、16ＰＱ－１、２グリットにある。中世館の南堀にかかる橋の橋台として利用されている。その際に石が土留に使われている。立地の中では、14号と16号の間に適当な余地があるが、本来周堀のない小石槨であった可能性がある。群集墳の終末期のものではなく、あらかじめ立地が予定されていたか、群の中での墓域の単位が関係していると考えられる。

南開口Ｓ－20°－Ｅ、小規模ながらも河原石乱石積両袖型横穴式石室の作りである。羨道の先端は、館の南堀で削平されている。構築面は、ローム漸移層で縦2.80m、横1.90mの方形の掘り方の中に作られている。石室全長1.50m以上、幅45cmの短冊形、玄室の長さ88cm、高さ60cm、壁はやや内傾、奥壁を含めてすべて小口積で５段目が天井となる。床面は水平、縦に２石並べて框石とし玄室と羨道として区別する。玄室は卵大の玉石敷、羨道は拳大で区別された上に閉塞石を詰め込まれている。裏込めは、掘り方と壁石との間に拳大の石が密に詰め込まれている。玄室および周囲に伴う遺物はない。時期は、直接の資料はないが周辺にある古墳との位置関係や石室プランの特徴から７世紀後半と考えられる。



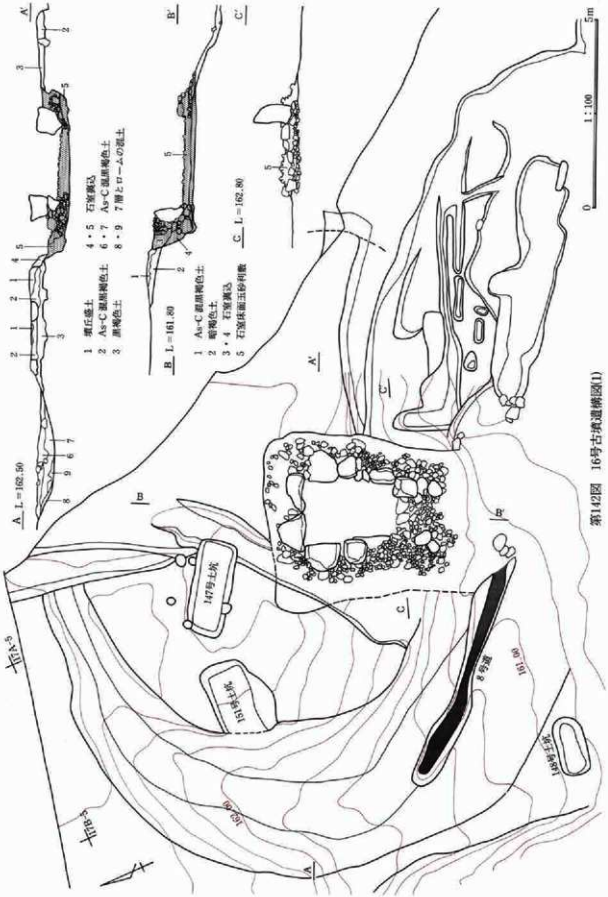
第141図　15号古墳遺構図

16号古墳（第142・143図　ＰＬ21・22・93・99）　箕郷町和田山字天神前228-１、229-１、9　綠覧車郷村溜

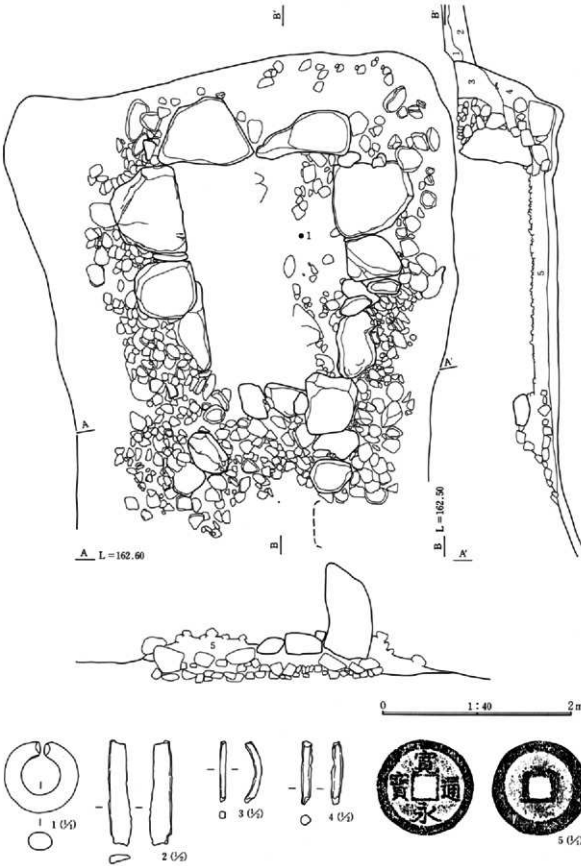
東尾根の斜面中段、16ＳＴ－20～１、17ＡＢ－２～４グリットにある。15号と19号古墳の間にある。中世館の南堀が北東側を、宅地造成で上半分を削られている。中世の147号土坑、江戸時代の８号道が重複する。

円墳、直径10m、構築面はAs-C混黒褐色土、盛土はわずかに残る。周堀は、上幅２～４m、深さ50cm前後で前庭側を深くして全周する。

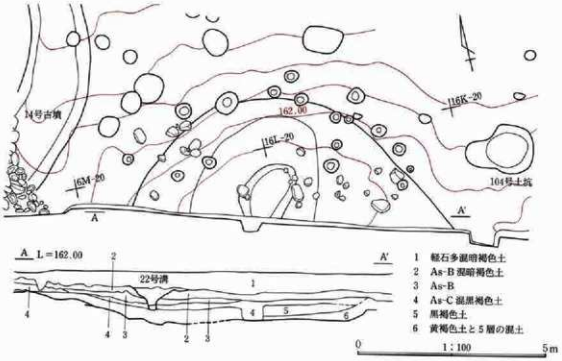
主体部は、南開口Ｓ－25°－Ｅ、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は暗色帯、縦5.76m以上、横4.40mの方台形の掘り方の中に作られている。奥壁下で作業用と思われるピットがある。石室全長3.88m、玄室は同じく方台形で長さ3.88m以上、幅は奥壁で1.72m、玄門で1.32m玄門は立柱、高さ112cmである。羨道は一部を残して削平されている。壁は２段、横置き、大ぶりな石が特徴である。傾斜は少ない。裏込めは、根石の下に人頭大ほどの地衆の石が厚くかまされ、さらに段に合わせて互層状に繰り返している。床面は卵大の玉石を２層に敷き重ねている。遺物は、玄室で耳環１点が出土している。埴輪はない。時期は、玄室プランの特徴から７世紀前半と考えられる。



第142図　16号古墳遺構図(1)



第143図　16号古墳遺構図(2)・遺物図



第144図　17号古墳遺構図

17号古墳（第144図　ＰＬ19）　箕郷町和田山字天神前230　綜覧車郷村漏

東尾根の斜面中段、６ＫＬ－19、20グリットにある。12号と14号古墳の間にある。周堀の北側だけが検出されたもので、上面には中世の館や関連する遺構が重複し、調査区域の南は宅地造成や町道で削平されて周堀を残す程度と推定される。

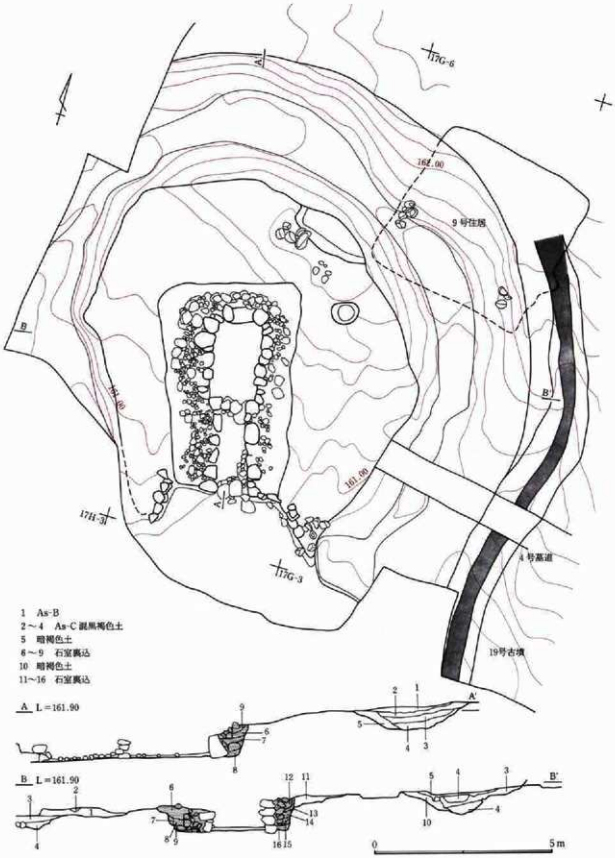
周堀からは、７ｍ前後の円墳と推定される。19号古墳のように北側が大きくふくらむ周堀の形態で、上幅３ｍ以上、深さ80cm以上である。覆土には、葺石と思われる河原石が混在していたが量が少なく、周囲からの混入とも考えられる。立地からみて、葺石、墳輪をもたないものと考えられる。時期は、７世紀代である。

18号古墳（第145～147図　ＰＬ22・26・93・94・99）　箕郷町和田山字天神前227-１　綜覧車郷村漏

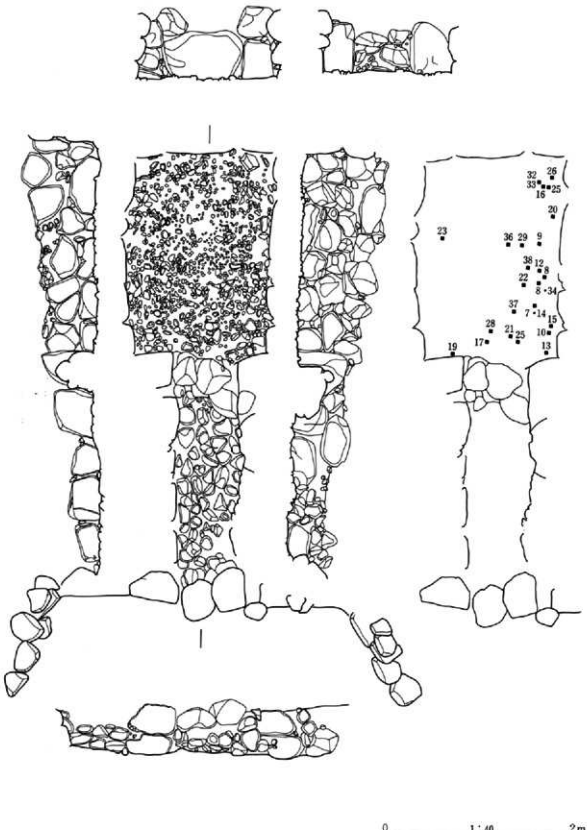
東尾根の南斜面、菅原神社前の17Ｆ～Ｈ－２～５グリットにある。16号、19号古墳とは東西に並らび、19号との間には４号墓道が周堀を東から北西に回り込むようにある。墳丘下には、９号と11号、６世紀後半の２軒の住居跡がある。全体は、神社境内の整地などで削平され、盛土の下にある。

円墳、直径10.50～11ｍ、As-C混黒褐色土が構築面で、同じ混土と暗褐色土、ローム漸移層の混土で盛土をしている。墳輪、葺石はない。周堀は、上幅3.50ｍ、深さ80cmで全周する。

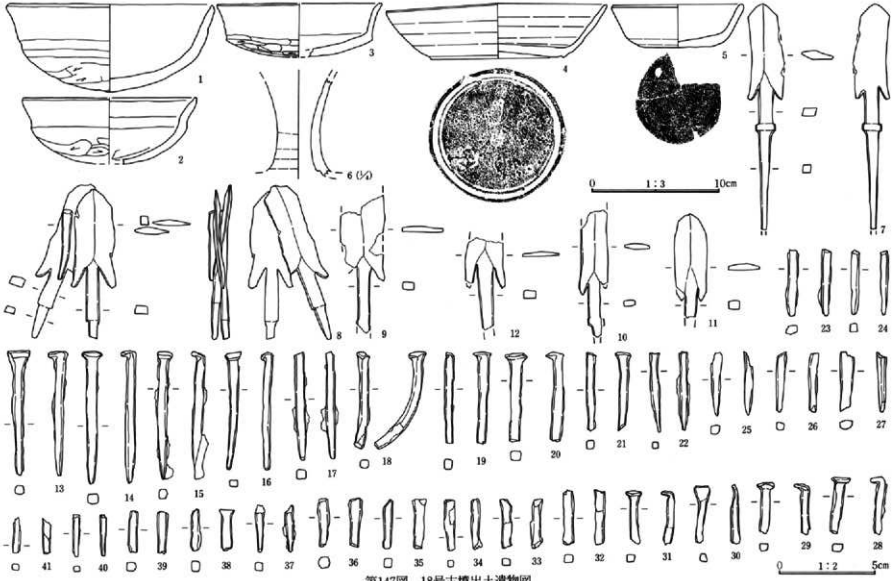
主体部は、南開口Ｓ－27°－Ｗ、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面はローム層で、縦6.10ｍ以上、横2.80ｍ～４ｍの長台形の掘り方の中に作られている。石室全長4.90ｍ、玄室は短冊形で長さ2.20ｍ、幅1.35ｍ、玄門は立柱、高さ52cm、積上げによる閉塞がある。羨道は長さ2.70ｍ、幅75cm、両壁はほぼ平行している。羨門は小口積２段が残る。壁石は50cm大、小口積、裏込めは拳大～卵大の石と砂利を主とする。床面は、小砂利敷きの上に手のひら大の偏平な石を敷いている。前庭は台形、裏込めのない小口積みで３段ほどの石組が残る。遺物は、玄室から鉄鏃６点、釘36点が出土している。鉄鏃は奥壁寄り、釘は右壁側に集中している。追葬を思わせる状態である。時期は、玄室プランの特徴から７世紀前半から中頃と考えられる。



第145図 18号古墳遺構図(1)



第146図　18号古墳遺構図(2)



第147図　18号古墳出土遺物図

A-A'
1・2　As-C混黒褐色土
　　明暗で区分する
3　As-C混暗黒褐色土
4　暗褐色土
5　4層の攪乱

B-B'
1　As-B
2　As-C混暗褐色土　4号墓道覆土　硬化面
3　As-C混暗褐色土
4　暗褐色土
5　As-C混黒褐色土と暗色帯の混土　墳丘盛土
6　As-A混暗褐色土　8号集石覆土
7　As-C混黒褐色土
8　As-C混暗黒褐色土　墳丘盛土
9　As-C混土と暗色帯の混土　墳丘盛土
10　黒褐色土とロームの混土　墳丘盛土
11　暗褐色土と暗色帯の混土　墳丘盛土
12　黒褐色土に暗色帯混入　墳丘盛土
13　ローム主に褐色土混入　墳丘盛土
14　石室床面玉砂利敷

C-C'
1　As-B
2　As-B混暗褐色土
3　As-C混黒褐色土
4　As-C混黒褐色・暗褐色土
5　As-C混暗褐色土とローム
　　漸移層の混土
6　As-A・B混暗褐色土
7　3層とロームの混土
8　As-B・C混暗褐色土
9　As-C混黒褐色土
10　暗褐色土と暗色帯の混土
11　黒褐色土と暗色帯の混土
12　黒褐色土とロームの混土
13　ローム
14　石室床面玉砂利敷

19号古墳よりも新しいが微差である。

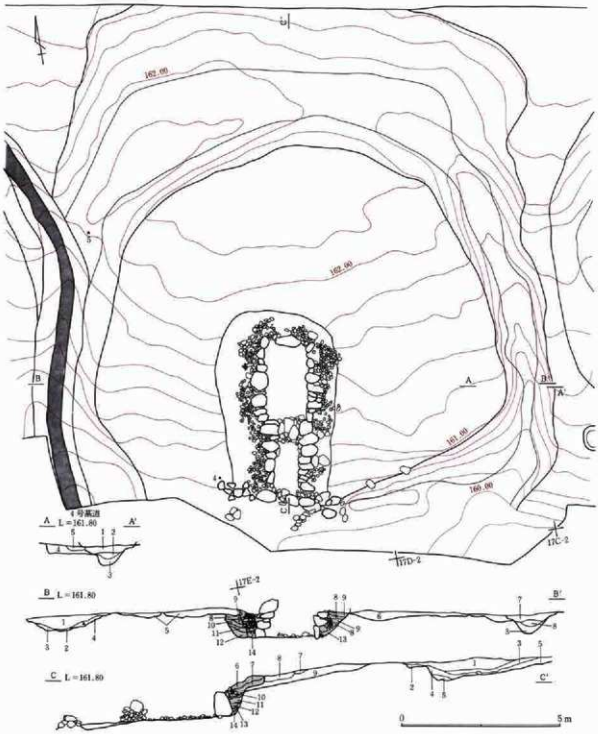
19号古墳（第148～150図　ＰＬ22・23・26・94・100）　箕郷町和田山字天神前228-１　綜覧車郷村漏

東尾根の南斜面、菅原神社前の17Ｂ～Ｅ－２～６グリットにある。16号、18号古墳とは東西に並び、18号との間には４号墓道がある。墳丘下には、６世紀後半の13号住居跡がある。全体は、神社境内の整地などで削平され、盛土の下にある。

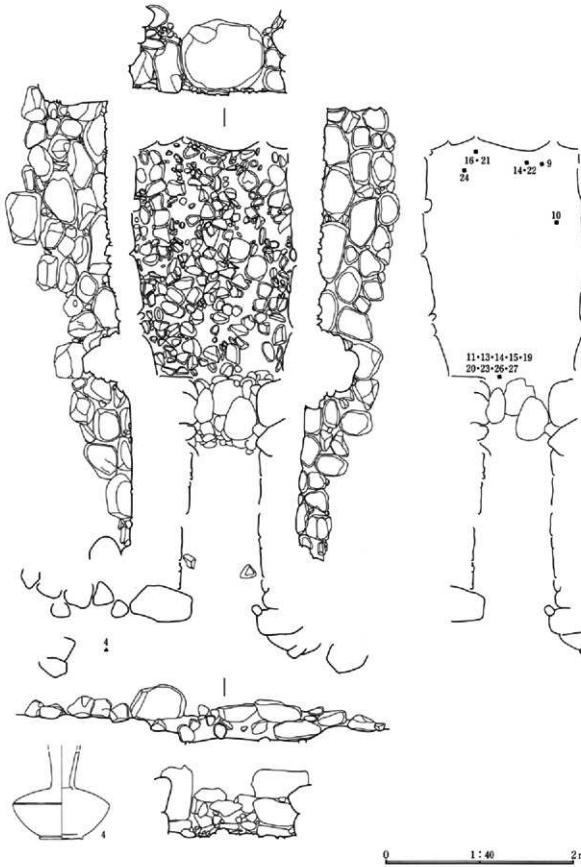
円墳、直径12.40m、As-C混黒褐色土が構築面で、同じ混土とロームによる盛土がある。埴輪、葺石はない。周堀は、上幅2.50m、深さ60cmで全周する。北側が卵形にふくらんでいる。

主体部は、南開口Ｓ－11'－Ｅ、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面はローム層上位、縦６m、横３～3.60mの方台形の掘り方の中に作られている。石室全長５m、玄室は短冊形で長さ2.40m、幅1.30m、玄門は立柱状、奥壁は中央に鏡石、左右に各１石、壁は小口積である。羨道の長さ2.60m、幅80cm、両壁はほぼ平行する。裏込めは、段に合わせたロームと黒褐色土の混土の互層、壁石との間に拳大の玉石を詰め込んでいる。床面は、小砂利敷きの上に手のひら大、偏平な石を敷いている。前庭は台形、裏込めのない小口積み、２段の石組みが残る。

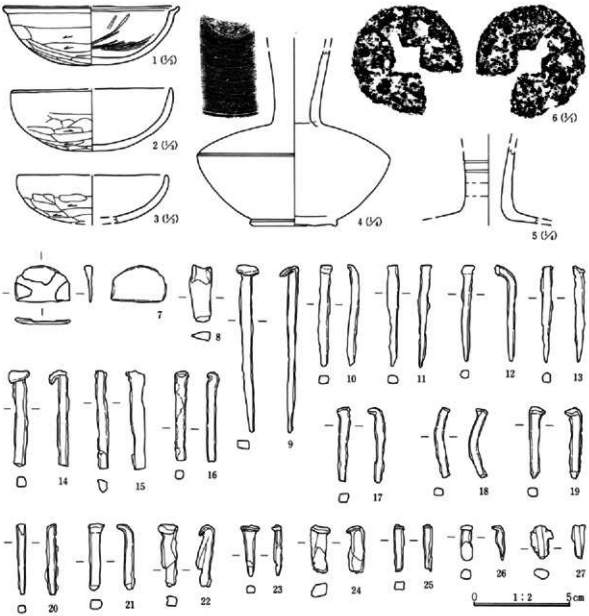
遺物は、玄室で飾金具１点、刀子１点、釘13点、前庭北西隅からは須恵器長頸壺１点、周堀からは住居跡からの混入と思われる高杯が出土している。釘は、長さ３、６、９cm前後で３分類できる。長頸壺は、墓前に供献されたものである。時期は、玄室や長頸壺の特徴から７世紀前半から中頃と考えられる。18号古墳よりも微差ながら古い。



第148図　19号古墳遺構図(1)



第149図　19号古墳遺構図(2)



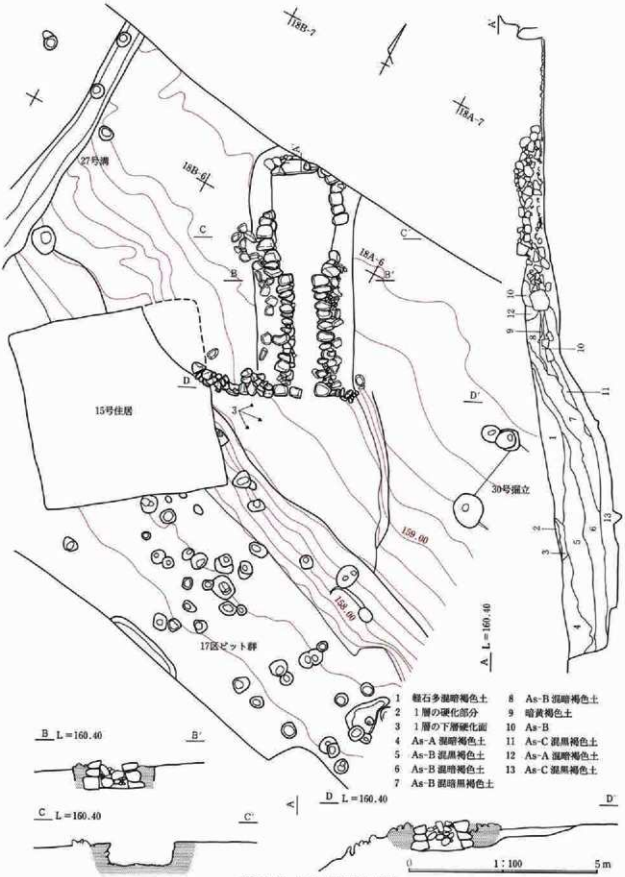
第150図 19号古墳出土遺物図

20号古墳（第151～154図 ＰＬ18・23・94・100） 筑郷町和田山字天神前163-1 綜覧車郷村漏

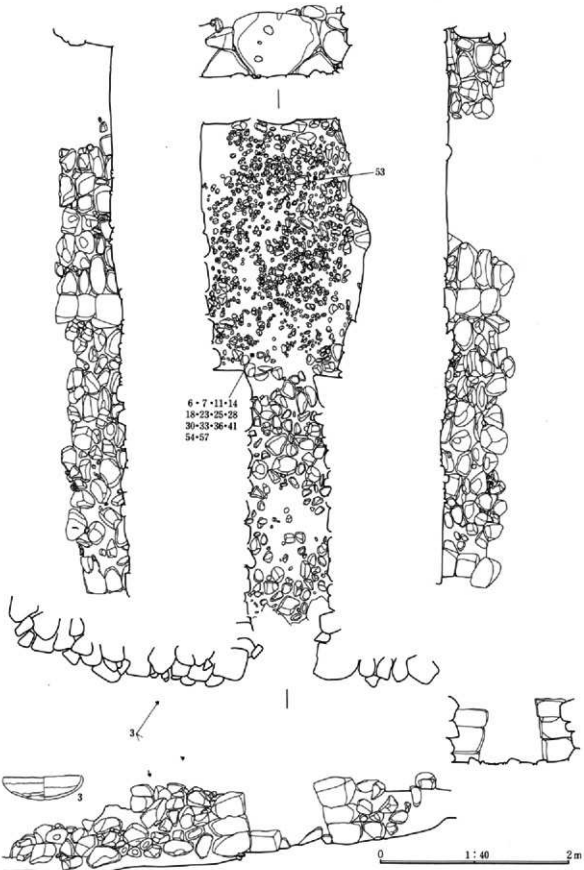
東尾根の南斜面、17ＳＴ４～６、18ＡＢ－４～６グリットにある。９号、21号古墳と東西に並び、15号住居跡の上に作られている。前庭の先端部は、中世寺院に伴う削平段で消失している。また、As-Ｂ降下以前に前庭には多量の石が崩落している様子が観察された。住居とは、わずかに埋没しかけたか築造にあたって埋め戻したかの前後関係である。

円墳、推定直径10m、構築面は、As-Ｃ混黒褐色土が構築面である。墳輪、葺石はない。周堀は、掘り方が浅いのかローム層上面では検出できなかった。

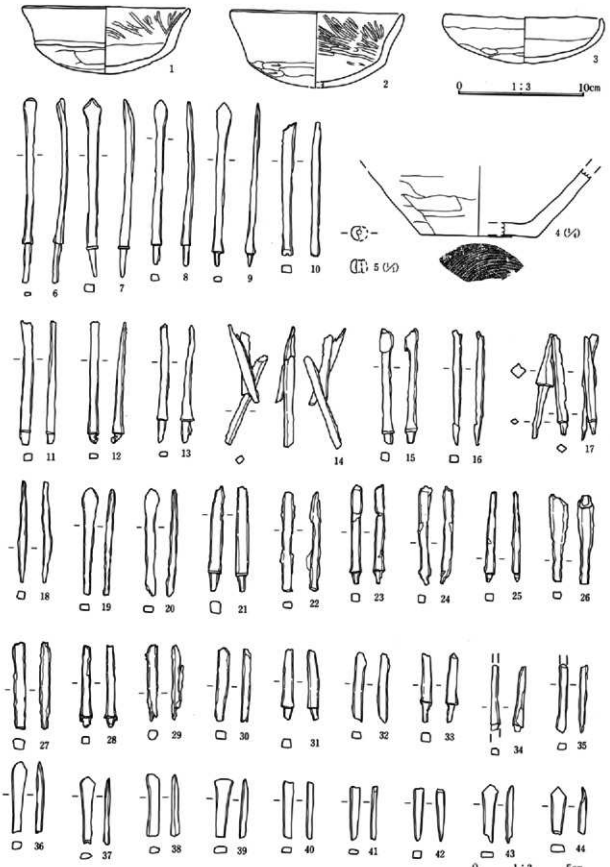
主体部は、南開口Ｓ－28°－Ｗ、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。玄門と羨門に角閃石安山岩を平滑に５面削りした切石を使用している。構築面はローム層中位で、縦6.80m、横2.60mの隅丸長方形の掘り方の中に作られている。石室全長5.83m、玄室の長さ右壁2.73m、左壁2.64m、幅1.43m、玄門は４段が残る。



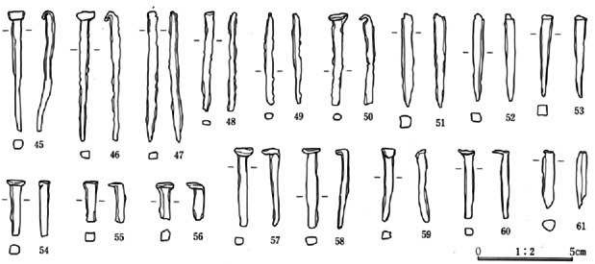
第151図　20号古墳遺構図(1)



第152図　20号古墳遺構図(2)



第153図　20号古墳出土遺物図(1)



第154図 20号古墳出土遺物図(2)

羨道の長さ3.10m、幅87cmで左右の壁はほぼ平行する。全体に石が詰め込まれている。羨門は4段が残る。裏込めは、玄室が厚く羨道にかけて薄くなる。20cm大の石が壁石の根固めとなり、その上にロームと砂利の半ば互層でつき固めている。床面は羨道から玄室まで水平、玉砂利敷きの上に手のひら大の石を一面に敷いている。前庭は台形、裏込めのない小口積、3段の石が残る。

遺物は、玄室から鉄鎌39点以上、北東隅と南西隅の2箇所に分かれて集中、端刃鑿先式など5分類できる。平釘と角釘あわせて釘17点が出土している。時期は、玄室プランや玄門、羨門の特徴から7世紀前半から中頃と考えられる。

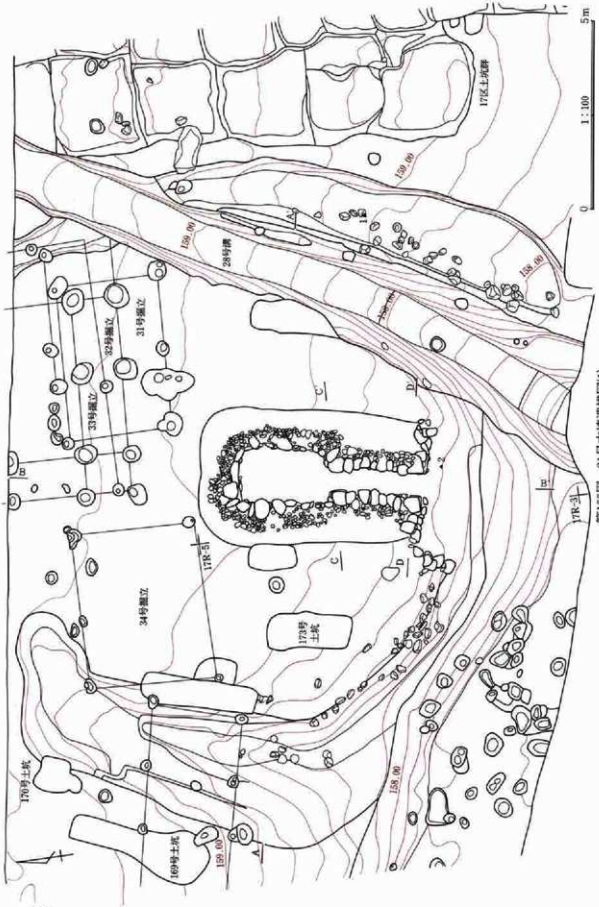
21号古墳（第155～158図 ＰＬ18・24・94・98） 箕郷町和田山字天神前163－1 綜覧東郷村漏

東尾根の南斜面、17Ｐ～Ｓ－3～6グリットにある。9号、20号古墳と東西に並んでいる。全体は、江戸時代の2号屋敷、前庭は中世寺院に伴う階平段でそれぞれ削平されている。

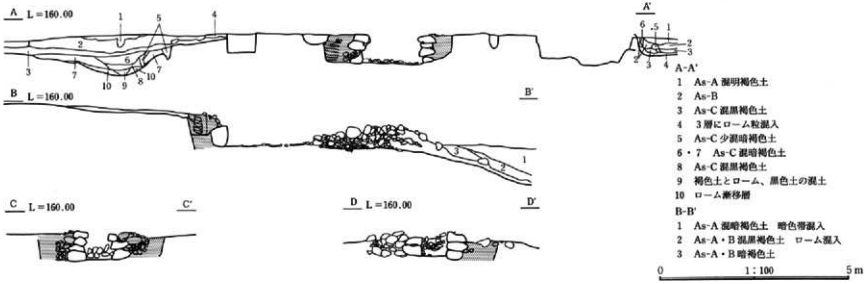
円墳、直径12m、As-C混黒褐色土を構築面とし、黒褐色土とローム、暗褐色土との混土で盛土をしている。埴輪はなく、前庭から西側墳丘にかけて葺石がめぐる。上幅2.40m、深さ50cmの周堀がめぐり、北側が途切れている。

主体部は、南開口Ｓ－10°－Ｅ、河原石乱石積両袖型横穴式石室である。玄門、羨門に角閃石安山岩を平滑に5面削りした切石が使用されている。構築面は、ローム層上位で縦5.48m、横3.72mの方台形の掘り方の中に作られている。根石列の箇所が溝状に一段深くなる。西壁には、作業用と思われるピット2本がある。石室全長4.80m、玄室の長さ2.40m、幅1.40m、玄門は4段が残る。羨道は両壁がほぼ平行し長さ1.40m、幅70～75cm、羨門は4段が残る。裏込めは、拳大ほどの石が壁の裏に詰め込まれ、掘り方との間をロームと黒褐色土で半ば互層につき固められている。床面は、羨道から玄室までは水平、小砂利敷きの上に手のひら大の石を一面に敷いている。前庭は台形、裏込めのない小口積で3段ほどある。

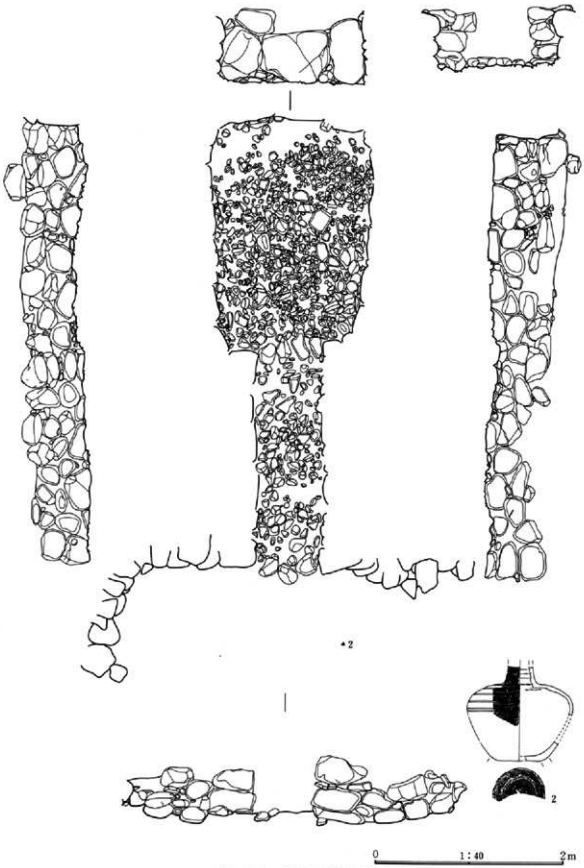
遺物は、玄室から釘10点、前庭の左羨門前から土師器杯1点が出土している。杯は墓前に供献されたものである。時期は、玄室プランと玄門、羨門の特徴から7世紀前半から中頃と考えられる。



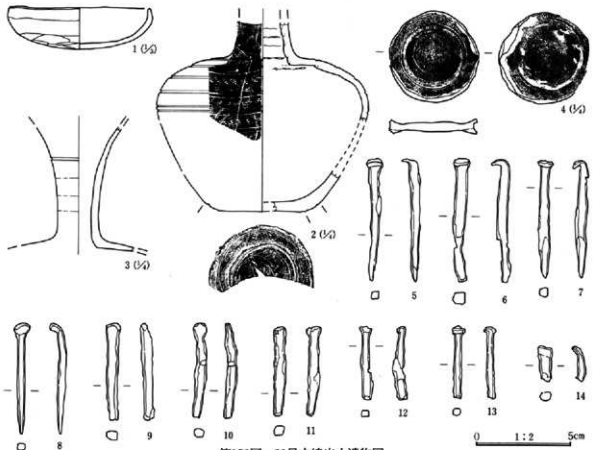
第155図　21号古墳遺構図(1)



第156図 21号古墳遺構図(2)



第157図　21号古墳遺構図(3)



第158図　21号古墳出土遺物図

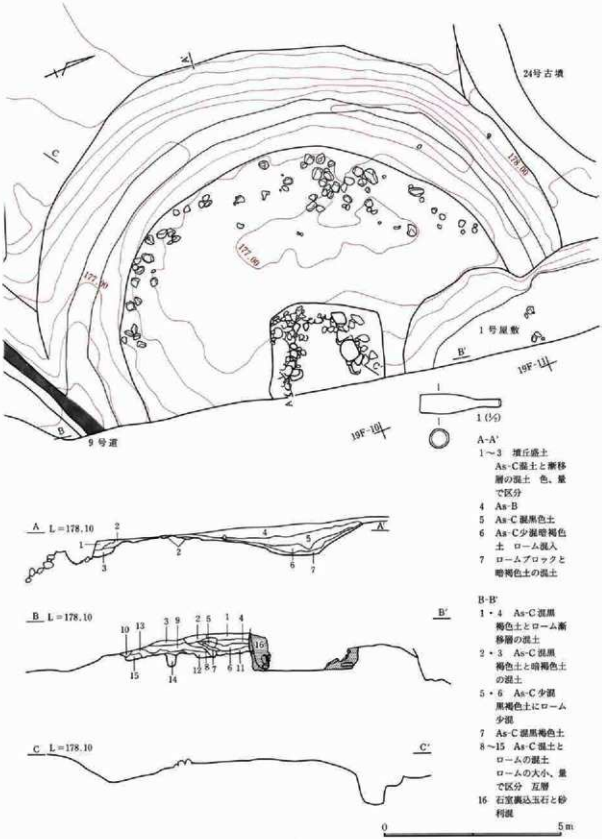
22号古墳（第159・160図　ＰＬ10・24・98）　箕郷町和田山字地蔵堂439　綜覧車郷村漏

中央尾根の頂上部東肩口、19ＦＧ－８～11グリットにある。５号、23号古墳と縦列して並んでいる。

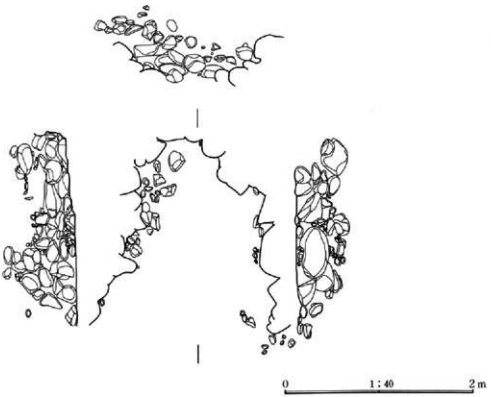
円墳、直径11.5m、東半分は、江戸時代の１号屋敷の造成で削平、主体部も玄室半分を残す程度である。その後も宅地造成で上面が整地されている。墳丘は、ローム漸移層上面まで削平して盛土をしている。主にAs-C混黒褐色土とロームの混土で厚さ10cm前後の互層をなす。地形勾配をいかして東を厚く盛り付け、西が薄い。葺石は、基壇部分に人頭大の角閃石安山岩がめぐっている。まばらな残存状態ながら、全周していたものと推定される。周堀は、幅2.20～2.40m、深さ１m前後である。

主体部は、東開口Ｅ－２'－Ｓ、角閃石安山岩乱石積横穴式石室である。両袖型と推定されるが、横石が１段しかも３石しかなく断定できない。壁石から、玄室の長さ２m、幅１m前後が復元できる。構築面は、墳丘盛土からローム層まで掘り込み、縦2.70m以上、横3.32m、長方形の掘り方の中に作られている。特徴として、壁、控積、裏込のほとんどが軽石であること。控積が厚いこと。互目通小口積を基本とし、右壁では二重にめぐる。掘り方の壁際に拳大の円礫が、壁石の裏には人頭大以上の控積が充塡されている。壁石は、小口等の一部にハツリ痕がある。床面は、ローム層を削り込んだ上に径１～３cmの玉砂利を敷き、拳大の軽石をその上に重ねる。

遺物は、北から北西の周堀で葺石に混じって埴輪が出土している。４号、24号古墳からの流れ込みである。石室からは、１号屋敷に伴う江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器が出土している。報告から除外した人骨１点が、攪乱された床面で出土している。時期は、立地、主要な石材が軽石であることの２点から、５号、23号と一群をなす７世紀前半代と考えられる。



第159図　22号古墳遺構図(1)・遺物図



第160図　22号古墳遺構図(2)

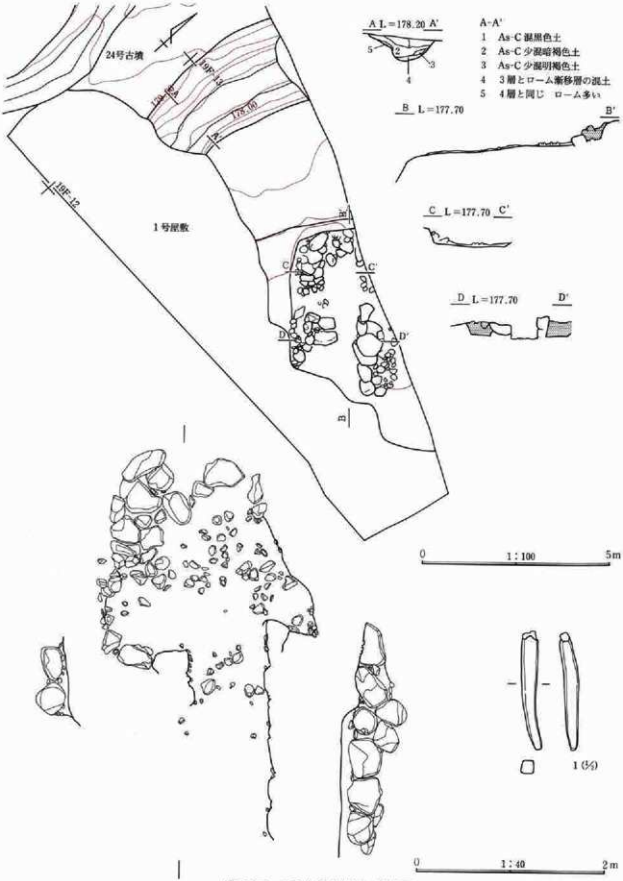
23号古墳（第161図　ＰＬ10・25・98）　箕郷町和田山字地蔵堂451-13　綜覧不明

中央尾根の頂上東肩口、19Ｃ～Ｆ－12・13グリットにある。５号、22号古墳と縦列して並んでいる。

円墳、直径10m、東半分が江戸時代の１号屋敷で削平、主体部も羨道部が消失している。石も屋敷の造成で大半が抜かれている。墳丘は、旧地表面のAs-C混黒褐色土に盛土をしているらしいが耕作で削平されている。盛土は、周堀覆土の様子から22号と同様な状態と考えられる。周堀は、上幅1.20m、深さ70cmで底面には墳丘盛土を思わせるローム多混土がみられる。

主体部は、東開口Ｅ－40'－Ｓ、角閃石安山岩乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、旧地表のAs-C混黒褐色土からローム層まで掘り込んで縦5.16m以上、横2.80m以上、長方形の掘り方の中に作られている。根石１段分を残す程度であるが、全長４m以上のうち、玄室の長さ2.20m、幅が奥壁で80cm、玄門で71cmである。特徴として、壁、控積、裏込めのほとんどが軽石を使い、奥壁とほか数石が輝石安山岩である。控積は、厚く大きく左壁が右の２倍近くある。山側が薄く、谷地側を厚くしたものと考えられる。壁石は小口積で、玄門付近のものに割石が使われ、残る中にもハツリ痕がみられる。ハツリは刃幅９cm以上、一本調子で規則的な列をなすものと左右扇形に振り分ける２種類がある。床面は、ローム層直上に５～15cmの軽石円礫を敷き、玉砂利を薄く重ねる。

遺物は、１号屋敷に伴う陶磁器が石室内から出土している。周堀上層には、24号古墳から流れ込んだ埴輪がある。時期は、玄室プランや主要石材の特徴から７世紀前半と考えられる。



第161図　23号古墳遺構図・遺物図

24号古墳（第162～166図　ＰＬ10・25・95・96・98）　箕郷町和田山字地蔵堂451-14、18　綜覧不明

中央尾根の頂上平坦面、19Ｆ～Ｈ－11～13グリットにある。３号、４号、25号と空地を囲むようになる。墳丘の北側にかかって１号方形周溝墓がある。

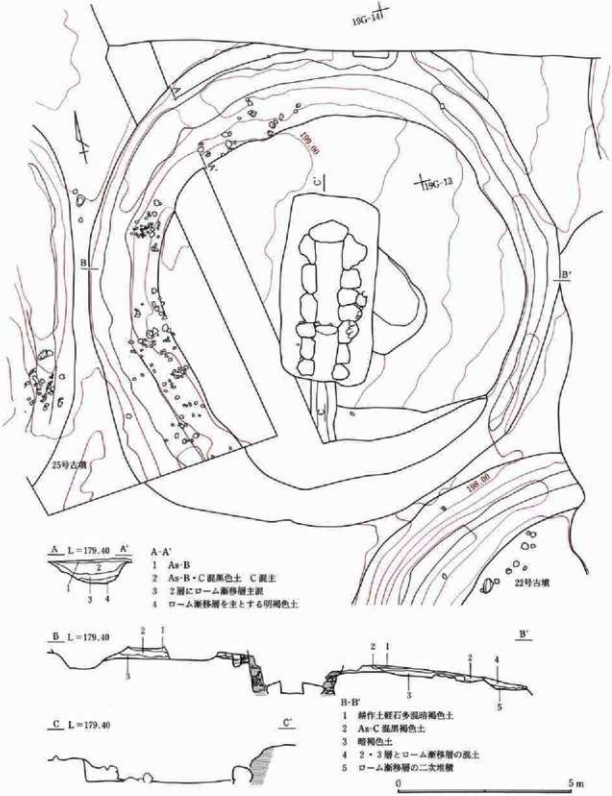
円墳、直径11m、構築面は、旧地表のAs-C混黒褐色土中にあり、As-C混黒褐色土とローム漸移層の混土の盛土がわずかに残る。盛土は、石室の西では整地面の上にのるのに対して、下り勾配の東は地表面に直接のせられていた。本来は壁３段前後残っていたものが、宅地造成で大きく削平されている。周堀は、上幅2.20m、深さ70cm前後で全周する。

主体部は、南開口Ｓ－13°－Ｅ、自然石乱石積両袖型横穴式石室である。構築面は、盛土上からローム層まで掘り込み縦5.30m、横2.60m、長方形の掘り方の中に作られている。この外側に作業用と思われる、盛土を切る対のピットが検出されている。石室全長3.90m、玄室は短冊形、右壁が奥壁とほぼ直角なのに対して、左壁がわずかに鋭角となる。構築の基準が右にあったためと考えられる。長さ2.50m、幅奥壁で80cm、玄門で60cm、奥壁は鏡石が１段残る。鏡石上面に２段目との安定をとるため、円形の調整用敲打痕がある。壁は右４石、左３石、裏込めは、左壁では卵大から人頭の軽石をつめ、隙間に砂利多混のロームを詰め込んでいる。一方の右壁では、人頭大の軽石が多いという違いをみせている。構築順序との関係と思われる。玄門には、厚さ22cm、高さ23cmの扉石がある。羨門は石に差がなく、奥壁は鏡石１段が残る。床面は、ローム層上に１～５cmの軽石を厚さ５cm強で敷き、その上に手のひら大の石を一面に敷いている。墓道は幅70cm、羨道部と70cmの段差差がある。素掘りである。

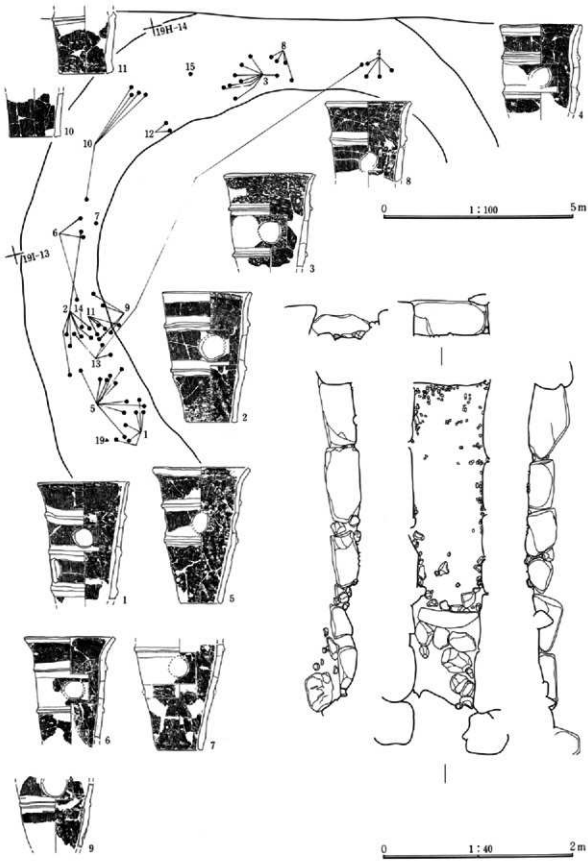
遺物は、玄室から型式不明の鉄鏃２点、釘２点が出土している。攪乱を受けており、本来の組成ではない。周堀からは、墳丘から崩落した状態で円筒埴輪、須恵器の甕が出土している。宅地造成で墳丘のほとんどを削平したが、埴輪の多くはそれ以前に崩落している。西半分に多く、東側では少ない。これは、配列の状態を反映しているものと思われ、円筒は数本おきの間隔で並び、形象は削平が深い東側の限られた一角に立てられ、個体数も少ないのではないかと推定させる。

時期は、玄室プランや遺物の特徴から25号古墳に後続する６世紀後半と考えられる。２５号古墳とは、玄室プランや円筒埴輪の特徴で共通点がある。しかも、周堀の覆土に差がなく、同世代の微差での前後関係と思われる。

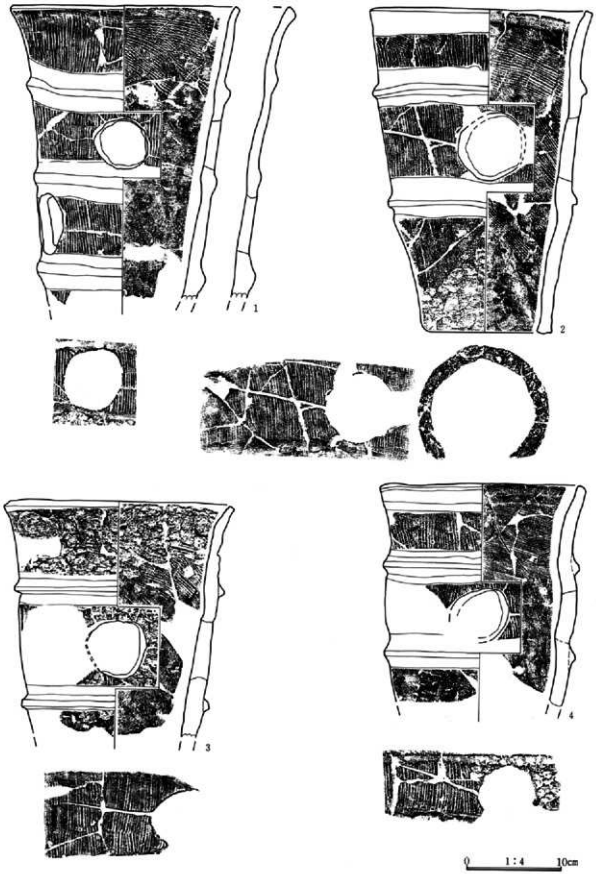
埴輪　円筒のみ図示したが、未報告の中には形象もある。同筒は、25号古墳と胎土、色調、凸帯の形状やなでつけの調整、ハケの特徴でよくにている。朝顔はない。赤褐色、比較的精選された胎土で結晶質片岩粒が混入している。全体に統一感のあることが特徴で、法量でも高さ35cm、口径23cm前後、底径14cm前後に集中している。成形では、第１段をハケ調整後、あらためて縦にヘラケズリをしている。これが24号古墳にのみみられる大きな特徴でもある。凸帯は、２条と３条のものがある。ハケ調整後に貼付され、ほとんどが台形である。稜は、比較的はっきりしている。透孔は円形、３条凸帯では２段にある。その左右のいずれかに１本線のカマ記しがある。比率としては高い。ハケは、１cmあたり４本と５～６本の太めのものと、７本以上で細いものまで３分類できる。調整としては、密に施され丁寧な状態である。内面は、縦に指ナデ後、２段目以上に主にナナメ方向にハケが１～２段に施されている。



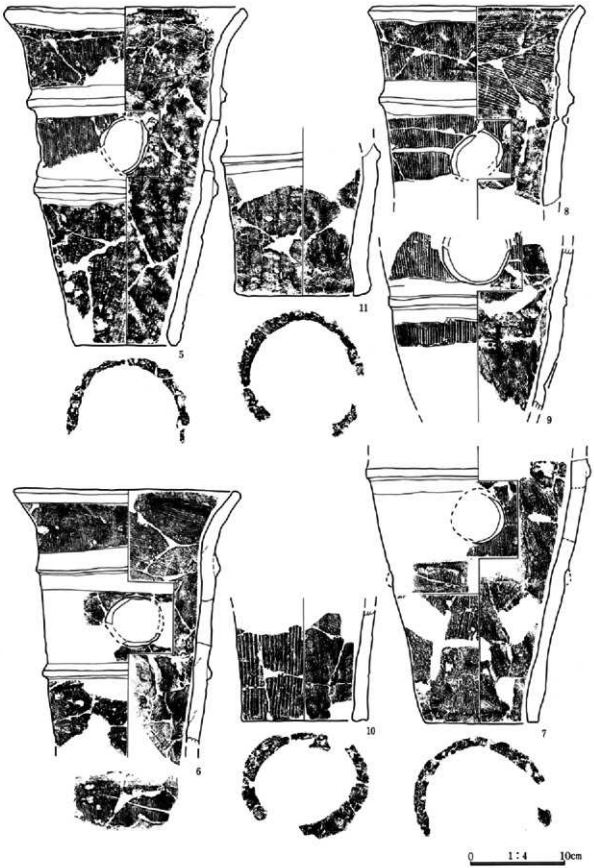
第162図　24号古墳遺構図(1)



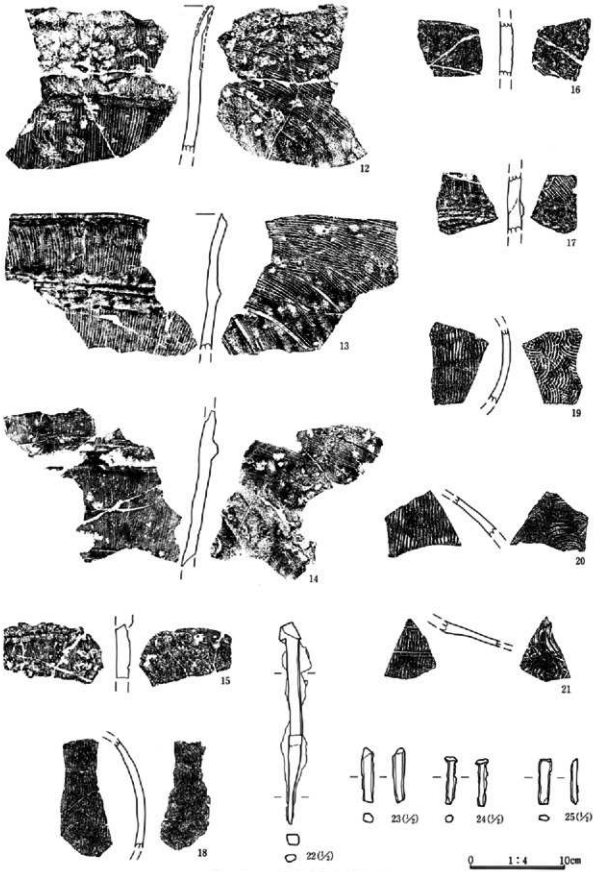
第163図　24号古墳遺構図(2)



第164図　24号古墳出土遺物図(1)



第165図 24号古墳出土遺物図(2)



第166図　24号古墳出土遺物図(3)

25号古墳（第167～172図　ＰＬ10・25・26・96～98）　箕郷町和田山字地蔵堂451-14　綜覧不明

中央尾根の頂上平坦面、191～Ｌ－11～14グリッドにある。３号、４号、24号と群をなし中央の空き地を囲むようにある。昭和53年の町道改良工事で、墳丘の西側が削平されている。その後、宅地造成で壁１段を残して全体が削平されている。宅地の擁壁裏込めには壁や天井の石が使用され、駐車場には円筒埴輪の列があったとのことである。昭和50年代前半まで、古墳らしい景観を残していたようである。

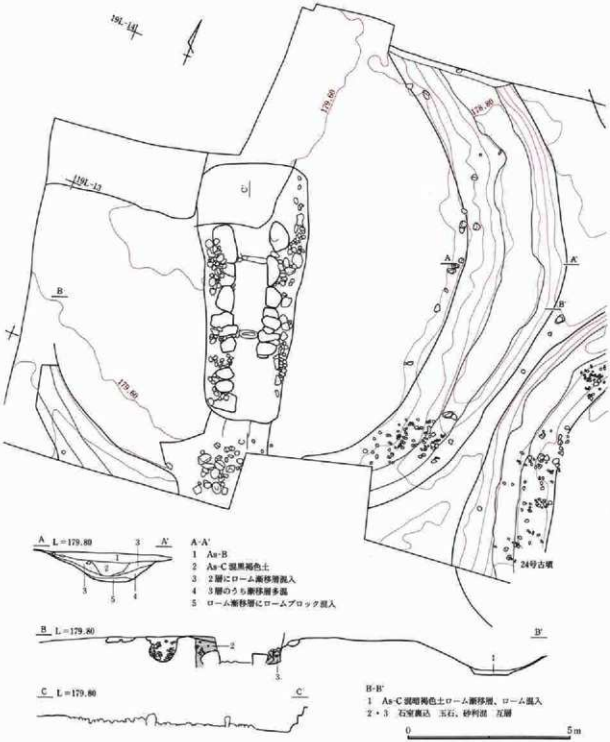
円墳、直径13m、As-C混黒褐色土上にあり、ロームなどとの混土で盛土をしている。葺石が点々と残る。Ａｓ－Ｂ下の周堀上層で円筒埴輪が多く出土している。周堀は、上幅３m前後、深さ90～110cmで全周する。

主体部は、南開口Ｓ－20°－Ｗ、自然石両袖型横穴式石室である。構築面はローム層中位、縦7.86m、横2.40～3.40mの方台形の掘り方である。構築順序は、掘り方の中にロームと黒褐色土の混土を固く締めて版築状にする。壁石を置き、裏込めと控積を造作する。１段ごとに高さをそろえて版築状の裏込めを造作。２段目以降、これを繰り返すことがわかる。

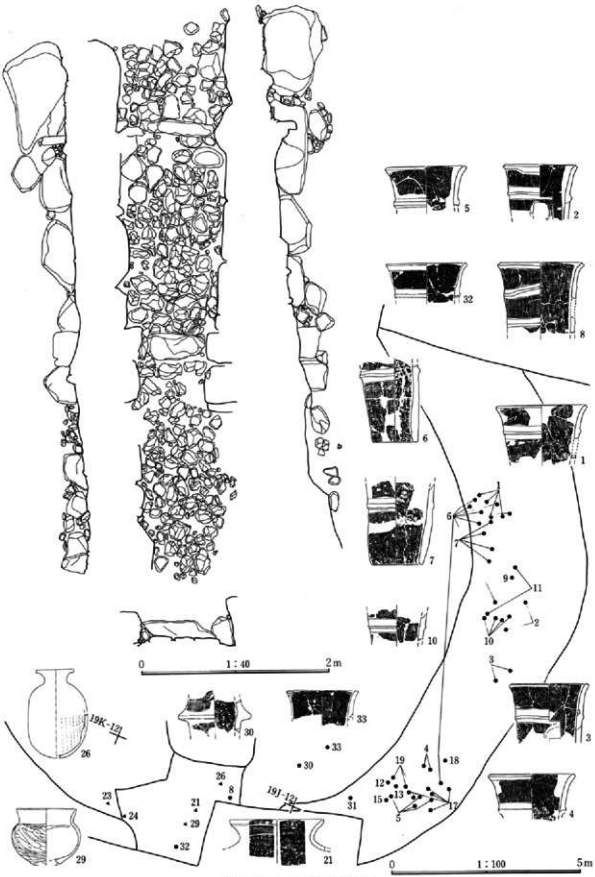
石室は羨道、前・後２室の玄室からなり、壁の奥１石分と奥壁が抜き取られている。石室全長６m以上、掘り方からみて推定７m前後である。玄室は短冊形、長さ推定4.60mで2.30m前後で２室に分けられる。幅は前室が97cm、後室がわずかに広く105cmある。玄室が横置き、玄門から羨門までが小口積みである。玄門は、小口積みで内側に15cmもち送りして区別する。扉石は、玄門に上からクサビ状に差し込んだもので厚さ24cm、高さ36cmである。前・後室は、厚さ20cm、高さ30cmの扉石で仕切られている。羨道は長さ2.60m、幅60cmで両壁はほぼ平行している。羨門は、玄門同様に内側に10cmもち送りをして区別する。裏込めは、軽石と山石を半々か軽石がやや多い程度に充塡、玄室側では大振りの石で控えをとり隙間に拳大の石を詰め込んでいる。床面は羨道から玄室まで水平、玉砂利層の上に手のひら大の河原石を並べている。羨門の箇所だけ縦軸である。閉塞は、人頭大の山石を前庭側から積み重ねている。墓道は、上幅２m、路幅80cm、羨道とは10cmの段差がある。

遺物は、玄室からは同丸広鋒三角腸抉式鉄鏃１点、釘１点が出土している。東周堀から円筒と馬、人物と思われる形象埴輪が出土、前庭からは須恵器の甕が出土している。出土状態からは、24号古墳とは逆に東側に円筒類が多く、西側に形象埴輪が配置されたようである。時期は、玄室や遺物の特徴から６世紀後半と考えられる。24古墳とは、墓道につながる空閑地を共有してわずかな時差である。

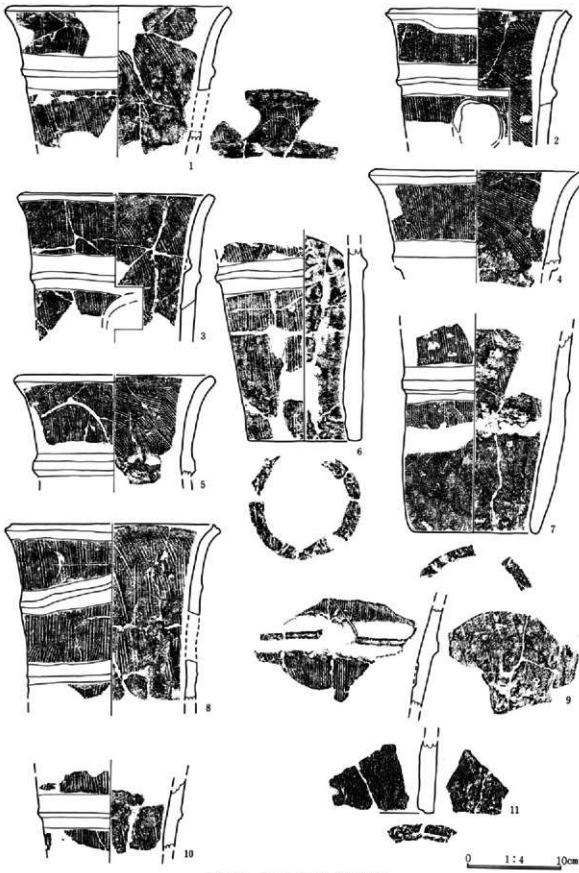
埴輪　組成は、昭和53年度町道改修工事の際に出土したものを加えると、朝顔を含む同筒、家、馬、人物がある。全体に胎土が成形に統一感があり、24号古墳とも近い特徴をもっている。肉眼的には、供給元を同じくするような類似点である。同筒は、形状で口縁がやや外反するものと直立気味のものとに分けられる。口径では23cm、21cm前後、高さは35cm前後と推定される。胎土は、赤褐色、精選された結晶質片岩粒が混入している。成形では、第１段の基底部にハケ調整をかねて板状のたたきがみられる。７や11を代表例とする。凸帯は、２条でＭ型である。ハケ調整の後に貼付され、稜線がはっきりしたものが多い。透孔は円形。カマ記しは、２段目と３段目とがあり半円形、横一線、斜線の３種類である。比率としては、24古墳同様に高い。ハケは、１cmあたり４と５本とに分けられる。丁寧に密に施されている。内面は、縦の指ナデ調整後に２段目と３段目にかけて縦とナナメの方向にハケが施されている。馬は、町道改修分を含めると２個体がある。胴体部分と鞍前輪や帯金具がある。人物は、男子と女子がある。20は、玉をつけた首の部分である。町道改修分では、男子の像が出土している。



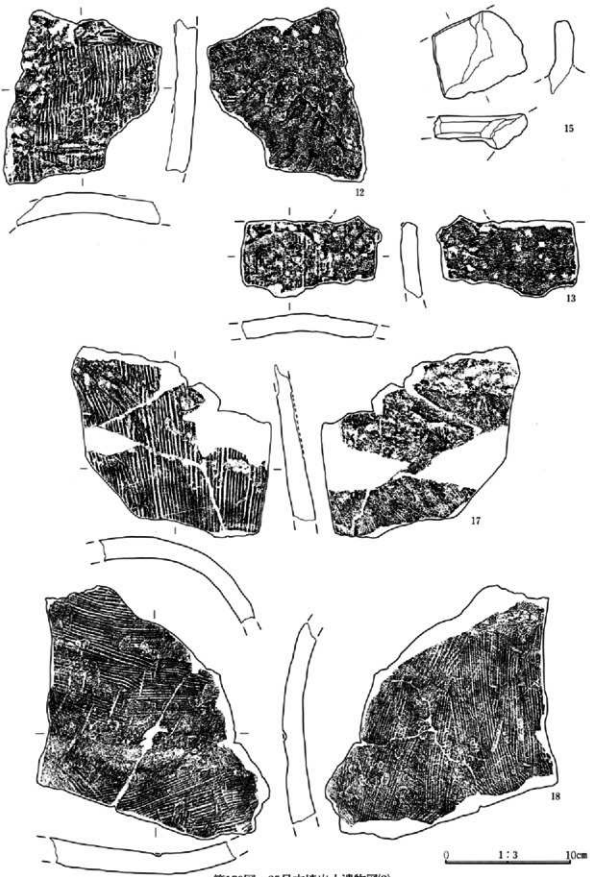
第167図　25号古墳遺構図(1)



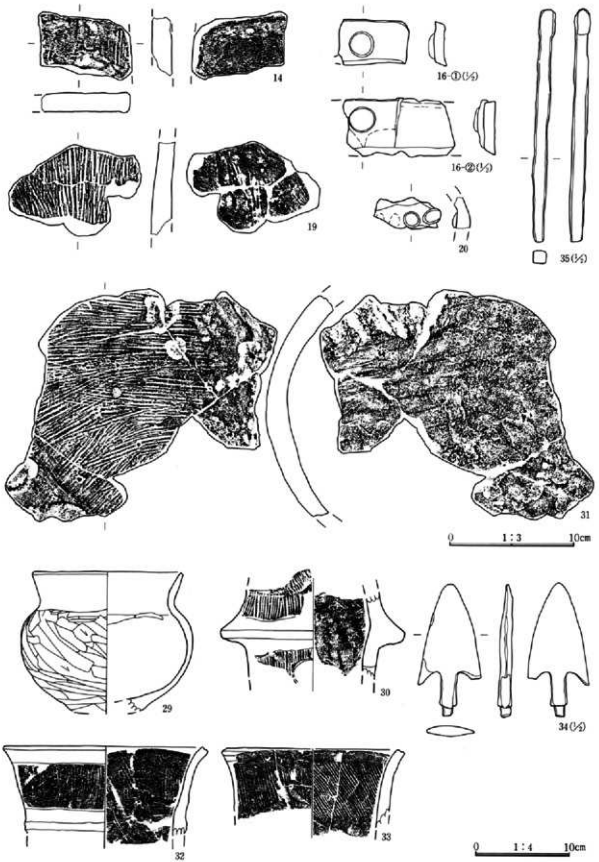
第168図　25号古墳遺構図(2)



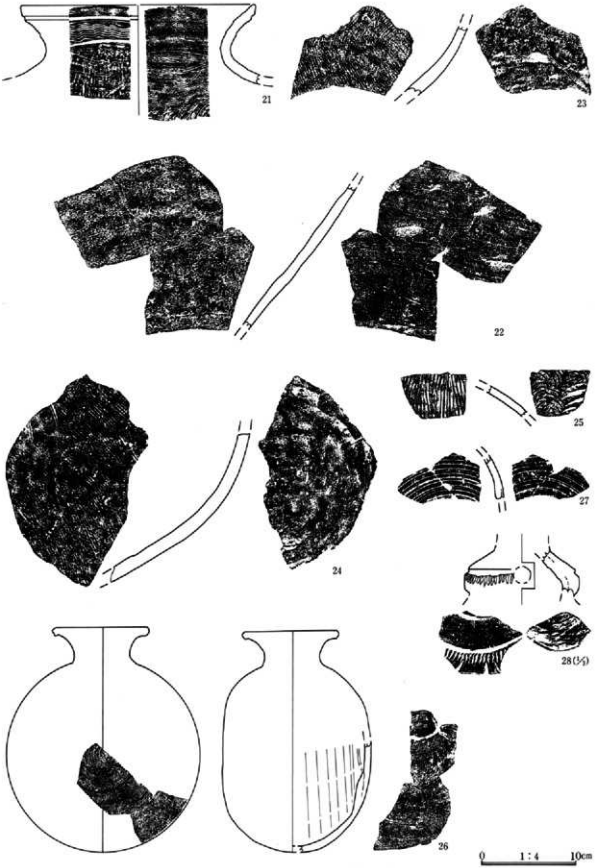
第169図　25号古墳出土遺物図(1)



第170図 25号古墳出土遺物図(2)



第171図　25号古墳出土遺物図(3)



第172図 25号古墳出土遺物図(4)

26号古墳　箕郷町和田山字地蔵堂451-17、23、24、25　綜覧不明

中央尾根の頂上部、19ＨＩ―14グリットにある。24号、25号古墳の北側で、円墳周堀の一部が検出されたものである。幅２ｍ、断面椀形の深さ90cmで、周囲にある古墳と同じくしっかりした掘り方で全周すると考えられる。遺物は、覆土に混入して縄文時代前期黒浜式土器が出土しただけで、葺石、埴輪の有無については不明である。

5　墓　道

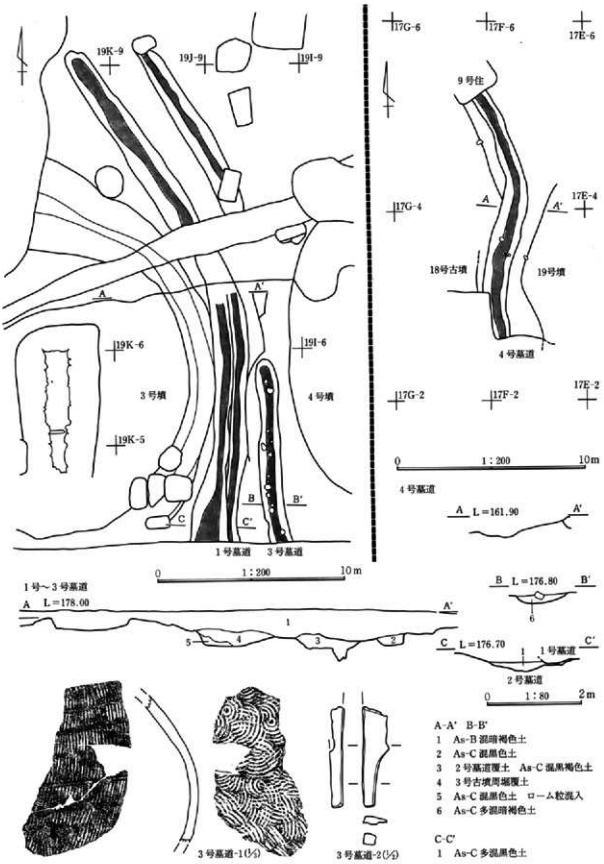
1号～3号墓道（第173図　ＰＬ10・26・145・151）

中央尾根の頂上部、19ＩＪ－４～６グリットにある。３号古墳、４号古墳の間を南北に縦走し、24号・25号古墳の前までつなぐかたちで検出された。遺存状態や位置からして、さらに南につづき尾根の頂上中央部を南北に貫いていた幹道と推定される。旧地表面であるAs-C混黒褐色土からローム層上面まで掘り込み、平坦で硬化した状態が一様に認められた。１号が上幅0.70m、ローム面からの深さ30cm、直接As-Bで覆われている。２号が上幅1.20～1.40m、ローム面からの深さ20cm、一部が３号古墳東周堀と重複している。３号が上幅1.10～1.50m、深さ28cmである。路幅はおおよそ50cm前後で一定している。覆土は、上にAs-Bの純層があり、硬化面との間に薄く暗褐色土がみられた。新旧関係は、２号→１号、３号である。２号と１号が造り替え、３号がわずかな時差でそれに続くものと考えられる。３号で、須恵器甕、埴輪が出土したが４号古墳の出土物と同一個体で一部は接合する。時期は、As-B層以下に厚さや埋没状態に違いがみられたり古墳との重複がみられるが、古墳群に伴う作薬用や墓参のための道と判断される。

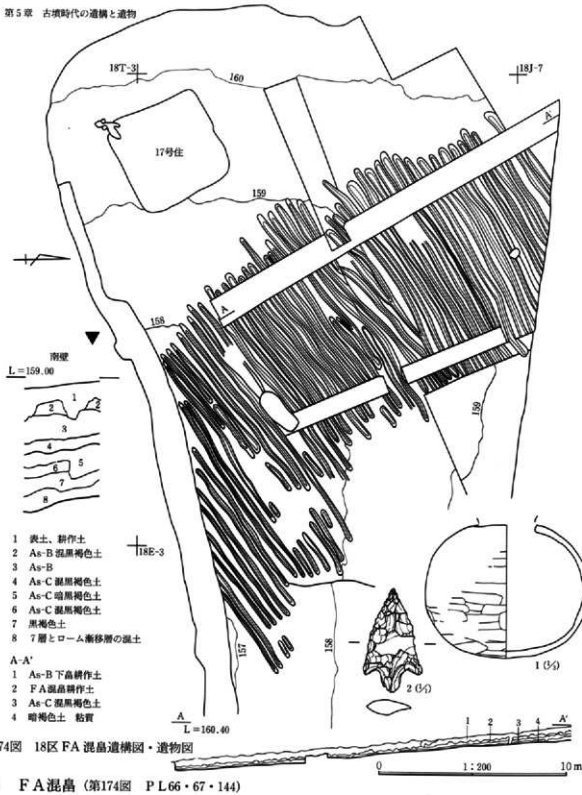
4号墓道（第173図　ＰＬ26）

東尾根、17ＥＦ－２～４グリットにある。18号古墳と19号古墳の間を南北にぬけて、西にまがり９号住居の上を通過する。さらに、尾根の西へと向かうものと推定される。尾根基部を縦走する幹道から枝分かれした支線と推定される。19区の尾根にある１号～３号墓道と同様に旧地表面のAs-C混黒褐色土からローム上層まで掘り込み、平坦な硬化した面の状態が認められた。幅2.60m、断面は外反する椀形で深さは40cm、路幅40cmである。19区のものと比較して、掘り込みや断面の形状を知ることができる。時期を特定する遺物はないが、古墳の周堀をさけて作られていること、覆土の堆積状態から古墳時代の道と判断する。

第５章　参考文献
「群馬県史」資料編３　原始古代３　古墳　群馬県史編さん委　1981
「箕郷町誌」箕郷町誌編さん委　1975
後藤守一　「上古時代鉄鏃の年代研究」人類学雑誌第54巻　第４号　1939
津野　仁「古代・中世の鉄鏃」物質文化54　1990
群馬県古墳時代研究会　「群馬県内の横穴式石室Ⅰ（西毛編）」1998
群馬県埋蔵文化財調査事業団　「神保下瓶遺跡」1992
群馬県埋蔵文化財調査事業団　「奥原古墳群」1983



第173図 1～4号墓道遺構図・遺物図



第174図　18区FA混畠遺構図・遺物図

6　FA混畠（第174図　PL66・67・144）

中央尾根と東尾根の谷あい、18D～K－3～7グリットにある。15号、17号住居に付随する畠である。As-B下の畠とは、上下の位置関係にあるが継続性はない。9号古墳の盛土には、FA混黒褐色土が使われていることから住居と同じく墓域の拡大に伴って廃棄されたものと考えられる。範囲は、東西20m、南北27mで、南の調査区域外に続いている。畝の方向は、N－45°－W、2時期以上の重複があるものの畝間50cmと狭いのが特徴である。植物珪酸体分析では、イネ科は検出されていない（第12章科学分析参照）。

第6章　平安時代の遺構と遺物

1　概　　要

榛名白川の東には、一面に水田が広がっていた時代である。対岸の下芝上田屋遺跡はそのひとつで、そこからのびる水田は和田山の尾根を取り巻くように広がっていたと思われる。古墳時代には、尾根が前期以来墓域となり、谷地はそれを支える生産や居住の場であった。この時代でも、谷地ではこれを踏襲したような動きである。

18区では、尾根のふところ、谷頭から16号、18号の竪穴住居跡2軒、As-B下畠、馬が埋葬された土坑1基が重複して検出されている。集落としては一部であるが、重複の状況からおおよそ9世紀後半代に始まり、その後は11世紀代に居住域から畠へと転換し、そして天仁元年の浅間山噴火による畠の廃棄という変遷を知ることができる。それ以前には、古墳の前庭部や周堀で8世紀代の杯や短頸壺などが出土している。墓域としての意識が残っていたのであろうか、尾根は依然として墓地として利用されたようである。その中で、居住域から畠への転換とその廃棄が画期である。集落としては、南の尾根沿いに中心があると考えられる。水のある谷頭というのが占地の要因であろう。

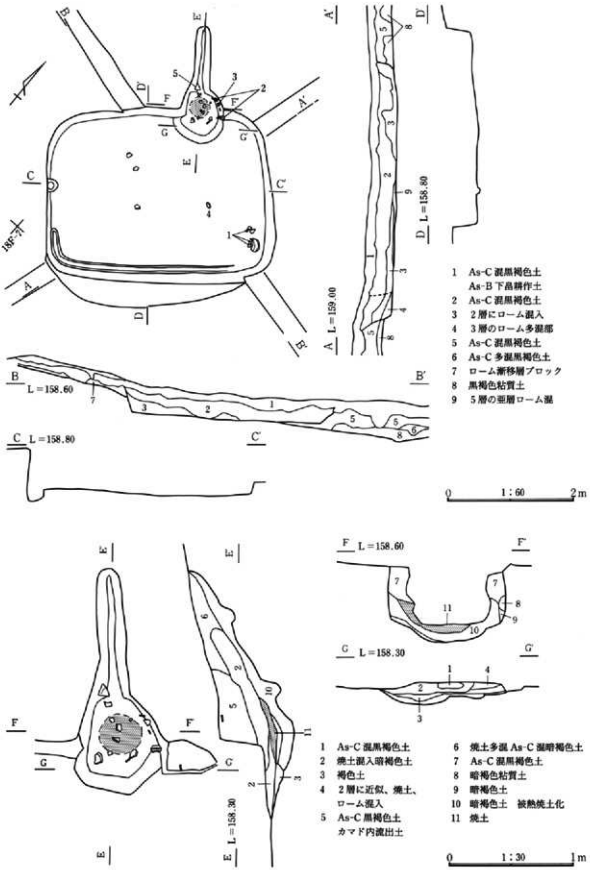
20区の谷地では、土坑が1基だけ検出されている。中央の尾根を越して唯一の遺構である。畠の適地と思われたが、東側にくらべて水が乏しいために開墾が一歩遅れたようである。

畠は、古墳時代のものにほぼ重複して検出された。植物珪酸体分析からは、稲作の可能性が指摘されている。広域にひろがる水田からみれば、尾根の縁辺部に限定されたような畠と考えられる。平野から山麓への開墾意欲をのぞかせる遺構である。

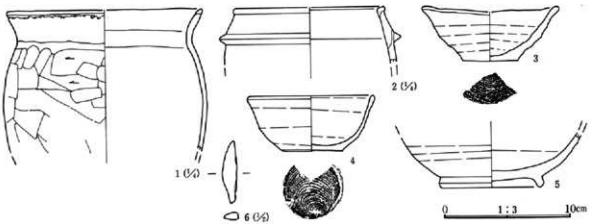
2　竪穴住居跡

16号住居跡（第175・176図　ＰＬ9・97・148）

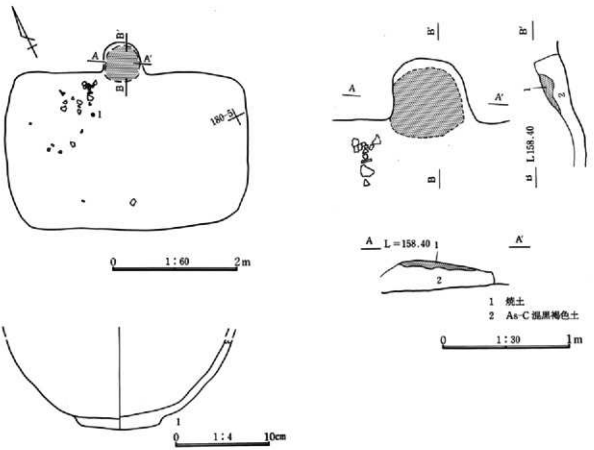
18区ＥＦ－6・7グリットにあり、As-B下畠の耕作土を取り除いたところで検出された。すでに耕作土の上面が窪んでいたことから、周堤帯を想定してトレンチを設定、調査を進めたが確定できなかった。畠の耕作で削平されたものと考えられる。隅丸方形としたが、南辺側は埋土と地山との区別がむずかしく広がる要素もある。その根拠が、南辺側の外周にみられる弧状の段差である。規模は、南西辺で3.60m、北西辺で2.70mである。主軸方向は北西辺でＮ－132°－Ｗ、地形勾配には斜交している。谷地側に入口を設けたためであろう。主柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。唯一、北西辺の中央部で浅いピットが検出されている。長軸線上にあたり、主柱穴の可能性をもっている。周溝は南西辺から南西隅にかけてめぐり、プランについての判断した根拠でもある。幅10cm、深さ5cmと形状も一定している。埋土は、北側から流入したAs-C混黒褐色土で自然埋没している。残壁高は50cm、直立気味である。床面は、ローム漸移層まで掘り込んで平坦にしている。南へわずかに傾斜している。かまどの焚口から住居中央部にかけて、硬化面がみられる。床下に掘り方はない。かまどは、北東辺の南寄りにある。全長約2m、燃焼部は壁際にあり、長さ1mあまりの煙道がついている。遺物は、かまどの中で羽釜、杯、東南隅でコの字壺が出土している。いずれも破片である。鉄鏃は、9号古墳からの混入の可能性がある。遺構の時期は、かまど内の遺物から10世紀後半と考えられる。



第175図　16号住居跡遺構図



第176図　16号住居跡出土遺物図

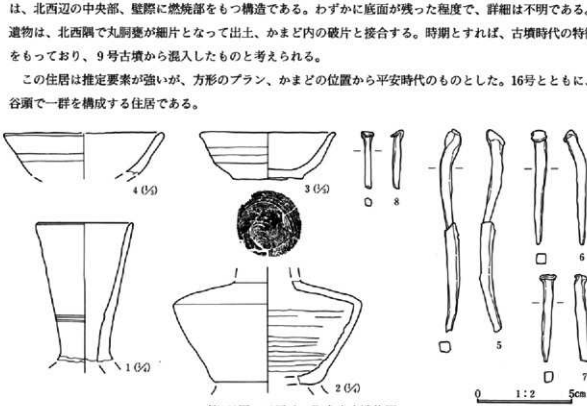


第177図　18号住居跡遺構図・遺物図

18号住居跡（第177図　ＰＬ9・78）

18区ＣＤ－4・5グリットにあり、As-B下畠の耕作土を取り除き、9号古墳の掘り方調査中に前庭部で検出された。ほぼ床面近くまで削平された状態で、かまどの一部である焼土とそれに続くAs-C混暗褐色土のひろがりをもとに方形のプランを推定した。規模は縦3.50m、横2.50m、主軸方向は北西辺でＮ－23°－Ｗである。16号住居跡と同様に、谷地にむかって入口を推定させる方向である。柱穴、貯蔵穴、周溝の有無は不明である。埋土は、As-C混暗褐色土で、床面もAs-C混黒褐色土かローム漸移層中と浅い位置にある。かまどは、北西辺の中央部、壁際に燃焼部をもつ構造である。わずかに底面が残った程度で、詳細は不明である。遺物は、北西隅で丸胴甕が細片となって出土、かまど内の破片と接合する。時期とすれば、古墳時代の特徴をもっており、9号古墳から混入したものと考えられる。

この住居は推定要素が強いが、方形のプラン、かまどの位置から平安時代のものとした。16号とともに、谷頭で一群を構成する住居である。

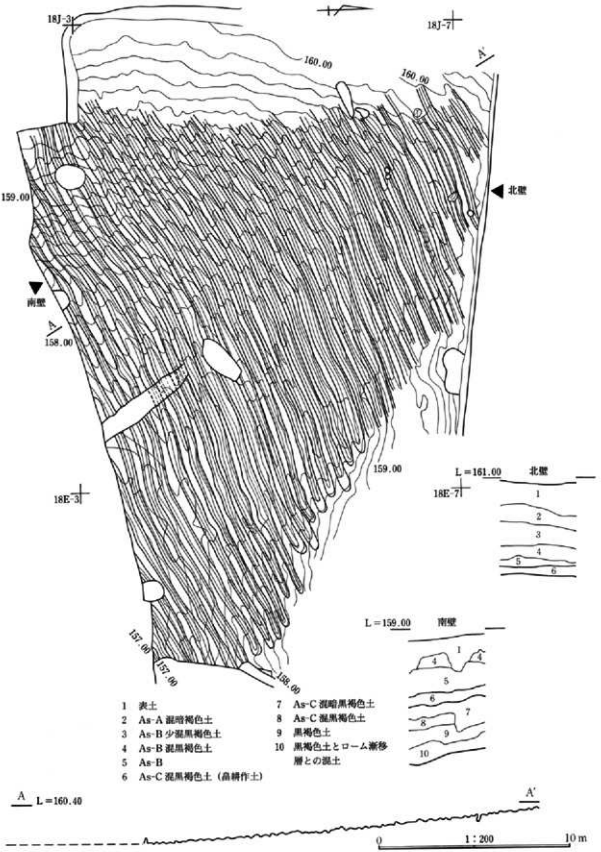


第178図　18区 As-B 畠出土遺物図

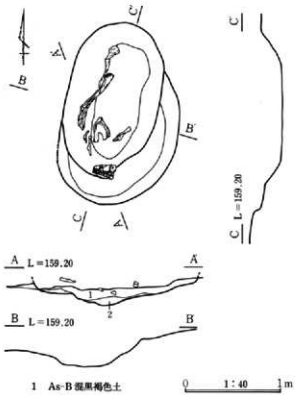
3　As-B 下畠（第178・179図　ＰＬ66・67・144・151）

18区Ｄ～Ｋ－3～7グリットの谷頭一杯にひろがる畠である。中央部に中世の寺院に伴う6号道が重複していたり、尾根寄りの縁辺部が一部削平を受けたりしているが、良好な状態で検出されている。その範囲は、東西35m、南北25m、さらに南に続いている。それは、現況の水田よりも一段高い部分に相当している。検出した南北間では約2m近い勾配があり、谷地の斜面に作られた畠である。耕作土は、As-C混黒褐色土で直上には厚さ20cm近いAs-Bの純層がある。復旧された形跡はない。畝は、等高線に平行する東西でゆるい弧を描いている。畝の幅50cm、押し潰された状態で高さ10cm、畝間は70cmである。長頸壺は、9号古墳前庭部に副葬されたものが耕作で混入し、同じく釘は2号建物からの混入であろう。

植物珪酸体分析では、低い数値ながらもイネとキビ属が検出され稲作の可能性が指摘されている。また、植生については、少量ながらもウシクサ族（ススキ属など）が卓越し、ネザサ節型がこれに次いで多いことがわかる。これにより、周辺の環境としては、森林に覆われたような状態ではなく比較的開かれたものと考えられている。調査地点の周辺では、ブナ属やコナラ属など落葉広葉樹がある程度生育したものと推定される（第12章自然科学分析参照）。



第179図　18区 As-B 畠遺構図



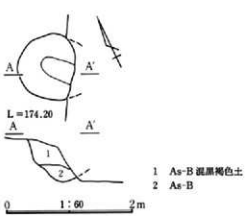
第180図　18区 As-B 畠下層馬骨出土遺構図

4　As-B 下馬埋葬土坑

（第180図　P L67）

18区H－2・3グリット、As-B 下畠の西縁辺部で検出された。幼令馬を埋葬した土坑である。土坑は、縦1.90m、横1m前後で南側が一段高くなり50cmほど広がる。頭を固定するための段差であろうか。底面はほぼ平坦で、深さは42cm、主軸方向N－10°－Eである。馬は、一頭分の頭部、前足、後足がある。南に頭、西に足を投げ出し、死後硬直が始まったような格好である。鼻面を西にむけ土坑の中に押し込められたようにある。前足はくの字に曲がり、後足は投げ出して棒のようにつっぱっていた。

埋土は、As-B 混黒色土と As-C 混黒褐色土の混土、中に1cm角大の炭化物が混入している。炭化物は太枝から小枝ほどで、いずれも破片である。検出面から底面まで見られたが、腹側である西側にやや多い傾向がある。しかし、骨は被熱した様子がなく、埋葬とどのような関係にあるのかは不明である。土坑は、畠を切って作られているが中世の寺院による盛土を全て取り除いたところで検出されている。このことより、畠よりは新しいが畠としての意識が残る平安時代の末頃の時期と見られる。



第181図　1号土坑遺構図

5　土　坑

1号土坑（第181図　P L27）

西第2谷地の谷頭、19区S－13グリットにあり、上面に2号溝が重複している。直径1.05mの円形、As-B 混暗褐色土で埋没している。須恵器杯の破片、甕破片が出土している。この谷地は、南で箕郷町教育委員会が調査したが、As-B は堆積していたものの遺構の検出はなかった。この土坑が、谷地での唯一の遺構となった。

第7章　中世の遺構と遺物

1　概　　要

16区を中心とした椿名白川寄りの尾根の先端部には、極楽院とその前身、そして館がある。18区を中心とした谷地から尾根の斜面一帯には、寺院、墓がある。この中間には、粘土採掘坑や瓦窯跡、掘立柱建物が推定される削平段がある。そして、尾根を越えた西の20区には火葬茶毘跡がある。

その変遷は、13世紀後半から14世紀前半に創建された寺院が、15世紀前半に東に中心を移して極楽院の前身、館、そして極楽院に整備されたものと考えられる。極楽院の前身からは、信貴形水瓶が出土している。寺院と極楽院の前身との間には、1世紀あまりの空白がある。水瓶は、前代までの寺院を象徴する遺物として、新たに創建された施設の地鎮具として埋納されたものと考えられる。

和田山極楽院清涼寺は、箕輪城主長野業政を開山とする修験道場である（角川書店『角川日本地名大辞典10群馬県　1988』）。箕輪落城には、長野業盛の遺子亀寿丸がここに落ちのびたとされ、長野氏との関係の深さをうかがわせる。その一方で、武田信玄は箕輪城攻略後、ただちに修験の西上野年行事職の格式を与えて保護策を講じている。修験の世界では、当山派の群馬町大蔵坊と覇を競い上野国内を二分するほどの勢力であったことが記録に残されている。

武田信玄以後も、その子勝頼、織田信長家臣滝川一益、北条氏邦、そして徳川家康と代々の為政者が、この極楽院に対して所領安堵や修験の格式に保護の手を加えている。戦国期の諜報あるいは情報収集の機関として、特異な權力を保持していたようである。

三代将軍徳川家光からは、朱印地20石余が天神領にあたえられている。江戸時代には、聖護院末寺本山派に属し、明治5年廃寺となるまでその威勢を誇る。関係する文書は計13通あり、極楽院文書として群馬県史資料編7ほかに掲載されている。

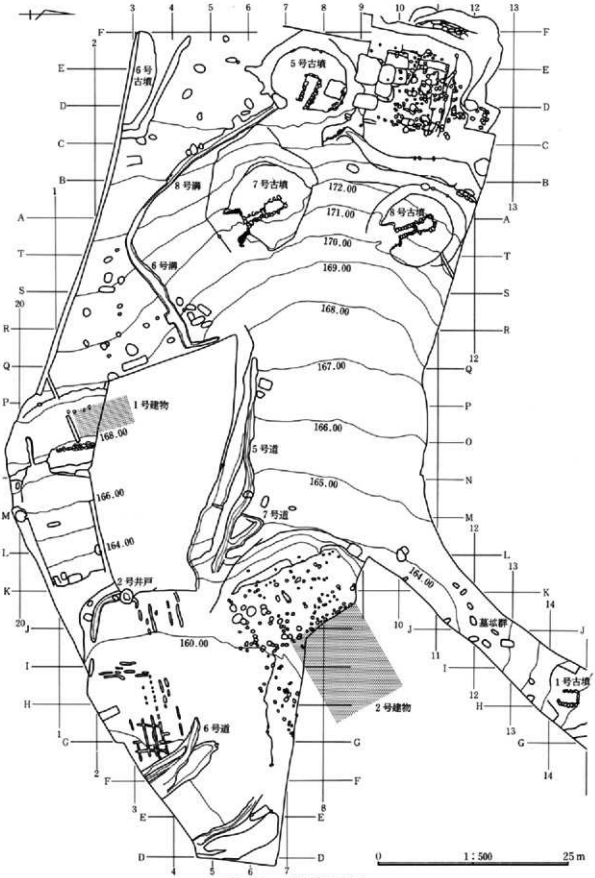
この発掘調査では、極楽院に直接かかわる遺構とその前身が発見され、変遷を知ることができた。さらに、13世紀代まで溯る寺院が発見され、県内でも稀な中世寺院の一例である。

2　寺　　院（第182図　PL45～48）

18区の谷地から19区の尾根にかけて立地する。寺域は、椿名白川に向かってコの字形にのびる尾根に囲まれた、方200mあまりと推定される。南面、東面の2説が考えられ、その北辺にあたる部分を検出したものと思われる。なだらかな尾根を背負い、削平段を設けて建物が配置されている。調査中に現地で指導を受けた大正大学斎藤忠名誉教授からは、浄土系寺院の立地と指摘されている。

寺域は、天神社にあたえられた朱印地の範囲と重複する可能性がある。北西が通称薬師様、南西が長野氏歴代墓地、東が椿名白川で区画される一帯である。寺を象徴する範囲が、その後も朱印地として保護されたとみることもできる。明治年間の公図では、その後菅原神社と改称された天神社をまつる長野氏が大半を所有していることも、傍証となるか。今後、寺院の建物配置や性格を知る上での検討課題である。

寺の配置に直接関係するものに、礎石建ち瓦葺建物2棟、道3本、井戸3基、溝2条、削平段がある。変遷の中で関係があるものに、粘土採掘坑1箇所、瓦窯跡1基、墓16基がある。建物は、瓦の分布状態から調



第182図　中世寺院全体図

査区域内、南の調査区域外におのおの推定することができる。

また、この寺域の中に極楽院をはじめとする遺構があることから、現状の資料からは1世紀あまりの空白があるものの一連の遺構と推定される。極楽院が長野氏と関係するとすれば、この寺院も創建、その後の維持が長野氏の勢力によると考えられる。

1号建物（第183～210図　PL45・46・117～126・135）

8NO－20、18N～Q－1～3グリット、尾根の斜面中段、削平段に東面する有礎瓦葺建物である。北側は調査区域外にあるが、礎石と思われる1石が露出している。遺存状態は良好である。

削平段は、建物がある上段と前面に石段がとりつく下段とがある。上段は、標高168.70mを整地面とし山側が地山削り出し、石段側が混土による盛土と推定されるがほとんどが流失している。調査範囲で間口12m、石段からの奥行き10mである。南端は、長さ4m、幅80cmの11号溝が区画している。約40本あるピットは、基部のものが土留杭跡を思わせる掘り方と間隔である。

下段は、石段の掘り方と瓦敷がある道跡の掘り込みに合わせたものである。標高167.40m前後に整地面がある。南端には、さらに南に続く道の掘り込みがありピット2本があいている。列石は、道の路肩養生と推定されるがやや新しい。石段は、最大3段が残る。間口2.82m、段差20cm、30cm前後の踏面である。崩れ落ちた石の数からすると、間口4m前後、5段程度の高さではないかと推定される。南側には、高さ50cm、削平段の法面を養生する小口積み、3段の石垣がある。石段との境には、高さ70cmの立石がある。

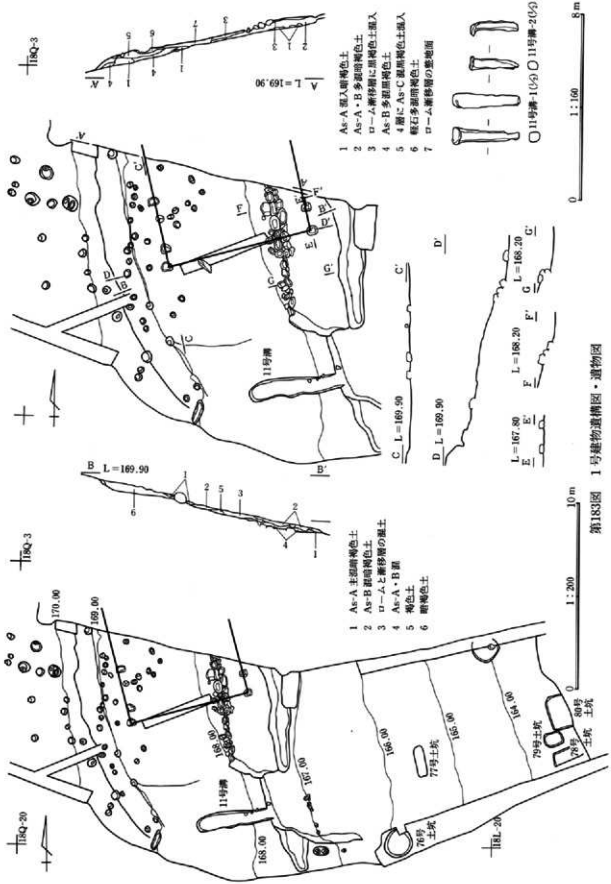
道は、瓦敷面、その上の硬化面と2面がある。瓦敷は、石段の前だけにあるもので養生跡とみることもできる。硬化面は、谷地側を削られているが幅50cm、北にのびている。さらに上面には江戸時代天明頃の面があり、現在では地蔵堂と天神前の字界にあたる。2号建物がある整地面とは8mほどの段差があり、調査区域外の中間にはひな壇状の箇所が数箇所ある。建物を推定するには十分な余地である。76号土坑は、円筒形の掘り方で時代不明としたが、この削平段に伴う可能性が大きい。

建物は、削平段の推定される規模、検出された礎石の位置と数から、梁間2間、桁行3間の南北棟と推定される。南梁間には80cm幅の縁がつき、さらに東には石段をまたぐように奥行き1間の向拝状の軒がでていたようである。礎石は4石ある。3石が輝石安山岩、面をそろえ、掘り方を持たず地山に直接置かれている。柱間が210cm、残る1石が角閃石安山岩でやや小ぶりなことから、床束とも考えられる。石段前の2石は、上段の礎石列から6.20mの位置にある。南西隅の2石とは対の位置にあたり、石段の南の面とも対応する。向拝を推定する理由がここにある。

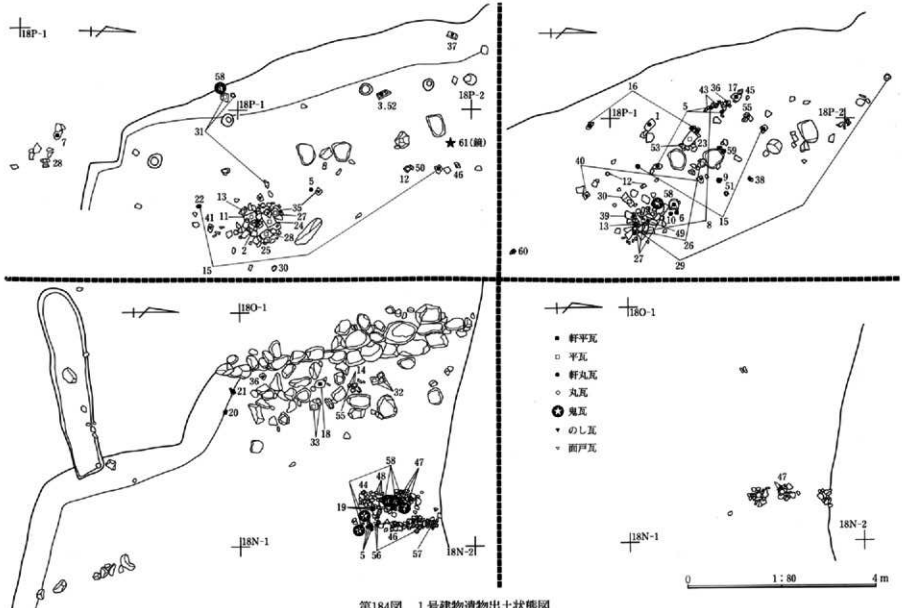
瓦は、三巴文軒丸瓦と陽刻下向き剣頭文軒平瓦の組み合わせである。建物の南西側に集中している。建物の影でもあり、廃棄されたとも考えられるが、軒平瓦、軒丸瓦をはじめ、平、丸、熨斗、鬼の各種瓦があること。いずれも遺存状態が良好で接合率も高く、屋根からずり落ちたままと推定される。石段前の集中は、砕かれて敷かれたものである。瓦のほかに建物の内部から、懸仏に転用された蓬萊双雀鏡1面、釘75点が出土している。この他に破片で摺鉢が出土しただけで、一括性の高い出土状態である。遺構の時期は、瓦や鏡の年代観からは13世紀後半から14世紀前半が創建、その後は瓦敷のある道跡を考慮しても比較的短期間かと推定される。

1号建物からは、周辺グリットと合わせて総数534点の瓦が出土している。先述のとおり、遺存状態良好、接合率も高く、倒壊崩落した状態を思わせる。

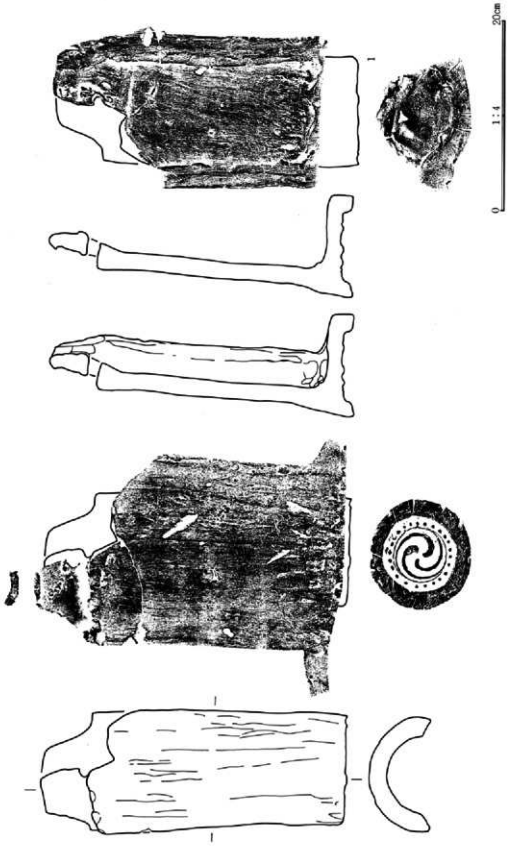
軒丸瓦は、珠文三巴文、2本の圏線で囲まれる。瓦当貼付け、内面も丁寧なナデ整形である。巴は左巻き、



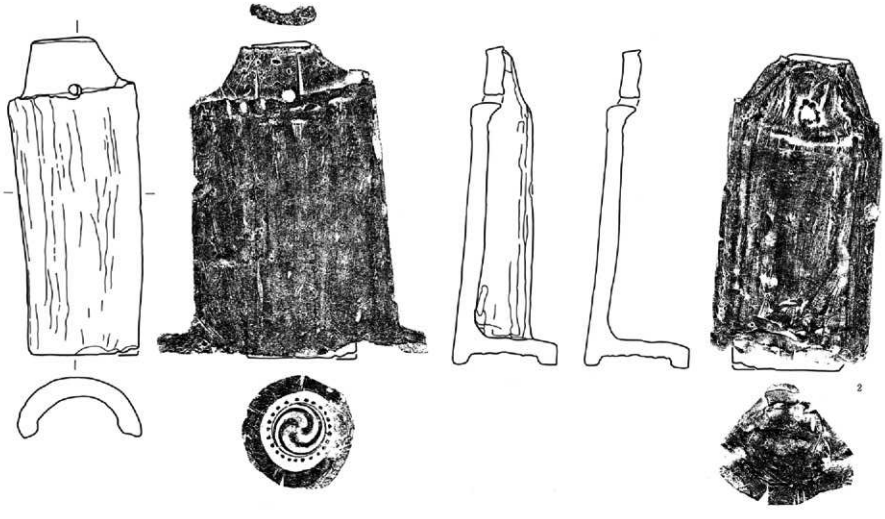
第183図　1号建物遺構図・遺物図



第184図　1号建物遺物出土状態図

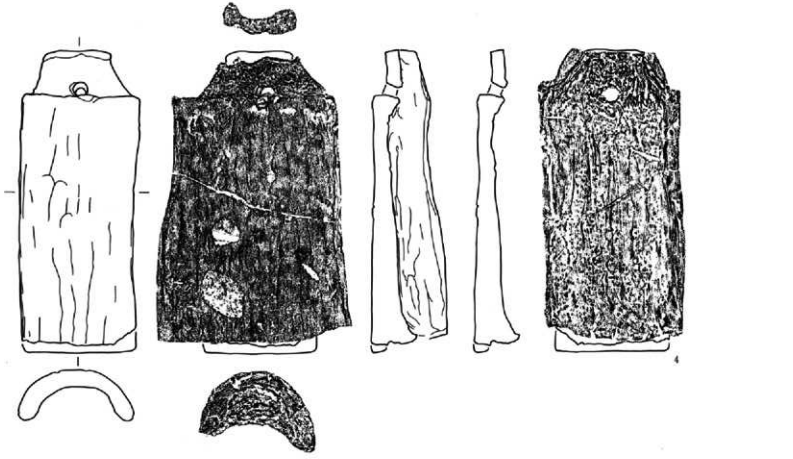


第185図　1号建物出土遺物図(1)

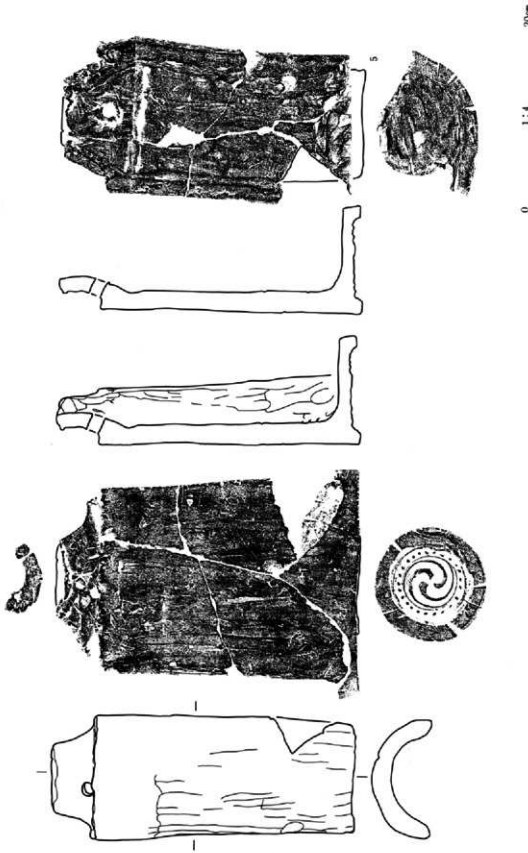


第186図　1号建物出土遺物図(2)

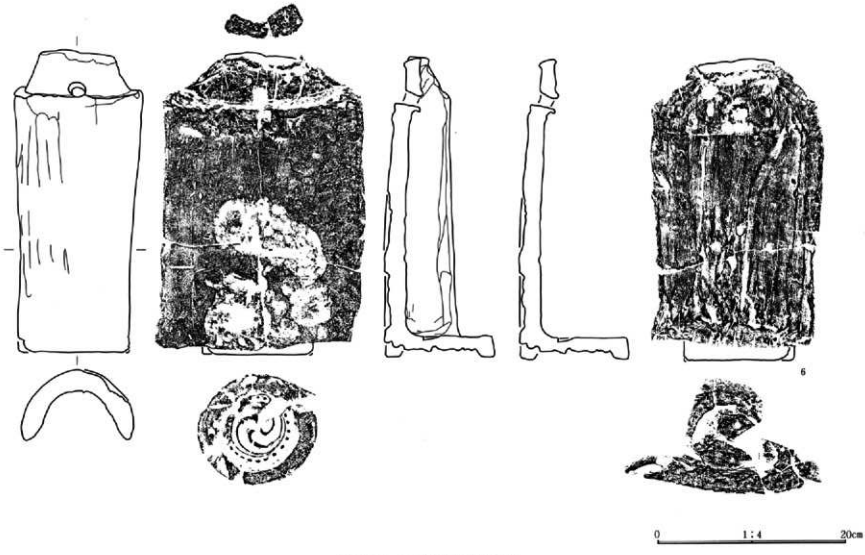
第187図　1号建物出土遺物図(3)



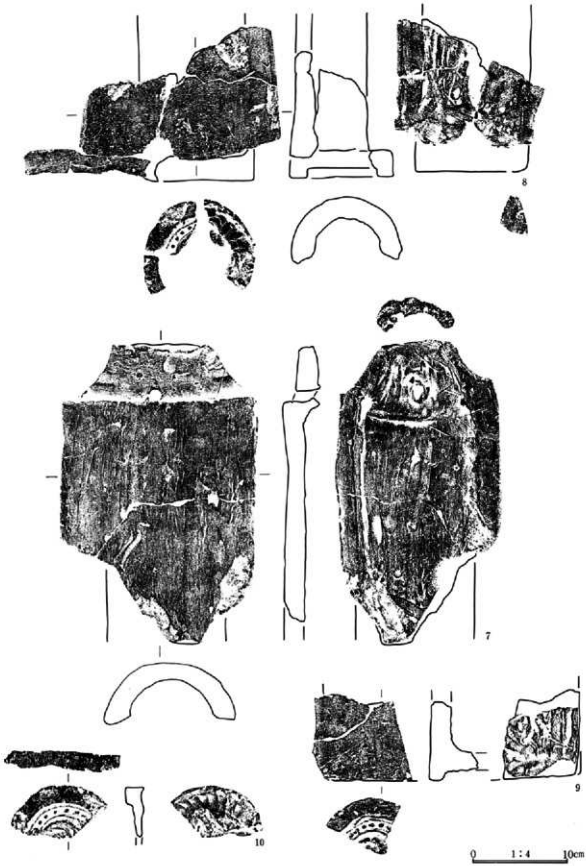
第188図　1号建物出土遺物図(4)



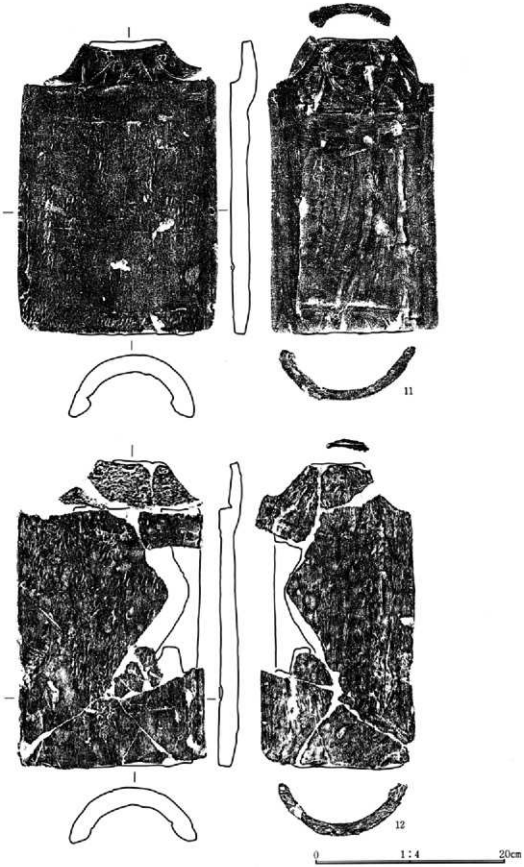
第189図　1号建物出土遺物図(5)



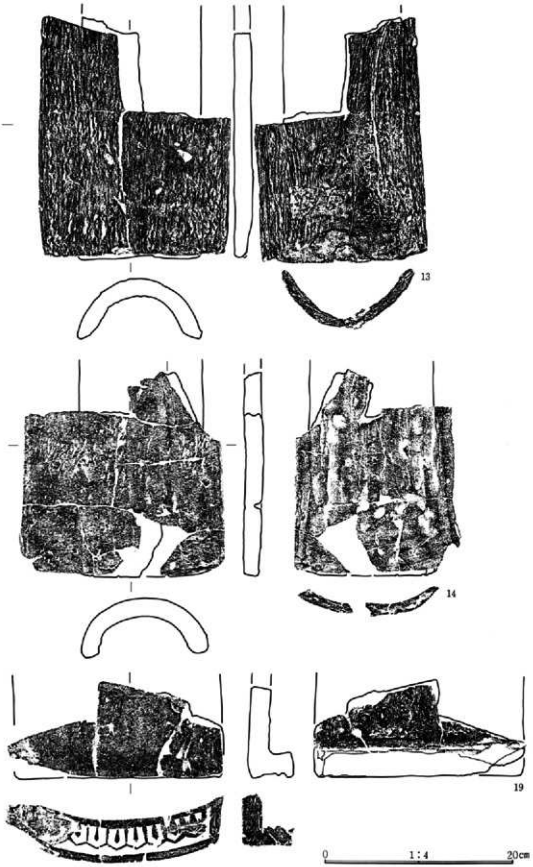
第190図　1号建物出土遺物図(6)



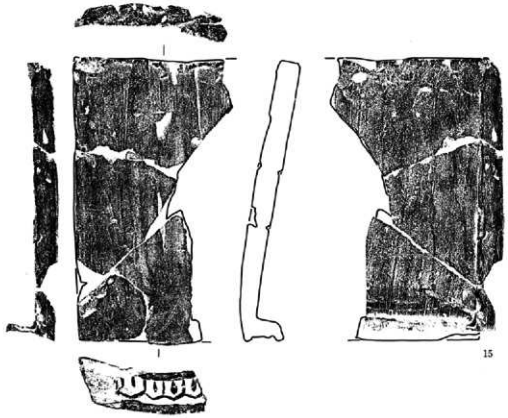
第191図　1号建物出土遺物図(7)

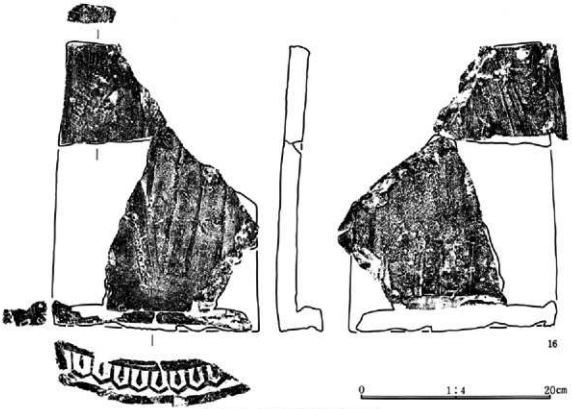


第192図　1号建物出土遺物図(8)

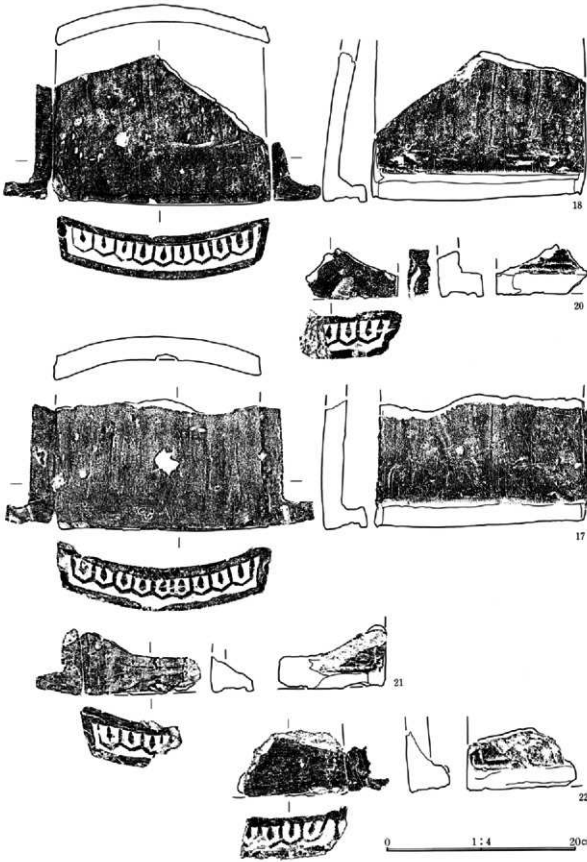


第193図　1号建物出土遺物図(9)

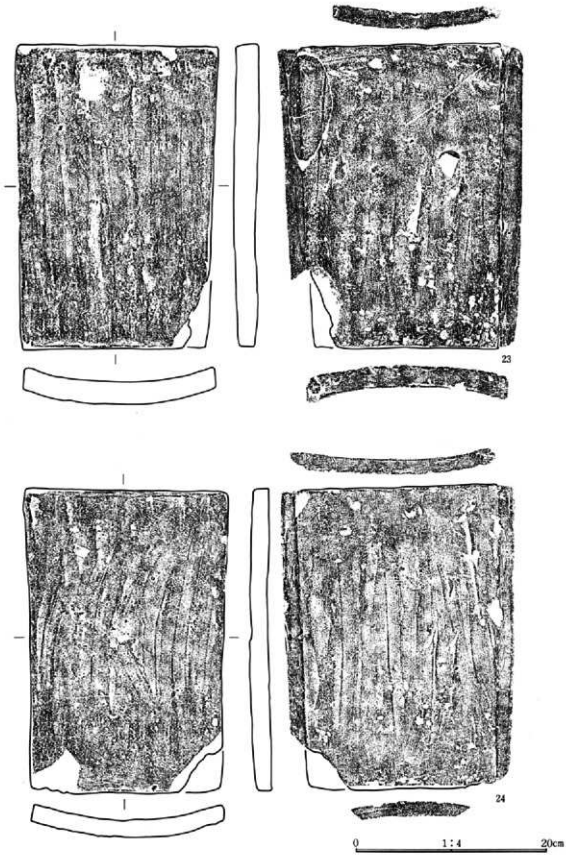




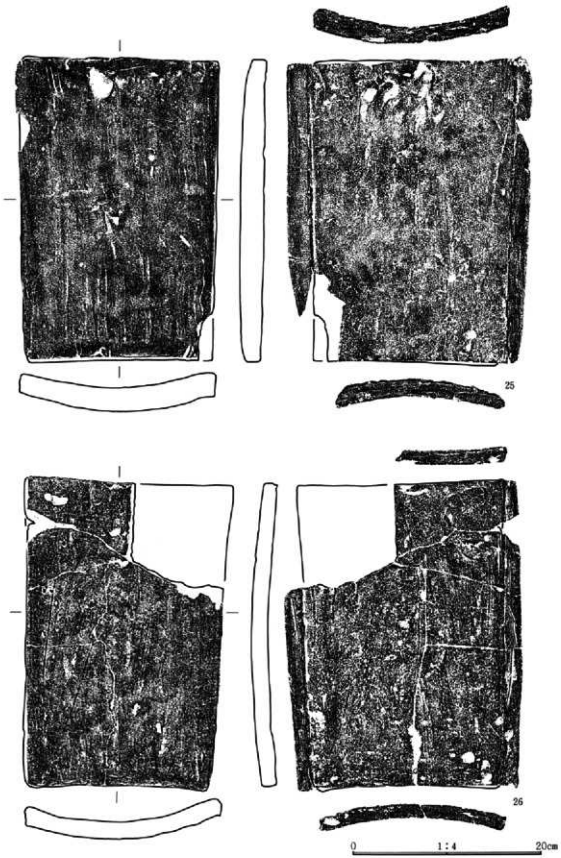
第194図　1号建物出土遺物図(14)



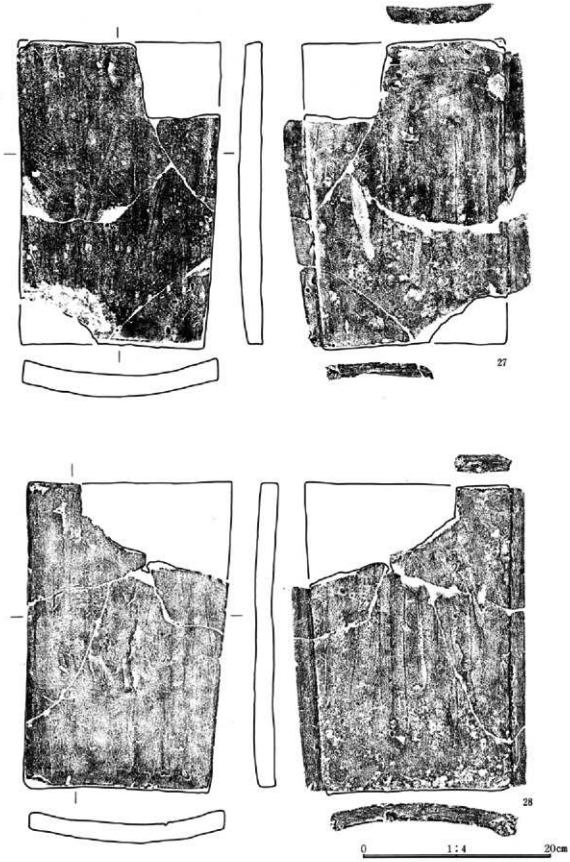
第195図　1号建物出土遺物図(11)



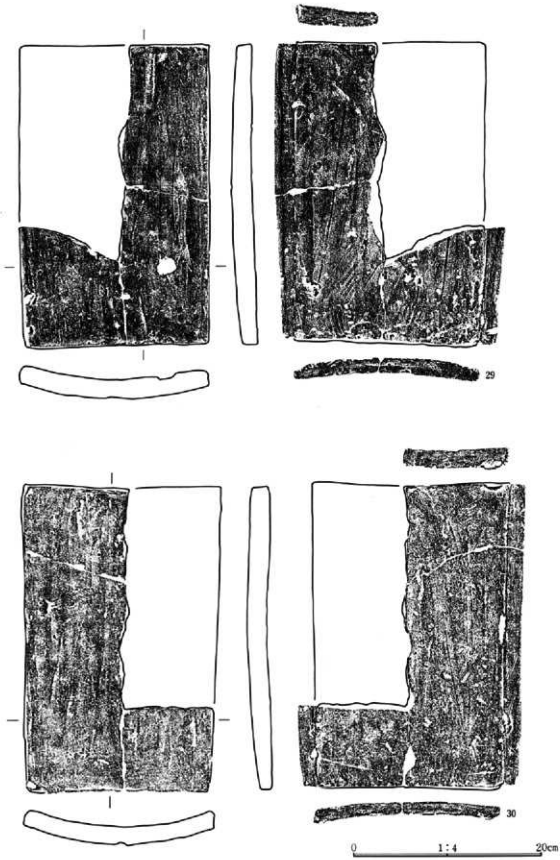
第196図　1号建物出土遺物図(12)



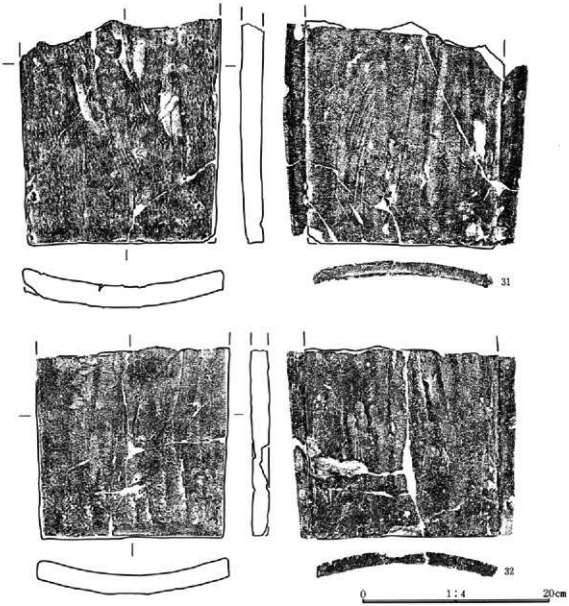
第197図　１号建物出土遺物図(3)



第198図　1号建物出土遺物図(4)

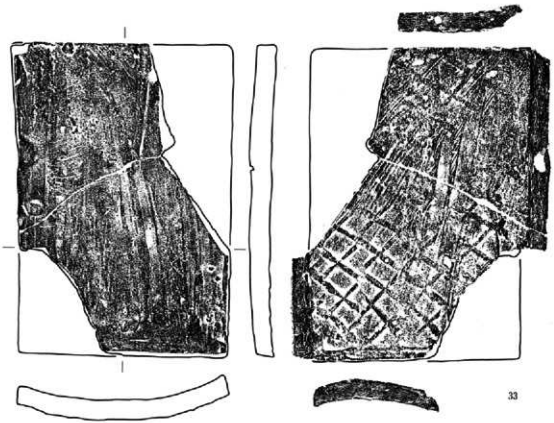


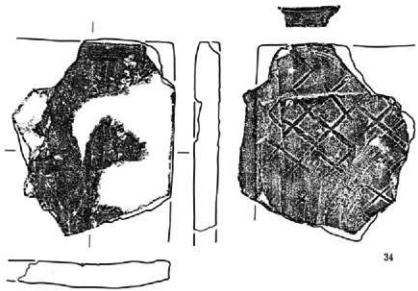
第199図　1号建物出土遺物図(15)



第200図　1号建物出土遺物図(4)

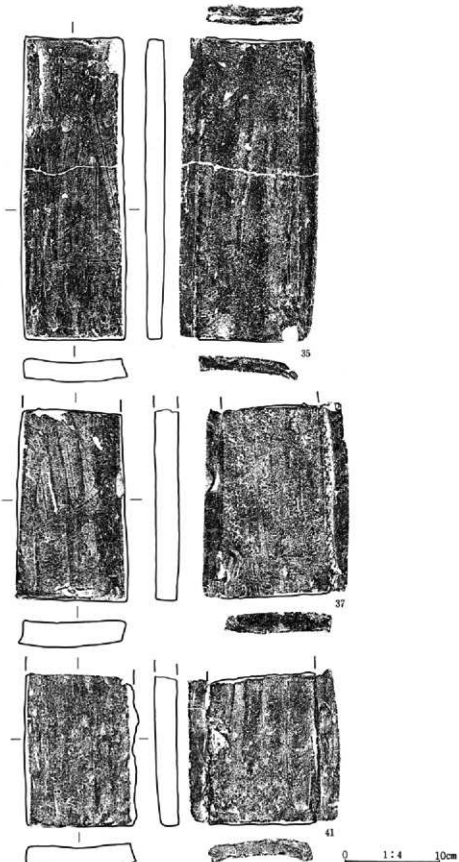
細い尾を引いている。丸瓦は、凸面縄目タタキ、凹面には布目痕がみられる。軒平瓦は、陽刻下向き剣頭文のみである。瓦当貼付け、表裏とも丁寧なナデ整形である。剣中の鎬を菱形に太く表現している。平瓦は、表裏ナデ整形と凸面に格子目タタキを持つものとに分けられるが、主流は前者の一群である。熨斗瓦は、平瓦を焼成前に半裁したもので占められ、表裏ともに丁寧なナデ整形である。面戸瓦は、玉縁付丸瓦を焼成前に裁断したもので、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕を持つものがみられる。鬼瓦は1点のみで、形状や大きさから大棟タイプである。



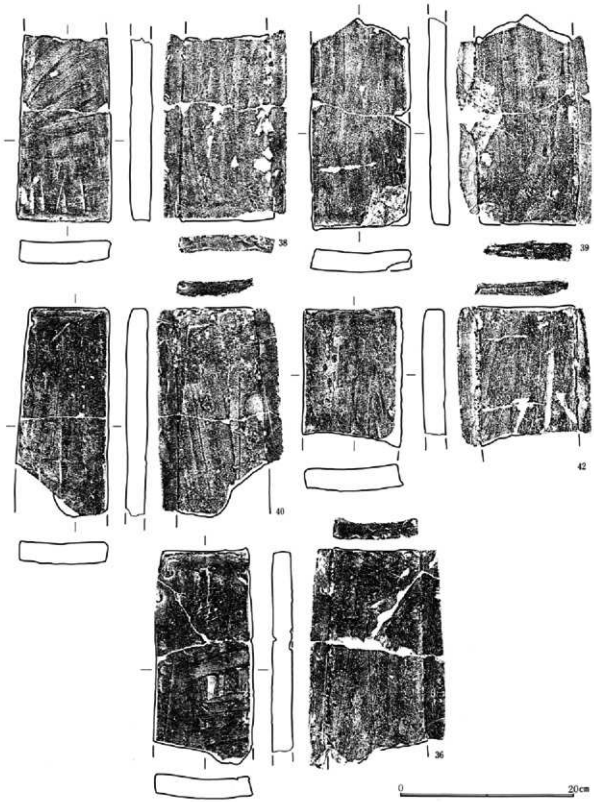


0　1:4　20cm

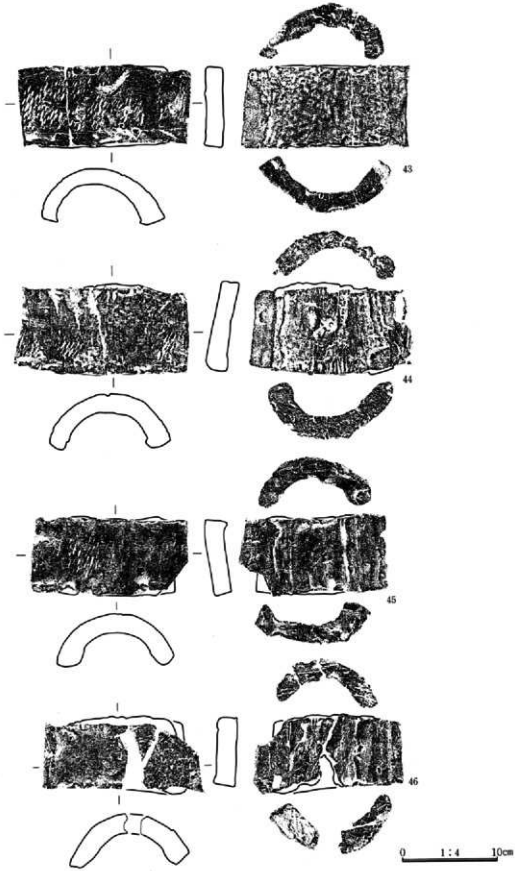
第201図　1号建物出土遺物図(17)



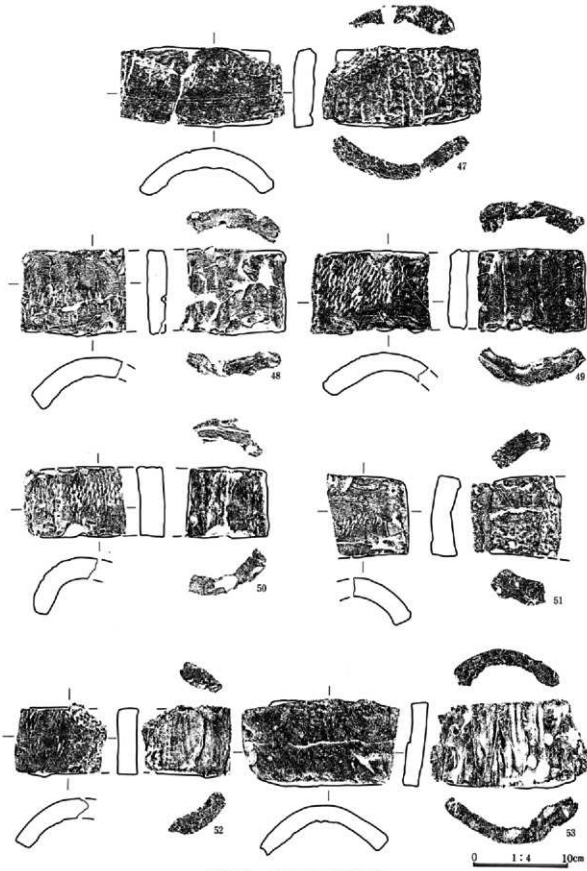
第202図 1号建物出土遺物図(8)



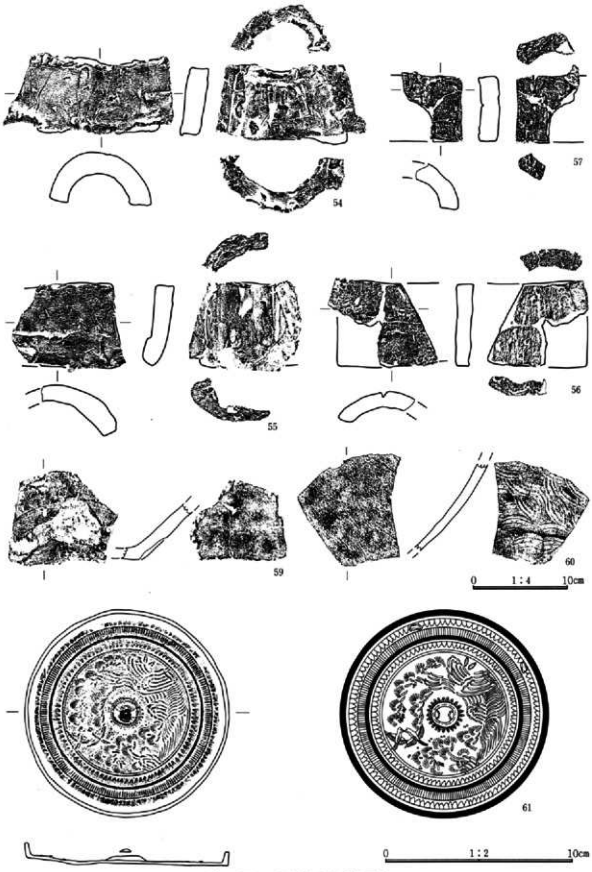
第203図　1号建物出土遺物図(09)



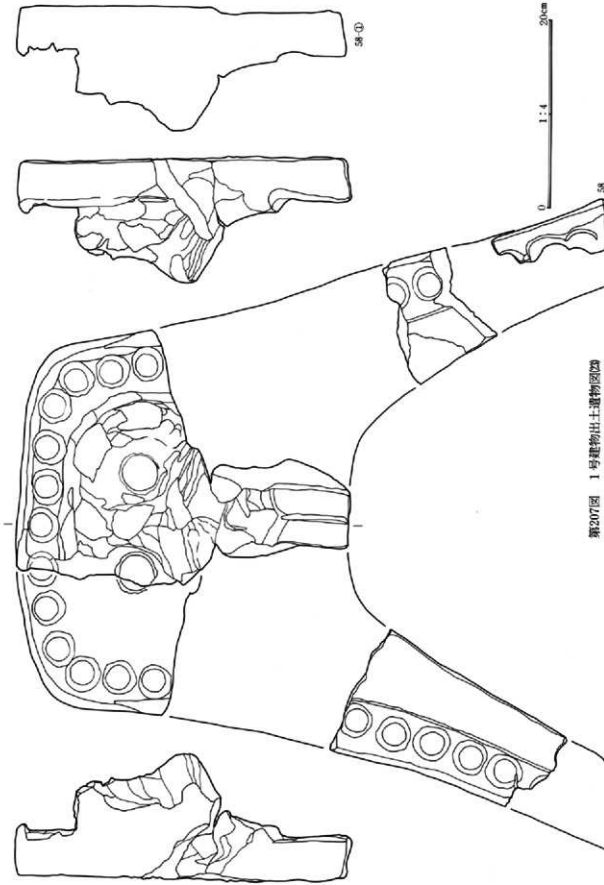
第204図 1号建物出土遺物図(四)



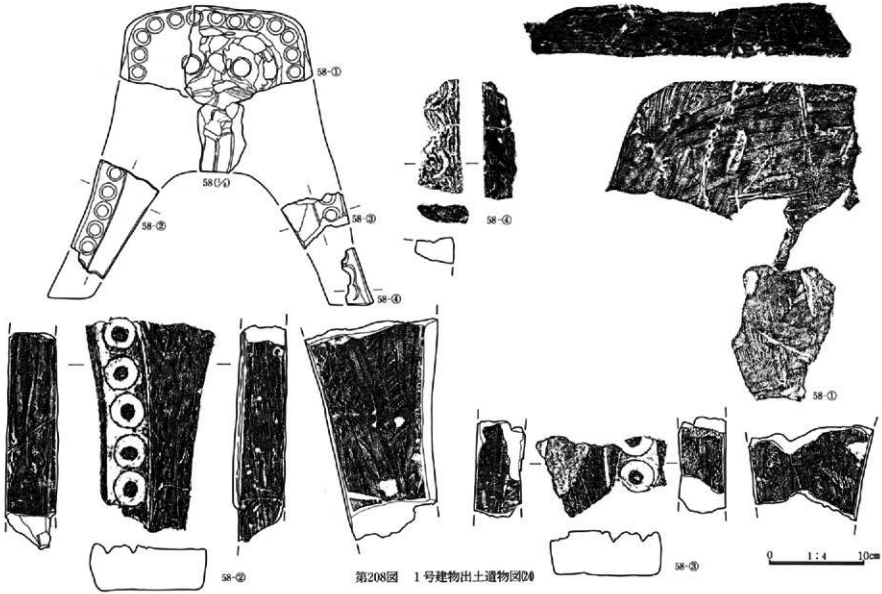
第205図　1号建物出土遺物図(2)



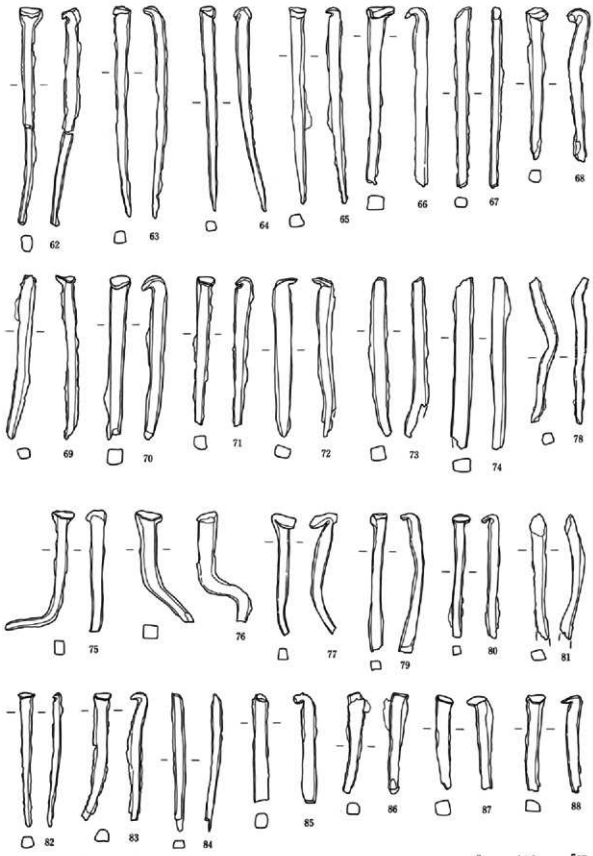
第206図 1号建物出土遺物図(2)



第207図　1号建物出土遺物図(3)



第208図　1号建物出土遺物図(2)



第209図　1号建物出土遺物図(5)